

塩津丘陵遺跡群

(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附 亀ノ尾古墳)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ

(第1分冊・本文編1)



1998年3月

江国道工事事務所

島根県教育委員会

塩津丘陵遺跡群

(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附 亀ノ尾古墳)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IX

(第1分冊・本文編1)

1998年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会



上空から見た荒島地区 中心付近が塩津丘陵遺跡群



上空から見た塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡 向こうの谷まで水面が入りこんでいた。



西上空から見た塩津丘陵遺跡群 手前は柳遺跡



南上空から見た柳遺跡 上方の学校付近までは水面だった。



東上空から見た柳遺跡 右上は柳II遺跡



南上空から見た柳遺跡 上方は中海 遠山古墳群も見える。



西から見た塩津丘陵遺跡群



東から見た塩津丘陵遺跡群 手前が塩津山1号墳



柳道跡から見た竹ヶ崎道跡



竹ヶ崎道跡から見た柳道跡



竹ヶ崎遺跡SI09 コシキ形土器取上げ風景



竹ヶ崎遺跡・柳遺跡出土のコシキ形土器



柳遺跡 階段状遺構出土弥生土器



竹ヶ崎遺跡・柳遺跡出土玉作関連遺物等



竹ヶ崎遺跡出土 近世陶磁器類



同上

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして高規格道路安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当道路においても道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成6年度、7年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものがあります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術並びに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成10年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 大石 龍太郎

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号（安来道路）建設予定地内遺跡の調査を行っております。この報告書は、平成6年度に実施した塩津山遺跡と平成7年度に実施した竹ヶ崎遺跡・柳遺跡の調査成果を取りまとめたものです。

安来道路の建設が進められている安来市周辺は、古代から文化が栄えた地域であり、多くの遺跡が確認されています。今回調査を実施しました遺跡からは、弥生時代終わり頃と古墳時代中期の竪穴住居跡や掘立柱建物群、加工段など100を有にこえる遺構が検出されました。

特に、弥生時代の終わり頃は、倭国乱から邪馬台国の時代にあたり、日本に大きなまとまりが出来つつある激動の時代です。当時の出雲は独特の四隅突出型墳丘墓を作るなど、地域色豊かな文化を花咲かせた時代でもありました。この調査は、全国でも有数の弥生時代の墳丘墓を作った荒島地域での生活の実態を明らかにする貴重な成果をあげることが出来たと考えております。

こうした発掘調査の成果は、今後島根県の歴史、ひいては日本の古代史の解明に役立つものと思われまふ。本報告書が地域の歴史を解明する糸口となり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いと思ひます。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、御協力いただきました建設省中国地方建設局松江国道工事事務所、安来市教育委員会をはじめとする関係者の各位に厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

島根県教育委員会教育長

江口博晴

例 言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成6年度、平成7年度に実施した、一般国道9号(安米道路)建設予定地内の「塩津山遺跡」、「竹ヶ崎遺跡」、「柳遺跡」、「亀ノ尾古墳」の発掘調査報告書である。これらの遺跡のうち前3者は、「塩津山墳墓群」、「柳II遺跡」(平成8年度報告済)とともに一体の遺跡と判断されるため、5遺跡を一括して「塩津丘陵遺跡群」と呼称することとした。

2. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

(平成6年度) 塩津山遺跡

事務局 島根県教育庁文化課 広沢卓嗣(課長)、野村純一(課長補佐)、中島哲(文化係長)、丸宏治(文化係主事)

文化財埋蔵文化財調査センター 勝部昭(センター長)、佐伯善治(課長補佐)、工藤直樹(企画調整係主事)、田辺利夫(島根県教育文化財団)

調査員 埋蔵文化財調査センター 調査第1係 勝瀬(現守岡)利恵(主事)、大塚充(講師兼主事)、勝部智明(主事)、北尾浩之(教諭兼文化財保護主事)、田中強志(臨時職員)

調査指導 山本清(島根県文化財保護審議会会長)、池田満雄(同委員)、渡辺貞幸(島根大学法文学部教授)、三浦清(島根大学教育学部教授)、都出比呂志(大阪大学文学部教授)、岡村道雄(文化庁記念物課)、朽津信明(東京国立文化財研究所)、

調査協力 高尾明浩(横田町教育委員会)、森田直子

(平成7年度) 竹ヶ崎遺跡・柳遺跡

事務局 文化財課 勝部昭(課長)、森山洋光(課長補佐)

文化財課埋蔵文化財調査センター 宍道正年(センター長)、佐伯善治(課長補佐)、渋谷昌宏(企画調整係主事)、田部利夫(島根県教育文化財団嘱託)

調査員 埋蔵文化財調査センター 調査第2係 卜部吉博(主幹)、大本公良(教諭兼文化財保護主事)、福島浩(教諭兼文化財保護主事)、植田良治(教諭兼主事)、丹羽野裕(文化財保護主事)、大庭俊治(主事)、寺谷隆(講師兼主事)、稲田和久(臨時職員)、梅木茂雄(臨時職員)、永戸麗子(臨時職員)、東森晋(臨時職員)

調査指導 山本清(島根県文化財保護審議会委員)、田中義昭(島根大学法文学部教授、島根県文化財保護審議会委員)、渡辺貞幸(島根大学法文学部教授)、西田健彦(文化庁記念物課)、酒井龍一(奈良大学教授)、池田満雄(島根県文化財保護審議会委員)

調査協力 妹尾秀樹(伯太町教育委員会)

(平成9年度) 報告書作成

事務局 島根県教育庁文化財課 勝部昭(課長)、島地徳郎(課長補佐)

文化財課埋蔵文化財調査センター 矢道正年(センター長)、古崎蔵治(課長補佐)、渋谷昌宏(企画調整係主事)

調査員 埋蔵文化財調査センター 丹羽野裕(文化財保護主事)、池淵俊一(主事)、梅木茂雄(臨時職員)、和田郁子(臨時職員)、福田市子(臨時職員)

調査指導 広瀬和雄(奈良女子大学教授)、渡部忠世(京都大学名誉教授)

遺物整理(平成6年度～9年度)

青戸房子、荒川あかね、笠井文恵、門脇卓子、佐伯明子、佐々木京子、佐々木順子、砂口光枝、瀬川恭子、多久和文子、田中路子、田原まり子、津森真弓、中島美穂子、広田和子、堀江五十鈴、増田弘子、三奈木康江、山本千穂、渡部恵子

3. 発掘作業(発掘作業員雇用等)については、建設省中国地方建設局、鳥根県教育委員会、(社)中国建設弘済会の三者協定に基づき、鳥根県教育委員会から(社)中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会鳥根支部(平成6年度)

布村幹夫(現場事務所長)、木村昌義(技術員)、高木由香(事務員)

社団法人 中国建設弘済会鳥根支部(平成7年度)

布村幹夫(現場事務所長)、吉岡勇次(技術員)、寺田透(技術員)、与倉明子(事務員)、周藤美奈子(事務員)

4. 現地調査、及び資料整理については、上記調査指導の諸先生の他、以下の各氏に有益なご助言とご協力をいただいた。(順不同)

町田章(奈良国立文化財研究所)、宇垣匡雅(岡山県古代吉備文化財センター)、北野博司(石川県立埋蔵文化財センター)、栃木英道(石川県立埋蔵文化財センター)、浜崎信司(石川県埋蔵文化財センター)、出越茂和(金沢市教育委員会)、橋本輝彦(桜井市教育委員会)、清水真一(同)、萩原儀征(同)、藤田三郎(田原本町教育委員会)、福宜田佳男(兵庫県教育委員会)、松井潔(鳥取県埋蔵文化財センター)、湯村功(同)、谷口恭子(鳥取市埋蔵文化財調査センター)、根鈴輝雄(倉吉博物館)、森下哲哉(倉吉市教育委員会)、根鈴智津子(同)、三宅博士(安来市教育委員会)、永見英(同)、金山尚志(同)水口品郎(同)、大久保徹也(財団法人香川県埋蔵文化財調査センター)、六沢義功、東森市良、岸本道明(龍野市教育委員会)、佐藤晃一(加悦町教育委員会)、近澤豊明(綾部市教育委員会)、津金澤吉茂(群馬県教育委員会)、山本勇(千葉市教育委員会)、松浦宥一郎(東京国立博物館)、古谷毅(同)、望月幹夫(同)、岩田文章(淀江町教育委員会)、山口剛(大山町教育委員会)

5. 挿図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。

6. 挿図の縮尺は、図中に明示した。

7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

8. 本書で使用した遺構記号は以下の通りである。

P・・・ピット S I・・・竪穴住居跡 SB・・・掘立柱建物跡 SK・・・土坑

9. 本書に掲載した遺物の実測及び挿図の浄写は、主として以下の者が行った。

(実測) 梅木茂雄、丹羽野裕、守岡(旧姓勝瀬)利恵、石倉敬子、深田浩、東森晋、和田郁

子、佐々木京子、中島美穂子、野津旭、伊藤善太郎、

(浄写) 荒川あかね、水戸麗子、津森真弓、渡部恵子、佐々木順子、和田郁子、佐々木京子、
中島美穂子

10. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、丹羽野、梅木、守岡、大庭、池淵が行った。
14. 本書の執筆は、卜部、丹羽野、池淵、守岡、梅木が行った。執筆分担は1と4の一部を卜部、2、5、8と4の一部を丹羽野、3を守岡、4の大部分と8の一部を梅木、6を池淵が担当した。文責は目次にも明示している。
15. 本書では、藁科哲男氏、大沢正己氏、三辻利一氏に自然科学的分析を依頼し、玉稿を頂いた。
16. 本書の編集は、丹羽野、梅木、守岡で協議して行った。
17. 本遺跡出土資料及び実測図、写真等の資料は、島根県埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。



本文目次

<第1分冊>

1. 調査に至る経緯	(卜部) … 1
2. 塩津丘陵遺跡群(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡)の位置と環境	(丹羽野) … 5
第1章 安来平野における荒島地区の位置と環境	… 7
第2章 荒島地区の遺跡と塩津丘陵遺跡群	… 11
第3章 塩津丘陵遺跡群の中の塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡	… 15
3. 塩津山遺跡の調査	(守岡) … 21
第1章 調査の経過と概要	… 23
第2章 調査の結果	… 25
第3章 塩津山遺跡のまとめ	… 71
4. 竹ヶ崎遺跡の調査	(梅木・卜部・丹羽野) … 81
第1章 調査の経過と概要	
1節 調査前の状況と経過	… 83
2節 地区割りとは調査の概要	… 88
第2章 調査の結果	
1節 調査区東側上段	… 91
2節 調査区東側下段	… 128
3節 調査区西側	… 198
4節 近世	… 232

<第2分冊>

5. 柳遺跡の調査	(丹羽野) … 239
第1章 調査の経過と概要	
1節 調査前の状況と経過	… 241
2節 地区割りとは概要	… 245
第2章 調査の結果	
1節 頂上部から西斜面の調査	… 247
2節 東斜面の調査	… 304
6. 附 亀ノ尾古墳	(池瀧) … 475
7. 自然科学的分析	
柳遺跡出土の玉材剥片の産地分析	… 藁科哲男 … 481
柳遺跡出土の模形鍔治湾の金属学的調査	… 大沢正己 … 491
塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡出土炭・炭化物の ¹⁴ C年代の測定	… 財団法人九州環境管理協会 … 495
8. まとめ	
第1章 塩津丘陵遺跡群出土の弥生時代後期後半の土器編年	(梅木・丹羽野) … 499
第2章 塩津丘陵遺跡群で検出の弥生時代後期後半の遺構について	(丹羽野) … 507
第3章 塩津丘陵遺跡群の性格について	(丹羽野) … 520

<第3分冊>

写真図版編

挿図目次

<第1分冊>

第1図	塩津丘陵遺跡群の位置	7
第2図	塩津丘陵遺跡群(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡)の位置と周辺の遺跡	8
第3図	荒為墳墓群と塩津丘陵遺跡群	11
第4図	塩津山墳墓群・塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡の関係	16
第5図	柳II遺跡出土土器実測図	18
第6図	塩津山遺跡・塩津山古墳群調査後地形測量図 S=1/400	24
第7図	塩津山遺跡 加工段I実測図 S=1/180	26
第8図	塩津山遺跡 加工段I床面遺物出土状況 S=1/180	27
第9図	塩津山遺跡 加工段I出土遺物実測図 S=1/3	29
第10図	塩津山遺跡 S I 01出土遺物実測図 S=1/3	30
第11図	塩津山遺跡 S I 01実測図 S=1/60	31
第12図	塩津山遺跡 東側斜面調査区遺構配置図 S=1/350	33
第13図	塩津山遺跡 S I 03出土遺物実測図 S=1/3	34
第14図	塩津山遺跡 S I 02・03実測図 S=1/60	35
第15図	塩津山遺跡 S I 04実測図 S=1/60	37
第16図	塩津山遺跡 S I 04出土遺物実測図 S=1/3	37
第17図	塩津山遺跡 S I 05実測図 S=1/60	38
第18図	塩津山遺跡 S I 05床面遺物出土状況 S=1/60	39
第19図	塩津山遺跡 S I 05出土遺物実測図 S=1/3	40
第20図	塩津山遺跡 加工段2実測図 S=1/90	42
第21図	塩津山遺跡 加工段2遺物出土状況 S=1/90	43
第22図	塩津山遺跡 加工段2出土遺物実測図(1) S=1/3	44
第23図	塩津山遺跡 加工段2出土遺物実測図(2) S=1/3	45
第24図	塩津山遺跡 加工段3実測図 S=1/60	46
第25図	塩津山遺跡 加工段3床面遺物出土状況 S=1/60	47
第26図	塩津山遺跡 加工段3出土遺物実測図 S=1/3	47
第27図	塩津山遺跡 S D 01実測図 S=1/60	48
第28図	塩津山遺跡 S D 02実測図 S=1/60	49
第29図	塩津山遺跡 S D 01・S D 03模式図	50
第30図	塩津山遺跡 S D 03実測図 S=1/60	51
第31図	塩津山遺跡 S D 03出土遺物実測図(1) S=1/3	53
第32図	塩津山遺跡 S D 03出土遺物実測図(2) S=1/3	54
第33図	塩津山遺跡 S D 04実測図 S=1/60	55
第34図	塩津山遺跡 S D 04出土遺物実測図 S=1/3	55
第35図	塩津山遺跡 S D 05実測図 S=1/60	56
第36図	塩津山遺跡 S D 05出土遺物実測図 S=1/3	57
第37図	塩津山遺跡 S K 01実測図 S=1/60	58
第38図	塩津山遺跡 S K 01出土遺物実測図 S=1/3	58
第39図	塩津山遺跡 S K 03実測図 S=1/60	59
第40図	塩津山遺跡 S K 03出土遺物実測図 S=1/3	59
第41図	塩津山遺跡 S K 04実測図 S=1/60	60
第42図	塩津山遺跡 S X 01実測図 S=1/60	61
第43図	塩津山遺跡 S X 01出土遺物実測図 S=1/3	61
第44図	塩津山遺跡 S X 02~06、S K 02実測図 S=1/60	62
第45図	塩津山遺跡 S X 07実測図 S=1/60	63
第46図	塩津山遺跡 S X 12~14エレベーション図 S=1/60	64

第47図	塩津山遺跡	S X08～S X14実測図	S=1/60	65
第48図	塩津山遺跡	S X09出土遺物実測図	S=1/3	66
第49図	塩津山遺跡	S X10、11付近出土遺物実測図	S=1/3	67
第50図	塩津山遺跡	S X14出土遺物実測図	S=1/3	68
第51図	塩津山遺跡	S X15実測図	S=1/60	69
第52図	塩津山遺跡	遺構外出土遺物実測図	S=1/3、石器のみS=1/2	70
第53図	竹ヶ崎遺跡	調査前地形測量図	S=1/600	85～86
第54図	竹ヶ崎遺跡	調査終了後地形測量図	S=1/600	87
第55図	竹ヶ崎遺跡	東側調査区上段遺構配置図	S=1/300	89
第56図	竹ヶ崎遺跡	加工段01・加工段02・加工段03実測図	S=1/60	90
第57図	竹ヶ崎遺跡	S I 01実測図	S=1/60	92
第58図	竹ヶ崎遺跡	加工段02(1～3)・加工段03(4～5)・S I 01(6～16)遺物実測図	S=1/60	93
		(鉄器16はS=1/2)		
第59図	竹ヶ崎遺跡	加工段01・加工段02・加工段03遺物出土状況	S=1/80	94
第60図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06遺構配置図	S=1/120	95
第61図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06実測図(1)	S=1/60	96
第62図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06土層図(1)	S=1/60	97
第63図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06実測図(2)	S=1/60	98
第64図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06土層図(2)	S=1/60	99
第65図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06実測図(3)	S=1/60	100
第66図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06遺物出土状況	S=1/80	101
第67図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06床面直上出土遺物実測図	S=1/3	102
第68図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06出土遺物実測図(1)	S=1/3	104
第69図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06出土遺物実測図(2)	S=1/3	105
第70図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06出土遺物実測図(3)	S=1/3	106
第71図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06出土遺物実測図(4)	S=1/3	108
第72図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06出土遺物実測図(5)	S=1/3	110
第73図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06出土遺物実測図(6)	S=1/3	111
第74図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06出土遺物実測図(7)	S=1/3	112
第75図	竹ヶ崎遺跡	加工段04～加工段06出土遺物実測図(8)	S=1/3	114
		(鉄器197～199はS=1/2)		
第76図	竹ヶ崎遺跡	S I 02実測図	S=1/60	115
第77図	竹ヶ崎遺跡	S D01実測図	S=1/60	116
第78図	竹ヶ崎遺跡	S I 02(200～210)・S D01出土遺物実測図	S=1/3	117
		(鉄器210はS=1/2)		
第79図	竹ヶ崎遺跡	S K01実測図	S=1/60	118
第80図	竹ヶ崎遺跡	S K01遺物出土状況	S=1/80	119
第81図	竹ヶ崎遺跡	S K01出土遺物実測図	S=1/3(鉄器221はS=1/2)	119
第82図	竹ヶ崎遺跡	S I 03・S K02・S K03実測図	S=1/60	120
第83図	竹ヶ崎遺跡	加工段07・S K04実測図	S=1/60	121
第84図	竹ヶ崎遺跡	S I 03・S K02・S K03遺物出土状況	S=1/80	123
第85図	竹ヶ崎遺跡	S I 03・S K02出土遺物実測図(1)	S=1/3	124
第86図	竹ヶ崎遺跡	S I 03・S K02出土遺物実測図(2)	S=1/3	125
		(鉄器254～255はS=1/2)		
第87図	竹ヶ崎遺跡	加工段07出土遺物実測図(1)	S=1/3(鉄器268～269はS=1/2)	127
第88図	竹ヶ崎遺跡	加工段07出土遺物実測図(2)	S=1/1	128
第89図	竹ヶ崎遺跡	東側調査区下段遺構配置図	S=1/390	129
第90図	竹ヶ崎遺跡	S I 04実測図	S=1/60	130
第91図	竹ヶ崎遺跡	S I 04土層図	S=1/60	131
第92図	竹ヶ崎遺跡	S I 04遺物出土状況	S=1/80	132

第93図	竹ヶ崎遺跡	S I 04遺物実測図 S = 1/3(鉄器296~297は S = 1/2) ……133
第94図	竹ヶ崎遺跡	S I 06中央ビット甌形土器出土状況 S = 1/30 ……134
第95図	竹ヶ崎遺跡	S I 05・S I 06実測図 S = 1/60 ……135
第96図	竹ヶ崎遺跡	S I 05・S I 06遺物出土状況 S = 1/80 ……137
第97図	竹ヶ崎遺跡	S I 05出土遺物実測図 S = 1/3(鉄器315は S = 1/2) ……138
第98図	竹ヶ崎遺跡	S I 05南土器散布地遺物実測図 S = 1/3 ……139
第99図	竹ヶ崎遺跡	S I 06遺物実測図(1) S = 1/3 ……140
第100図	竹ヶ崎遺跡	S I 06遺物実測図(2) S = 1/4 ……141
第101図	竹ヶ崎遺跡	S D 03・S D 04実測図 S = 1/60 ……143
第102図	竹ヶ崎遺跡	S D 04出土遺物実測図 S = 1/3 ……143
第103図	竹ヶ崎遺跡	S I 07・S I 08実測図 S = 1/60 ……144
第104図	竹ヶ崎遺跡	S I 07~S I 08(361)出土遺物実測図 S = 1/3 ……145
第105図	竹ヶ崎遺跡	S I 09実測図 S = 1/60 ……146
第106図	竹ヶ崎遺跡	S I 09土層断面図 S = 1/60 ……147
第107図	竹ヶ崎遺跡	S I 09遺物出土状況 S = 1/80 ……148
第108図	竹ヶ崎遺跡	S I 09出土遺物実測図(1) S = 1/3 ……150
第109図	竹ヶ崎遺跡	S I 09出土遺物実測図(2) S = 1/3(鉄器383は S = 1/2) ……151
第110図	竹ヶ崎遺跡	S I 10・S K 05・S D 05実測図 S = 1/60 ……153
第111図	竹ヶ崎遺跡	加工段08・S K 06・S D 06実測図 S = 1/60 ……154
第112図	竹ヶ崎遺跡	S I 10(384)・S D 06(385~389)出土遺物実測図 S = 1/3 ……155
第113図	竹ヶ崎遺跡	S I 11~S I 17周辺遺構配置図 S = 1/120 ……156
第114図	竹ヶ崎遺跡	S I 11実測図 S = 1/60 ……157
第115図	竹ヶ崎遺跡	S I 11(390~392)出土遺物実測図 S = 1/3(石器392は S = 1/1) ……158
第116図	竹ヶ崎遺跡	S D 07・S D 08実測図 S = 1/60 ……159
第117図	竹ヶ崎遺跡	S I 12・S I 13実測図 S = 1/60 ……160
第118図	竹ヶ崎遺跡	S I 12・S I 13土層断面図 S = 1/60 ……161
第119図	竹ヶ崎遺跡	S I 12・S I 13遺物出土状況 S = 1/80 ……162
第120図	竹ヶ崎遺跡	S I 12出土遺物実測図(1) S = 1/3 ……163
第121図	竹ヶ崎遺跡	S I 12出土遺物実測図(2) S = 1/3 ……164 (石器427は S = 1/1, 鉄器428は S = 1/2)
第122図	竹ヶ崎遺跡	S I 13出土遺物実測図 S = 1/3(石器433は S = 1/1) ……165
第123図	竹ヶ崎遺跡	S I 14~S I 17遺構配置図・遺物出土状況 S = 1/80 ……167
第124図	竹ヶ崎遺跡	S I 14・S I 15実測図 S = 1/60 ……168
第125図	竹ヶ崎遺跡	S I 14・S I 15土層断面図 S = 1/60 ……169
第126図	竹ヶ崎遺跡	S I 15土層内遺物出土状況 S = 1/30 ……170
第127図	竹ヶ崎遺跡	S I 14出土遺物実測図 S = 1/3(鉄器437~438は S = 1/2) ……171
第128図	竹ヶ崎遺跡	S I 15出土遺物実測図(1) S = 1/3 ……172 (中央ビット439~441, 土塊442~449)
第129図	竹ヶ崎遺跡	S I 15出土遺物実測図(2) S = 1/3 ……173 (石器464~465は S = 1/1, 鉄器466は S = 1/2)
第130図	竹ヶ崎遺跡	S I 16・S I 17実測図 S = 1/60 ……176
第131図	竹ヶ崎遺跡	S I 16・S I 17土層断面図 S = 1/60 ……177
第132図	竹ヶ崎遺跡	S I 17出土遺物実測図(1) S = 1/3 ……178
第133図	竹ヶ崎遺跡	S I 17出土遺物実測図(2) S = 1/3(鉄器492~493は S = 1/2) ……179
第134図	竹ヶ崎遺跡	S I 18実測図 S = 1/60 ……180
第135図	竹ヶ崎遺跡	S I 18土層断面図 S = 1/60 ……181
第136図	竹ヶ崎遺跡	S I 18遺物出土状況 S = 1/80 ……182
第137図	竹ヶ崎遺跡	S I 18出土遺物実測図 S = 1/3 ……182
第138図	竹ヶ崎遺跡	S I 19実測図 S = 1/60 ……183
第139図	竹ヶ崎遺跡	S I 19出土遺物実測図 S = 1/3 ……184

第140図	竹ヶ崎遺跡	S I 20・加工段09~17遺構配置図	S = 1/120	185
第141図	竹ヶ崎遺跡	加工段15土器溜まり出土遺物実測図(1)	S = 1/3	186
第142図	竹ヶ崎遺跡	加工段15土器溜まり出土遺物実測図(2)	S = 1/3	187
第143図	竹ヶ崎遺跡	S I 20・加工段09~加工段14実測図	S = 1/60	189
第144図	竹ヶ崎遺跡	加工段12~加工段13出土遺物実測図	S = 1/3	190
第145図	竹ヶ崎遺跡	加工段15実測図	S = 1/60	191
第146図	竹ヶ崎遺跡	加工段16・加工段17実測図	S = 1/60	192
第147図	竹ヶ崎遺跡	加工段09~加工段17出土遺物実測図(1)	S = 1/3	194
第148図	竹ヶ崎遺跡	加工段09~加工段17出土遺物実測図(2)	S = 1/3	195
第149図	竹ヶ崎遺跡	加工段09~加工段17出土遺物実測図(3)	S = 1/3	196
第150図	竹ヶ崎遺跡	西側調査区遺構配置図	S = 1/300	199
第151図	竹ヶ崎遺跡	加工段18実測図	S = 1/60	200
第152図	竹ヶ崎遺跡	加工段19実測図	S = 1/60	200
第153図	竹ヶ崎遺跡	加工段19遺物出土状況	S = 1/80	201
第154図	竹ヶ崎遺跡	加工段19出土遺物実測図	S = 1/3(鉄器598はS = 1/2)	201
第155図	竹ヶ崎遺跡	S I 21実測図	S = 1/60	202
第156図	竹ヶ崎遺跡	S I 21遺物出土状況	S = 1/80	203
第157図	竹ヶ崎遺跡	S I 21出土遺物実測図	S = 1/3	203
第158図	竹ヶ崎遺跡	S I 22~S I 25周辺遺構配置図	S = 1/120	205
第159図	竹ヶ崎遺跡	加工段20実測図	S = 1/60	206
第160図	竹ヶ崎遺跡	加工段20遺物出土状況	S = 1/80	206
第161図	竹ヶ崎遺跡	加工段20出土遺物実測図	S = 1/3	207
第162図	竹ヶ崎遺跡	S D 09・S D 10実測図	S = 1/60	208
第163図	竹ヶ崎遺跡	S I 22・S I 23・S D 11・S D 12実測図	S = 1/60	209
第164図	竹ヶ崎遺跡	S D 11~S D 12出土遺物実測図	S = 1/3	210
第165図	竹ヶ崎遺跡	S I 22・S I 23遺物出土状況	S = 1/80	210
第166図	竹ヶ崎遺跡	S I 22出土遺物実測図	S = 1/3	211
第167図	竹ヶ崎遺跡	S I 23出土遺物実測図	S = 1/3	212
第168図	竹ヶ崎遺跡	加工段21実測図	S = 1/60	213
第169図	竹ヶ崎遺跡	加工段21(646)遺物実測図	S = 1/3	213
第170図	竹ヶ崎遺跡	S K 19・S K 20実測図	S = 1/60	214
第171図	竹ヶ崎遺跡	S K 18・S K 19出土遺物実測図	S = 1/3	214
第172図	竹ヶ崎遺跡	S I 24・S I 25実測図	S = 1/60	216
第173図	竹ヶ崎遺跡	S I 24・S I 25土層断面図	S = 1/60	217
第174図	竹ヶ崎遺跡	S I 24・S I 25遺物出土状況	S = 1/80	218
第175図	竹ヶ崎遺跡	S I 24出土遺物実測図(1)	S = 1/3	219
第176図	竹ヶ崎遺跡	S I 24出土遺物実測図(2)	S = 1/3	220
第177図	竹ヶ崎遺跡	S I 25出土遺物実測図	S = 1/3	221
第178図	竹ヶ崎遺跡	加工段22実測図	S = 1/60	222
第179図	竹ヶ崎遺跡	加工段22出土遺物実測図	S = 1/3	223
第180図	竹ヶ崎遺跡	遺構に伴わない遺物実測図(1)	S = 1/3	225
第181図	竹ヶ崎遺跡	遺構に伴わない遺物実測図(2)	S = 1/3	226
第182図	竹ヶ崎遺跡	遺構に伴わない遺物実測図(3)	S = 1/3	227
第183図	竹ヶ崎遺跡	遺構に伴わない遺物実測図(4)	S = 1/3	228
第184図	竹ヶ崎遺跡	遺構に伴わない遺物実測図(5)	S = 1/3	229
第185図	竹ヶ崎遺跡	遺構に伴わない石器実測図	S = 1/1	230
第186図	竹ヶ崎遺跡	近世遺構配置図	S = 1/600	231
第187図	竹ヶ崎遺跡	近世削平段02・S K 15実測図	S = 1/80	233
第188図	竹ヶ崎遺跡	S X 01周辺遺構配置図	S = 1/60	234
第189図	竹ヶ崎遺跡	S X 01実測図	S = 1/60	235

第190図	竹ヶ崎遺跡	SX02実測図	S=1/60	236
第191図	竹ヶ崎遺跡	SK07~SK18 (SK15を除く) 実測図	S=1/60	237
第192図	竹ヶ崎遺跡	SK12出土遺物実測図	S=1/3	238

<第2分冊>

第193図	柳遺跡	発掘調査前の地形測量図	S=1/600	242
第194図	柳遺跡	発掘調査後の地形測量図・遺構配置図	S=1/600	244
第195図	柳遺跡	頂上~西斜面遺構配置図	S=1/300	248
第196図	柳遺跡	頂上高所平坦面西半~西斜面の遺構配置図・遺物出土状況	S=1/240	249
第197図	柳遺跡	SI01実測図	S=1/60	251
第198図	柳遺跡	SI01遺物出土状況	S=1/30 (遺物はスケール不同)	253
第199図	柳遺跡	SI01出土遺物実測図(1)	S=1/3, 17は2/3	254
第200図	柳遺跡	SI01出土遺物実測図(2)	S=1/4	255
第201図	柳遺跡	SI01出土遺物実測図(3)	S=1/3	256
第202図	柳遺跡	SB01・SB02(SD01~SD04)・SD05・SD06・SD07・柱列1実測図	S=1/60	257
第203図	柳遺跡	SB03・SB04実測図	S=1/60	258
第204図	柳遺跡	柱列2・柱列3・柱列4・柱列5・SD08・SK01実測図		260
第205図	柳遺跡	SB05・柱列6実測図	S=1/60	261
第206図	柳遺跡	SB06実測図	S=1/60	262
第207図	柳遺跡	SI07実測図	S=1/60	263
第208図	柳遺跡	加工段1実測図	S=1/60	264
第209図	柳遺跡	頂上高所平坦面西半出土遺物実測図	S=1/3	265
第210図	柳遺跡	頂上高所平坦面西側下方出土遺物実測図	S=1/3, 26・27は2/3	267
第211図	柳遺跡	頂上平坦面及び西側斜面出土遺物実測図	S=1/3	268
第212図	柳遺跡	西斜面谷底土層断面実測図	S=1/80	269
第213図	柳遺跡	西側斜面谷底出土遺物実測図(1)	S=1/3	270
第214図	柳遺跡	西側斜面谷底出土遺物実測図(2)	S=1/3	271
第215図	柳遺跡	西側斜面谷底出土遺物実測図(3)	S=1/3	273
第216図	柳遺跡	西側斜面谷底出土遺物実測図(4)	S=1/3, 126は2/3	274
第217図	柳遺跡	西側斜面谷底出土遺物実測図(5)	S=1/3	275
第218図	柳遺跡	頂上高所平坦面東半~東斜面の遺構配置図・遺物出土状況	S=1/150	277
第219図	柳遺跡	頂上高所平坦面東側 土層堆積状況実測図	S=1/80	278
第220図	柳遺跡	SB08・SB09・SB10実測図	S=1/60	279
第221図	柳遺跡	SB11・SB12実測図	S=1/60	280
第222図	柳遺跡	SB13・SB14・柱列8実測図	S=1/60	281
第223図	柳遺跡	SB15・SB16実測図	S=1/60	282
第224図	柳遺跡	SB17・SB18実測図	S=1/60	283
第225図	柳遺跡	頂上高所平坦面東側直下斜面 盛土・流土中出土遺物実測図	S=1/3	284
第226図	柳遺跡	頂上高所平坦面東半・東側盛土中出土遺物実測図	S=1/3	286
第227図	柳遺跡	頂上高所平坦面東側斜面 流土中出土遺物実測図	S=1/3	287
第228図	柳遺跡	頂上北低平部遺構配置図・遺物出土状況	S=1/150	288
第229図	柳遺跡	SI02実測図	S=1/60	289
第230図	柳遺跡	SI02出土遺物実測図	S=1/3	290
第231図	柳遺跡	SI03実測図	S=1/60	291
第232図	柳遺跡	SI03遺物出土状況	S=1/120 (遺物はS=1/6)	292
第233図	柳遺跡	SI03出土遺物実測図(1)	S=1/3	292
第234図	柳遺跡	SI03出土遺物実測図(2)	S=1/3	293
第235図	柳遺跡	SI04実測図	S=1/60	294
第236図	柳遺跡	SI04出土遺物実測図	S=1/3	295

第237図	柳遺跡	加工段2実測図 S=1/60	296
第238図	柳遺跡	加工段2出土遺物実測図 S=1/3, 11は2/3	297
第239図	柳遺跡	S B19・柱列9実測図 S=1/60	298
第240図	柳遺跡	S B20・S B21・S B22・S B23・柱列10実測図 S=1/60	299
第241図	柳遺跡	S B24・柱列11実測図 S=1/60	300
第242図	柳遺跡	頂上北端柱列実測図 S=1/60	301
第243図	柳遺跡	頂上北低平部と東側斜面出土遺物実測図 S=1/3	302
第244図	柳遺跡	東斜面上半の遺構配置図 S=1/300	305
第245図	柳遺跡	加工段3・加工段4実測図 S=1/60	306
第246図	柳遺跡	加工段5実測図 S=1/60	307
第247図	柳遺跡	加工段4出土遺物実測図 S=1/3	307
第248図	柳遺跡	加工段6・加工段7・加工段8・加工段9・加工段10配置図 S=1/120	308
第249図	柳遺跡	加工段6・加工段7・加工段8実測図 (S B25・S B26・S B27)	310
第250図	柳遺跡	S B25・S B26・S B27断面図 S=1/60	311
第251図	柳遺跡	加工段7 (S B28)・加工段8実測図 S=1/60	312
第252図	柳遺跡	加工段9・加工段10実測図 S=1/60	314
第253図	柳遺跡	加工段6・加工段10出土遺物実測図 S=1/3, 14のみ2/3	315
第254図	柳遺跡	S I 05・加工段5・加工段11・加工段12配置図 S=1/120	316
第255図	柳遺跡	S I 05実測図 S=1/60 (遺物出土状況は1/30)	318
第256図	柳遺跡	S I 05断面図 (1) S=1/60	319
第257図	柳遺跡	S I 05断面図 (2) S=1/60	320
第258図	柳遺跡	S I 05遺物出土状況 S=1/120 (遺物は1/6)	321
第259図	柳遺跡	S I 05出土遺物実測図 (1) S=1/3	322
第260図	柳遺跡	S I 05出土遺物実測図 (2) S=1/3	324
第261図	柳遺跡	S I 05上段・周溝出土遺物実測図 S=1/3	325
第262図	柳遺跡	加工段11実測図 S=1/60	326
第263図	柳遺跡	加工段11出土遺物実測図 S=1/3	327
第264図	柳遺跡	加工段12実測図 S=1/60	328
第265図	柳遺跡	加工段12出土遺物実測図 S=1/3	329
第266図	柳遺跡	加工段13・加工段14・加工段15・加工段16・加工段17・加工段18・ 加工段19・S I 06・S I 07・S I 08・S I 09・S I 10配置図	331
第267図	柳遺跡	加工段13実測図 S=1/60	332
第268図	柳遺跡	加工段13出土遺物実測図 S=1/3	333
第269図	柳遺跡	加工段14・加工段15実測図 S=1/60	334
第270図	柳遺跡	加工段14・加工段15断面図 S=1/60	335
第271図	柳遺跡	加工段14・加工段15出土遺物実測図 S=1/3	336
第272図	柳遺跡	加工段16実測図 S=1/60	337
第273図	柳遺跡	加工段16出土遺物実測図 S=1/3	338
第274図	柳遺跡	S I 06実測図 S=1/60	340
第275図	柳遺跡	S I 06断面図 S=1/60	341
第276図	柳遺跡	S I 06遺物出土状況 S=1/120 (遺物は1/6)	342
第277図	柳遺跡	S I 06出土遺物実測図 (1) S=1/3	343
第278図	柳遺跡	S I 06出土遺物実測図 (2) S=1/3	344
第279図	柳遺跡	S I 07・加工段17実測図 S=1/60	346
第280図	柳遺跡	S I 07断面実測図 S=1/60	347
第281図	柳遺跡	S I 07建て替え概念図 S=1/120	348
第282図	柳遺跡	S I 07・S I 08遺物出土状況 S=1/120 (遺物は1/6)	348
第283図	柳遺跡	S I 07出土遺物実測図 S=1/3	349
第284図	柳遺跡	S I 08・S I 09実測図 S=1/60	350
第285図	柳遺跡	S I 08・S I 09断面実測図 S=1/60	351

第286図	柳遺跡	S I 08断面図 S =1/60	352
第287図	柳遺跡	S I 08出土遺物実測図 S =1/3	354
第288図	柳遺跡	S I 08上段・周溝出土遺物実測図 S =1/3	355
第289図	柳遺跡	S I 08上段出土碧玉実測図 S =1/2	357
第290図	柳遺跡	S I 10実測図 S =1/60	358
第291図	柳遺跡	S I 10遺物出土状況 S =1/120(遺物は1/6)	359
第292図	柳遺跡	S I 10出土遺物実測図 S =1/3	360
第293図	柳遺跡	加工段18・加工段19・加工段20実測図 S =1/60	361
第294図	柳遺跡	加工段18・加工段19出土遺物実測図 S =1/3	362
第295図	柳遺跡	加工段21 下面実測図 S =1/60	365
第296図	柳遺跡	加工段21 中面実測図 S =1/60	366
第297図	柳遺跡	加工段21 上面実測図 S =1/60	367
第298図	柳遺跡	加工段21出土遺物実測図(1) S =1/3	368
第299図	柳遺跡	加工段21出土遺物実測図(2) S =1/3	369
第300図	柳遺跡	加工段22・加工段26実測図 S =1/60	370
第301図	柳遺跡	加工段22・加工段26断面実測図 S =1/60	371
第302図	柳遺跡 出土)	加工段22遺物出土状況 S =1/120(遺物は1/6、●・床面出土 ○・覆土)	372
第303図	柳遺跡	加工段22出土遺物実測図 S =1/3	373
第304図	柳遺跡	加工段26出土遺物実測図 S =1/3	375
第305図	柳遺跡	加工段23・加工段27実測図 S =1/60	376
第306図	柳遺跡	加工段23断面図 S =1/60	377
第307図	柳遺跡 出土)	加工段23遺物出土状況 S =1/120(遺物は1/6、●・床面出土 ○・覆土)	378
第308図	柳遺跡	加工段23出土遺物実測図 S =1/3	379
第309図	柳遺跡	加工段22・加工段23出土遺物実測図 S =1/2	380
第310図	柳遺跡	加工段24実測図 S =1/60	381
第311図	柳遺跡	加工段24出土遺物実測図 S =1/3	381
第312図	柳遺跡	加工段25実測図 S =1/60	383
第313図	柳遺跡	加工段25断面図 S =1/60	384
第314図	柳遺跡	加工段25出土遺物実測図(1) S =1/3	386
第315図	柳遺跡	加工段25出土遺物実測図(2) S =1/3	387
第316図	柳遺跡	加工段25出土遺物実測図(3) S =1/2	388
第317図	柳遺跡	加工段28, 29, 30, 31, S I 11, S K 02配置図 1/120	389
第318図	柳遺跡	加工段28実測図 S =1/60	391
第319図	柳遺跡	加工段28出土遺物実測図 S =1/3	392
第320図	柳遺跡	加工段29・加工段30実測図 S =1/60	393
第321図	柳遺跡	加工段29・加工段30・加工段31断面図 S =1/60	394
第322図	柳遺跡	加工段29出土遺物実測図 S =1/3	395
第323図	柳遺跡	加工段30・S I 11出土遺物実測図 S =1/3	396
第324図	柳遺跡	加工段31・S I 11・S K 02実測図 S =1/60	398
第325図	柳遺跡	加工段31出土遺物実測図 S =1/3	399
第326図	柳遺跡	S K 02実測図 S =1/30	400
第327図	柳遺跡	S K 02出土遺物実測図 S =1/3	400
第328図	柳遺跡	東斜面下半の遺構配置図 S =1/300	402
第329図	柳遺跡	加工段32・加工段33・加工段34・加工段35・加工段36・ 加工段38・加工段43・S I 12配置図 S =1/120	403
第330図	柳遺跡	加工段32・加工段35・加工段36実測図 S =1/60	405
第331図	柳遺跡	加工段32・加工段35・加工段36断面図 S =1/60	406

第332図	柳遺跡	加工段32・加工段33・加工段34・加工段35・加工段36遺物出土 状況 S=1/120(遺物は1/6)	407
第333図	柳遺跡	加工段32出土遺物実測図 S=1/3	408
第334図	柳遺跡	加工段33・加工段34実測図 S=1/60	410
第335図	柳遺跡	加工段33・加工段34出土遺物実測図 S=1/3	411
第336図	柳遺跡	加工段32・加工段34出土遺物実測図 S=1/2	412
第337図	柳遺跡	加工段34南側出土遺物実測図 S=1/3	414
第338図	柳遺跡	加工段35出土遺物実測図 S=1/3	416
第339図	柳遺跡	加工段36出土遺物実測図 S=1/2	417
第340図	柳遺跡	加工段37実測図 S=1/60	419
第341図	柳遺跡	加工段37出土遺物実測図 S=1/3	420
第342図	柳遺跡	加工段38(古)実測図 S=1/60	421
第343図	柳遺跡	加工段38(新)実測図 S=1/60	422
第344図	柳遺跡	加工段38出土遺物実測図 S=1/3	423
第345図	柳遺跡	S K03下方出土遺物実測図 S=1/3	424
第346図	柳遺跡	S K03遺物出土状況 S=1/30	424
第347図	柳遺跡	S K03出土遺物実測図 S=1/2	424
第348図	柳遺跡	加工段39実測図 S=1/60	425
第349図	柳遺跡	加工段40実測図 S=1/60	426
第350図	柳遺跡	加工段38・加工段40出土遺物実測図 S=1/2	426
第351図	柳遺跡	加工段41実測図 S=1/60(炉状遺構断面図は1/30)	427
第352図	柳遺跡	加工段41・加工段42出土遺物実測図 S=1/2	428
第353図	柳遺跡	加工段42実測図 S=1/60	430
第354図	柳遺跡	加工段42出土遺物実測図 S=1/3	431
第355図	柳遺跡	加工段43実測図 S=1/60	432
第356図	柳遺跡	加工段43出土遺物実測図 S=1/3	433
第357図	柳遺跡	S I12実測図 S=1/60	435
第358図	柳遺跡	S I12・S I12南出土遺物実測図 S=1/3	435
第359図	柳遺跡	加工段44・加工段45・加工段46・加工段47・加工段48・ 加工段50・加工段51・階段状遺構配置図 S=1/120	436
第360図	柳遺跡	加工段44・加工段45・加工段46・加工段47・加工段48・ 加工段50実測図 S=1/60	437
第361図	柳遺跡	加工段45・加工段46・加工段47・加工段48断面実測図 S=1/60	438
第362図	柳遺跡	加工段45出土遺物実測図 S=1/3	440
第363図	柳遺跡	加工段47・加工段48出土遺物実測図 S=1/3	442
第364図	柳遺跡	加工段49実測図 S=1/60	443
第365図	柳遺跡	加工段49・加工段50出土遺物実測図 S=1/3	444
第366図	柳遺跡	階段状遺構・加工段51実測図 S=1/60	447
第367図	柳遺跡	階段状遺構遺物出土状況 S=1/30	449
第368図	柳遺跡	階段状遺構出土遺物実測図(1) S=1/3	450
第369図	柳遺跡	階段状遺構出土遺物実測図(2) S=1/3	451
第370図	柳遺跡	階段状遺構出土遺物実測図(3) S=1/3	453
第371図	柳遺跡	階段状遺構出土遺物実測図(4) S=1/3	454
第372図	柳遺跡	階段状遺構出土遺物実測図(5) S=1/3	455
第373図	柳遺跡	階段状遺構出土遺物実測図(6) S=1/2	457
第374図	柳遺跡	加工段51・加工段51下方出土遺物実測図 S=1/3	459
第375図	柳遺跡	加工段52・加工段53・加工段54・加工段55・加工段56配置図 S=1/120	460
第376図	柳遺跡	加工段52・加工段53実測図 S=1/60	462
第377図	柳遺跡	加工段52・加工段55出土遺物実測図 S=1/2	463

第378図	柳遺跡	加工段52・加工段55・加工段58出土遺物実測図	S=1/3	463	
第379図	柳遺跡	加工段53出土遺物実測図	S=1/3	465	
第380図	柳遺跡	加工段54実測図	S=1/60	466	
第381図	柳遺跡	加工段55・加工段56実測図	S=1/60	468	
第382図	柳遺跡	加工段57・加工段58実測図	S=1/60	469	
第383図	柳遺跡	池状遺構土層断面実測図	S=1/80	470	
第384図	柳遺跡	池状遺構出土遺物実測図	S=1/2	471	
第385図	柳遺跡	東斜面部 遺構に伴わない遺物実測図	S=1/3	473	
第386図	亀ノ尾古墳	位置図	S=1/7,500	477	
第387図	亀ノ尾古墳	トレンチ配置図	S=1/300	478	
第388図	塩津丘陵遺跡群出土土器	編年表(1)	S=1/10	500	
第389図	塩津丘陵遺跡群出土土器	編年表(2)	S=1/10	501	
第390図	塩津丘陵遺跡群	時期別、遺構別出土土器の組成グラフ		504	
第391図	塩津丘陵遺跡群出土	塩津5期併行の外來系土器と甌形土器		505	
第392図	柳遺跡	検出加工段の類型別分布図	S=1/600	511	
第393図	柳遺跡	頂上平坦面検出の建物群	時期別変遷図(1)	S=1/400	516
第394図	柳遺跡	頂上平坦面検出の建物群	時期別変遷図(2)	S=1/400	516
第395図	柳遺跡	頂上平坦面検出の建物群	時期別変遷図(3)	S=1/400	517
第396図	柳遺跡	頂上平坦面検出の建物群	時期別変遷図(4)	S=1/400	517
第397図	塩津丘陵遺跡群	検出された遺構の時期別変遷図(1)	塩津1期	S=1/1500	521
第398図	塩津丘陵遺跡群	検出された遺構の時期別変遷図(2)	塩津2期、3期	S=1/1500	522
第399図	塩津丘陵遺跡群	検出された遺構の時期別変遷図(3)	塩津4期、5期	S=1/1500	523
第400図	塩津丘陵遺跡群	と周辺の地形測量図	S=1/2000	525~526	

1 調査に至る経緯



1 調査に至る経緯

昭和47年5月26日付けで、建設省松江国道事務所から島根県教育委員会に「国道9号バイパス」建設の基本設計資料として、鳥取県との境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無について照会があった。

そこで、県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て、昭和47年、48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果等をふまえ、建設省からルート案が呈示され、昭和48年7月には松江市東地区の予定ルートにかかわる遺跡の取扱いについて協議があった。昭和49年7月には安来地区の清水一月坂間のルート案について協議があった。つづいて、昭和50年1月22日付けで県教育委員会あて、松江東地区と安来地区のうち清水一月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受けて、昭和50年7月には建設省と契約を取り交わし、昭和50年度、松江市竹矢町才の峠古墳群、同矢田町平所遺跡、安来市早田町大坪古墳群の発掘調査を、昭和51年度には、松江市平所遺跡の関連再調査、東出雲町出雲郷夫敷遺跡の試掘調査を実施した。平所遺跡では、埴輪窯跡から馬、鹿、家、人物などの形象埴輪が出土し、52年6月には国の重要文化財に指定された。

昭和55年度・56年度には、昭和57年に開催が決定していた「くにびき国体」の主要幹線道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼ばれていた。）東出雲町出雲郷から松江市古志原町に至る5.4km間の7遺跡（東出雲町の春日遺跡、夫敷遺跡、松江市の布田遺跡、中竹矢遺跡、才の峠遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）のうち2車線分を緊急に調査した。

その後、「松江バイパス」は高規格道路に設計変更され「松江道路」となり、昭和60年に建設省から前回調査した7ヶ所の残り4車線分の調査依頼があった。調査は昭和61年度から平成3年度まで順次行った。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9kmが「安来バイパス」として事業化されたが、翌昭和63年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ東出雲町出雲郷—安来市吉佐町間の18.7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で、予定ルートにも変更が生じたため、昭和62年度・63年度に再度分布調査を実施した。

発掘調査はまず、安来市赤江町から島田町に至る6.9km（インター部を含む。）において平成元年度から4年度まで8遺跡（安来市宮内町宮内遺跡、佐久保町大原遺跡、同 臼コクリ遺跡、同 岩尾口南遺跡、同 岩屋口北遺跡、黒井町同越峠遺跡、同 オノ神遺跡、島田町島田南遺跡）で実施し、平成4年度からは安来市荒島町—東出雲町出雲郷間を「安来道路西地区」として、さらに平成5年度からは安来市吉佐町—宮内町間を「安来道路東地区」として実施中している。

本報告書所載の3遺跡は、安来道路西地区の最も東側に所在する遺跡で、平成6年度に塩津山遺跡、7年度に竹ヶ崎遺跡と柳遺跡の調査を行っている。このあいだに、塩津山遺跡内に存在する塩津山1号墳について、出雲地方最古の古墳のひとつとして現状保存が出来ないか協議を行ってきた。その結果、トンネル工法への設計変更により保存が決定している。

（卜部）

一般国道9号（安来道路）建設に伴う主要な埋蔵文化財調査一覧表

年 度	東地区 遺跡名	所 在 地	西地区 遺跡名	所 在 地
平成元年度	宮内遺跡	安来市佐久保町字栗坪		
平成2年度	宮内遺跡	安来市佐久保町字栗坪		
	島田南遺跡	安来市島田町字雨谷		
平成3年度	白コクリ遺跡	安来市佐久保町字白コクリ		
	岩屋口南遺跡	安来市佐久保町字カワラケ免		
	越時遺跡	安来市黒井田町字高垣		
平成4年度	岩屋口南遺跡	安来市佐久保町字カワラケ免	御崎谷遺跡	東出雲町
	岩屋口北遺跡	安来市佐久保町字カワラケ免	清水遺跡	東出雲町
	大原遺跡	安来市佐久保町字大原		
	オノ神遺跡	安来市黒井田町字越時		
平成5年度	明子谷遺跡	安来市島田町字明子谷	四ツ廻り遺跡	東出雲町横屋字四ツ廻り
	島田黒谷Ⅰ遺跡	安来市島田町黒谷	林廻り遺跡	出雲町横屋字林廻り
	島田黒谷Ⅱ遺跡	安来市島田町黒谷	安来市島田町黒谷	東出雲町横屋字受馬
	島田黒谷Ⅲ遺跡	安来市島田町黒谷	巻林遺跡	東出雲町下意東
	猫ノ谷遺跡	安来市黒井田町細井	駒賀遺跡	東出雲町出雲崎字深田
	国古遺跡	安来市吉佐町字国古	中山遺跡	安来市荒島町中山
	カンボウ遺跡	安来市吉佐町字カンボウ		
	平ラⅠ遺跡	安来市吉佐町字平ラ		
	平ラⅡ遺跡(穴神横穴群)	安来市吉佐町字山根、油出		
	石田遺跡	安来市吉佐町字石田		
平成6年度	岩屋口北遺跡	安来市佐久保町字カワラケ免	塩津山遺跡	安来市荒島町沢、久白町塩津
	山ノ神遺跡	安来市吉佐町字山ノ神	坂津山古墳群	安来市荒島町沢、久白町塩津
	徳見津遺跡	安来市吉佐町字徳見津	島田池遺跡	東出雲町出雲郡
	日廻遺跡	安来市吉佐町字日廻		
	五反田遺跡	安来市吉佐町字五反田		
	隔徳遺跡	安来市門生町字隔徳		
	隔徳寺遺跡	安来市門生町字隔徳		
	門生黒谷Ⅰ遺跡 (門生山根1号竪穴群含む)	安来市門生町字		
	門生黒谷Ⅱ遺跡	安来市門生町		
	門生黒谷山遺跡 (五反田古墳群含む)	安来市門生町		
平成7年度	石田遺跡	安来市吉佐町字石田	竹ヶ崎遺跡	安来市荒島町竹ヶ崎
	門生黒谷Ⅲ遺跡	安来市門生町	柳遺跡	安来市荒島町柳
			柳Ⅱ遺跡	安来市荒島町柳
			小久山墳墓群	安来市荒島町鎌十鈎
			神庭谷遺跡	安来市荒島町舟藏
			洗山池遺跡	東出雲町横屋
			洗山池古墳群	東出雲町横屋
			原ノ前遺跡	東出雲町横屋
			島田遺跡	東出雲町出雲郡
			島田池遺跡	東出雲町出雲郡
		岸尾遺跡	東出雲町出雲郡	
		静負遺跡	東出雲町横屋	

2. 塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・ 竹ヶ崎遺跡・柳遺跡）の位置と環境



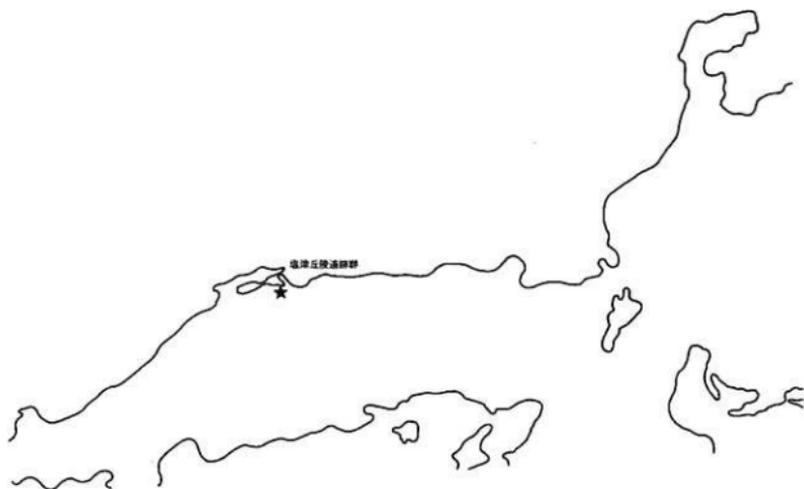
2. 塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡）の位置と環境

第1章 安来平野における荒島地区の位置と環境

塩津丘陵遺跡群が存在する安来市荒島地区は、島根県の東端に広がる安来平野西側縁辺の中海を望むところに位置している。安来平野は、中国山地に源を発し、南流して中海に注ぐ飯梨川と、伯太川、そして安来市南部を源流とする吉田川の3河川の沖積作用により形作られた平野である。現在平野の北側は、中海に突出して三角州を形成し、広い水田地帯となっている。

しかしこの三角州の大部分は、近世以降のたたら製鉄に伴う鉄穴流しによる莫大な土砂流出によるところが大きく、古代においては現中海が現在の平野内にかなり滲入していた可能性が高い。このことは、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に、現国道9号線のすぐ北にある飯島権現のある山が「飯島」として「入海」の項に島として記載されている¹⁾ことや、国道9号線の南側にある地名の荒島、赤江、塩津、今津、中津などからもうかがうことが出来よう。

この安来平野の周辺地域は、島根県内においても有数の遺跡密集地域である。塩津丘陵遺跡群にかかわりの深い弥生時代から古墳時代にかけての遺跡を中心にして、この地域の歴史的環境を概観してみたい。



第1図 塩津丘陵遺跡群の位置

塩津丘陵遺跡群周辺の遺跡一覧表

1	塩津丘陵遺跡群 塩津山墳墓群 塩津山遺跡 竹ヶ崎遺跡 樽遺跡・柳口遺跡	四隅突出型墳丘墓2、古墳9等	42	小林遺跡	弥生堅穴住居
		弥生後期集落	43	瀬戸山遺跡	弥生後期住居跡
		弥生後期、古墳中期集落	44	清水山土墳墓群	弥生土塚墓群
		弥生後期、古墳中期集落			
2	岩屋遺跡	古墳前期海岸線	45	尾尾土塚墓群	弥生後期墳墓、土塚墓群
3	安養寺墳墓群	四隅突出型墳丘墓2	46	教興寺跡	奈良寺跡
4	富山墳墓群	四隅突出墓1古墳2、弥生末集落	47	小谷土塚墓	古墳前期
5	仲仙寺墳墓群	四隅突出型墳丘墓3	48	加茂古墳	箱式石棺、礎床
6	下山墳丘墓	四隅突出型墳丘墓	49	切川土塚墓群	赤崎上城墓群含む
7	橋松古墳群		50	赤崎横穴墓群	3穴
8	仏山古墳	後期古墳、彌嚙環頭大刀、馬具等	51	十神山古墳	長持形石棺
9	大成古墳	前期方墳、竪穴式石室、鏡等	52	浦ヶ部遺跡	前方後円墳、古墳集落等
10	道山古墳群	前期方墳2、中期古墳2	53	長曾土塚墓群	弥生後期土塚墓、区画墓
11	高塚山古墳	後期古墳?	54	尾光塚古墳	前方後円墳50m、舟形石棺
12	小久白墳墓	弥生終末期古台墓	55	客さん古墳	長持形石棺
13	神庭谷遺跡	弥生末、古墳後期以降散布地	56	高広遺跡	横穴墓13、弥生、古墳以降集落
14	岩塚古墳	終末期古墳、横穴式石室	57	新林古墳群	前期古墳
15	中山遺跡	奈良火葬墓	58	あんもち山古墳群	円墳(1基は径35m)
16	亀の尾古墳	遺物散布地	59	宮内遺跡	弥生後期集落、横穴墓2他
17	西荒島古墳群	中期古墳3(大形方墳あり)	60	大原遺跡	弥生後期集落、古墳五作、横穴墓
18	塩田横穴墓群	整正家形横穴墓	61	白コクリ遺跡	弥生後期集落、墳墓、横穴墓19他
19	塩田古墳群		62	岩屋口北遺跡	弥生後期集落、横穴墓12穴
20	客山古墳群		63	越時遺跡	弥生後期、古墳後期～奈良集落
21	山の神古墳群		64	オノ神遺跡	弥生後期集落、奈良～平安祭祀
22	備前山古墳群		65	猫ノ谷遺跡	弥生後期住居跡
23	巻林横穴墓		66	叶谷遺跡	弥生後期集落
24	織近遺跡	弥生土器、石斧	67	大坪古墳群	弥生後期住居跡、中期古墳6
25	金成山古墳	石棺式石室	68	九重土塚墓群	弥生後期土塚墓群
26	岩屋古墳群	前方後方墳1(30m)、方墳3	69	清水大川空裏遺跡	弥生土塚墓群、横穴、近世墓
27	まろつか古墳	円墳	70	清瀬山古墳群	13基(前方後円墳2、47m、33m)
28	榎廻古墳群	前方後方墳、方墳等7	71	大入原古墳群	4基(前方後円墳1)
29	柚免古墳群	方墳、円墳6	72	島田黒谷遺跡	縄文、弥生後期散布地
30	焼畑古墳群	方墳7、箱式石棺等	73	善治場遺跡	弥生後期、古墳後期～平安集落
31	鎌子谷古墳群	方墳2	74	門生高畑古墳群	須恵器窯跡群(山陰I期)
32	飯坂岩舟古墳	後期古墳、石棺式石室	75	島田黒谷田遺跡	弥生末土塚墓群
33	かわらけ谷横穴墓群	13穴、環頭大刀など	76	門生山根1号窯跡	5世紀末須恵器窯跡
34	釜ノ湯病跡跡横穴墓群	8穴以上、石棺、環頭大刀、冠等	77	門生黒谷田遺跡	弥生後期集落、 (五反田古墳群)
35	能義神社遺跡	弥生堅穴住居跡			前～中期古墳6(25m円墳)
36	能義神社奥の院古墳群	12基(1基は径35m)	78	陽徳遺跡	弥生後期高地性集落
37	祝谷横穴墓群	金環、須恵器	79	山根古墳	前方後円墳
38	矢田古墳群、横穴墓群	古墳107基、横穴墓57穴	80	五反田遺跡	古墳後期～飛鳥集落(鍛冶)
39	意多岐神社古墳群	3基、横穴墓3穴	81	徳見津遺跡	古墳後期～奈良集落(鍛冶)
40	今右時古墳群	円墳(28m、石棺等)前方後円墳	82	山ノ神遺跡	弥生中期、古墳後期集落
41	えくり谷横穴墓群	20穴以上			

旧石器時代から縄文時代の遺跡の検出例はまれだが、近年わずかずつながらあきらかに増えている。旧石器時代の遺物としては、安来市黒井田町の小沙手遺跡から玉髄製の削器¹⁰⁾が、吉佐町のカンボウ遺跡からは安山岩製の削器が出土¹¹⁾している。前者は東北日本との、後者は瀬戸内地方との関係をうかがわせる資料である。一方縄文時代の遺物は、安来市島田町の島田黒谷Ⅰ遺跡から、縄文時代前期から後期にかけての上器が相当量出土している¹²⁾。また黒井田町の高広遺跡¹³⁾や吉佐町の石田遺跡¹⁴⁾などでも少量ながら縄文土器の出土が知られ、古くからこの地域で人々が生活していたことがわかりつつある。

弥生時代になると、多くの遺跡が確認されるようになる。前期の遺跡は発見例が少ないが、本遺跡群の柳Ⅱ遺跡から壺棺が検出されている¹⁵⁾。中期前半では、荒島地区の西側の東出雲町磯近遺跡でまとまって土器が出土¹⁶⁾しており、平野部の開発が進んだことをうかがわせる。中期中葉以降、安来平野では吉佐町山ノ神遺跡¹⁷⁾、黒井田町高広遺跡¹⁸⁾、宮内町宮内遺跡¹⁹⁾などの遺跡が知られている。現状では、調査が丘陵部に偏り気味なことが中期以前の遺跡の検出例が少ないことに関連している可能性が高く、今後平野部の調査が進めばさらに遺跡は増加するものと考えられる。

弥生時代後期になると遺跡の検出例が格段に増加する。集落については、丘陵上に住居跡が検出される例が目立つ。鳥取県境に近い門生町陽徳遺跡では、中海を眼下に見おろす標高約80mの山頂から竪穴住居跡5棟が検出され、その立地から見張り等の機能を持つ「高地性集落」と推定される²⁰⁾。そのほかにも、オノ神遺跡²¹⁾、岩屋口北遺跡²²⁾、臼コクリ遺跡²³⁾、大坪遺跡²⁴⁾、叶谷遺跡²⁵⁾などからも丘陵上で建物跡が検出されている。これらの遺跡の大部分が塩津丘陵遺跡群で検出された集落跡と同時期に展開しており、注目される。

一方弥生時代後期の墳墓の調査例も多い。荒島地区を中心に、数多くの四隅突出型墳丘墓が知られている。四隅突出型墳丘墓以外にも墳丘や区画を持つ例も多く、鍵尾土塚墓群²⁶⁾、臼コクリ遺跡²⁷⁾、長曾土塚墓群²⁸⁾、島田黒谷Ⅲ遺跡²⁹⁾などが挙げられる。また九重土塚墓群をはじめとして墳丘が不明瞭な例も多く認められる³⁰⁾。

古墳時代前期には荒島地区で大規模な方墳が築かれる（後章で詳述）ほか、平野東の丘陵には新林古墳群³¹⁾、陽徳Ⅰ号墳³²⁾、吉佐山根Ⅰ号墳³³⁾などが知られている。門生町の五反田Ⅰ号墳は平野東側では最大の古墳で直径25m、竪穴式石室を持つ³⁴⁾。中期には荒島地区で引き続き大形の前方後方墳や方墳が築かれる一方で、飯梨川を挟んで東側の丘陵では昆壳塚古墳を始めとする前方後円墳やあんなも山古墳を始めとする円墳が築かれ、対照を為している。

古墳時代後期には、飯梨川西岸では飯梨岩舟古墳や塩津神社古墳を始めとした精美的な石棺式石室³⁵⁾が築かれるが、東岸では東境の神代塚古墳を除いては全く石室墳は見られず、もっぱら横穴墓が造られている。横穴墓は安来平野周辺のほぼ全域で造られ、石棺や金銅装大刀・馬具などの優秀な副葬品を持つものも少なくない。代表的な例としては鷲の湯病院跡横穴墓群、欠田横穴墓群³⁶⁾、臼コクリ横穴墓群³⁷⁾、宮内横穴墓群³⁸⁾、高広横穴墓群³⁹⁾、穴神横穴墓群⁴⁰⁾などが挙げられる。

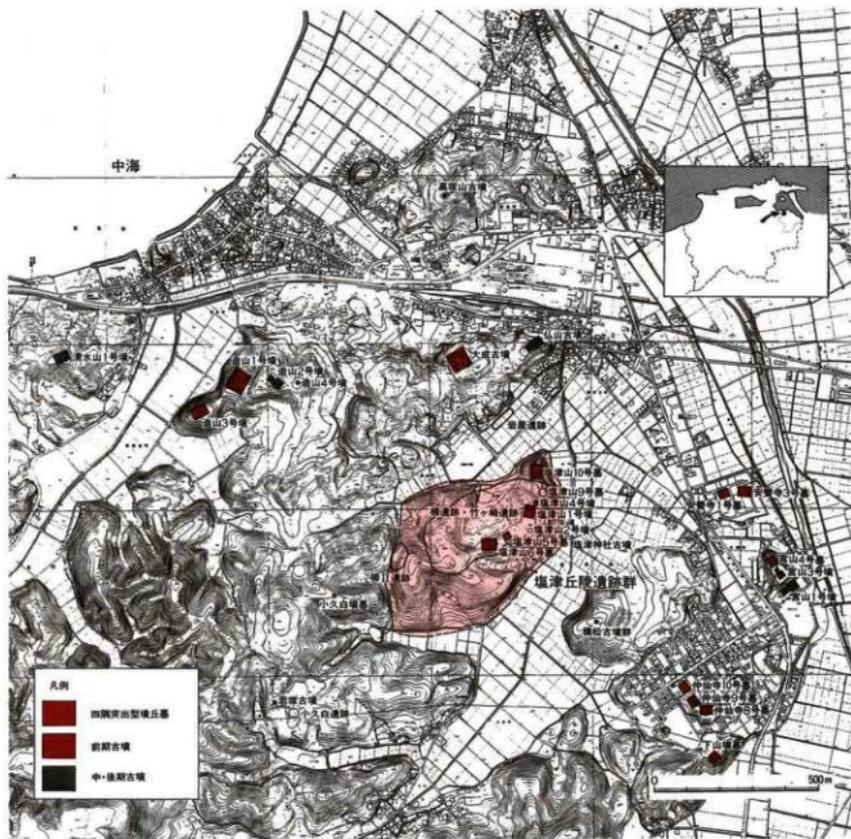
古墳時代の集落は中期以降、丘陵の斜面で多く検出されている。岩屋口南遺跡⁴¹⁾、越峠遺跡⁴²⁾、高広遺跡⁴³⁾、門生黒谷Ⅱ遺跡⁴⁴⁾などが代表例である。生産遺跡としては大原遺跡⁴⁵⁾や平Ⅱ遺跡⁴⁶⁾で玉作が、門生古窯跡群⁴⁷⁾では須臾器生産が、五反田遺跡や徳見津遺跡では鍛冶が行われた⁴⁸⁾ことがわかっている。

以上のように安来平野周辺には多くの遺跡が残され、出雲地方において重要な位置を占めている。

第2章 荒島地区の遺跡と塩津丘陵遺跡群

荒島地区は、前章で述べたように安来平野の北西縁に位置している。この地区の丘陵部でも平野に面した丘陵一体は、特に遺跡が密集するところである。東西約2km、南北約1.5kmの範囲に弥生時代後期から律令期に至るまでの大形墳墓が集中しており、「荒島墳墓群」と総称されている¹⁰⁾。特に弥生時代後期の四隅突出型墳墓や前期の大方墳の集中度は、県下のみならず、全国的に見ても高い地区といえ、弥生時代から古墳時代にかけての首長墓の動きを探る上で貴重な資料を提供している。

「塩津丘陵遺跡群」は、この荒島墳墓群のほぼ中央部に位置している。東側（安来平野側）に開



第3図 荒島墳墓群と塩津丘陵遺跡群

く谷の中央に舌上に突出する丘陵部にあたり、この遺跡群をとりまくように大形の墳墓が存在している。この丘陵の東側尾根上には、大形の四隅突出型墳墓や前期古墳を含んで11基の墳墓（塩津山墳墓群）が並び、墳墓群の範囲に重複しながら弥生時代後期末と古墳時代中期の集落跡である塩津山遺跡、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡、柳II遺跡が連なっている。これらの遺跡は、発見の経緯や開発事業との調整の関係で別々の遺跡名を冠して呼ばれているが、本来区分するのは極めて困難である。現実に塩津山墳墓群と塩津山遺跡はその範囲を重複させている。特に弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけては、これらの遺跡は密接に関連した一体の遺跡である可能性が高くなってきており、ここでこれらの遺跡を一括して「塩津丘陵遺跡群」と総称することとした。

塩津丘陵遺跡群の詳細は後章にゆずることとして、以下周辺の遺跡群について、時期毎に簡単に紹介したい。

弥生時代後期の四隅突出型墳墓は、塩津丘陵遺跡群の南東丘陵に集中している。まず現在明らかになっている四隅突出型墳墓を列挙してみよう。

仲仙寺墳墓群²⁹⁾ 標高約40mの丘陵の頂上部から続く尾根上に3基(8~10号墓)の四隅突出型墳墓が隣接して築かれている。8号墓は未調査だが、9号墓は突出部を含めて27×22.5mの長方形で、墳頂に3基の墓壇が検出されている。10号墓は突出部を含まない方丘部が18m四方のほぼ正方形を呈し、墳頂に11基の墓壇が検出された。両墳墓とも大形の墓壇には碧玉製の管玉が副葬されている。草田3期³⁰⁾である。

下山墳墓³¹⁾ 仲仙寺墳墓群の南に続く丘陵尾根上にある。未調査だが方丘部で25m×17mの長方形を



上空から見た荒島地区 中央が塩津丘陵遺跡群

呈す。墳丘で土器が採集されており、草田4～5期の特徴を持つものである。宮山4号墓⁵⁹⁾ 仲仙寺墳墓群東側の標高約28mの独立丘陵上に存する。突出部を含めた規模は28.8×24.6mで、墳頂に1基、4×3mの墓壇が設けられており、長さ68cmの直刀が副葬されていた。最新の四隅突出型墳丘墓と言われ、草田5～6期のものであろう。



宮山4号墓

安養寺墳墓群⁶⁰⁾ 宮山墳墓の北にある標高30mばかりの独立丘陵上にあった墳墓群である。4基の墳墓が調査されたが、うち1号墓と3号墓が四隅突出型墳丘墓である。1号墓は方丘部が20m×16mの長方形で、4ヶ所主体部が検出されている。2号墓は1辺しか調査されていないが、30m×20m程度のかなり大形の墳丘墓と推測されている。2号墓、3号墓とも草田5期併行であらう。



仲仙寺9号墓

これらの四隅突出型墳丘墓を見ると、

傾向として古いものが西側の標高の高い丘陵に築かれているようである。一方当該期の集落は、宮山墳墓群で草田5期併行と考えられる竪穴住居跡が1棟検出されているのみである。しかし、塩津丘陵遺跡群のあり方を見ると、これらの墳墓の周辺丘陵上や斜面に集落が営まれていた可能性は高い。

古墳時代前期になると、一転して塩津丘陵遺跡群の北西側の丘陵上に大形古墳が築かれる。

大成古墳⁶¹⁾ 塩津丘陵遺跡群の谷を挟んで北側丘陵の頂部に築かれた古墳である。45m四方の大形方墳だが、北側(中海側)には基壇状の加工を行ってより墳丘が大きく見える作り方をしている。主体の竪穴式石室は、長さ7.5mと有数の長さを誇り⁶²⁾、三角縁神獣鏡の他、素環頭大刀を始めとする武器類も副葬している。特殊円筒形土器も出土している。

造山1号墳⁶³⁾ 大成古墳の西側、中海を見おろす丘陵上に築かれた古墳である。大成古墳と同様、北側(中海側)からの見栄を意識して造られた方墳で、北側で測ると60mにおよぶ大方墳である。竪穴式石室が2基設けられ、第1石室は長さ7.1mと長大である。仿製鏡3面や玉類などが出土している。また特殊円筒形土器が出土している。

造山3号墳⁶⁴⁾ 造山1号墳と同じ丘陵上、約150m南西に位置する。墳丘は改変が著しいが、30～40m程度の方墳と考えられる。主体は長さ4.75mの竪穴式石室で、斜縁神獣鏡や玉類などが副葬されていた。

以上3基に塩津山1号墳を加えたこの地区の前期古墳は、いずれも竪穴式石室という前方後円墳と同様の新たな埋葬型式を採用しながら、墳形は方墳と地域色の強い形を採用している。その理由はいまだ定説はないが、前方後円墳体制とも呼ばれる広範な地域連合が形成された時代での、地域地域における前方後円墳の受け入れ方を考える好資料となっている。

古墳時代中期の大形古墳としては、宮山4号墓の築かれた丘陵に全長52mの前方後方墳、宮山1号墳が、造山古墳群の西側の丘陵上に42m×30m以上の方墳である清水山1号墳⁹⁹が知られている。前者が5世紀でも比較的早い時期、後者が後半に位置づけられる。また仲仙寺墳墓群の丘陵には小規模な古墳が多く築かれた。

古墳時代後期にも引き続き大形古墳が築かれる。造山2号墳は全長50mの前方後方墳で、6世紀でも早い時期に築造されたものである¹⁰⁰。大成古墳の東丘陵上にある仏山古墳は50m程の前方後方墳で、獅鬚環頭大刀や劍菱形杏葉、鉄製武器類等が出土している。6世紀後半になると、出雲地方東部に特徴的な石棺式石室を持つ塩津神社古墳¹⁰¹が築かれる。この古墳の石室は同種の石室の中でも大形の部類に属し、前代までの大形古墳の系譜を引くものと考えられる。高塚山古墳も同様の石室を持つ可能性がある。終末期の古墳としては、塩津丘陵遺跡群の西側丘陵に築かれた若塚古墳¹⁰²を挙げることが出来る。小形の石室だが、畿内の横口式石槨の影響を受けたものと推定されている。律令期に入っても、須恵器蔵骨器が出土した小久白遺跡や家形の石槨に火葬骨を納めた中山遺跡¹⁰³などが知られている。

以上のように、塩津丘陵遺跡群を含む荒島地区は、弥生時代後期から奈良時代に至るまで、ほぼ途切れることなく大形墳墓を追うことが出来る地区である。500年以上にも渡って首長墓系譜が追えるこの地域は県内のみならず、全国的に見ても貴重と言って過言ではない。



造山1号墳 竪穴式石室

第3章 塩津丘陵遺跡群の中での 塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡

塩津丘陵遺跡群の範囲

「塩津丘陵遺跡群」は、前章で述べたように荒鳥墳墓群のほぼ中央に舌状に伸びた丘陵に存する塩津山墳墓群、塩津山遺跡、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡、柳Ⅱ遺跡を包括的に含んだ範囲の総称である。遺跡群内の各遺跡について詳述する前に、設定した遺跡群の範囲とその理由を述べておきたい。

塩津山墳墓群、塩津山遺跡、竹ヶ崎遺跡、柳遺跡は遺構の分布が途切れることなく続いており、遺跡の範囲を区分するのが困難なほどであるのは前述したとおりである。また調査範囲は丘陵の中央を東西に縦断しており、南北に未調査区が広がるが、遺構がさらに未調査区まで広がっていくことは疑いない。すなわち、塩津山遺跡と竹ヶ崎遺跡の北側には緩斜面がさらに続き、集落の範囲が延びていく可能性が高い。柳遺跡は北側に向かって遺構の密度が濃くなっており、北側の未調査区に集落が続いていることは間違いない。また柳遺跡頂上部には独立柱建物群が集中し、南側の尾根に向かってさらに広がる気配である（第4図）。

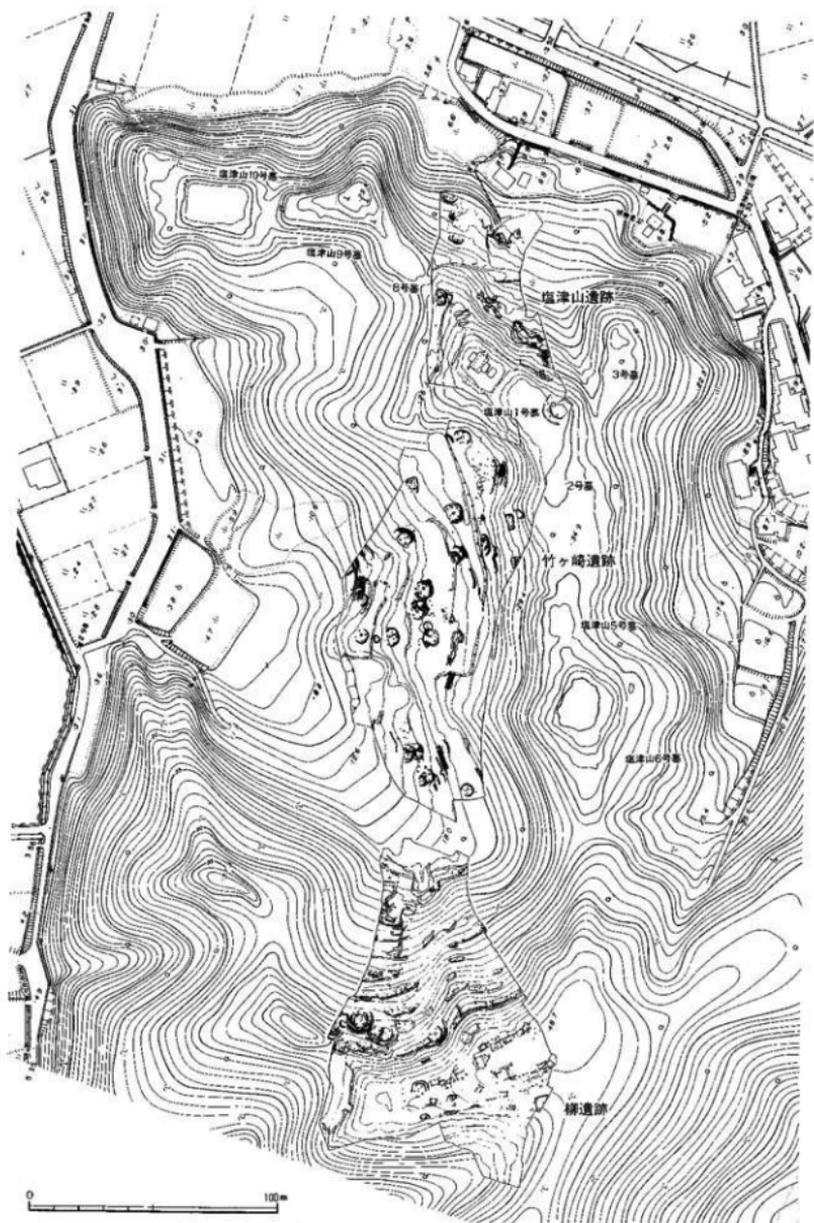
一方、柳遺跡と柳Ⅱ遺跡の間には遺構の空地があるように見える。しかしこれは調査範囲内にあたる尾根上が後世の造成で攪乱を受けていたため、柳遺跡西側斜面から大量の弥生時代後期土器が出土したことは、少なくとも柳遺跡から柳Ⅱ遺跡に向かう鞍部には遺跡が広がっていた可能性が高いことを示している（5、2章1節②参照）。柳Ⅱ遺跡からは他の3遺跡と同時期の遺構が検出されており¹⁰、塩津山遺跡から柳遺跡につながる一連の遺構群はさらに柳Ⅱ遺跡にまで至っていると考えた方が自然であろう。

柳Ⅱ遺跡からさらに西に向かっては確認調査が行われており、弥生時代後期末の区画墓が検出された小久白墳墓群¹¹を除いて、ほとんど遺跡が認められていない。さらに自然地形も、柳Ⅱ遺跡の西側に深い谷が横断している。遺構の密度、地形上の特徴いずれをとっても、柳Ⅱ遺跡の西側で区切るのが適当と判断される。

以上のことから、北、東、南を水田面で囲まれ、西側は柳Ⅱ遺跡の西の谷で区切られた丘陵部一帯の東西約500m、南北約400mの範囲（およそ20ha）を塩津丘陵遺跡群として捉えることとした。ちなみに今回報告分の3遺跡の調査面積は約22,000m²である。

塩津山墳墓群・塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡の関係と概要

塩津丘陵遺跡群において北東側に位置し、遺跡群の中で大きな位置を占める標記の4遺跡は、北側に谷を開く不正馬蹄形の丘陵に囲まれた範囲である。これらの遺跡のほとんどは、安来道路建設に伴う分布調査において発見されたもので、当時は遺跡の規模等もわかるすべもなく、個別4遺跡の点的分布であった。ところが調査にはいるとそれぞれの遺跡は範囲が広がり、墳墓も新たに発見されて実態として遺跡同士の境界はなくなってしまったといえる。ただ、それぞれの別の遺跡として動き始めてしまった以上、便宜的とはいえ遺跡の境界を明確にしておく必要がある。以下、各遺跡の概要を述べるとともに、隣接遺跡との関係を合わせて説明したい。



第4図 塩津山墳墓群・塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡の関係

塩津山墳墓群は馬蹄形の丘陵の南から東に連なる尾根上に存する。現状で11基から成り、今後調査によって地表からは観察できない低平な墳丘が発見される可能性もある。道路予定地内で調査された1号墳は竪穴式石室を持つ前期古墳で、痕跡的に隅の張り出しを持つ25×20mの方墳である。脚部を持つ古式の特殊円筒形土器を棺として使用していることから、前期でも古い部類に属すであろう。4号墳は1号墳に付随的に築かれた古墳で、3つの異なる棺形式の主体部を持つ。2号墳は古墳時代後期の古墳である¹⁰⁾。

そのほかの墳墓は未調査だが、地表観察や測量調査の結果から、墳墓群の西端の最高所にある6号墓¹⁰⁾と、丘陵北先端にある10号墓¹⁰⁾は四隅突出型墳丘墓の可能性が高い。しかも両者とも突出部を含めた長辺が40mを越える巨大なもので、荒島墳墓群の四隅突出型墳丘墓中最大規模であるだけでなく、全国的に見ても最大級の弥生墳丘墓である。両墳墓の突出部の先に付随的にある5号墓、11号墓も同時期の可能性が高い。他の墳墓の時期や性格を推測させる材料はないが、9号墓は前方後円形を呈す可能性もある。

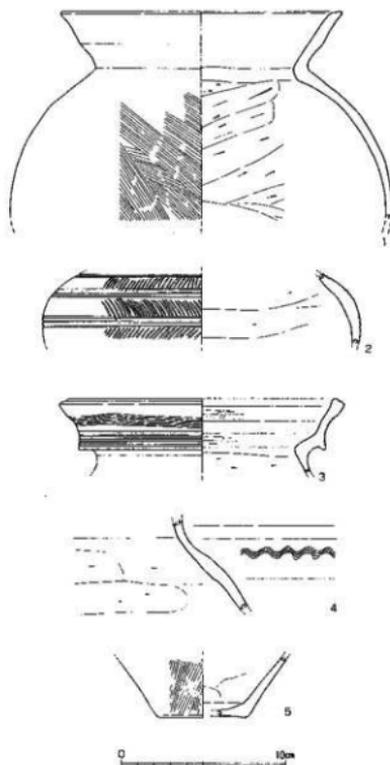
さて塩津山墳墓群は、明らかに塩津山遺跡の範囲と重なっている。遺構の広がり具合によっては竹ヶ崎遺跡の範囲とも重なる可能性がある。これは墳墓群という遺構の性質からの遺跡名であるため、どうしても生じる矛盾である。塩津山墳墓群は、一定領域を表す遺跡というより、一定の範囲内に存在する墳墓とそれにかかわる遺構群の集合体を指すものと理解している。

塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡は弥生時代後期末を中心とする大規模な集落遺跡であり、一部古墳時代中期の集落跡も含む。調査区は馬蹄形に北側に開いた谷間のほぼ中央を東西に縦貫しているが、一部急な斜面を含むにもかかわらず、全体的に高い密度で遺構が検出された。おそらくこの谷をとりまく丘陵全体に集落が広がっていたものと推測させる。

これらの3遺跡の境界については、調査区外も含めた地形を勘案して便宜的に設定せざるを得ない。まず塩津山遺跡と竹ヶ崎遺跡の境界は、塩津山8号～11号墳（旧塩津古墳群）が存す南北方向の尾根の西側にある尾根の支脈（塩津山1号墳の北西隅回りから北に延びる尾根）あたりに設ける。竹ヶ崎遺跡と柳遺跡の境界は、南北方向の最も大きな谷筋に設定すれば、調査区も一度途切れており問題はない。ただ柳遺跡は調査区の南側にも広がっているのが明らかだが、丘陵最高所の頂上部でおさまるのか、さらに南東に延びる



東上空から見た塩津丘陵遺跡群（手前が柳遺跡）



第5図 柳II遺跡 出土土器実測図

塩津丘陵遺跡群の景観

塩津丘陵遺跡群は、現在北、東、南側の三方を水田面に囲まれている。安米平野の北半のかなりの部分が近世以降に陸化したことは一章で述べたとおりで、塩津丘陵遺跡群に限らず、荒島地区の丘陵がかなり水面に近い環境であった可能性が高い。

海面もしくは湖水面との関係を具体的に知る資料が1997年、安米市教育委員会によって調査された岩屋遺跡で知ることが出来た。未報告なので詳細は不明であるが、塩津丘陵遺跡群の北側に入り込む谷の水田面にあたるこの遺跡では、波打ち際と考えられる地形が検出されている。しかもその地形に堆積した砂層からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土しており¹⁰⁾、塩津丘陵遺跡群で大規模な集落が展開した弥生時代後期末の段階では少なくとも遺跡群の北側はすぐ水面が迫っていた可能性が高い。東側や南側のどこまで水面が広がっていたかは明かではないが、現在の地形を見ると、塩津丘陵遺跡群は海もしくは湖に突出した岬状を呈していた可能性もある。竹ヶ崎という地名もこうした地形を反映したものであったかも知れない。

(丹羽野)

丘陵にまで広がっていくのかは判断できない。柳遺跡の両側については範囲の設定を保留したい。

柳遺跡からさらに東側に続く丘陵の西斜面には柳II遺跡が存在する(報告済み、注7文献)。この遺跡からは弥生時代後期末と古墳時代中期後半を中心とする集落跡が検出された。これは塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡と同じ時期の集落である。さらに前述したように、柳遺跡と柳II遺跡との間の尾根上は、後世の改変のため遺構は検出されていないが、柳遺跡の西斜面での遺構・遺物のあり方は、本来この部分にも遺跡が広がっていた可能性を示している。地形条件が柳遺跡頂上部と同様であることもそれを傍証している。柳II遺跡も一体の遺跡として考えるべきであろう。

なおS B01付近で出土したと見られる土器等が、未整理遺物中から発見された。参考までに図示しておく。1、2がS B01付近で確認調査の際に出土した土器、3、4、5は谷底付近で出土した土器である。いずれも従来よりの柳II遺跡の年代観をさらに裏打ちするものである。



注

塩津山1号墳

- (1) 加藤義成『修訂 出雲国風土記参究』1957
- (2) 1997年、安来市教育委員会により調査が行われた。水口品郎氏のご教示による。
- (3) 島根県教育委員会『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡——般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ—』1994
- (4) 島根県教育委員会『オノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷1遺跡——般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9—』1995
- (5) 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984
- (6) 1996年の調査で出土している。
- (7) 島根県教育委員会『柳Ⅱ遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡——般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅳ—』1996
- (8) 石井悠ほか『原始・古代』『東出雲町史』1978
- (9) 1994年に島根県教育委員会が調査している。
- (10) 島根県教育委員会『越峠遺跡・宮内遺跡——般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ—』1993
- (11) 島根県教育委員会『陽徳遺跡・平ラ1遺跡——般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11—』1995
- (12) 島根県教育委員会『オノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷1遺跡——般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9—』1995
- (13) 島根県教育委員会『岩屋口北遺跡・白コクリ遺跡（F区）——般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13—』1997
- (14) 島根県教育委員会『白コクリ遺跡・大原遺跡——般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ—』1994
- (15) 島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1976

- (16) 三宅博上他「安来・叶谷遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第X I集 1995
- (17) 山本清「山陰の土師器」『山陰文化研究紀要』第6号 1965
- (18) 安来市教育委員会「長曾土壙墓群」1981
- (19) 島根県教育委員会「明子谷遺跡・島田黒谷II遺跡・島田黒谷III遺跡・猫の谷遺跡——般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI—」1994
- (20) 近藤正ほか「島根県安来市における土壙墓」『上代文化』36 1961
- (21) 安来市教育委員会「市道清水線試掘調査概要」1993
- (22) 島根県教育委員会「平ラII遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群——般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10—」1995
- (23) 1994年に島根県教育委員会が調査を行った。
- (24) 島根県教育委員会「若尾口南遺跡——般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8—」1996
- (25) 1994年に島根県教育委員会が調査を行った。
- (26) 島根県教育委員会「島根県生産遺跡分布調査報告書一窯関関係—」1985
- (27) 島根県教育委員会「徳見津遺跡・日廻遺跡・陽徳寺遺跡——般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12—」1996
- (28) 出雲考古学研究会「荒島墳墓群」『古代の出雲を考える』4
- (29) 安来市教育委員会「仲仙寺古墳群」1972
- (30) 鹿島町教育委員会「南講武草田遺跡」
- (31) 安来市教育委員会「史跡 仲仙寺古墳群」1977
- (32) 本村豪章ほか「既掘前期古墳資料の総合的再検討」1992
安来市教育委員会「大成古墳第3次発掘調査報告書」1995
- (33) 1997年の安来市教育委員会の調査で明らかになった。
- (34) 島根県教育委員会「造山3号墳発掘調査報告」1967
- (35) 安来市教育委員会「清水山古墳群発掘調査報告書」1994
- (36) 安来市教育委員会「安来市造山古墳群発掘調査報告書」1992
- (38) 島根県教育委員会「中山遺跡・巻林遺跡——般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区II—」1994
- (39) 島根県教育委員会「塩津山古墳群——般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IV—」1997
- (40) 島根県教育委員会「塩津山1号墳が語る古代の出雲」1996
- (41) 以前より塩津1号墓と呼ばれていた墳墓である(注28文獻)。しかし隣接の塩津山墳墓群と紛らわしい名称である上、両者は同一尾根上で連続しており、別の墳墓群として区別する理由は全くないため、他の3墳墓とともに新たに塩津山墳墓群中に組み入れられることとなった。(安来市教育委員会、水口晶郎氏ご教示)
- (42) 安来市教育委員会、大塚尚氏、金山尚志氏のご教示による。筆者も現地でも合わせて実見した。

3 塩津山遺跡の調査



第 1 章 調査の経過と概要

塩津山遺跡の位置

安来平野の西縁に広がる低丘陵地一帯が、弥生時代後期～律令期という約500年間にもおよぶ長期に渡り、大型墳墓が築かれる「荒島墳墓群」と呼ばれる特別な地域であることと、塩津丘陵遺跡群が、荒島墳墓群のただ中に所在している、ということは先に述べた通りである(本書掲載「2 塩津丘陵遺跡群(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡)の位置と環境」に詳しい)。また塩津丘陵遺跡群が、尾根上には塩津山1・4号墳を含む大小11基の墳墓群で構成される塩津山墳墓群と、今回の調査で明らかとなってきた弥生時代末の大集落跡が存在することから、この丘陵が単に墳墓域として選択されただけの場所ではなく、四隅突出型墳丘墓や前期古墳を築いた集団にとって非常に重要な場所であったことが明らかとなってきた。塩津山・竹ヶ崎・柳遺跡それぞれの立地は、小さな支丘を挟んでいたり標高の高低など、細かく見ると遺跡の名称を分けたように違いが見られるものの、本来は弥生時代終末期の大集落として一つのまとまりであったと考えられる。

塩津山遺跡は、平野に面した緩斜面を中心に広がり、一部塩津山墳墓群の存在する尾根上に墳墓群と接して展開している。つまり、安来平野に伸び出した舌状の丘陵の、直接平野に面する場所に塩津山遺跡が存在すると言え、塩津丘陵遺跡群の中でも最東端に当たる。塩津山遺跡は、これらの集落遺跡の中で、最も東側にある。柳・竹ヶ崎遺跡とは、塩津山古墳群のある丘陵と塩津山1号墳付近で分岐して北西方向に小さく派生する支丘によって遮られる形となっているが、行き来することは容易にできる。

調査前の状況と調査区の設定

塩津山遺跡や塩津山古墳群は、調査前に実施した分布調査の時点では、わずかに尾根上の一部が「塩津山古墳群」として注意されていたのみであり、斜面も急峻で、かなり改変を受けていることから、このような大集落遺跡の存在を想定するには至らなかった。1号墳の北側と東側の斜面に遺跡が広がっていることが明らかになったのは、平成6年4月に調査に先立って行ったトレンチ調査においてである。トレンチ調査は、1号墳の東側斜面を中心に、2×6～8mのトレンチを9カ所に設定し、遺跡の有無と広がりを確認する目的で行った。結果、すべてのトレンチにおいて遺物が出土し、遺跡は、東側の市道までの道路予定地の山林ほぼ全域に広がっていることが明らかとなり、尾根上の古墳群を「塩津山古墳群」、北側・東側斜面の集落跡を「塩津山遺跡」と呼び分けて、平成6年度に全面調査を実施することとなった。

調査は、平成6年4月のトレンチ調査に引き続き、塩津山古墳群と並行して行った。5～6月には古墳群の調査を集中的に行ったため、本格的には7月から実施し、一部実測などを残して平成7年1月に現地調査を終了した。調査に当たっては、1・4号墳の造られた北東方向に延びる尾根筋を境にして、尾根の西側で1号墳の北側の斜面を「北側斜面調査区」、尾根の東側で1号墳の東側の斜面を「東側斜面調査区」と便宜上呼び分けた。なお、東側斜面調査区の東端は、家屋移転の関係上、平成6年度には調査を行っておらず、若干の未調査地を残して終了したため、今回の報告には含まれない。また尾根上の塩津山古墳群は、既に報告書が刊行されている⁽¹⁾。



第6図 塩津山遺跡・塩津山古墳群調査後地形測量図 (S=1/400)
 (東側斜面調査区は、P 33の詳図参照)

主な検出遺構は、北側斜面調査区では、東西に長い加工段状遺構と竪穴住居跡1棟、東側斜面調査区では、竪穴住居跡や斜面の加工段状遺構、性格不明の溝や土坑などを検出した。これらの遺構は、ほとんどが弥生時代終末期のものであり、時期の異なるものとしては東側斜面調査区で古墳時代後期以降の溝状遺構やピット、集石遺構を検出したのみである。

第 2 章 調査の結果

1 節 北側斜面調査区の調査

調査区の立地と概要

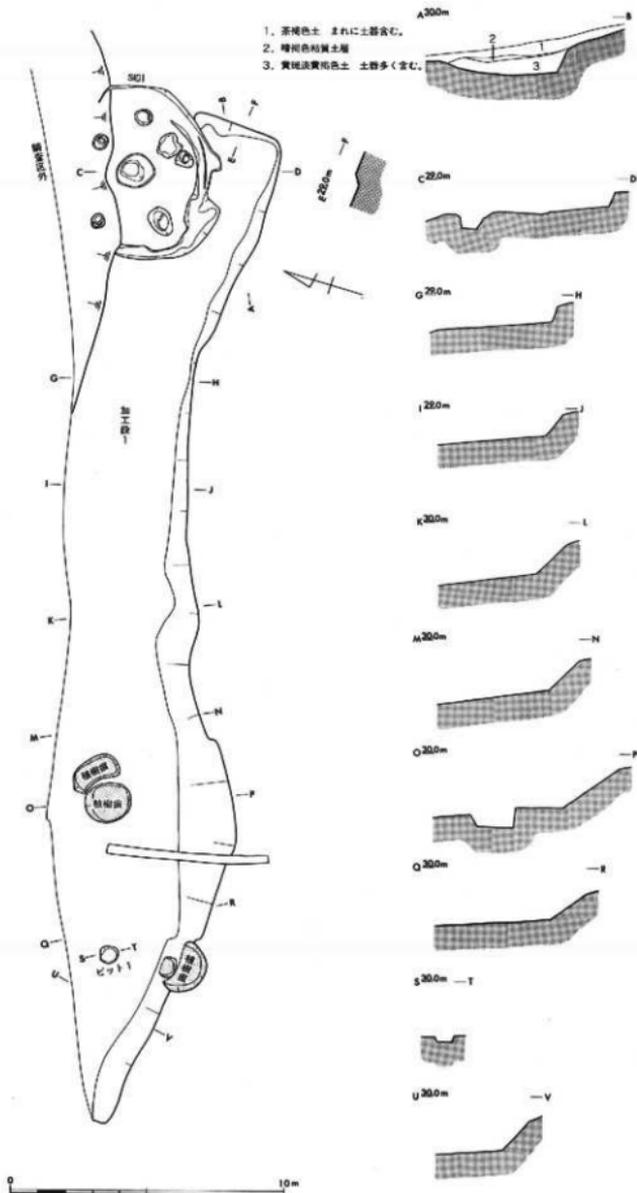
塩津山1号墳、4号墳の北側斜面に当たる調査区で、北側に小さく開けた谷の最高位・最奥部分である。竹々崎遺跡とは、1号墳のある位置から北西方向に派生している尾根筋を境に接している。北側は、道路用地境界に近く、東西に細長い調査区で、遺構は斜面のコンターラインに沿う東西方向に細長い加工段状遺構(加工段1)と、この加工段1上に竪穴住居跡(S101)を検出した。加工段1は広い平坦面を作り出しており、これは調査区境界より外側の北側へも広がっており、遺跡はさらに北側の斜面に向かって広がっているものと思われる。竪穴住居跡(S101)は加工段状遺構の平坦面に掘り込まれており、これらはほぼ同時期の弥生時代終末期のものと考えられる。1号墳、4号墳と加工段1・S101との前後関係は、相互に明瞭な切り合い関係が認められないが、加工段1の埋土最上層である黒色土に、溝などの4号墳に伴う遺構が見られないことや、4号墳の墳丘盛土がこの黒色土上面に堆積・流失していることから、4号墳が加工段1に先立って築かれたものとは考え難く、加工段1が4号墳に先行するか、あるいは同時期ということになろうが、前者である可能性が高い。加工段1・S101からは土器等の遺物が出土しており、弥生時代終末期のものである。

加工段状遺構1 (以下加工段1と略す。 第7～8図)

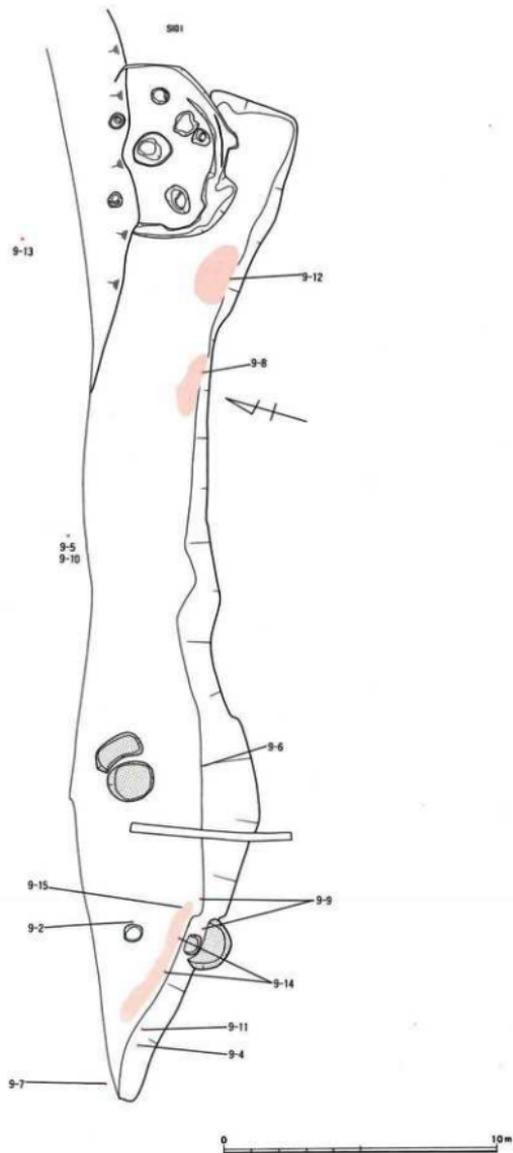
北側調査区境界に近接して検出した加工段状遺構である。北東側の一部は後世の掘削を受けて流失しているが、加工段の北端は境界の外側へと続いており、調査区外の谷地形部においても遺構が存在している可能性が高い。

地山をL字状に掘り込み、平坦面を削り出したもので、東端は直角に曲がって完結している。確認できた現状での平坦面の規模は、東西約37.2m南北約4.2～7mである。形態は東半と西半でやや異なっており、東半部では、0.5～1m地山が掘り込まれ、急な角度で立ち上がる壁を作り出している。西半分では、掘り込みが1号墳裾側の南側へ大きく入り込み、掘り込みの立ち上がりも緩く傾斜を持って1～2.2mと高く立ち上がっている。形態にこのような差異が認められることから、初めは小規模だったものが何回かに分けて徐々に拡大されていったことも考えられるが、検出した平坦面は、標高28mのレベルではほぼ平らに整えられており、土器の出土状況に大きな差が無く、時期も限られたものであることから、廃棄時にはこの広い平坦面を一連のものとして有していたと思われる。

加工段1では、東端で竪穴住居跡1棟(S101)、西端で内部に円礫が充填された直径60cm深さ



第7図 塩津山遺跡 加工段1実測図 (S=1/180)



第8図 塩津山遺跡 加工段1床面遺物出土状況 (S=1/180)
 (濃いスクリーントーン部は土器溜まりを示す)

20cmのピット1が検出されたのみで、他に明瞭な遺構は検出されていない。

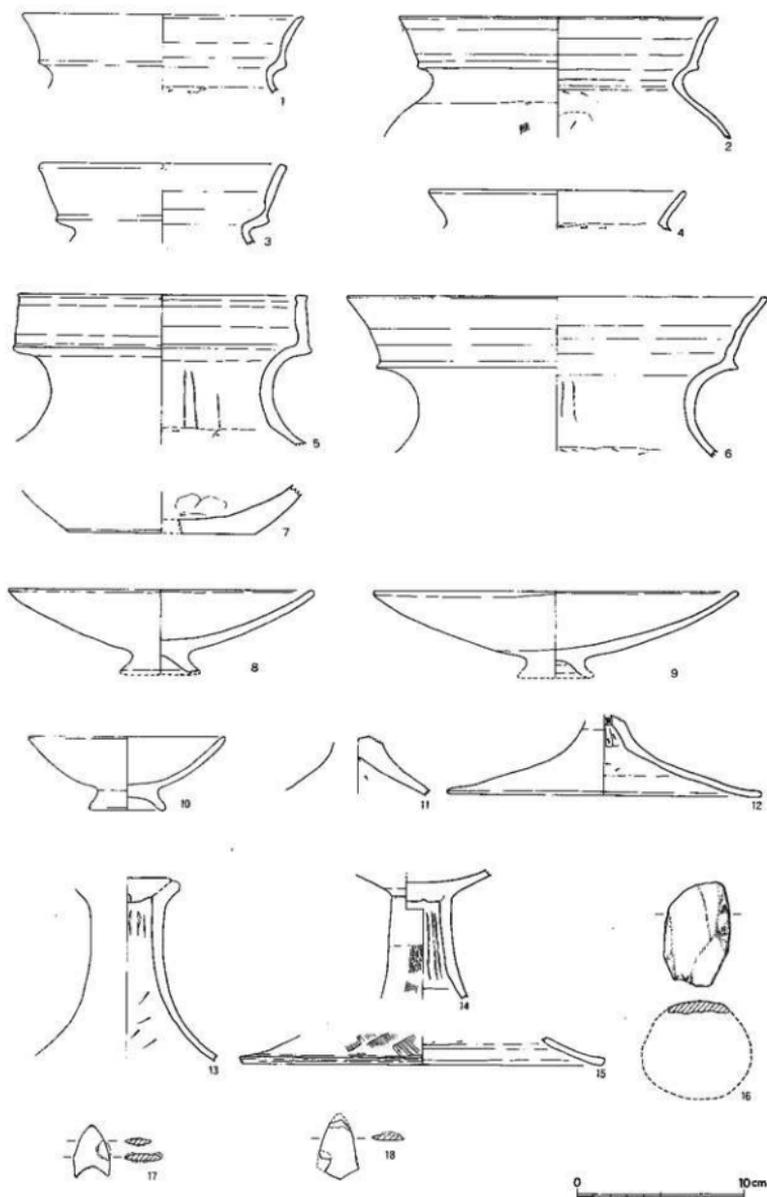
遺物は壁際に沿った位置で多く出土しており、3カ所で土器溜まりが認められた。

加工段1出土遺物（第9図）

土器を中心に、他に鉄鍔2点、石器片が出土している。土器は3カ所の土器溜まりで比較的良好なものが出土した以外はほとんどが小片である。

1～4は甕形土器である。甕は完形に復元可能な個体は無い。1は、口径17cmの甕の口縁部で、薄く外反する複合口縁を呈し、口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、内面は頸部以下ヘラケズリが観察できる。なお口縁部の外面には煤状の付着物が認められ、火を受けた痕跡であろうか。2は、口径20cmの甕の小片である。口縁は1と同様に薄く、緩く外反し、ヨコナデ調整である。体部は外面は細かな単位のハケメ調整で、内面はヘラケズリである。3は、口径14cmの甕の口縁部である。やや厚みのある複合口縁は、直線的で段の突出も鈍い。4は逆ハの字に開く単純口縁を呈する甕の口縁部で、口径は約10cmである。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、頸部以下は遺存部分が小さいためよく分からないが、内面はヘラケズリのように、ヘラケズリは口縁部との境の高い位置まで及んでいて、稜を形成している。胎土は砂粒を多く含むものでやや粗く、色調も他の個体とはやや異なっている。1～3の甕の胎土は砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、共通している。5は壺で、口径17cmを測る。複合口縁部は厚く、内傾して立ち上がり、端部は水平な平面を持つ。外面はヨコナデ調整で、頸部内面は縦方向にシボリ痕を残し、ナデている。6は口径25cmの壺で、加工段1で出土した壺の中では、大型のものである。器壁は薄く、口縁部は端部に小さく平坦面を有し、外面の段の稜は明瞭である。7は壺や甕の底部片で、図上復元で直径11cmのしっかりした平底を有している。器壁は厚く、断面は黒色を呈する。内面にはヘラケズリの後に指頭圧痕が残されている。8～10は低脚坏である。これらはいずれも器高が約5cm前後で、脚部の形態や同じであるが、坏部の直径が大きく異なる。8は坏部直径が18.5cmを測る。9は坏部直径が22cmで、最大のものである。出土状態は、脚部を遺構面に接して坏部が上を向いた正立した状態で出土している。8や9のように、坏部は大きい脚部は小さいものは、本来天地逆で、坏ではなく甕などの蓋という機能も考えられるが、内外面ともヨコナデ調整と整形方法や調整が同じであり、ここでは特に記すべき根拠が無い限りは低脚坏としてまとめて述べることとした。10は器高5cm坏部直径12cmを測り、やや深い坏部を有する。色調は白っぽい淡黄褐色を呈する。11は高坏等の脚部と思われるが、弥生時代後期～古墳時代前期に一般的な器形、手法とは異なっている。坏部の形態は不明である。円錐状で器壁の厚い脚部で、内面はヘラケズリによる砂粒の移動が認められる。接合部は円板充填ではなく、小孔も認められ無い代わりに、内面中央には調整時についたと思われる爪形状の刺突痕3カ所に見られる。12は脚の裾が大きく開いた高坏の脚部で、裾部直径は19.2cmである。13～15は一般的な高坏で、接合部は円板充填による。内面中央には小穴が穿たれている。13・14は調整も類似点が多く、筒部径も約4cmと似通っており、脚高が10cm前後の高坏であろう。15は高坏の脚部端であろうか。以上の土器の時期は、甕の口縁形態や、高坏が出現していること、大型の低脚坏が認められることなどの点から、弥生時代終末期、塩津5期のものと思われる。

石器は小片が一点出土している（第9図16）。淡灰色の砂岩質の石材を用いており、本来の形態は不明である。部分的に薄く剥落したようで、一面は破面となっている。使用痕を残す面は摩滅し



第9图 塩津山遺跡 加工段1出土遺物実測图 (S=1/3)

ており、緩やかな弧状を呈し、小さく柔らかな稜がいくつか認められる。

17・18は鉄鏝である。17は無頸式である。側面は両側とも緩やかな弧を描いてカーブし、平面形は側面の中央で小さく肩を持つ五角形を呈する。基部は約7mm挟れる凹基である。ほぼ完形であり、鏝身長3.3cm幅2.2cm厚さ0.3~0.4cmを測る。18も無頸式で、基部は凸状を呈する。先端と側面に一部欠損が見られ、本来の大きさは不明であるが、現状から復元想定すると、長さ4.0cm幅2.5cm前後と見られ、厚さは0.4cmである。

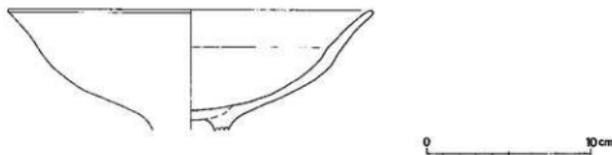
S 101 (第11図)

加工段1の東端で、加工段1の一部を壊して造られた竪穴住居跡である。塩津山1号墳のある尾根筋上の、やや斜面側に寄った標高28mの位置にあり、東には安来平野から平野西縁の丘陵地までを一望でき、西側は柳・竹ヶ崎遺跡を見渡せる非常に見通しの利く場所にある。検出した時点で北側1/3は流失していた。柱穴は、中央ビットを囲んで配置され、直径30~50cm深さ30~50cmの柱穴跡を6個検出した。土層では確認できないが、柱穴の規模や配置から、四本柱の主柱を持つ建物跡が想定できる(P1~P4)。この柱穴他にも、同じような規模の柱穴が重なったりして検出されていることから、建て替えが行われたものと思われる。壁の立ち上がりの平面形は、やや不正形な多方形を呈し、現存部から想定すると一辺2.2~2.3mの七~八角形であったと思われる。南側の壁の一辺には、1.4mの幅で内側へ凹み、壁の立ち上がりほとんど無い部分が認められ、通常の壁体とは異なる構造・役割であったことが考えられる。また壁の立ち上がりより内側の床面には、幅20cm深さ10cmに満たない非常に浅い溝が確認できた。これは、隅丸方形を呈し、四本柱建物の方向と合っていることから、四本柱建物の壁体溝の痕跡と考えられる。これらの状況から見ると、当初の床面の規模が約5×5mで主柱が四本の隅丸方形の竪穴住居から、規模を拡大し、床面で6.5mを測る多方形の竪穴住居跡に建て替えられたと思われる。

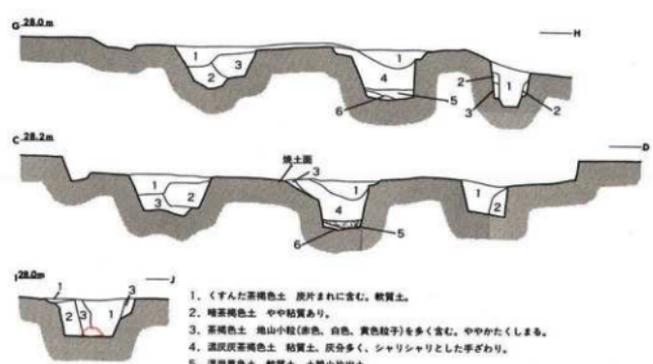
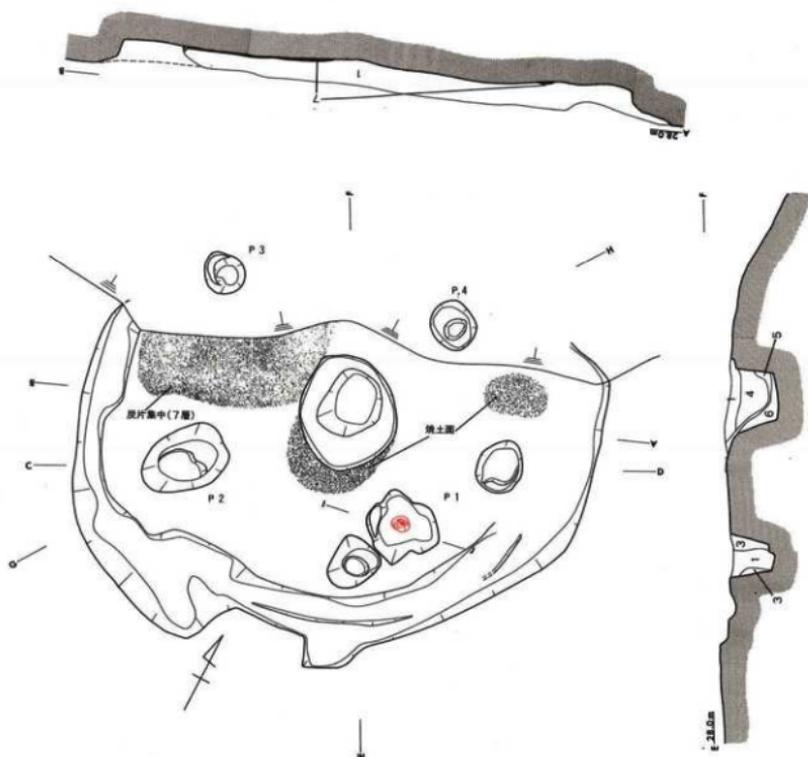
床面には、赤く焼けた痕跡が東側と中央ビット周辺の二カ所見られる。また、赤く焼けた痕跡は無いが、炭層が薄く広がるところが一カ所認められた。床面上には、軟らかく炭化物を多く含む茶褐色土が堆積していて、これは加工段1上を覆う土でもあり、このことから竪穴住居跡と加工段1の廃絶時期が近い時期と考えられる。

住居床面中央の中央ビットは、床面から10cm下がったところで小さく段を持つ二段掘り、深さ60cm底直径50cmと柱穴より大きいものである。内部には柱穴跡では見られない灰を含む軟質土層(4層)が厚く堆積し、底には黒色炭化物を多く含んだ土層(5層)が認められた。

遺物は、上層から土器小片と、炭化樹種が出土したが、床面に接した状況では認められず、ビット1の底に接した状態で土師器高坏の坏部1個体が出土したのみである。



第10図 塩津山遺跡 S 101出土遺物実測図(S=1/3)



1. くすんだ茶褐色土 炭片まれに含む。軟質土。
2. 暗茶褐色土 やや粘質あり。
3. 茶褐色土 地山小粒(赤色、白色、黄色粒)を多く含む。ややかたくしまる。
4. 濃灰茶褐色土 粘質土。灰分多く、シャリシャリとした手ざわり。
5. 濃灰黒色土 軟質土、土粒小片出土。
6. 黄褐色土 軟質土。
7. 黒色炭層 厚さ3~5cmの炭層。炭層の下はやや意味を帯びた地山面。



第11図 塩津山遺跡 S101実測図 (S=1/60)

S101出土遺物 (第10図)

床面やピット内に接して出土した土器は、第10図に図示したピット1内の底に坏部を伏せたように出土したものと、中央ピット内で土師器小片が出土したのみで、後者は固化できなかった。

第10図は高坏は口径22cm坏部の深さが6.5cmを測る。坏部の中位で傾きが変化し稜を有す。外面がより風化が著しく、詳しい調整の観察はできなかった。坏部と脚部の接合部内面には中央に小孔があり、接合方法は円盤を充填したものである。内面調整は坏部の中位付近で、段をなし、ヨコナデを施している。時期は判断し難いが、加工段1が弥生時代終末期の塩津5期と考え、同じ塩津5期と考えるのが妥当であろう。他に、上面に堆積した土層からは木片などの炭化物を多く含んでおり、その中から炭化種が1点出土している(写真版19)。

2節 東側斜面調査区の調査

(1)調査区の立地と概要

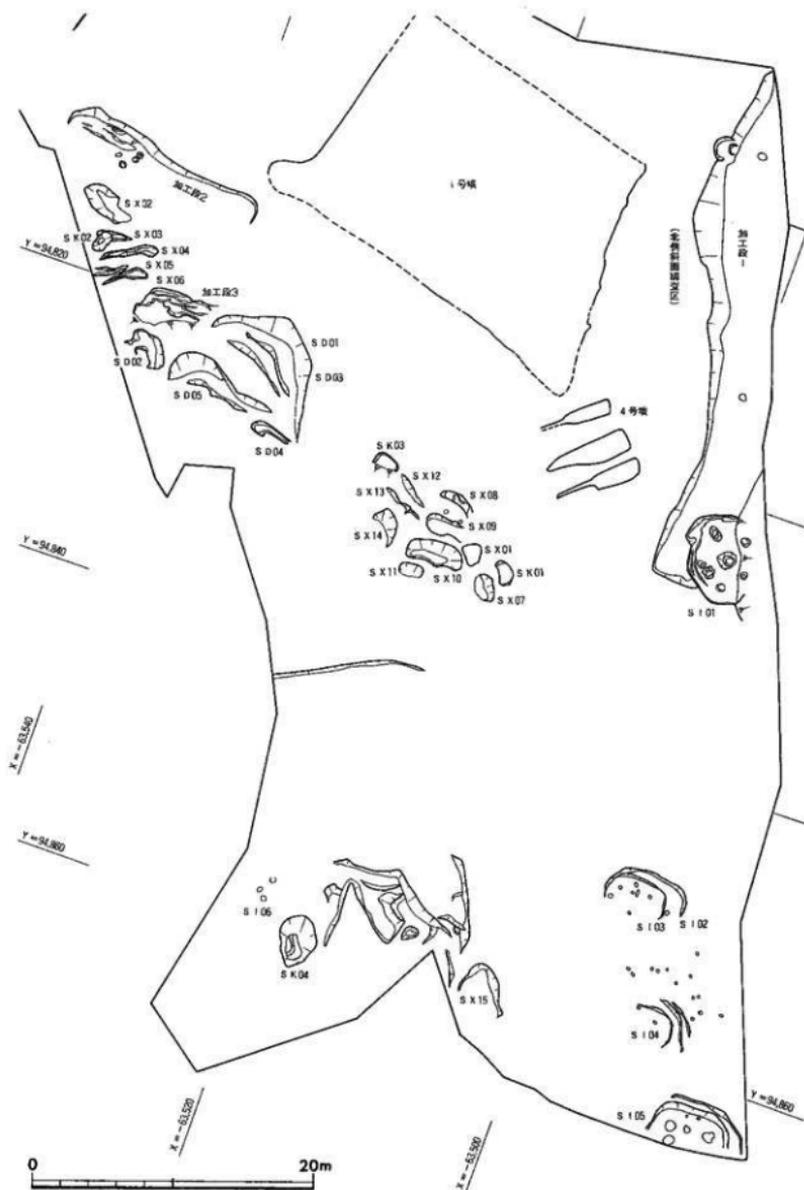
東側斜面調査区は、塩津山1・2・4号墳のある丘陵東側斜面である。この斜面は、塩津山1・2・4号墳が築かれている北東方向に延びる主たる尾根筋と、この尾根筋から東方向へ小さく派生する2本の支丘とによってコの字状に囲まれた、小規模な谷地形を形成したところに当たる。この谷地形のほとんどが調査対象地として含まれる。平野の縁辺で、傾斜の緩やかな標高20m以下のところでは、調査前まで人家があったり、畑として開墾されていたなど、調査前の様子からも後世に大きく改変されていることが観察できた。またこの調査区のほぼ中央を南北に山道が掘り込まれており、大きく削られていた。

現地調査を開始する以前には、遺跡として把握されておらず、塩津山古墳群の調査と並行してトレンチ調査を実施したところ、遺構が確認されたため発掘調査を実施するに至った。調査は平成6年4月にトレンチ調査から開始し、平成7年1月まで行った。なお平成6年度の調査では、遺跡は調査区の東側にさらに広がっていることが明らかであったが、用地取得の関係上、一部未調査地を残して終了しているため、S105の東半は未調査である。

検出した遺構(下表)は、竪穴住居跡4棟(と1カ所)、加工段状遺構2基、土坑4基、溝状遺構5条など弥生時代終末期のものがほとんどであるが、上層では古墳時代後期や中世の遺物も出土し、また現地表面に近い浅い土層からは近世以降の陶磁器が多く出土している。なお弥生時代終末期の遺構について、小規模な加工段状の形態を呈したり、浅い溝状を呈するものの、使用された目的や性格が不明な遺構を検出し、SXでナンバリングして述べることにする。

東側斜面調査区検出遺構

遺構の種類	遺構略名	時 期	遺構の種類	遺構略名	時 期
竪穴住居跡	SI02・03	塩津5期	性格不明遺構	SX01	古墳時代後期後半以降
	SI04	塩津2期(～3期)		SX02	不明(弥生時代終末か)
	SI05	塩津5期		SX03	不明(弥生時代終末か)
加工段状遺構	SI06	不明(塩津5期か)		SX04	不明(弥生時代終末か)
	加工段2	塩津5期		SX05	不明(弥生時代終末か)
	加工段3	塩津5期		SX06	不明(弥生時代終末か)
溝状遺構	SD01	古墳時代後期以降		SX07	不明(弥生時代終末か)
	SD02	不明		SX08	不明(弥生時代終末か)
	SD03	塩津2～5期		SX09	塩津5期
	SD04	塩津5期		SX10	塩津5期
	SD05	塩津5期		SX11	塩津5期
土坑	SK01	塩津4期		SX12	塩津5期
	SK02	不明		SX13	塩津5期
	SK03	塩津5期		SX14	塩津5期
	SK04	不明(弥生時代終末か)		SX15	塩津5期



第12图 塩津山遺跡 東側斜面調査区遺構配置図 (S=1/350)

(2) 竪穴住居跡の調査

S 102・03 (第14図)

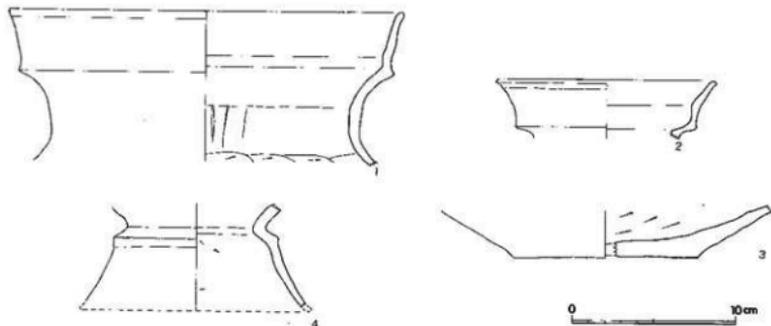
尾根の頂上から10m以上下がった斜面の中腹、標高約19mの緩斜面にある竪穴住居跡で、上下に2棟重なり合って検出した。遺構の東側1/2は流失し現存していないが、いずれの住居跡も斜面側の壁の立ち上がりと床面1/2ほどを確認できた。2棟の前後関係は、土層の堆積状況から、下層面で東側に検出した隅丸方形の竪穴住居跡S 102がまず使用された後、S 102の床面を埋め、北西のS 103に拡張・移動したと見られる。

S 102は、床面の標高約18mの隅丸方形の竪穴住居跡である。規模は、床面で南北4.2mで、壁際に沿って幅10cm深さ5cmの壁体溝が廻る。柱穴は極端に浅いピット1を除くと、直径約20cm深さ20~30cmのものを5個検出した。東側の柱穴配置が不明ではあるが、ピット2・3をつなぐ辺を一辺とし、柱間2.2mの四本柱構造の建物が想定できる。柱穴とは異なる性格の中央ピットは検出しておらず、遺物も床面からは出土しなかった。床面の1カ所では約50cm×15cmの楕円形に赤く焼けた焼土面を検出した。

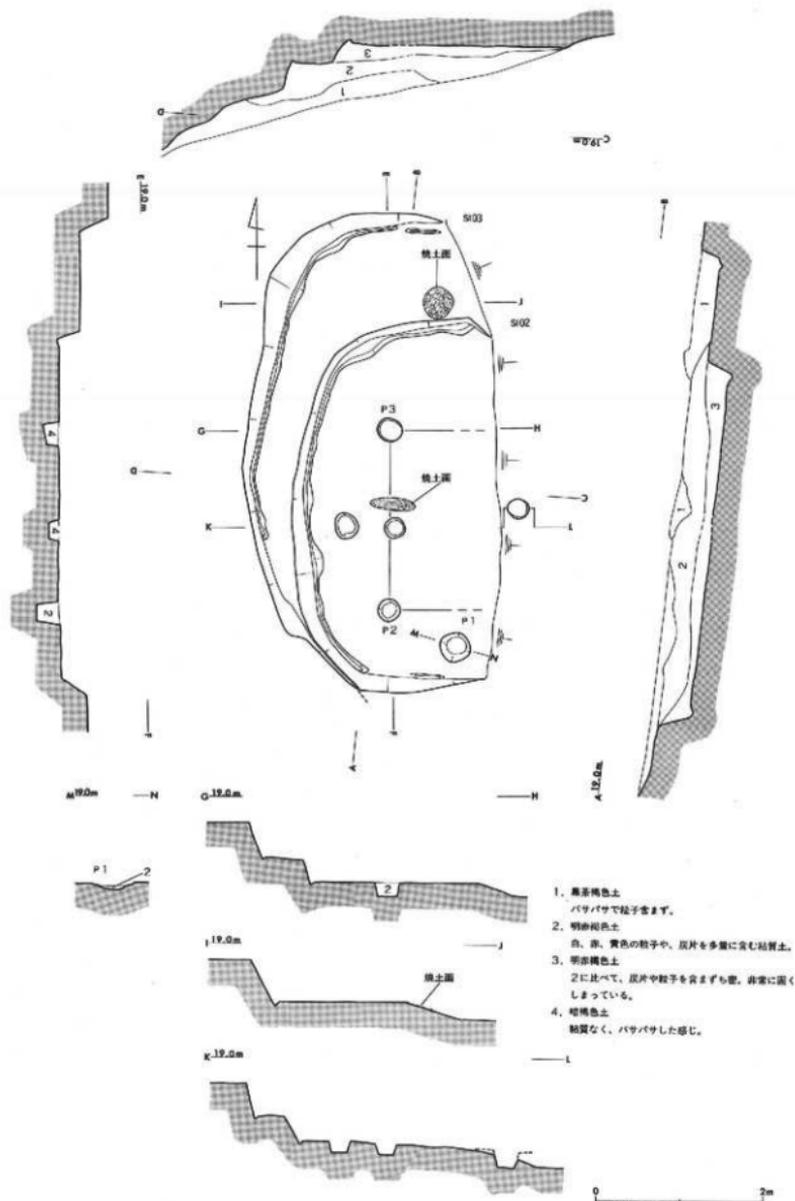
S 103は、S 102から北西側へ移動して作られた竪穴住居跡である。平面形は現存する部分から想定すると、いびつであるがいくつかの隅を有する多角形に近いものであろう。床面はS 102で掘り込んだ部分は地山を掘削した土で埋め、標高18.3mで平らに整えた見られる。規模は床面の差し渡しが約6m前後と考えられ、S 102と比べて大きい。壁際には幅・深さとも10cmに満たない壁体溝を検出し、床面の1カ所が直径35cmの円形に赤く焼けた箇所が認められた。柱は大部分が埋土面であるためかS 103の床面から掘り込まれたものは確認できなかった。遺物は床面から20cm以上浮いた状態では出土したが、床面に貼り付いた状態で少量出土した(第13図)。これによると、S 103は弥生時代終末期塩津5期の時期と考えられ、S 102はこれより先立つ時期が考えられ、上面や周辺から出土した遺物もこの時期を大きく異なるものは認められないため、近い時期に連続していた可能性が強い。

S 102・03出土遺物 (第13図)

第13図1は口径が20cmを越える甕の口縁部である。外面はヨコナデ調整、内面は口縁部ヨコナデ、



第13図 塩津山遺跡 S 103出土遺物実測図 (S=1/3)



第14図 塩津山遺跡 S102・03実測図 (S=1/60)

肩部以下へラ削り調整である。2は口径約13cmの甕口縁部である。内外面ともヨコナデ調整で、口縁端は薄くアクセントを持たない。1・2は淡黄褐色を呈する。3は鼓形器台の下半である。風化が著しく調整の詳細は不明であるが、内面にはへラ削りによる砂粒の移動が認められる。4は甕底部で器壁が厚く大粒の砂粒を多く含んでいる。底部は図上復元で約11cmのしっかりとした平底を呈する。3・4は黄褐色を呈する。これらの時期は1・2・4が、弥生時代終末期、塩津5期とみられ、S102・03はこのころ相次いで作られたものと思われる。

S104 (第15図)

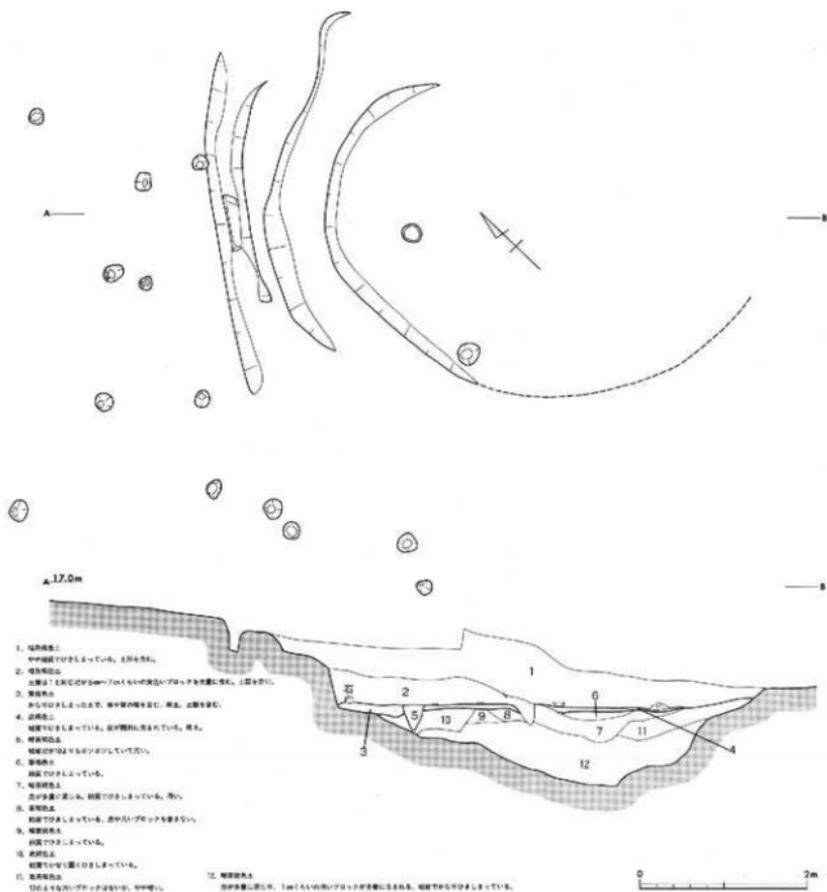
S102・03の東側5m程の位置の緩斜面で検出した堅穴住居跡である。住居跡のちょうど中央に直径80cm以上で、1.5mを越える範囲に広く深く根を張った巨木があり、この周囲の掘り下げに苦慮し、結果床面の一部を掘り下げすぎたから住居跡であることに気付いたため、床面を平面で確認できたのは、全体の1/4であった。この巨木の根元の現地表には、周辺で産出する通称荒烏石の30cm前後の不定形な石材を用いて根元を取り囲むように石組みが見られ、最近まで何らかの信仰の対象としてまつられていたのだろう。

S104の床面は、暗黄褐色を呈する5~10cm厚の貼床層(第3層)が見られる。この貼床面が最終遺構面とみられるが、地山面上に堆積した堅緻な堆積土層上に貼床を行って整えられている。本来の基盤となる地山面は、S104の床面から深いところでは1.5m下層でV字の谷状に窪んでいて、その上に遺物や礫を含まず均質で非常に堅く締まった土が堆積している。S105・06のある調査区の標高16m以下の緩斜面でもこうした状況がみられ、この土層の堆積はここで集落が営まれる以前に形成された自然地形と考えられる。

標高は貼床面で15.5mを測る。規模や形態は明らかに出来なかったが、竪の立ち上りの外周にはこの住居跡を囲むように加工段や溝をの一部を検出した。また、S102・03とS104との間では、直径15cm深さ20cmの柱穴を12個検出し、建物跡であることが考えられたが、規則的な配置は見出せなかった。

S104出土遺物 (第16図)

図示した2点は、床面から出土した土器である。1は口縁外面に擬凹線文の施された甕である。口径は18cmを測り、頸部には波状文が施されている。器壁は全体的に厚く、口縁部は直線的にやや外傾している。調整は内面頸部以下へラケズリである以外はヨコナデである。この土器は塩津山遺跡で検出している土器の中では古い時期に含まれ、塩津2期のものであろう。1は鼓形器台の下半の脚台部である。調整は内面へラケズリ、外面はヨコナデであるが、外面はヨコナデを施す前に平行沈線文が施文されていたものが、ヨコナデ調整によりナデ消された跡がわずかに観察できる。2の土器の時期は塩津2~3期以降に当たると見られる。1と2の土器には、時期差が認められるが、S104の周囲には掘り込みや柱穴と見られるピットも検出していることから、これらの土器の出土した時期に継続して生活が営まれたものと思われる。



第15図 塩津山遺跡 S104実測図 (S=1/60)

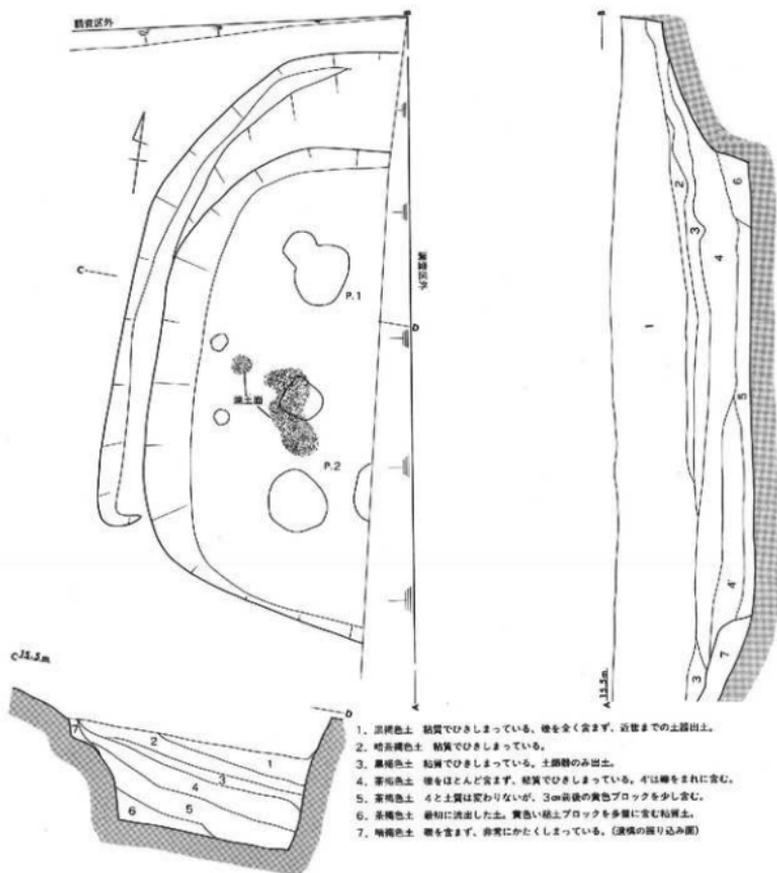


第16図 塩津山遺跡 S104出土遺物実測図 (S=1/3)

S 105 (第17~18図)

調査区の北東端、S 104の5m東側で検出した竪穴住居跡である。用地取得の関係上、平成6年の調査では住居跡を完掘することはできなかったが、およその形態や規模を想定することは可能である。なお柱穴跡は平面的に位置を確認するに留め、内部は掘り下げていない。

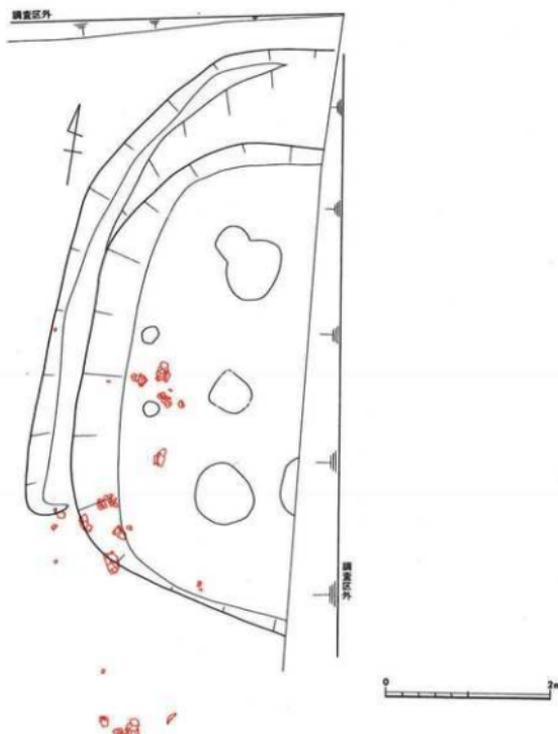
S 105は隅丸方形の竪穴住居跡で、床面で標高14.7mを測る。現在の地表面から1.8m下層とかなり深い位置で床面を検出し、壁の立ち上がりも掘り込み面から1m以上残存しており、遺構の遺存状況は良好であると言えよう。遺構の掘り込まれた面は、S 104と同様に粒子の細かい堅く締まっ



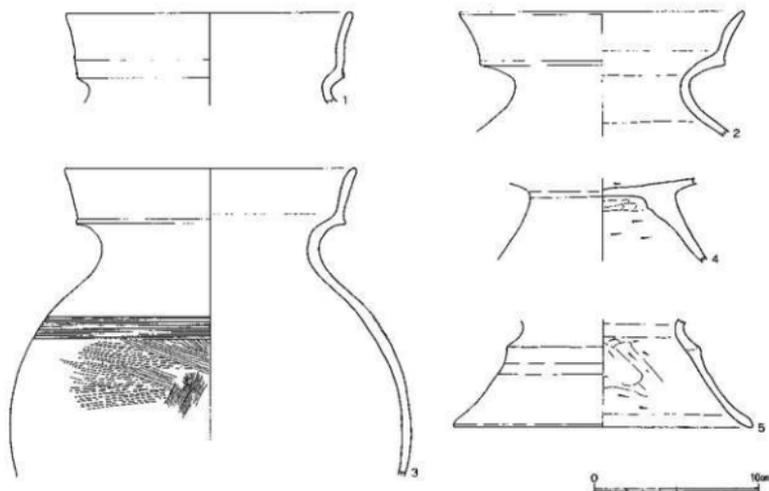
第17図 塩津山遺跡 S 105実測図 (S=1/60)

た粘質土層から（第7層）であるが、ほとんどは地山層まで掘り込みが達している。床面には大小2種類の柱穴のプランを計7個検出した。規模の大きい柱穴は主柱穴と思われ、直径50cm以上で、このうち直径70cmを越えるピット1・2は柱間2.8mを測る。小さい柱穴は直径15cm前後で、壁際に寄った位置で検出し、主柱とは異なる性格のものと思われる。床面には赤く焼けた焼土面が2カ所あり、一部はピットの上を覆っている。他に床面では土器が潰れて出土しているが、壁体溝は検出してない。壁の立ち上がりの外周には、幅25cmの小さな平坦面や非常に緩やかな斜面を備えた掘り込みが認められ、居住空間とは異なった防水や安全のための堅穴住居に関連する施設であったと考えられる。規模は床面の内法だけでは約4.8m四方であるが、外周の掘り込みを合わせると、差し渡し7mを越える面積を1棟の住居で占地していたことになろう。

遺物は床面に密着し、潰れた状況で出土している（第18図）。これらからS105の時期は弥生時代終末期、塩津5期と見られる。



第18図 塩津山遺跡 S105床面遺物出土状況 (S=1/60)



第19図 塩津山遺跡 S105出土遺物実測図(S=1/3)

S105出土遺物(第19図)

遺物は床面に密着して出土したものと、やや浮いた状態で出土したものとがあったが、1は床面から30cm浮いた位置で出土した、口径17cmの口縁端に平面を持つ甕の口縁部である。淡黄褐色を呈し、内面には黒斑がある。2～5は床面に密着して出土しており、S105の時期を示す遺物である。2は甕で口縁端にアクセントを持たない。風化の為不明瞭であるが口縁部は内外面ともヨコナデ調整仕上げである。3は甕で、2と類似しており同一個体の可能性が高い。口径約17cmで、丸く膨らみを帯びた胴部最大径は24.5cmを測る。外面の肩部には一条が浅く幅広いの工具による8条一単位の構描平行文が廻る。この文様以下は斜め方向の細かなハケ目調整が施されている。内面は頸部から肩部にかけてヘラ削りの後丁寧なナデ調整が施される。以下はヘラケズリである。2・3は色調・胎土とも類似しており、橙黄色を呈し、外面には口縁部と体部に黒斑が見られる。4は低脚高坏か台付の甕や鉢の脚台部であろう。脚部の外面はヨコナデ調整で、内面はヘラケズリの後ラフなヨコナデにより砂粒の移動が消されている。接合部は特に強くナデつけられている。甕や鉢の内面に相当する部分は砂粒の移動が観察できる。5は鼓形器台の下半で、外面はヨコナデ、内面はヘラ削り調整を施し、底径18cmを測る。

以上の土器の特徴から、S105の時期は塩津5期と思われる。

S106(第12図)

東側調査区の東端で検出した焼土面とピットで、後世の攪乱を大きく受けており、遺構の全体は不明であるが、他の住居跡の焼土面の状態と類似しており、本来は竈穴住居跡があった可能性が高く、S106と呼んだ。検出した遺構は、床面の一部とピット1個、焼土面2カ所である。焼土面は

直径約40cmの円形を呈し、鮮やかな橙色から赤色である。床面はほとんど破壊されていたが、標高約14.3mに整えられていた。この周辺では土器が多数出土しており、他にも住居跡があった可能性が高い。遺物はS106の床面に接しては出土していないが、上面の掘削層からは多数の土器が出土している。

(3)加工段状遺構の調査

加工段2 (第20～21図)

塩津山1号墳の築かれた尾根上から東側斜面に約2m下った標高約31mの位置で検出した遺構である。かなり急峻な斜面をし字状に掘り込み、コンターラインに沿った南北方向に細長い平坦面を造り出している。床面の標高は約31.5mで、床面上には不整形な溝やピットを確認した。遺構の北端は、塩津山1号墳の南東隅墳端と近接してわずか2m程しか離れていない。検出した遺構面の土層には非常に堅く締まった淡黄色土層が2層あり、この層の上面では土器が出土していることから、数回に分けて盛土を行うなどしたことも考えられる。しかしこれらの面から掘り込まれた遺構は検出出来なかったため、この土層の性格は不明である。

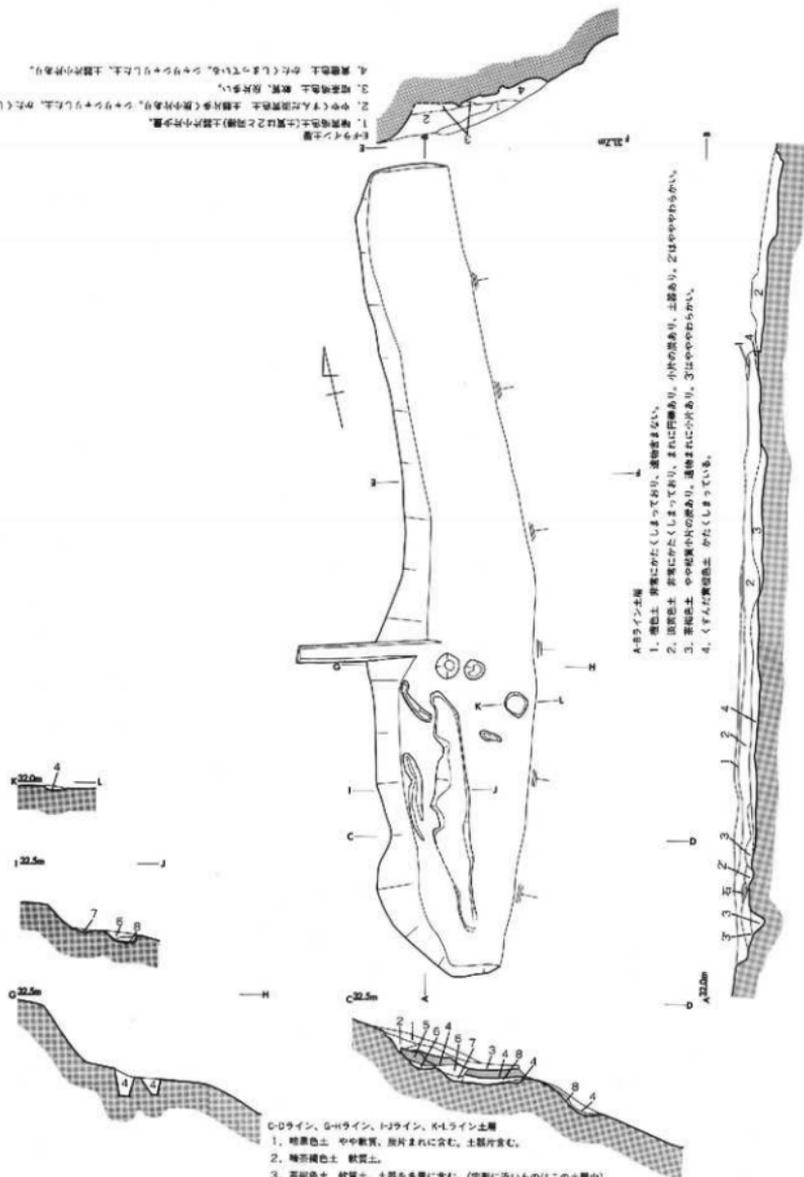
加工段2の規模は、南北14.8m、谷側は流失しているものと思われるが東西幅は1.8～3mを測る。地山面で検出した溝は、南半で小規模のものも含めると3条検出したがいずれも不整形で、最大のもので、長さ4.5mを測る。ピットは3個検出したが配置や形態に規則性は認められず、溝同様の性格のものに由来するか不明であった。加工段2の性格については明らかにすることはできなかったが、隣接する柳遺跡においても同様に急斜面を掘り込んだ細長い加工段が多数確認されており、同様の性格が考えられる。

遺物は南半の溝が検出された上面でまとまって出土し、離れて石器が2点出土している。

加工段2出土遺物 (第22～23図)

遺物は、溝の上面でまとまって出土した他にも、遺構全体で点々と出土している。ほとんどが土器で、石器も2点出土している。第22図1～10は甕である。1～3は口径10cm前後と小型の甕口縁部である。1・2は薄く外反する口縁部に、ヨコナデ調整を施す。3はやや厚い口縁部を持ち、口縁端は厚く平坦面を持つ。内外面ともヨコナデ仕上げで、内面は頸部以下にヘラ削り調整を施す。4～10は口径15～20cmの中型の甕である。4・5は内外面ともヨコナデ調整で器壁の薄い口縁部である。6は同様にヨコナデ仕上げであるが、器壁のやや厚い。7は風化をあまり受けていない甕で、口径はcmである。口縁部はヨコナデでやや厚く、端部が肉厚気味なアクセントを持つ。体部外面には横方向あるいは斜め方向の細かな単位のハケ目調整を施し、肩部には幅広く浅い平行沈線文を施す。内面は頸部以下ヘラケズリ調整である。8・9・10は口縁端に端面を持つ甕で、口縁部はやや厚みを有する。特に10は端面を水平方向につまみ出したようなアクセントを有す。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部以下は外面はハケ目、内面はヘラケズリを施している。11は口径17.3cmの甕である。12は胴厚く小さく内傾する口縁部を有する甕で、胴部は丸く球状を呈す。口径は16.2cm胴部最大径は35.2cmである。肩部には貝殻による羽状文が廻り、その上下には平行沈線文が施されている。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデ調整で、以下は外面は細かな単位のハケ目、内面は横方向のヘラケズリ調整である。13は甕又は甕の底部で直径8.5cmの平底を呈

1. 暗褐色土 土層が小片層
2. 赤褐色土 土層が小片層
3. 赤褐色土 土層が小片層
4. 赤褐色土 土層が小片層

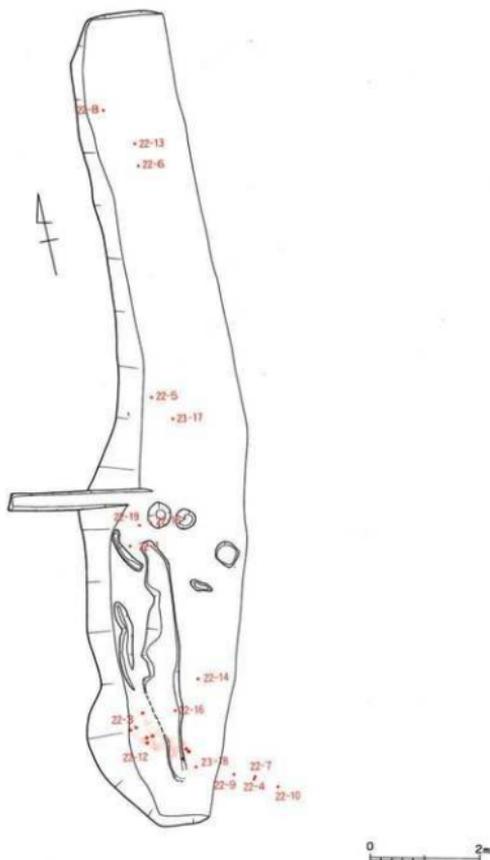


- 小田原ライン土層
1. 暗褐色土 土層が小片層で、遺物が多い。
2. 赤褐色土 土層が小片層で、まれに土層あり。小片の土層あり。土層あり。2は中層から多い。
3. 赤褐色土 中層土層の土層あり。遺物まれに小片あり。3は中層から多い。
4. くすんだ赤褐色土 中層土層が小片層で、遺物少ない。

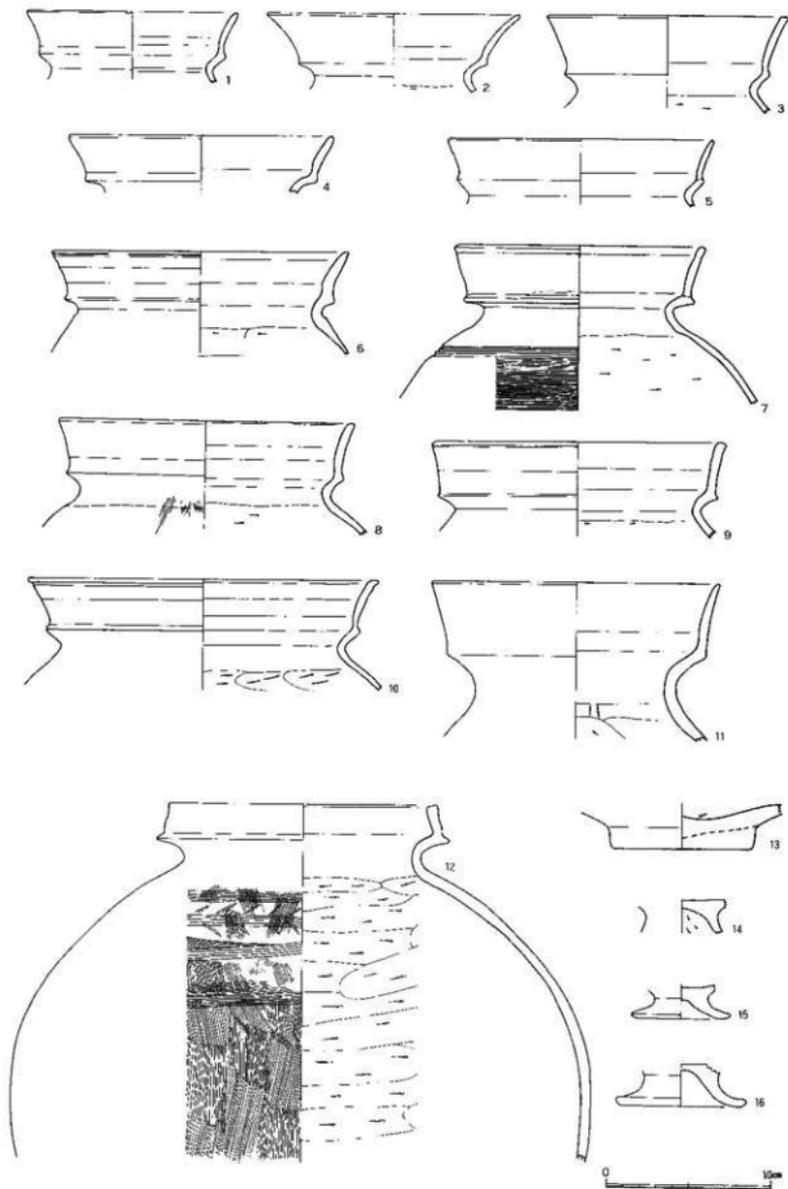
- C-Dライン、G-Hライン、I-Jライン、K-Lライン土層
1. 暗褐色土 やや軟質、土層が小片層に含む。土層が小片層。
2. 暗褐色土 軟質土。
3. 赤褐色土 軟質土。土層を多数に含む。(空層に含むものはこの土層中)
4. 赤褐色土 非常に小片層に含む。土層の小片層に含む。
5. 暗褐色土 非常に小片層に含む。
6. くすんだ赤褐色土 やや軟質土。
7. くすんだ赤褐色土。
8. 暗褐色土 非常に小片層に含む。まれに土層あり。

第20図 塩津山遺跡 加工段2実測図 (S=1/90)

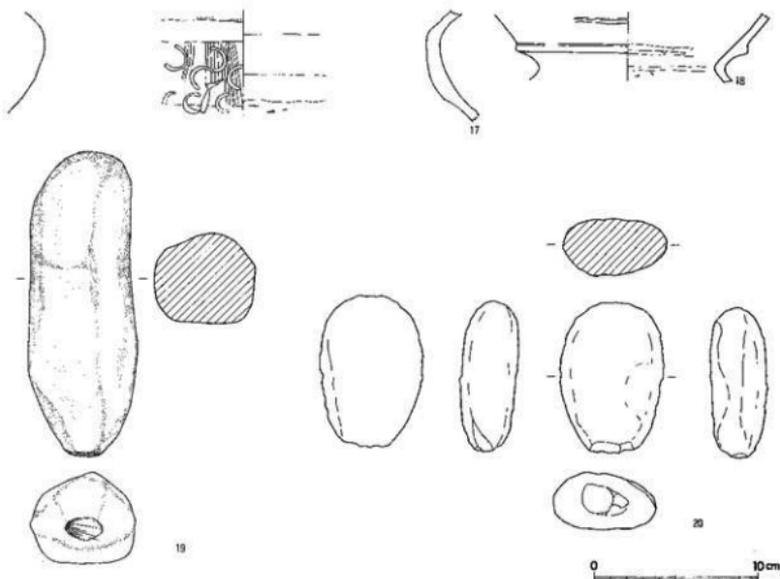
する。胎土は粗く、内面はヘラケズリ調整である。14は低脚高坏の坏部と脚部の接合部分である。脚部の最小径は3.8cmである。15・16は低脚坏の脚部である。第23図17は大型の壺の頸部の小片である。外面は、タテ方向ハケ目調整の後、C字状の原体を用いてスタンプ文を施文してある。18は鼓形器台の上台部で、不明瞭ながら外面には平行沈線文を施している。内面は一部に丁寧なヨコナデが認められる。19は長さ18.8cm直径6.1cmの円柱状の安山岩を用いており、石器の表面は風化を受けて、白灰色を呈する。やや尖り気味の一端にすり減った平坦面が認められ。他の表面はなめらかで丸みを帯びている。20は多孔質の円碟で、長さ9.3cm幅6.3cm厚さ4.4cmと扁平な形態で、一方の先端に打ち欠いたような痕跡が見られる。その他に使用痕は見られず、用途は不明だが石材も軟



第21図 塩津山遺跡 加工段2遺物出土状況 (S=1/90)
 (濃いアミかけは土器溜まりを示す。数字は挿図番号に対応)



第22图 塩津山遺跡 加工段2出土遺物実測図(1)



第23図 塩津山遺跡 加工段2出土遺物実測図2(S=1/3)

質で、長期に渡って使用されたものではなく、何らかを打ち欠く目的で短期間あるいは限られた目的で使用されたものと考えられる。

土器の年代よりこれらの時期は弥生時代終末期、塩津5期と見られる。

加工段3 (第24～25図)

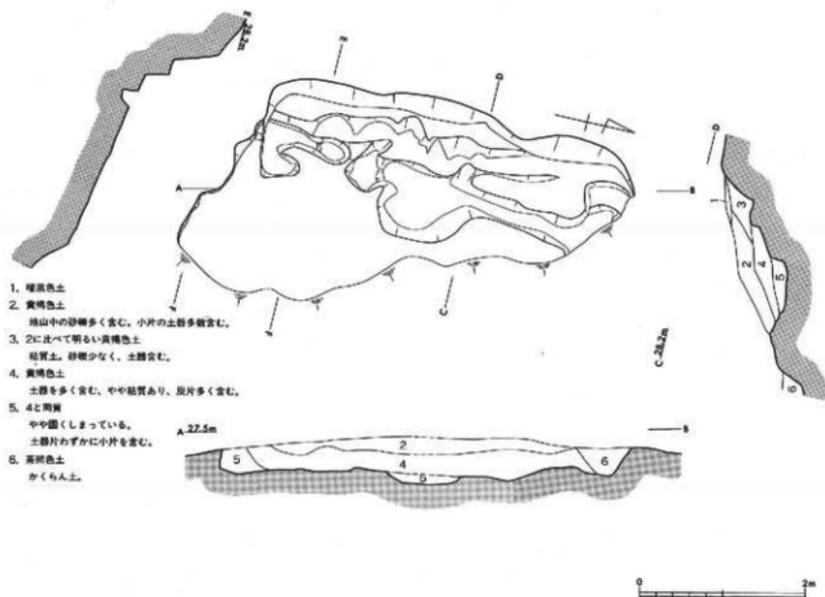
東側調査区は、尾根からかなり険しい斜面の傾斜であったものが、標高26m付近を境に傾斜が緩くなり、丘陵裾の緩斜面へとつながっていく。加工段3は、ちょうどこの変換点付近で検出した遺構で、加工段と呼んだが、加工段1・2とは規模や形状は異なり、機能も違うと思われる。

加工段3は標高28mの緩斜面に掘り込まれた遺構で、非常に複雑な形状を呈する。東側は流失しているが、約3m×約1.5mの平坦面を有する。西側の壁際には籬壇状の幅約20cmのテラス面が1段または2段作り出されている。遺物は西側の段上や、遺構中央などで高坏などが出土している。

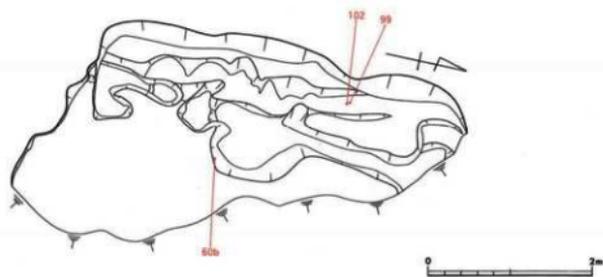
加工段3出土遺物 (第26図)

第26図1は甕口縁部で、口径14cmを測る。口縁端には小さくつまんだようなアクセントを持ちヨコナデ調整を施す。2は低脚坏で、器高がやや高く坏部は深い。3は低脚高坏や脚付鉢等の器種の脚部である。脚柱部の最小径は7cm底部径12cmとしっかりした脚部で、坏部内面はヨコナデ調整であり、脚付甕ではなく、内面をヨコナデやハラミガキ等で仕上げる事が多い脚坏と考えられよ

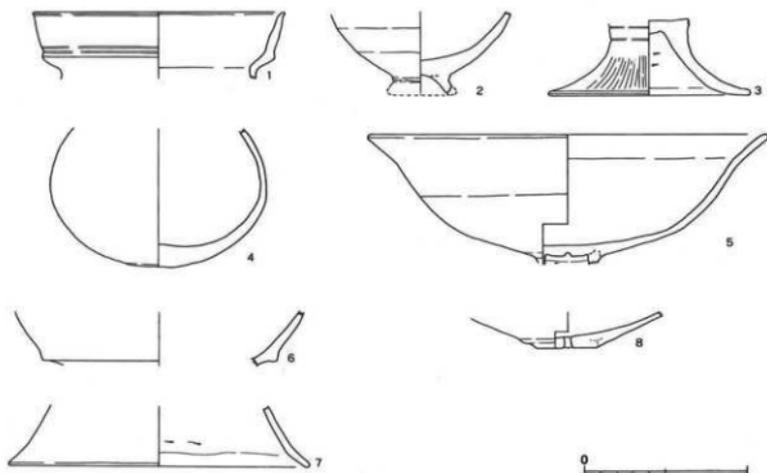
う。脚部の外面は丁寧なタテ方向のヘラミガキで、内面はヘラケズリを施している。4は扁平な円形の壺の体部で、底部は器壁薄い体部比べてかなり厚くやや不安定な500円玉程の平底を有する。内面はヘラケズリにより器壁を薄く整形した後、強いヨコナデで削りの痕跡をナデ消している。外面はヨコナデ調整である。5は高坏で、口径24.2cmを測る。脚接合部の内面には坏部のほぼ中央に当たる部分に貫通しない小孔がある。6・7は鼓形器台の小片である。8は小片であり、不明瞭であるが、外面はヨコナデ、内面ヘラケズリ調整で、器形や器壁の薄さから甕あるいは壺の底部と思われる。底部は直径4cmの平底で、中央には焼成前に穿たれた約6mmの小孔があけられている。これらの土器は塩津5期のものである。



第24図 塩津山遺跡 加工段3実測図 (S=1/60)



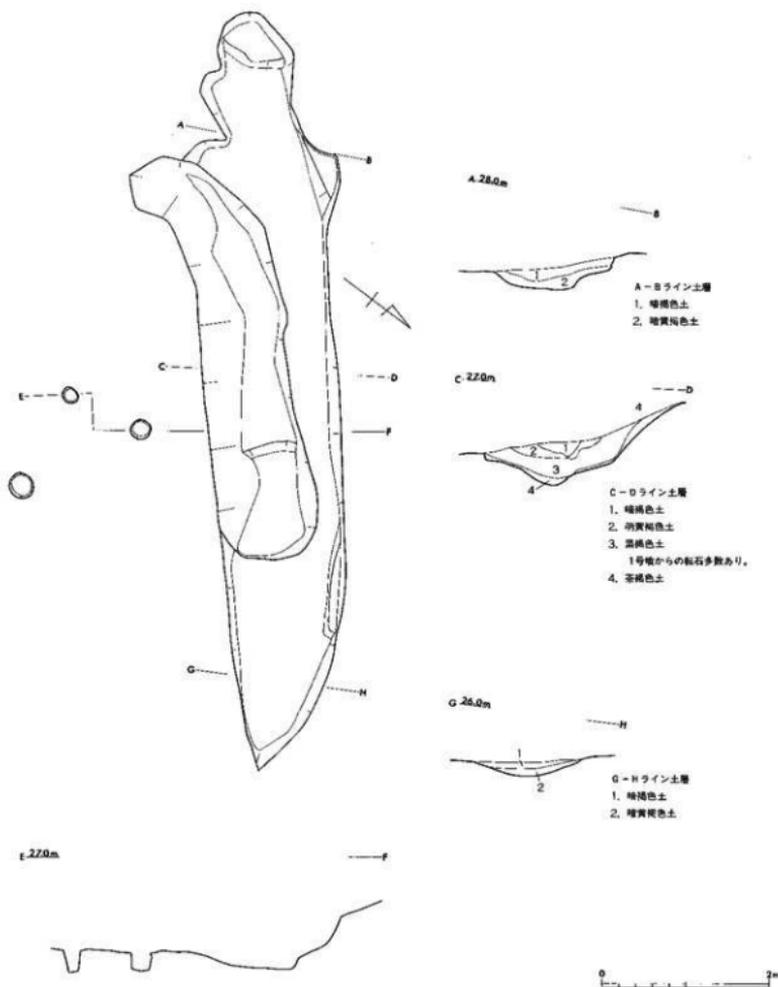
第25回 塩津山遺跡 加工段3床面遺物出土状況 (S=1/60)



第26回 塩津山遺跡 加工段3出土遺物実測図 (S=1/3)

(3) 溝状遺構、土坑、その他の不明遺構の調査

東側斜面調査区では、溝状遺構 (SD) や土坑 (SK)、性格不明の遺構 (SX) を検出した。性格不明遺構は、遺構の一部が流失しており本来の形状や用途を想定しにくいものをまとめた。



第27図 塩津山遺跡 SD01実測図 (S=1/60)

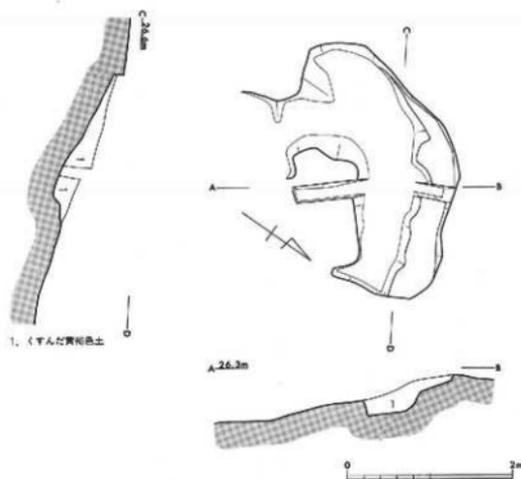
SD01 (第27図)

標高約28～25m、斜面に直行する南西から北東方向に検出した溝状遺構である。規模は、長さ9.2m、幅2.5～1.5m、深さは0.2～0.5mと浅く、底は緩やかなU字状を呈する。SD01は、SD03を埋めて上部に堆積した暗黄褐色土上面から掘り込まれており、周辺に直径20～30cm深さ30cmのピットを検出した。SD01の覆土中からは須恵器小片が出土しており、弥生時代終末期の遺構面が堆積により、おおよそ覆われてから古墳時代後期以降にSD01などのこれらの遺構が掘り込まれたと思われる。古墳時代後期の遺構は、他にSX01(性格不明の集積遺構)を検出しただけであるが、遺物は古墳時代後期～奈良・平安時代の須恵器小片が調査区全体から数十点出土しており、本来何らかの遺構が存在していたと考えられる。

SD01の底には塩津山1号墳東側斜面から転落した礫が多数堆積している。この下層からは転石と見られる礫はほとんど出土していないことから、古墳時代後期に整地した際に故意に集積されたと考えられよう。SD01の上面では、自然に転落した転石が出土している。

SD02 (第28図)

加工段3の約4m下方で検出した溝状遺構である。地山に掘り込まれた小規模で不正形な遺構である。遺構の北側の一部は二段に掘り込まれていて、底は緩い傾斜を有し平坦である。斜面の下方に向かう南側は開口している。規模は最大で幅1.3m長さ3.4mを測る。遺物は覆土中から、小片のみしか出土しておらず図化も不可能であったが、調整等から弥生時代末の年代が与えられると思われる。覆土中からは炭化物の小粒が多く出土している。



第28図 塩津山遺跡 SD02実測図 (S=1/60)

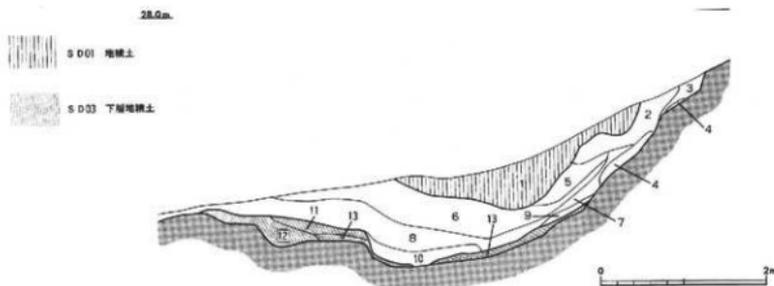
S D03 (第29図)

S D01の約0.4～2 m下層で検出した溝状遺構である。塩津山1号墳の東側の急峻な斜面からやや緩やかな緩斜面へ変換する付近である。急斜面側は元々の斜面を利用して掘り込まれている。遺構面は2面あり、下層で検出した古い溝を第1次遺構面、後に再掘削された溝を第2次遺構面と呼び分けた。

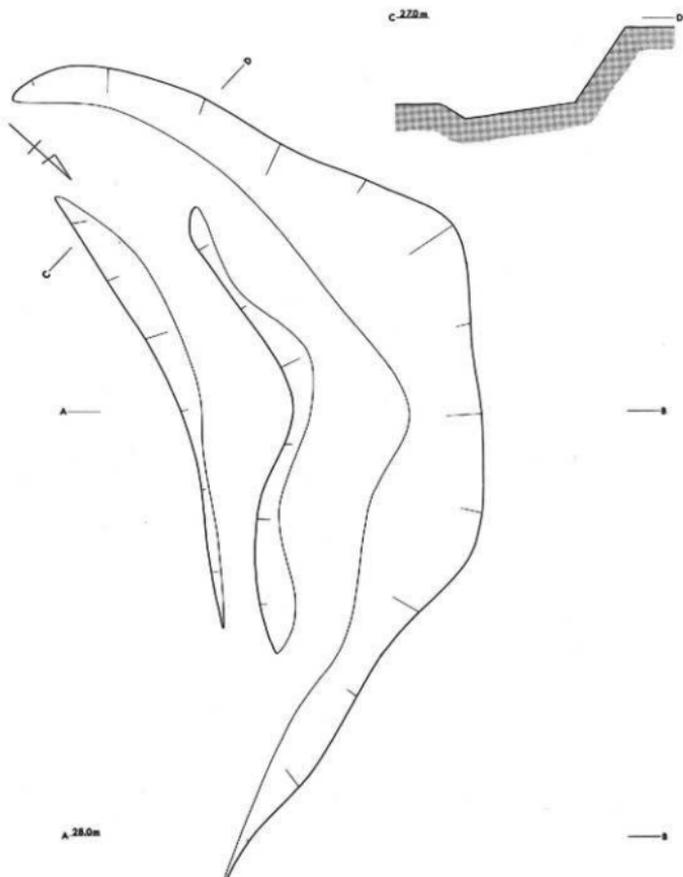
平面形は、検出できた第1面では斜面側は緩やかな曲線で弧を描いており、三日月状を呈する。両端はそれぞれ約1.0～1.5mの幅で開口している。断面形は浅いU字状を呈し、一部が二段掘りとなっている。斜面側である東側では、約20cmと僅かに掘り込んだところで緩やかな傾斜を有する平坦面を作り出している。

土層の堆積状況を見ると、上層にはS D01の埋土が堆積し(第30図1層)、その下層にS D03の埋土が堆積している。土層断面を見ると、1度掘削し直されたようで、古い掘削は東側が二段掘りになっている。新しい掘削は、U字状の底の形状は大きく変えることなく、東側の段が埋められた状態で掘り込まれたものであろう。二次的な掘削の掘り込み面となっている第11・12層は粒子の細かな粘土質層で、非常に強く締まっている。13層は溝の最下層に溜まった薄い粘土層で、遺物や有機物の小粒を含んでいる。それぞれの規模は、古い第1次の溝が掘り込みの上端で最大幅4.2m、深さ0.7mで、新しい第2次のものでは最大幅2.4m深さ0.5mと、幅は掘削し直した際に縮小したことになる。

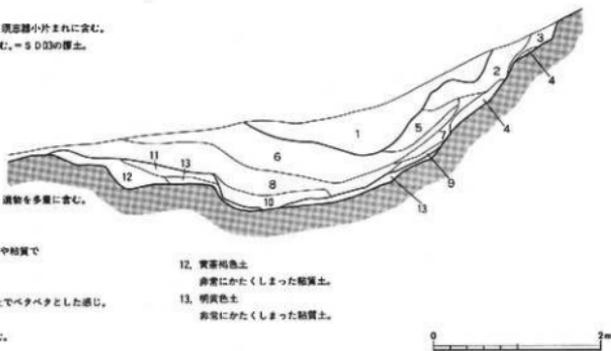
遺物はS D03の各土層中から多く出土しているが、まとまった状態ではなくバラバラと出土し、また大きく破損した状態のものが多く、完形に復元出来たものは無かった。出土した土器の時期はやや幅が見られ、弥生時代後期後半～終末期、塩津2期～5期と考えられる。これは出土位置が堆積土中ということと、遺構の性格からであろう。出土土器の年代の最も新しいものから考えて、弥生時代終末期にはS D03の上部には土が堆積していたものと思われる。



第29図 塩津山遺跡 S D01・S D03模式図



1. 暗褐色土
しまりなく、土器小片多く含む。灰器器小片まれに含む。
1号墳からの転石多い。炭小片含む。-S D 03の層土。
2. 暗黄褐色土
3. やや赤味を帯びた褐色土
遺物は出土していない。
4. 黄褐色土
やや結實あり。
5. 暗褐色土
炭小片含む。
6. 黄褐色土
ややシャリシャリとした軟質土。遺物を多量に含む。
7. 暗褐色土
8. 黄褐色土
6と比べて、黄味が濃くならず、やや結實で
ベタベタとした感じ。
9. 黄褐色土
水分が多く、キメの粗かな結實土でベタベタとした感じ。
10. くすんだ黄褐色土
結實やや強い軟質土。炭小片含む。
11. 黄褐色土
水分が多く、キメの粗かな結實土。ベタベタとした手ざわり、かたくしめる。



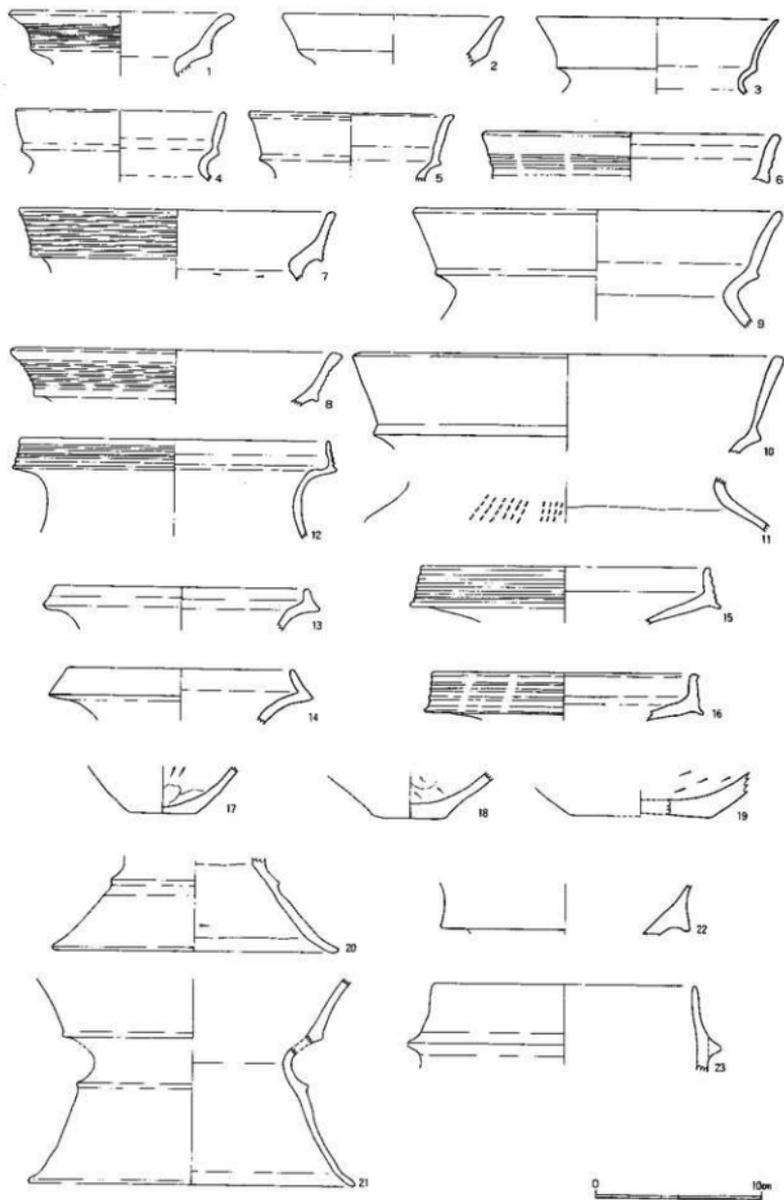
12. 黄褐色土
非常にかたくしまった結實土。
13. 明黄色土
非常にかたくしまった結實土。

第30図 塩津山遺跡 S D 03実測図 (S=1/60)

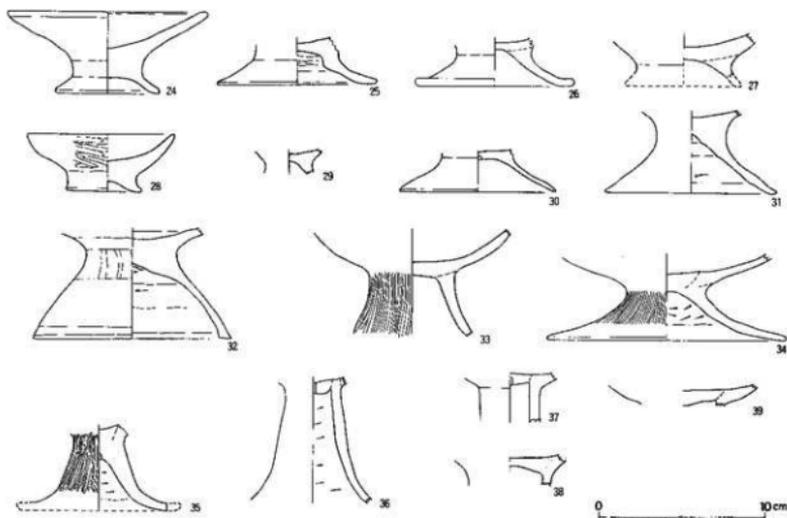
S D03出土遺物 (第31~32図)

遺物は、甕、壺、器台、甌、低脚杯、台付鉢、高杯が出土している。

第31図1~11は甕である。甕は全体を復元できるものは出土しておらず、凶化できたのは口縁部がほとんどであるが、体部破片も出土しており、外面ハケ目内面ヘラケズリ調整が観察できる。1~5は口径12cm~14cmの小型の甕の口縁部である。1は外面に貝殻腹縁により平行沈線文の施されているもので、器壁は厚く、大きく外反する。外面の平行沈線文は外反の強い端部は施されており、下半に平行沈線文が施されている。2は内外面ともヨコナデ仕上げの口縁部で、厚く、立ち上がりは小さく、段もやや不明瞭である。3はヨコナデ仕上げの甕の口縁部で、非常に薄く外反する。4・5は厚みがあり、直線的な口縁部で、5の口縁端はつまみ出したような平坦面を形成している。以上はいずれも甕の口縁部であるとおもわれるが、形態や調整に差があり、時間幅があるものと考えられよう。6は壺あるいは甕の口縁部である。外面は口縁上半部分には施文されていないが、下半には幅広の平行沈線文が施文されている。またこの個体は胎土や色調が他の土器とはやや異なっている。7は口縁外面に貝殻による平行沈線文が施文された口径19cmの甕である。口縁部から頸部にかけては厚く、しっかりとした印象である。8は7に比べてやや口縁の外反の強いもので、同様に平行沈線文が施されている。9・10は口縁部に文様を持たない口径22~26.2cmを測る。口縁部は厚く、ヨコナデ仕上げである。11は甕の頸部~肩部の小片で、外面に貝殻腹縁による刺突文が見られる。12~16は壺の口縁部である。12は、器壁が薄く内傾する口径18.8cmの壺口縁部である。口縁部外面に4条の平行沈線文が施されている。その他、内・外面はヨコナデ調整である。13・14は、無文で小さく内傾し立ち上がる口縁を有する壺の口縁部である。15・16は、褐色の独特の胎土・色調を呈する吉備系の小型器台か、あるいはこれとセットになる壺の口縁部の小片である。15は内傾する口縁部の立ち上がりの外面に横ナデによる凹線文を施す。16はほぼ垂直に立ち上がる口縁部で、外面に4条の凹線文を施す。15に比して凹線の凸凹が曖昧で、口径もやや小さい。15・16のような小型の吉備系器台・壺は、鳥根県では墳墓祭祀用として持ち込まれた例が知られており、本例もこれらと同様に吉備地方から搬入されたものと見られる¹⁰⁾。17~19は甕や壺の底部である。17・18は直径5cm前後の平底で、19は約8.5cmのしっかりした平底である。20は鼓形器台の脚部で、底径17.2cmを測る。調整は外面ヨコナデ内面ヘラケズリを施す。21は鼓形器台で、口縁部が欠損しているが、器高15cm以上、底径19.6cmと鼓形器台としては大きいものである。上半は内外面ともヨコナデで、筒部内面は曖昧な稜を形成している。22は破片で器形は判断し難いが、器台の一部であると思われる。23は甌の一部で、外面には断面三角形の突帯が付く。第32図24~28は低脚杯である。1はしっかりと踏ん張る脚部に直線的に開く坏部が付く低脚杯で、古い形態を呈するものである。25・26は脚端部径が直径約9.5cmと大きく、坏部も深く大きい低脚高杯の可能性もある。25は内面中央が強いナデによって大きくえぐれたようになっている。27は坏部がかなり厚めのものです。28は小型で器壁が厚く、外面には丁寧なヘラミガキを施す。29は小片のため形態が不明であるが、低脚杯の脚部としてはかなり小さいものである。30~34は低脚高杯の脚部である。30は底径9.5cmの脚部にしては器壁の薄いもので、坏と脚の接合部には高杯で見られるような坏部内面の中央に貫通しない約5mmの小孔が空いている。31は脚部で、内面はヘラケズリ技法である。32は内傾する踏ん張るような脚部で台付きの甕や壺の脚部と思われる。内面の中央には爪形の玉痕が3~4個付いている。33は鉢の脚部で外面は縦方向のハケ目調整である。34も同様に脚部の外面は縦方向のハケ目、内面



第31圖 塩津山遺跡 S D03出土遺物実測図(1) (S=1/3)



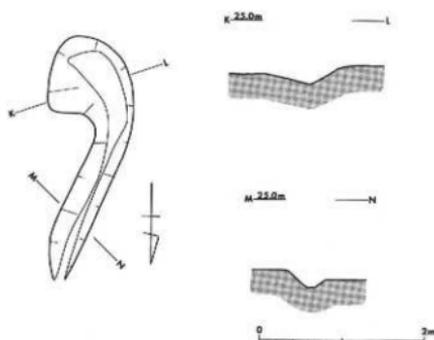
第32図 塩津山遺跡 S D 03出土遺物実測図(2) (1/3)

ヘラ削り調整である。35は高坏の脚部で外面は丁寧な縦方向のヘラミガキである。脚部と坏部の接合部は弥生時代終末期～古墳時代前期の高坏に一般的に見られるボタン状の円盤を充填するものとは異なり、接合部が厚く脚部内面の中央には小孔が空けられている。36～39は山陰で弥生時代末～古墳時代前期によく見られる高坏で、坏部と脚部の接合部はボタン状の円盤を充填するもので脚部内面の中央に小孔が空くものである。

以上の土器は弥生時代後期後半、塩津2期のものから弥生時代終末期の塩津5期のものが認められ、複数の土器型式にまたがって出土しており、最終的には塩津5期に東側斜面で集落やその他の遺構が廃絶される際に埋まったものと思われる。

S D 04 (第33図)

標高約24mで検出した小さな溝状遺構で、長さ3m幅0.5～1.0m深さ0.1～0.4の規模を測る。溝の一端は幅10cm開放しており、平面形は不正形に曲がっている。断面は浅いV字状あるいは台形である。覆土中には炭化物を多く含んでおり、土器の小片を混入していた。遺物は壺体部などの小片が出土したものの、図化出来たものは少なかった。S D 04はS D 03や05と近く、これらと関連する遺構であったと考えられる。S D 04からは第34図の壺口縁が出土しており、S D 03・05の時期と重なる弥生時代終末期、塩津5期のものであろう。



第33図 塩津山遺跡 S D04実測図 (S=1/60)



第34図 塩津山遺跡 S D04出土遺物
実測図 (S=1/3)

S D04出土遺物 (第34図)

覆土中からは細片が出土しているが、図化できたのはこの甕口縁片のみであった。

複合口縁の甕口縁部で、口径15.9cmを測る。口縁端はつまみ出したようなやや平坦な面を持ち、口縁部の段の突出は鋭い。内面は頸部以下横方向のヘラケズリである。時期は弥生時代終末期、塩津5期であろう。

S D05 (第35図)

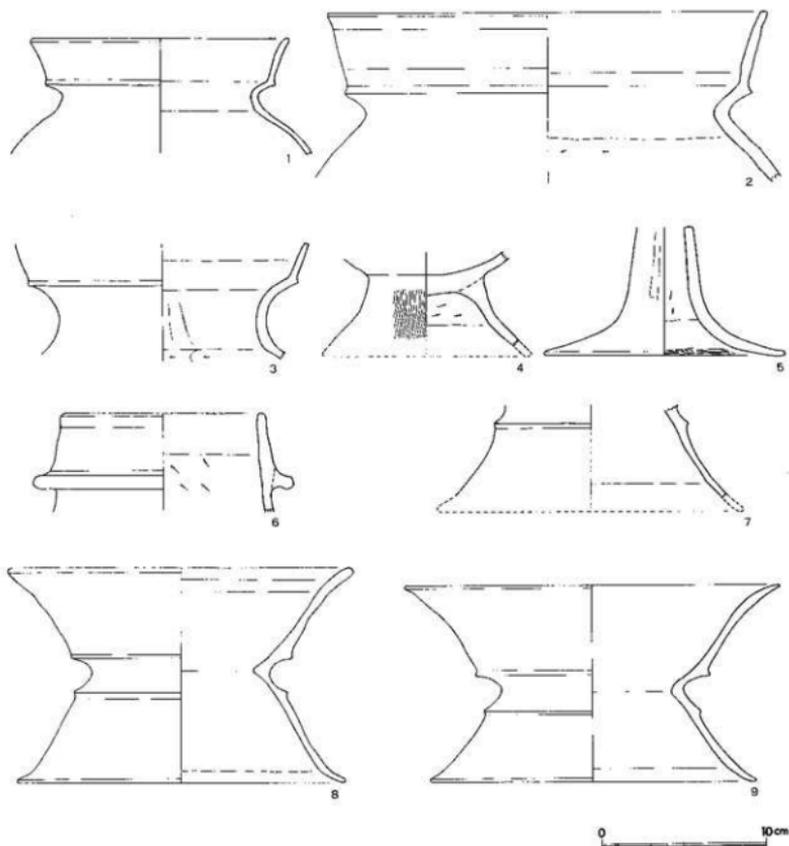
S D03の東側、これと並ぶように検出した溝状遺構である。標高27mの緩斜面にあり、平面形はいびつな弧状を呈する。断面はごく浅いV字状かあるいはL字状を呈し、加工段様を呈する部分も見られる。斜面側である北側は急な角度で掘り込まれており、中央部分ではほぼ垂直に掘り込まれている。堆積の最下層では炭の小片を多く含み、遺物も多くは壊れた状態で出土している。S D03と同様に完形に復元出来るものは無く、多くは小片であった。

S D05出土遺物 (第36図)

第36図1は口径15.4cmの甕である。外面は肩部まで現存しているが、文様は認められず、ヨコナデ調整仕上げである。2は口径26.7cmと大型の甕口縁部である。口縁端は端面を持ち、厚みのある複合口縁部である。3は甕で、口縁端部を欠くが現存部から想定すると口径約20cm前後であろう。頸部内面には縦方向の強いナデが見られ、以下ヘラケズリである。4は台付き鉢の脚台部で、外面は縦方向のハケ目を施す。脚部の内面は中央部分は強いヨコナデで、以下は横方向のヘラケズリで、端部はヨコナデ仕上げである。6は甕形土器の端部片である。甕形土器は一方の先がすぼんだ中空の円筒形の形をしているが、これは先がすぼんだ一端の破片であろう。端部から約10cmの位置に突帯が貼り付けられており、調整は内面にヘラケズリが見られる以外はヨコナデである。7～9は鼓形器台で、8、9は完形に復元が可能であった。8は上半と下半の器高や直径が非常によく似ているもので、通常の上半が大きく下半がやや小さい鼓形器台と比べると、どこことなく不安定な印象を

受ける。口径20.6cm底径19.6cm器高13.2cmで、筒部直径は11cmで、器壁は全体に薄く、筒部内面には不明瞭な稜が見られる。調整は下半の脚台部内面がヘラケズリの以外はヨコナデ調整である。9は口径22.6cm底径19.4cm器高10cmを測る。器壁はやはり薄く、筒部内面には不明瞭な稜を形成している。

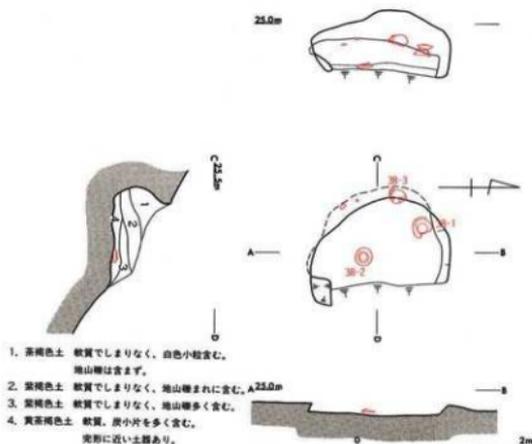
これらの土器は弥生時代終末期、塩津5期の土器であり、SD05の廃絶の時期はこの頃と思われる。



第36図 塩津山遺跡 SD05出土遺物実測図 (S = 1/3)

SK01 (第37図)

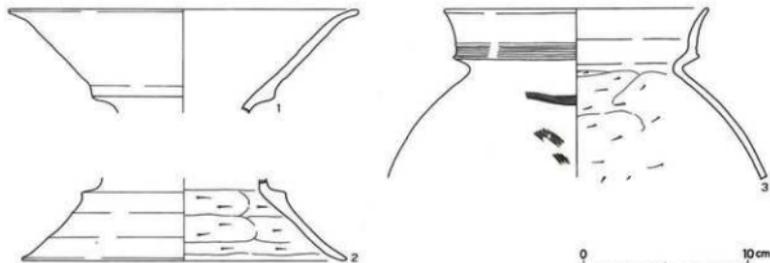
塩津山1号墳墳頂から東側へ下がった標高24m前後の緩斜面にはコンターラインに沿った方向に溝状遺構や加工段状遺構といった多くの遺構が集中して検出されているが、SK01はこの遺構群の最も北側の端で検出した地山面に掘られた土坑である。谷側の1/3を流失しており全形は不明であるが、床面が平らな直径2m程の円形の素掘りの土坑であると考えられる。内部は、壁が袋状に湾曲し、えぐれて掘り込まれており、比較的遺存状況の良かった西側の立ち上がりは検出面から床面までの深さが70cmである。内部にはほぼ水平に軟質の土が堆積しており、ほぼ完形の土器などが床面に接してか、あるいは数cm浮いて第4層中から出土し、焼土面など火を受けた痕跡は認められなかった。SK01の性格については不明であるが、形態やほぼ完形の土器の出土状況や土層の堆積状況からみても、墓とは考え難い。袋状ということ、貯蔵穴等の可能性も考えられるが、住居跡に明らかではない。



第37図 塩津山遺跡 SK01実測図 (S=1/60)

SK01出土遺物 (第38図)

1は鼓形器台である。出土した際には完形に近い形態を保っていたが、非常に脆く、取り上げ時に、1/2を欠失してしまい図化できなかった。取り上げ時のメモによると「およそ口径24cm底径20cm器高160cm」で、外面に文様は認められずヨコナデである。図下が可能であった上半部分は口径21cm、外面はヨコナデ調整で、逆ハの字状に直線的に開いている。2は1とは異なる鼓形器台の下半で、以上を欠くもの下半の遺存状況は良い。外面はヨコナデで、内面は端部以外は横方向のヘラ削りであ



第38図 塩津山遺跡 SK01出土遺物実測図 (S=1/3)

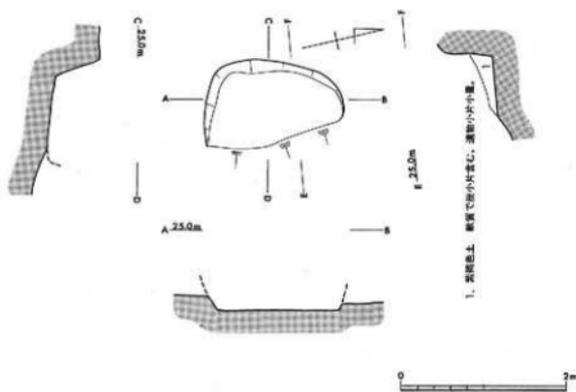
る。3は口径16.2cmの寛で、外面には煤が付着し、黒変していた。口縁部はやや外反して単純に丸い形態を呈し、外面の一部に平行沈線を2～3条確認できる。体部外面は細かな単位のハケ調整で、文様は見られない。内面はヘラケズリである。遺物は他に2点土器の細片が出土しているが、図化は不可能であった。これらの土器は弥生時代終末期、塩津4期のものと見られる。

SK02 (第44図)

SX03の一部を切って掘り込まれた用途不明の土坑である。1.4m×0.8mの長方形を呈し、深さ30cmである。床面は小さな凹凸があり、内部には炭小片を多く混入した軟質の黒褐色粘質土が堆積していたが、遺物は出土していない。

SK03 (第39図)

谷割の多くを流失していた遺存状況の悪い土坑である。1.7m×1.5mの小判形と想定でき、平らな床面の規模は1.5m×1.2mである。深さは現存する西側では60cm掘り込まれている。床面はほぼ全面が赤く火を受けた痕跡が認められ、覆土中には炭の小片を多く含んでいる。覆土中には土器の小片も含んでおり、弥生時代終末期、塩津5期のものである。



第39図 塩津山遺跡 SK03実測図 (S=1/60)



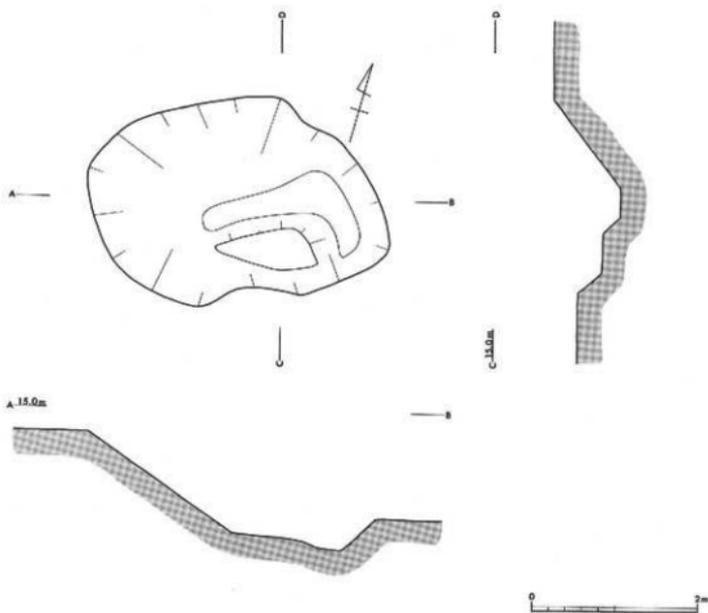
第40図 塩津山遺跡 SK03出土遺物実測図 (S=1/3)

SK03出土遺物 (第40図)

覆土中や、周辺から土器の一片が出土している。第40図1は鼓形器台の筒部で、筒部の最もくびれた位置で11cmと大きい。2は低脚坏で、口縁端部が丸く玉状に取まる。3は高坏の坏部で、坏部と脚部の接合は中央に小孔のあるボタン状の円板を充填するものである。これらの土器は小片であり、時期を決するには十分な資料ではないが、大型の鼓形器台や高坏が出土していることから、塩津5期頃のものと考えられる。

SK04 (第41図)

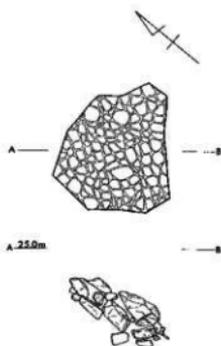
SK04は、標高14m付近で検出された用途不明の土坑で、加工段2・3やSD01-05等の遺構群とは距離が離れている。平面形は3.7m×2.5mの不整形な小判形で深さ0.7mを測る。摺り鉢状を呈し、底は小さく二段に掘られている。内部には非常に堅く締まった淡黄褐色土が堆積しており、遺物は出土していない。



第41図 塩津山遺跡 SK04実測図 (S=1/60)

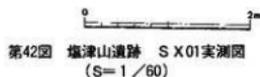
S X01 (第42図)

S X01の南側で検出した集石遺構である。表土直下の茶褐色土層の上ののった形で検出した遺構で、弥生時代後期の遺構群とは遺構面が異なる。石は1号墳の外表施設などに使用された安山岩質の自然石が大小30個余り約2m四方の範囲に集石していたものである。石の積み方に規則性は見られず、付近にあった転石を集めて片付けたものであろう。石の間からは須恵器大甕の小片が出土しており、古墳時代後期以降に集石されたものであろう。

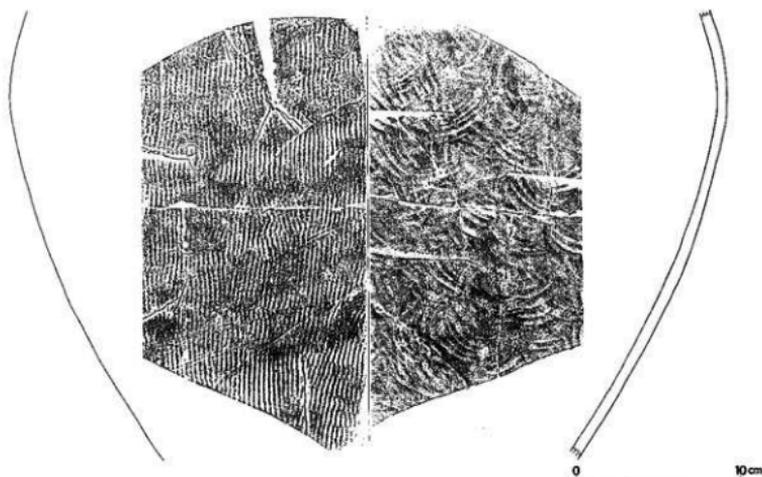


S X01出土遺物 (第43図)

内外面にタタキ痕を残す須恵器大甕である。これのみで時期を決定するのは困難であるが、古墳時代後期以降のものである。



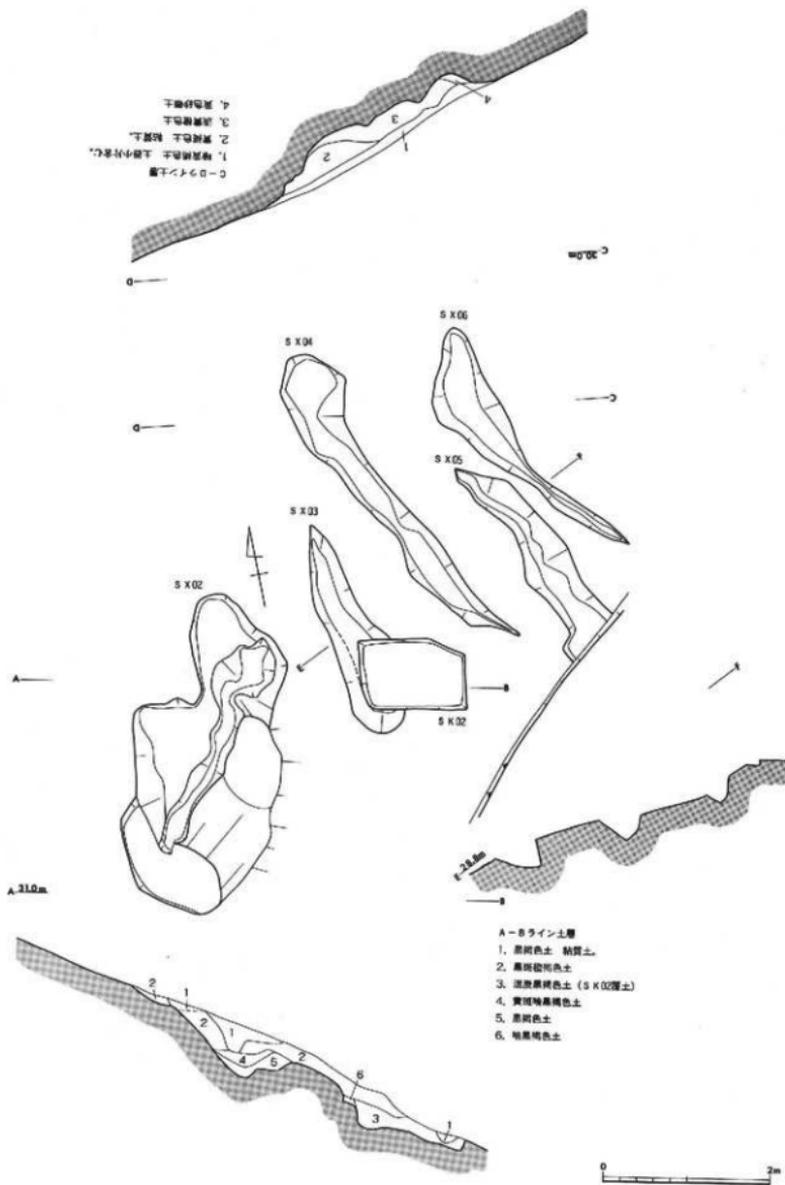
第42図 塩津山遺跡 S X01実測図 (S=1/60)



第43図 塩津山遺跡 S X01出土遺物実測図 (S=1/3)

S X02 (第44図)

標高29m、加工段2の下方で検出した用途不明の掘り込みである。2.0m×4.0m規模で途中に段を有する複雑な掘り込みで、中央が部分的にV字状に深く掘り込まれている。内部には暗～黒褐色土が堆積し、この中には炭片や土器細片が含まれていた。



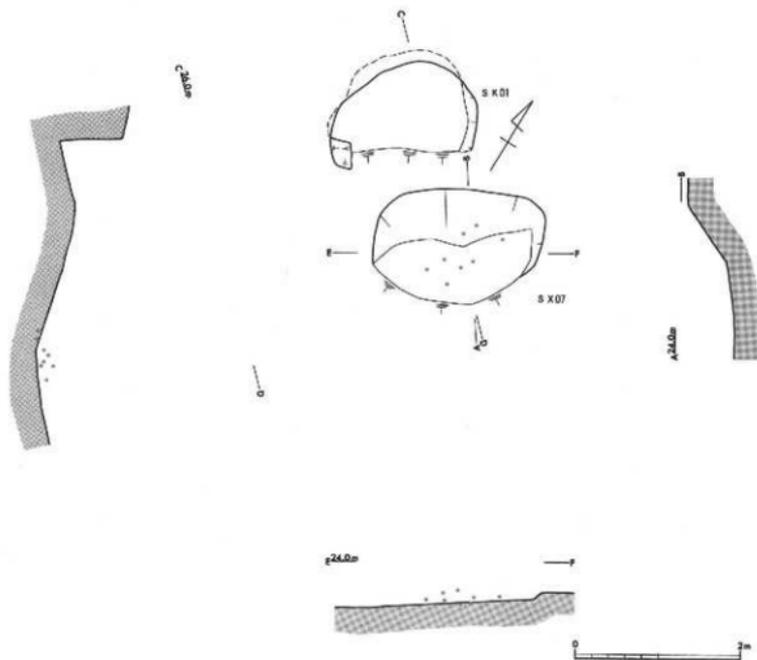
第44図 塩津山遺跡 S X 02~S X 06及びS K 02実測図 (S = 1/60)

S X03~06 (第44図)

S X02に隣接した遺構で、急斜面に掘られた小規模な溝状を呈する。形態はいずれも断面がV字状かU字状であるが、用途や機能は不明で、S X (不明遺構)として呼んだ。これらは斜面に平行して約0.2m~1.2mの間隔をおいて掘り込まれているもので、規模の明かなものは、S X03が0.2~0.6m×2.8m深さ40cm、S X04が0.3~0.4m×4.4m深さ40cm、S X06が0.2~0.8m×3.4m深さ30cmである。S X05は一端が調査区外へと続いていることから長さは不明であるが、幅40~60cmで形態も共通することから同様な規模かと思われる。内部には炭や土器細片を含んだ黒褐色系の土が3層堆積していた。土器はいずれもごく小さな細片で、混入した可能性も考えられるが、時期はおおよそ弥生時代後期後半~終末期のものと思われる。

S X07 (第45図)

S K01の下方で検出した小規模な平坦面である。急な斜面を掘り込んで造られたが、遺構の一部は流失しており、本来すり鉢状を呈する土坑であったことも考えられるが不明である。標高24mに1.9×0.8mの平坦面を検出し、これに貼り付いて土器細片が出土している。S K01との関係は明らかにできなかった。



第45図 塩津山遺跡 S X07実測図 (S=1/60)

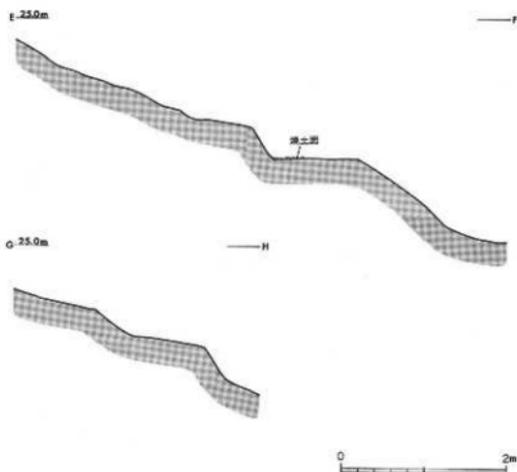
S X08～S X14 (第46～47図)

塩津山1号墳の東側下方、標高26～22m付近で、小規模な平坦面や土坑状の遺構群を検出した。これらの遺構に、平面的な切り合いを確認することはできなかったが、土層の堆積状況から、遺構の掘り込み面が異なり、新古があることが確認できた。しかし出土した土器をみると時期が大きく異なるものは認められず、おおよそ弥生時代終末期、塩津5期の時期に含まれることから、相次いで遺構の掘り変えが行われたものと思われる。

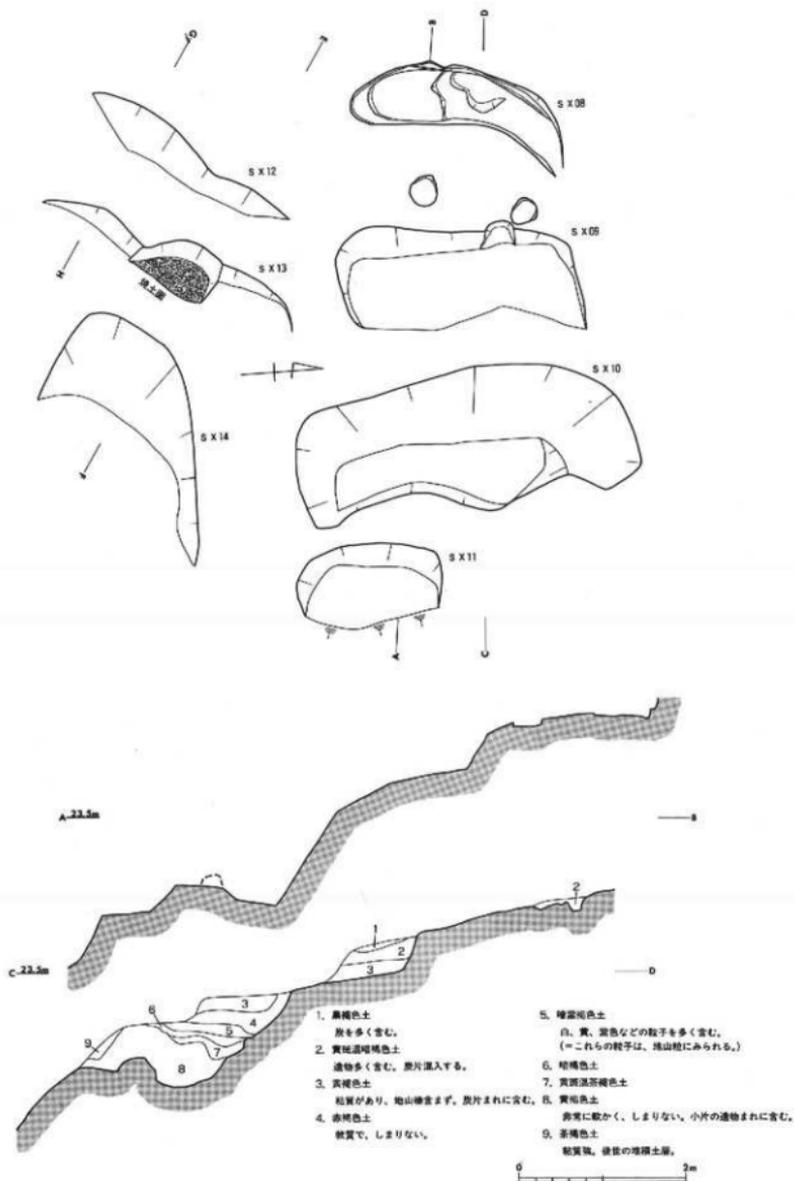
S X08～S X11は、土層の堆積と土器の出土状況から、S X11と10からまず掘られ、これらが埋まってからS X09が、S X09が埋まった後にS X08が、というように標高の低い方から高い方へと掘り変えられ使用されていったようである。遺構の覆土中からは土器が多く出土しており、特にS X09とS X10・11にはこれらに伴うと思われる土器溜まりを検出している。

最も斜面側で検出したS X08は、非常に浅く小規模な溝状遺構で、平面形は緩やかな弧状を呈する。一端は開口し、規模は長さ2.7m幅0.5～0.7mである。床面には小さな凹凸があり、最も深いところでも掘り込み面からは深さ20cmと非常に浅い。溝の底部や覆土中からは土器の細片が出土しているが、器種や時期を判別出来得るものは無かった。またS X08の東側に直径40cm深さ20cmのピットを3個検出しており、掘り込み面や覆土が一致することからS X08に伴う可能性が高いが、性格は不明である。

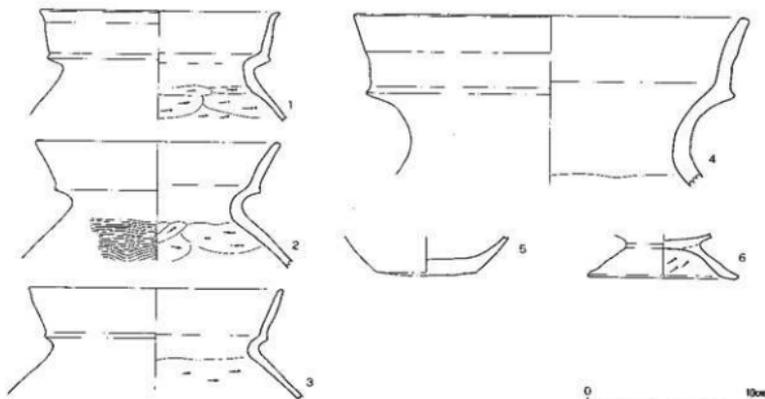
S X09は、S X08の下層、S X10の埋土上層で検出した遺構で、谷側の立ち上がりは流失し全形は不明である。地山面に掘り込まれた3.0×1.1mの方形の掘り方を検出した。平坦な床面は標高約23.5mで東側へ向かって緩く傾斜している。またS X10の埋土の上には土器溜まりが検出さ



第46図 塩津山遺跡 S X12～14エレベーション図 (S=1/60)



第47回 塩津山道跡 S X 08~S X 14実測図 (S=1/60)



第48図 塩津山遺跡 SX09出土遺物実測図(S=1/3)

れており、少なくとも平坦面は土器溜まりが検出された範囲まではっていたものと見られる。

SX10は不正形な性格不明の遺構で、断面がU字状を呈し、平らな部分を持たない。規模は約4.2m×1.7m深さ1mである。内部には軟らかく締まりの無い軟質の土が数層堆積しており、底から10数cm浮いた状態で、人頭大の円礫が4個出土しているが、整然と配置された痕跡は認められない。遺物は細片が出土しているが種類や時期等の判別はし難い。

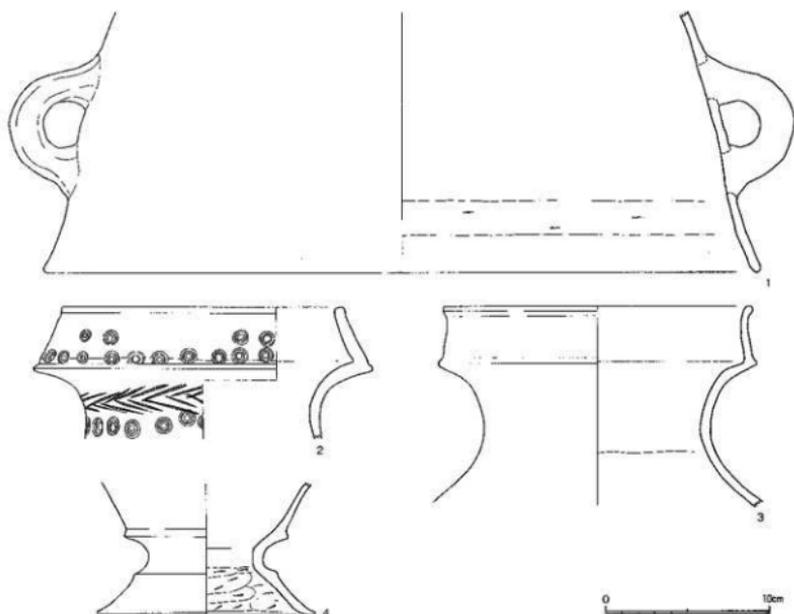
SX12-14は、SX08-11の南側に接して検出した遺構群で、これらにも前後関係が認められる。SX14が先立ち、これを埋めてSX12・13が掘られている。

SX09出土遺物 (第48図)

1-3は壺である。1は口縁端を外側につまみ出したようなアクセントを有する個体で、口径15cmを測る。外面はヨコナデで、文様は認められない。内面は頸部のやや下がった位置から削りが認められる。2は外面肩部に幅広の工具による平行文・波状文が施されたもので、器壁はやや厚く口縁端は単純におさまる。3は文様の見られない壺で、内面は頸部以下ヘラケズリである。口縁部は薄く、直線的である。4は壺の口縁部-頸部である。口縁部は厚く外面に文様は認められない。5は底部で直径5.2cmの正立する平底を呈する。6は脚部で、非常に薄い器壁を呈し、内面はヘラ削りである。時期は弥生時代終末期、塩津5期のものと思われる。

SX10、11付近出土遺物 (第49図)

1は甎で小片から図上に復元した。大きく開いた底部で、縦方向に把手が2カ所に付く。調整は外面が縦方向のハケメの後、ヨコナデで、内面は端部を除いて横方向のヘラケズリである。2は外面が加飾された壺で口縁部は内傾する。ヨコナデの後に施された文様は、竹管状の工具による二重円のスタンプ文と板状工具を用いた羽状文の二種類が見られる。口縁部の文様は上下二段に施されており、連続して一周する下段のスタンプ文に対して、上段は二個を1セットにして間隔を空けて施文されている。3は無文の壺で、口縁端は膨らみを有する。4はやや小型の鼓形器台で、上端

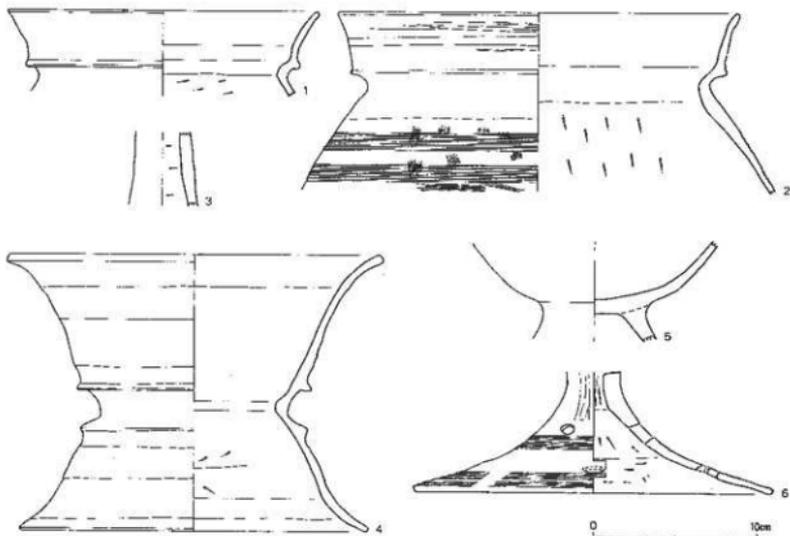


第49図 塩津山遺跡 SX10、11付近出土遺物実測図 (S=1/3)

を欠き、脚部内面がヘラケズリ調整である以外は内外面ヨコナデ調整である。筒部内面には上台部と下台部とは区別される垂直な幅約2cmの帯状の部分有している。これらの時期は、概ね弥生時代終末期、塩津5期と考えられる。

SX14出土遺物 (第50図)

1、2は甕である。1は口径18.8cmのヨコナデによるもので、口縁端がやや厚く丸みを帯びており、段も明瞭に突出している。2は薄く外反する口縁部を有する甕で、口径24.6cmを測る。口縁部外面はヨコナデに先だって施文された櫛状工具による平行沈線文が薄く観察でき、体部には細かな単位の花ケ目の後に平行沈線文が施されている。内面は頸部以下縦か斜め方向のヘラケズリである。3は高坏の脚部片で、内面はヘラケズリ調整が施されているが外面は不明瞭である。4は鼓形器台で、器高21.0cm口径22.6cm底径11.4cmを測る。調整は外面がヨコナデ、内面は上半がヨコナデ、下半がヘラケズリである。5は低脚高坏である。6は坏部を欠くが、高坏の脚部と考えられる。現存部の上端は接合が剝離したような状態であり、坏部との接合痕であろう。脚端は大きく広がっており底径は約21.8cmで、2段に円形の透かしが穿たれている。透かしは上段は3方向に穿たれているが、下段は方向は不明である。また8~10本を一単位とする平行沈線文が3段に施文されている。調整は外面の一部に縦方向のヘラミガキが認められ、内面はほとんどがヘラケズリである。このよう



第50図 塩津山遺跡 S X 14出土遺物実測図 (S=1/3)

に加飾される高坏は弥生時代後期～古墳時代前期の在地の土器には稀少である。

S X 15 (第51図)

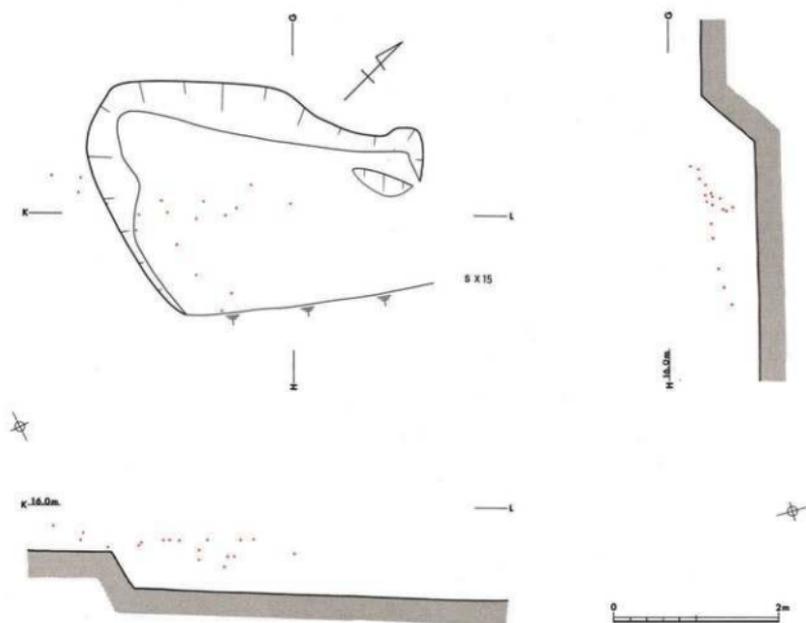
調査区の東端、標高16mで検出した加工段状を呈する遺構である。遺構の性格は不明である。この周辺は大きく後世の攪乱を受けているが、竪穴住居跡 (S I 04・S I 05) を検出していたり、攪乱土中からも多数の土器片が出土していることから本来何らかの遺構が存在していた可能性が非常に高い。

S X 15は方形の掘り込みで3.5m×2.2mの平坦面を削り出している。床面からは遺物は出土していないが、約20cm浮いた位置で土器の細片が出土している。

(4)遺構外出土遺物について (第52図)

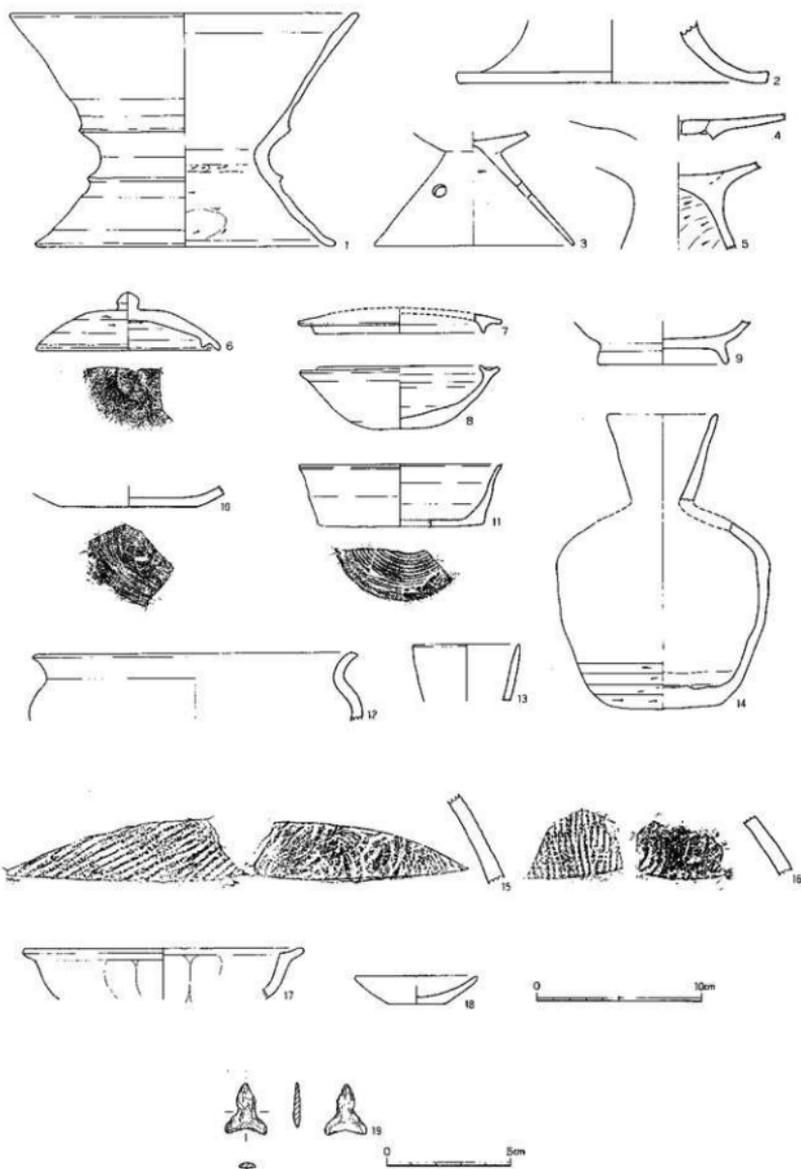
塩津山遺跡では、遺構に伴わない遺物が出土している。土器は後世の攪乱によって細片に壊されているものがほとんどである。これらの時期は、検出遺構の主たる年代である弥生時代末のものを中心とするが、古墳時代後期から奈良・平安期の須恵器も散見できる。他に中世のカワラケや陶磁器も見られ、これらの時期についても平野に近い丘陵の裾部であるこの土地は開発され、人々に利用されていたものと思われる。

1～5は弥生時代終末期の土器で、1は鼓形器台で、器高14.2cmを測り、上半部が下半分に比べてやや大きいプロポーションの個体である。2は小片のため全体は不明であるが、器台等の脚部



第51図 塩津山遺跡 S X15実測図 (S=1/60)

とみられる。3独特の赤褐色を呈する器台で、円錐形の薄い脚部の中段には3方向に円形の透かしが穿たれている。調整は風化により不明瞭であるが、脚部内面はヘラケズリによる砂粒の移動が観察できる。このような器形の器台は在地の土器には一般的な形ではなく、庄内式期に多く見られる器台と見られ、胎土も在地の個体とは異なり外部からもたらされたものであろう。5は高坏で、接合部は円盤充填によるものであろう。脚部径が最小でも7.5cmと太く、低脚高坏とも考えられる。6~16は須恵器である。6は口径10.8cmで宝珠状つまみが付く坏蓋で、外面の上半1/2はヘラケズリである。口縁部にはかえりがつき、内面には「井」の字状のヘラ記号が刻まれている。7はかえりのつく坏蓋である。8は坏身で、底部はヘラ起こしの痕跡がナゲ消されている。9は高台付坏で、底部はヨコナデ調整である。10、11は底部回転糸切り痕を残す坏である。12は頸部から口縁部が「く」の字状を呈する壺である。口縁部は外反して立ち上がる。現存部ではすべてヨコナデ仕上げである。13は壺の口縁部であろう。14は直口壺で、復元高18cmを測る。外面底部には回転ヘラケズリである。15、16は大甕の小片で、内外面ともタタキ痕が明瞭に残る。17は14世紀後半~15世紀の中国製の青磁の盤である。内外面には幅広の連弁が施されている。軸は透明感のある緑灰色を呈し、胎土は緻密な灰色である。18は中世土師器皿で、直径3.4cmの底部には回転糸切りの痕跡がわずかに観察できる。石器は石鏃が1点出土している。19は凝灰岩製の無頸の石鏃で、長さ1.8cm厚さ0.3cmを測る。



第52図 塩津山遺跡 遺構外出土遺物実測図 (S=1/3、石器のみ1/2)

第 3 章 塩津山遺跡のまとめ

以上、調査の結果について述べたが、ここで塩津山遺跡の成果について、若干まとめてみることにする。

検出した遺構は、主に弥生時代後期後半～終末期のものであり、柳・竹ヶ崎遺跡と合わせて弥生時代後期～終末期の大集落跡である塩津丘陵遺跡群を構成している。これらの遺構の時期を詳細に見てみると、塩津 2 期に属する遺構は S 104、塩津 4 期に属する遺構は S K01 とわずかであり、その他の大多数の遺構が弥生時代最終末期の塩津 5 期に属する遺構ということになる。このように、弥生時代後期後半～終末期のほとんどの時期を通じて遺構・遺物は検出されているが、各時期には遺構数の粗密が認められる。遺構数の粗密は、柳遺跡や竹ヶ崎遺跡においても見られることで、塩津丘陵遺跡群の集落規模の拡大・縮小や、集落内でのそれぞれの立地ごとの使い分けというようなことに起因するものと考えられよう。塩津山遺跡では、弥生時代終末期、塩津 5 期の遺構・遺物が最も多く、塩津丘陵遺跡群内で、この時期に集落がより東へ集中していったと考えられる。そして、塩津山遺跡では古墳時代前期前半の土器は出土しておらず、集落は、移動あるいは廃絶されたものと見られる。つまり塩津山 1 号墳を築いた頃には、安来平野側から見て塩津山 1 号墳の東側斜面からは、住居は姿を消していたことになる。

また、東側調査区で検出した溝状、あるいは性格不明の遺構群のほとんどは、弥生時代終末期、塩津 5 期に属する遺構であると考えられるが、弥生時代後期後半と、塩津山遺跡群の集落ではやや古い様相の土器も点在することから、古い遺構を壊して終末期、塩津 5 期に遺構が掘り込まれ、廃絶されたものと考えられる。S D03 等から出土した吉備地方の土器⁽²⁷⁾は、弥生時代後期後半、塩津 2～3 期に併行すると考えられるもので、墳墓祭祀と関係のある土器といわれており、これらを用いた墳墓か墳墓関連の遺構が、古い時期に存在し、それを壊して新しい遺構を掘り込んだか、周辺に存在し混入した可能性が考えられる。なお、発掘調査では、尾根筋に立地する塩津山古墳群以外では明瞭な墳墓遺構は確認していない。

遺物については、集落跡の時期である弥生時代後期後半～終末期のもの、古墳時代後期～中世のもの、近世以降の陶磁器類が出土しているが、遺構に伴っているものは弥生時代のもので、土器、石器、鉄器が出土している。土器は、在地の組成に見られるものがほとんどで、稀に先述の吉備系や在地の土器では一般的でない土器といった外来的要素の強いものが含まれている。柳遺跡・竹ヶ崎遺跡においても弥生時代終末期併行の畿内系の土器群が確認されており、塩津山遺跡を含めてこの集落が、外部に向けて開けた集落であったことが分かる。

また、これまで荒島墳墓群の各墳墓においては、出土例が知られていなかった吉備系の土器が出土していることより、四隅突出型墳墓を築造した勢力が、多少なりとも吉備地方の勢力と結び付いていた可能性が強くなった。

他に、塩津山遺跡では弥生時代終末期の加工段状遺構から、無頸式の鉄鏃が 2 点出土している。鳥根県内における集落遺跡での鉄鏃の出土例は、安来市岩屋口北遺跡⁽²⁸⁾では弥生時代終末期の竪穴住居跡から、安来市門生黒谷山遺跡⁽²⁹⁾では弥生時代後期初頭の竪穴住居跡などからと、頼原町森Ⅱ遺跡、森Ⅲ遺跡⁽³⁰⁾の弥生時代後期初頭の竪穴住居跡と弥生時代終末期の集落を囲む周溝から

それぞれ出土しており、柳遺跡、竹ヶ崎遺跡でも出土している。これらの遺跡は、弥生時代後期初頭か終末期の集落跡であり、鉄族が集落に持ち込まれ、保有・使用されていたことが分かる。

以上、塩津山遺跡で得られた成果について断片的ではあるがまとめた。

塩津山遺跡注

- (1) 鳥根県教育委員会「塩津山古墳群—一般国道9号(安米道路)予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅳ」1997
- (2) これらの土器は、弥生時代後期の吉備地方で発生し発達する特殊器台・特殊壺の胎土と共通する点が多く、特殊器台の墳墓祭祀と関係があると想定できるが、いわゆる「特殊土器」の一群とは区別されていることが多い土器である(a)。しかし鳥根県では弥生時代後期後半の墳墓で出土例が知られており、「特殊土器」と共出する場合(d)としない場合(b、c)がある。
 - (a) 宇垣匡雅「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第27号4 1981
 - (b) 近藤正・前島己基「鳥根県松江市の場土壙墓」『考古学雑誌』57巻4号 日本考古学協会刊 1972
 - (c) 山本 清「山陰の鼓形器台と当代の墓制」『人類史叢書8 出雲の古代文化』六興出版
 - (d) 伯太町教育委員会「伯太町埋蔵文化財調査報告書第3集 伯太町安田地内試掘報告書」平成4年
- (3) 鳥根県教育委員会「岩屋口北遺跡・白コクリ遺跡(F区)—一般国道9号(安米道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13」1997
- (4) 調査担当の鳥根県埋蔵文化財調査センター池淵俊一氏にご教示をいただいた(調査報告書平成9年度刊行予定)。
- (5) 調査担当の頓原町教育委員会山崎順子氏にご教示をいただいた。

塩津山遺跡遺物観察表

観測番号	図版番号	器種	法量 (cm)	胎土・焼成・色調	調形、文様、形装の特徴	備考
9図1	19	甕	口径17.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	外面煤付着
9図2	19	甕	口径19.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ、ハケ目	外面煤付着
9図3	19	甕	口径14.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 風化の為不明瞭、ヨコナデ 外面 ヨコナデ	外面煤付着
9図4	19	甕	口径15.6	胎土 やや粗、石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ 形態 単純口縁	
9図5	18	甕	口径16.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 明赤褐色	内面 ヨコナデ、縦方向ナデ (シボリメあり)、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
9図6	19	甕	口径24.8	胎土 やや粗、石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、縦方向ナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
9図7	19	甕等の底葺	底径11.4-12	胎土 やや粗、石英・長石含む 焼成 やや不真 色調 明褐色、断面黒色	摩滅しており不明瞭 内面 ヘラケズリ後ユビオサエ 外面 ヨコナデか	
9図8	18	低脚杯	口径18.2 高さ約5.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 明褐色	風化の為不明瞭 内面 ヨコナデか 外面 ヨコナデか	
9図9	18	低脚杯	口径21.6 高さ約5.4	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	風化の為不明瞭 内面 ヨコナデか 外面 ヨコナデか	
9図10	18	低脚杯	口径11.8 底径4.4 高さ4.5	胎土 細密 焼成 良好 色調 淡黄褐色外面黒面あり	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
9図11	18	脚部 (器台か)		胎土 やや粗、石英・長石含む 焼成 良好 色調 橙褐色	内面 ヘラケズリ後ナデ 外面 ヨコナデか	
9図12	18	脚部 (器台か)	底径19.2	胎土 やや粗、石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 シボリメ残す。ヘラケズリ、ヨコナデ 外面 ヨコナデか	
9図13	18	高杯		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 シボリメ残る。ヘラケズリ 外面 ヨコナデか	
9図14	18	高杯		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、シボリメ残す。ヘラケズリ後ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ハケ目後ヨコナデ	
9図15	19	高杯	底径21.8	胎土 やや粗密 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヘラケズリ、ヨコナデ 外面 ハケ目後ヨコナデ	
9図16	19	石製片	現存長5.4			
9図17	18	鉄鏝	長さ3.3 幅 2.2 厚さ0.3-0.4			
9図18	18	鉄鏝	額元型長4.0 幅 2.5 厚さ 0.4			
10図	19	高杯	口径22.4	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 明褐色	内面 ヨコナデ、ヘラミダキ 器台部門板光面、中央に小孔 外面 風化 (ヨコナデか)	
13図1	20	甕	口径24.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、縦方向ナデ、ヘラケズリ 外面 風化の為不明瞭 ヨコナデか	

標記番号	図版番号	形 状	法 量 (cm)	胎土・焼成・色調	調整、文様、形造の特徴	備 考
13図2	20	莢	口径13.0	胎土 良好 色調 淡黄色	外面 ヨコナデ	
13図3	20	莢等の底部	底径11.2	胎土 織、大粒の石英・長石を含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヘラケズリ 外面 風化の為不明	
13図4	20	瓶形器台	底径13.0 筒径9.8	やや粗、石英・長石を含む 焼成 良好 色調 橙褐色	風化の為調整不明瞭	
16図1	20	莢	口径18.0	胎土 長石・石英を含む 焼成 やや不良 色調 淡黄褐色、断面暗褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデか 文様 外面口縁部に縦門線文、頸部に波状文	
16図2	20	瓶形器台		胎土 やや粗、石英・長石を含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヘラケズリか 外面 ヨコナデか 文様 外面に縦門線文の後ナゲ消し	
19図1	20	莢	口径17.4	胎土 石英・長石を含む 焼成 やや不良 色調 淡黄褐色、外面黒縁あり	内面 風化により不明瞭 外面 ヨコナデか	
19図2	20	莢	口径17.2	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 橙褐色、外面黒縁あり	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
19図3	21	莢	口径17.6 胴部最大径24.5	胎土 やや粗、石英・長石を含む 焼成 良好 色調 橙色、外面黒縁あり	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ、縦ハケ目 文様 外面胴部に平行波線文あり	
19図4	21	台付莢等の胴部		胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
19図5	21	瓶形器台	底径18.0 筒径9.7	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
22図1	21	莢	口径12.4	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリか 外面 ヨコナデ	
22図2	21	莢	口径15.0	胎土 長石・石英を含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	外面黒付着
22図3	21	莢	口径14.6	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
22図4	21	莢	口径15.0	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	風化の為調整不明瞭 内外面ともヨコナデか	
22図5	21	莢	口径16.0	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	風化の為調整不明瞭 内外面ともヨコナデか	
22図6	22	莢	口径17.8	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	外面黒付着
22図7	22	莢	口径14.7	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ、横方向ハケ目 文様 外面胴部に平行波線文	外面黒付着
22図8	21	莢	口径17.6	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ、縦方向ハケ目	
22図9	21	莢	口径17.0	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色、外面一部黒縁	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
22図10	22	莢	口径21.3	胎土 石英・長石を含む 焼成 良好 色調 内面黒灰色外面淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	

標本番号	図版番号	器種	法量 (cm)	胎土・焼成・色調	調整、文様、形態の特徴	備考
22図11	21	壺	口径17.3	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
22図12	22	壺	11径16.2 胴部最大径35.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色、外面一部黒濁	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ、縦方向及び縦方向のハケ目 文様 外面胴部に良粒散線による羽状文、平行沈線文	
22図13	21	壺や甕等の底部	平底径8.5	胎土 やや粗、石英・長石粒の他に赤色粘土粒を含む 焼成 良好 色調 棕褐色	不明瞭（ヘラケズリか） 外面 ナデ、平底面に草木類の圧痕あり	
22図14	—	仏脚杯		胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 黄褐色	内面 ヘラケズリ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
22図15	—	仏脚杯	底径6.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	風化の為調整不明瞭 内外面ともヨコナデか	
22図16	—	仏脚杯	底径7.8	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	風化の為調整不明瞭 内外面ともヨコナデか	
22図17	22	壺		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ、縦方向ハケ目、ヨコナデ 文様 胴部外面にC字状のスタンプ文あり。図中央のT字状はヘラ状工具による刺突文	
23図18	—	鏡形器台		胎土 石英含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヘラミガキ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ 文様 外面はヨコナデにより縦四線文をナデ消している。	
23図19	22	すり石状石器	長さ18.8 幅 6.1 厚さ5.5		形態の特徴 石棒状の一端がすり減って、直径2cmの円形の面を形成している。	
23図20	22	版石状石器	長さ 9.3 幅 6.3 厚さ4.4		形態の特徴 楕円形の自然面を残す円盤。端が欠けたようにすり減る。	多孔質の円盤
24図1	23	壺	11径15.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
24図2	23	仏脚杯		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 内面・断面は暗褐色 外面は明赤褐色	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ（脚部は特に強いナデ）	内面煤付着
24図3	23	脚部	底径12.4	胎土 やや粗 焼成 良好 色調 暗黄褐色	内面 ヘラケズリ、ヨコナデ 外面 ヘラミガキ、ヨコナデ	
24図4	23	器か		胎土 石英・長石・金雲母含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ナデ、ヨコナデ、底部指環状 外面 ヨコナデか。 形態 正立不可能な底様式のアクセントあり	
24図5	23	高杯	口径34.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデか 外面 風化の為不明瞭（ヨコナデか） 形態 接合部均等に光潤、中央小孔あり	内面煤付着
24図6	24	鏡形器台か		胎土 石英・長石含む 焼成 不良 色調 茶褐色	風化の為調整不明瞭	
24図7	24	波形器台小	底径18.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 内面黒褐色外面黄褐色	内面 ヘラケズリ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ	

押印番号	図版番号	器 種	注 意 (cm)	胎土・焼成・色調	調整、文様、形態の特徴	備 考
26図8	24	底部		焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデか 形態 底部中央に焼成前穿孔あり。 直径4cmの平底あり。	
31図1	25	底	1径13.6	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 赤褐色	内面 ヘラミダギ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ 文様 外縁口縁部に縦凹線文	
31図2	25	底	口径13.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 褐色	風化により調整不明瞭	
31図3	25	底	口径14.6	胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 黄茶褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 風化のための調整不明瞭	
31図4	25	底	口径12.8	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 風化の不明瞭(ヨコナデか)	
31図5	25	底	1径12.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 灰褐色、黒斑あり	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
31図6	25	壺又は器台の口縁部	口径17.4	胎土 やや粗、石英・長石含む。 黒色粒含む 焼成 良好 色調 褐色、黒斑あり	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ 文様 外縁口縁部に2条の沈線文あり。	
31図7	25	底	口径19.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 内面茶褐色外面淡茶褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ 文様 口縁部外縁に9条の縦凹線文あり	
31図8	25	底	口径19.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡茶褐色、黒斑あり	内面 風化の不明瞭 外面 ヨコナデ、 文様 外縁口縁部に縦凹線文あり	
31図9	25	底	口径22.4	胎土 やや粗、石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
31図10	25	底	口径26.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
31図11	25	底		胎土 粗い。大粒の石英・長石・ 黒炭を含む 焼成 良好 色調 内面黄褐色外面茶褐色	内面 風化の不明瞭 外面 ヨコナデ 文様 外縁唇部に貝殻状縁による刺 突文	
31図12	25	底	1径18.8	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 風化の不明瞭、ヨコナデか 文様 外縁口縁部4条の縦凹線文	
31図13	25	底	口径15.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
31図14	25	底	1径13.4	胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 褐色	内面 ヨコナデか 外面 ヨコナデか	
31図15	25	壺又は器台の口縁部 (古橋派)	口径17.6	胎土 チョコレット色を呈する緻 密な胎土に石英・金赤母粒・黒色 粒を含む 焼成 良好 色調 黄茶褐色	内面 ヨコナデか 外面 ヨコナデか 文様 外縁口縁部に5条の凹線文	
31図16	25	壺又は器台の口縁部 (古橋派)	1径15.8	胎土 チョコレット色を呈する緻 密な胎土に石英・金赤母粒・黒色 粒を含む 焼成 良好 色調 黄茶褐色	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ 文様 外縁口縁部に4条の凹線文	内面に赤色顔 料塗布
31図17	24	底部		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色外面黒斑あり	内面 縦方向ヘラケズリ、タズリ状 指すデ(一部) 外面 風化の不明瞭 形態 直径4-4.3cmの正立する平 底を有する	

標記番号	加蔵番号	器 種	法 量 (cm)	胎土・焼成・色調	調整、文様、彫刻の特徴	備 考
31図18	—	底部		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 内面黄褐色外面濃茶褐色 外面一部黒道	内面 ヘラケズリ 外面 ナデ又はヘラミガキか 形態 直径5cmの正立可能な平底を有する	
31図19	—	底部		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヘラケズリ 外面 風化の為調整不明瞭 形態 直径 5cmの正立する平底を有する	
31図20	24	鼓形器台	底径17.8	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヘラケズリ、ヨコナデ 外面 一程度良いヨコナデ、大部分は風化の為不明瞭	
31図21	26	鼓形器台	底径19.6	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	風化の為調整不明瞭 外面 ヨコナデか	
31図22	25	器台か		胎土 やや粗、石英・長石多く含む 焼成 良好 色調 茶褐色	内面 風化の為調整不明瞭 外面 ヨコナデか	
31図23	—	瓶	口径15.8	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ナデか 外面 ヨコナデか 形態 断面三角形の突起が顕る	
32図24	26	低脚杯	口径12.0 底径6.2 高さ5.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色一部黒道	内面 ヨコナデか 外面 ヨコナデ	
32図25	26	低脚杯	底径9.4	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 僅いナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
32図26	26	低脚杯	底径9.7	胎土 やや緻密、石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
32図27	27	低脚杯		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 底部のみヘラミガキか 外面 風化の為調整不明	
32図28	26	低脚杯	口径9.0 底径4.5 高さ3.5	色調 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色外面黒道あり	内面 ヘラミガキ 外面 ヘラミガキ、ヨコナデ、ナデ	
32図29	27	高杯		色調 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 淡黄褐色	磨減しており不明	
32図30	26	低脚杯	底径9.5	胎土 やや密、石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ 形態 内面に貫通しない小孔あり	
32図31	26	脚部	底径10.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヘラケズリ、一部ヨコナデ 外面 ヨコナデか	
32図32	26	脚部	底径12.0	胎土 石英・長石の他に赤色粘土を含む 焼成 良好 色調 褐色断面は黒色	内面 ヘラケズリの後ヨコナデ 外面 ヨコナデ、縦方向のヨコナデ 形態 内面に爪型状の突起	
32図33	27	脚部鉢		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデか 外面 ヨコナデ、縦方向ハケ目	
32図34	26	脚部鉢	底径14.6	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ、縦方向ハケ目	
32図35	26	高杯	復元底径9.3	胎土 緻密、石英・長石含む 焼成 良好 色調 赤褐色	内面 ヘラケズリ、ヨコナデ 外面 縦方向ヘラミガキ、ヨコナデ	
32図36	26	高杯		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヘラケズリ 外面 風化の為不明瞭 形態 杯部接合部は円板状、中央に小孔あり	

神門番号	図版番号	器 種	法 量 (cm)	胎土・焼成・色調	調査、文様、形態の特徴	備 考
32図37	27	高坏		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	風化の高調整不明瞭 形態 坏部接合部中央に小孔あり。	
32図38	27	高坏		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	風化の高調整不明瞭	
32図39	27	高坏		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	風化の高調整不明瞭	
34図	27	甕	口径15.9	胎土 やや灰、石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
36図1	27	甕	口径15.4	胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 摩滅のため不明瞭。口縁部は ヨコナデ	
36図2	27	甕	口径26.7	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
36図3	28	甕		胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、縦方向のナデ 外面 ヨコナデ	
36図4	28	甕坏鉢		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ、縦方向ハケ目	
36図5	28	高坏	底径14.6	胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 黄褐色	内面 ヘラケズリ、ヨコナデ、ハケ 目 外面 縦方向ヘラミギキカ。ヨコナ デ	
36図6	—	甕	口径10.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 内面淡茶褐色外面黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ 形態 実態が異なる	
36図7	—	鼓形器台		胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 淡黄褐色	内面 ヘラケズリ 外面 摩滅のため不明瞭。ヨコナ デ	
36図8	28	鼓形器台	口径20.6 底径19.6 高さ13.2	胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 明黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ、ヨコ ナデ 外面 ヨコナデ	
36図9	28	鼓形器台	口径22.6 底径19.4 高さ10.0	胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 茶褐色、一部黒斑あり	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ、ヨコ ナデ 外面 ヨコナデ	
38図1	—	鼓形器台	口径21.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
38図2	—	鼓形器台	底径19.8	胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	内面に袋状の 付着物あり
38図3	—	甕	口径16.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ、ハナ目 文様 外面口縁部に細凹線文をナデ 滑している。	
40図1	—	鼓形器台		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	風化の高調整不明	
40図2	24	低脚坏	口径13.3 器高2.0 器底4.6	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 風化の色不明瞭 外面 ヨコナデ	
40図3	24	高坏	口径27.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	風化の高調整不明瞭 形態 坏部接合部内面に小孔あり	
48図	28	原形器 人更片		胎土 磁石、砂粒含む 焼成 良好 色調 灰色	内面 同心円状のタキキ痕 外面 平行タキキ痕	

神田番号	図版番号	器種	法量 (cm)	胎土・焼成・色調	溝彫、文様、彫刻の特徴	備考
48図1	29	甕	口径14.5	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 外側明褐色内側黒色(黒底)	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
48図2	29	甕	口径14.8	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ 文様 外面肩部に波状文	
48図3	29	甕	口径15.4	胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
48図4	29	甕	口径23.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色内側黒底あり	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
48図5	29	甕等の底部		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	風化著しく調査不明瞭 内面 ヘラケズリか 形跡 正立可能な直径5.2cmの平面	
48図6	29	仏脚環	底径14.4	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデか	
49図1	29	甕	底径43.6	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヘラケズリ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ 形跡 環状の把手が付く	
49図2	29	壺(加飾)	口径17.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ 文様 外側口縁部から胴部にかけて 支障あり。口縁部同心円のスタ ンプ文、胴部羽状文と同心 円スタンプ文	
49図3	29	壺	口径18.7	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
49図4	29	瓶形器台	底径13.3	胎土 石英・長石含む 焼成 やや不良 色調 明黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
50図1	30	甕	口径18.8	胎土 やや粗、石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
50図2	30	甕	口径24.6	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ、縦方向ハケ目 文様 外面11線部縦線文の後ナデ 消し、外面肩部平行波状文	
50図3	31	高坪		胎土 やや粗、石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
50図4	30	瓶形器台	口径22.6 底径11.4 器高21.0	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
50図5	31	脚環鉢		胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデか	
50図6	-	器台	底径21.8	胎土 やや粗、石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 シボリメ残る。ヘラケズリ、 ヨコナデ 外面 ヘラミガキ、ヨコナデ 文様 円形造かし2段、方向は不明 中段と端部に7条単位×2の 平行波状文	
50図7	31	瓶形器台	口径20.9 底径17.8 器高14.2	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 ヨコナデ	
52図2	-	脚部(器台か)	底径18.7	胎土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 黄褐色	内面 ナデか 外面 焼成が著しく不明	
52図3	31	器台	底径22.2	胎土 破砕、石英・長石小量含む 焼成 良好 色調 赤褐色	内面 ヨコナデ、ヘラケズリ 外面 風化の為不明瞭、ヨコナデか 形跡 脚部中絶に3方向に凹孔あり	

納品番号	図面番号	器 具	法 量 (cm)	粘土・焼成・色調	調整、文様、彫刻の特徴	備 考
52回4		高坏		焼成 良好 色調 淡橙褐色	彫刻 結合部内面光順、中央に小孔	
52回5	32	脚坏鉢		粘土 石英・長石含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 ココナデ、ヘラケズリ 外面 ココナデか	
52回6	32	須恵器 坏蓋	口径10.8 高さ3.5	粘土 緻密、砂粒含む 焼成 良好 色調 灰色	内面 回転ナデ、静止ナデ 外面 回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ	内面天井部にヘラ記号あり
52回7	32	須恵器 坏蓋	口径10.4	粘土 緻密、砂粒含む 焼成 良好 色調 淡灰色	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ	
52回8	32	須恵器 坏身	口径6.9 高さ3.8	粘土 緻密、砂粒含む 焼成 良好 色調 灰色	内面 回転ナデ、静止ナデ 外面 回転ナデ、底はヘラ切り後回転ナデ	
52回9	32	須恵器 坏	口径7.7	粘土 緻密、砂粒含む 焼成 良好 色調 灰色	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ 彫刻 高台付き	
52回10	32	須恵器 坏	口径4.1	粘土 緻密、砂粒含む 焼成 良好 色調 淡灰色	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ、底部回転糸切り	
52回11	32	須恵器 坏	口径12.4 高さ10.2 高さ3.8	粘土 緻密、砂粒含む 焼成 やや不良 色調 淡灰色	内面 回転ナデ、 外面 回転ナデ、底部回転糸切り	
52回12	32	須恵器 壺	口径19.0	粘土 緻密、砂粒含む 焼成 良好 色調 青灰色	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ	
52回13	32	須恵器 壺	口径6.4	粘土 緻密、砂粒含む 焼成 良好 色調 灰色	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ	
52回14	31	須恵器 直口壺	口径6.5 高さ18.0	粘土 緻密、砂粒含む 焼成 良好 色調 青灰色	内面 回転ナデ (ロクロ目が明確に残る) 外面 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
52回15	32	須恵器 大甕片		粘土 緻密、砂粒含む 焼成 良好 色調 内面淡灰色外面淡灰色	内面 同心円状タタキ目 外面 平行タタキ目	
52回16	32	須恵器 大甕片		粘土 緻密、砂粒含む 焼成 良好 色調 青灰色	内面 同心円状タタキ目 外面 平行タタキ目	
52回17	31	青磁 壺	口径16.8	粘土 緻密、栗色の微砂粒含む、 淡灰色の粘土 焼成 良好 色調 釉は透明感のある緑灰色	内面 輪飾、連弁あり (幅 0.5cm) 外面 輪飾、連弁あり (幅 0.5cm)	
52回18	32	かわらけ 皿	口径7.4 高さ3.4 高さ1.7	粘土 緻密、金雲母、石英等の砂粒含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ	
52回19	31	石罫	長さ1.8 幅 0.7 厚さ0.3			

4 竹ヶ崎遺跡の調査

4. 竹ヶ崎遺跡の調査

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査前の状況と経過

調査前の状況

竹ヶ崎遺跡は、周囲を不整馬蹄形に丘陵によって取り囲まれた谷の緩斜面に位置している。東側から南側へ続く尾根上には、巨大四隅突出型墳丘墓2基や前期古墳を含む塩津山墳墓群が連なり、西側の丘陵は柳遺跡が広がっている。これらの遺跡は、位置と環境で記したように各々別途の遺跡とは考えられず、明らかに一連の遺跡群（塩津丘陵遺跡群）を構成している。竹ヶ崎遺跡はこの塩津丘陵遺跡群の中では最も傾斜が緩やかな部分にあたり、集落立地には適しているが、北に広がる谷向きで冬季の風当たりは強い。調査区の北東側には緩斜面が引き続き広がっており、集落がさらに広がっていたことは間違いないだろう。遺跡の西端、柳遺跡との境界付近の谷には現在も湧水があり、飲用水として利用されている。遺跡のすぐ北側に入り込んでいる谷は、弥生時代後期末当時には水面が広がっていたことがわかっており、耕作地から離れた特殊な集落立地であったことがうかがえる。

地形を細かく見ると、尾根谷の凹凸があることがわかる。調査区の西端は柳遺跡との境界線となっている深い谷に面した西向き斜面で、中央部付近は丘陵上の塩津山6号墳の突出部付近から伸びてくる尾根が北に向けて続いている。その東側、つまり塩津山1号墳の西側下方付近は浅い谷状地形を呈し、その谷頭付近となる調査区東端は平坦面が奥深く広がっている。こうした微妙な自然地形は、調査前の観察では後世の削平によって全体が変化の乏しい平坦面に均されてしまい、不明瞭となってしまっていた。この削平面は溝によって区切られており、屋敷地などに利用されていたものと推測されたが、調査でその時期は近世後期、およそ17世紀末～18世紀であることが明らかになっている。調査によって検出された竪穴住居跡などの分布をその日で見ると、均されて変化の少ない地形に見えて、やはり不安定な谷底には作られず、尾根筋に集中しているのがわかる。

一方調査区の東端付近には、弧状に大きく陥没した箇所が多く認められ、果樹などが抜き取られたことが推測された。以上のように、竹ヶ崎遺跡は広い緩斜面を呈しているだけに、後世にかなり擾乱を受けていることが推測された。

調査の経過

竹ヶ崎遺跡は、昭和63年度に実施された安来道路建設に先立つ遺跡の分布調査において発見された。明瞭な遺物の散布などは認められなかったが、集落に最適な地形条件と周囲の遺跡の密度の濃さから考えて、遺跡の存在は疑いないところであった。平成6年度に立木の伐採が行われ、トレンチによる確認調査が実施された。その結果、道路計画予定地のほぼ全域で何がしかの遺構や遺物が検出され、約12,000㎡に及ぶ本調査範囲が設定された。

本調査は翌年の平成7年4月から開始された。4月は、その莫大な表土の掘削で大半を費やし、

人力による本格的な調査が始まったのは4月の下旬となった。調査は東側の標高が高い部分から開始し、当初から加工段04～06にあたって、まずはその大量に出土する弥生土器の取り上げに忙殺されることになった。

道路予定地の全域が調査範囲となっただけに、廃土の処理には難渋した。場内での処理は不可能だったので、柳遺跡との境界の谷に向けて仮設道路を設置し、10トントラックで搬出することにした。そのためにベルトコンベアを長く繋いでなるべく搬出路近くまで運んだ上に重機でまとめて廃土を始末する繰り返しであった。

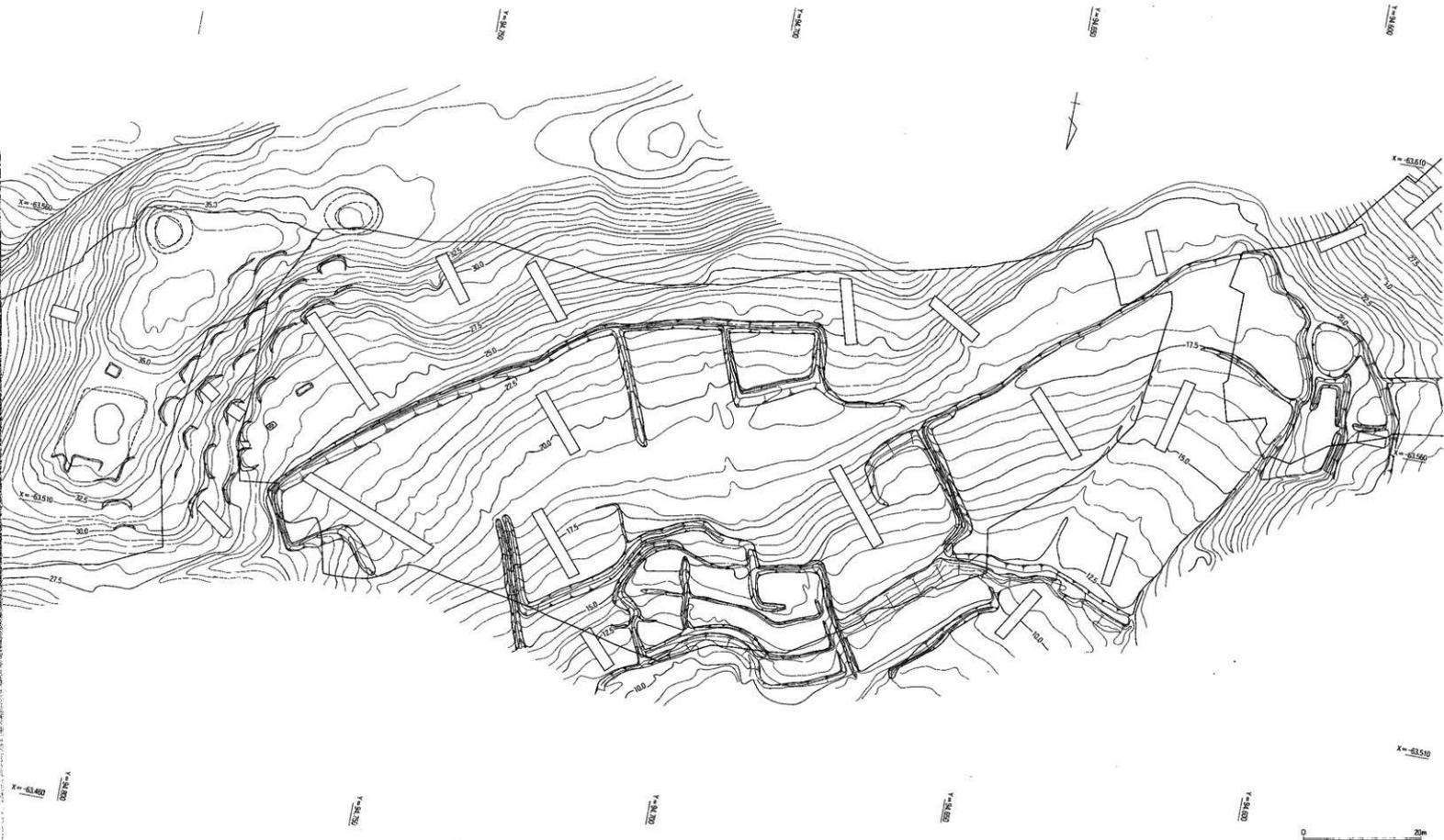
夏から秋にかけては、調査区の中央付近の尾根筋に調査の中心は移っていった。ここではまず、上層で近世の遺構が検出されたため、その処置に追われた。その下層からは竪穴住居跡が複雑に重なりながら検出されはじめ、その切り合い関係の確認と記録化に調査員の神経はすり減らされたが、土の色はわかりにくく十分な記録が残せなかった部分もあり、反省材料となった。

秋以降は、調査区西端付近に調査の中心を移した。ここでも竪穴住居跡や加工段、溝状遺構などが重なり合って検出された。特に冬になると遺構から水分が抜けず、清掃が困難な状況での平面や切り合いの確認を余儀なくされた。南側にすぐ斜面が迫ってきている場所だけに、冬は陽が当たる時間が短く、土の色調も暗いこともあって写真撮影にも難渋した。調査は厳寒の中越年し、翌1月12日に現場作業を終了した。

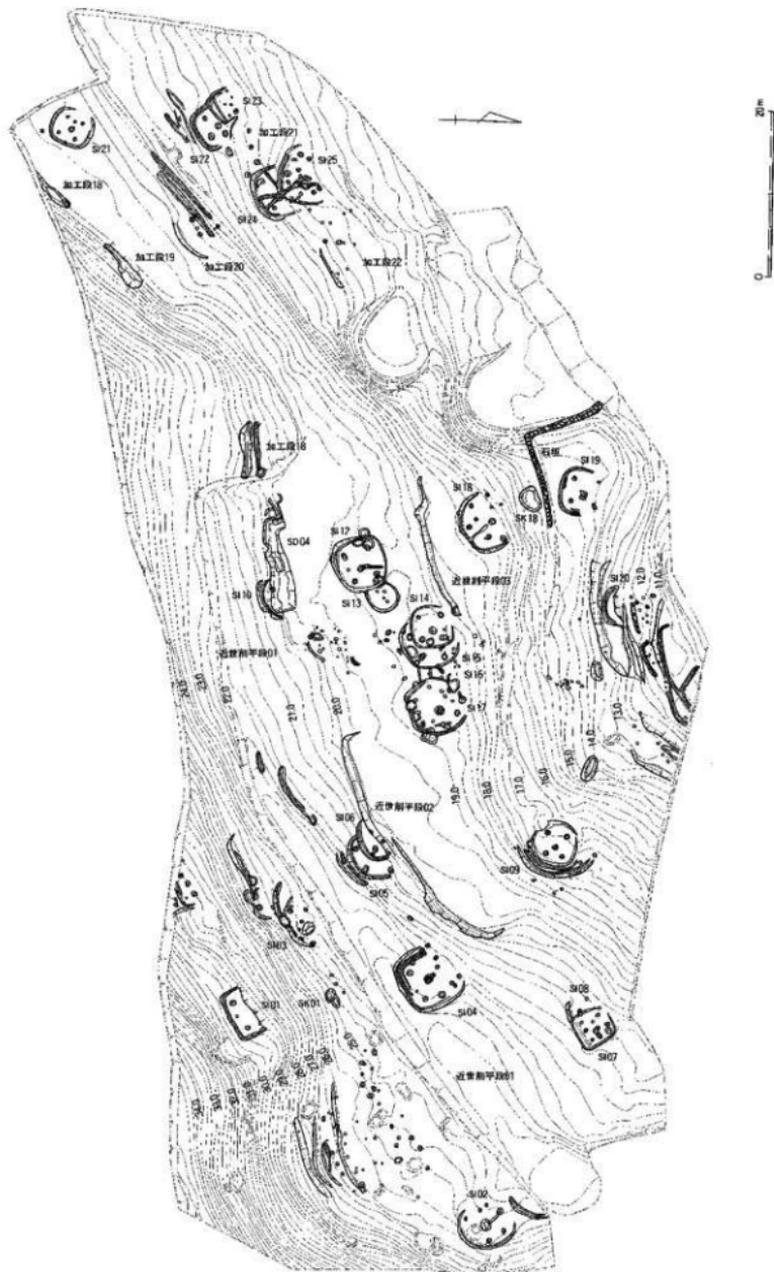
(丹羽野)



竹ヶ崎遺跡調査風景



第53回 竹ノ梅遺跡調査前地形測量図 S=1/600



第54図 竹ヶ崎遺跡調査終了地形測量図・遺構配置図 S=1/600

第2節 地区割りと調査の概要

竹ヶ崎遺跡の調査区は大きく東西に2分割できる。調査区内よりの突出した丘陵部と谷によって緩やかな斜面が分断されるところで国土座標南北(+94607)の線上である。更に便宜上調査区の東側を近世削平段01によって、削平を受けていない上段と削平を受けた下段に分けることとする。以下それぞれを東側調査区上段・東側調査区下段・西側調査区と3分割して記述する事とする。

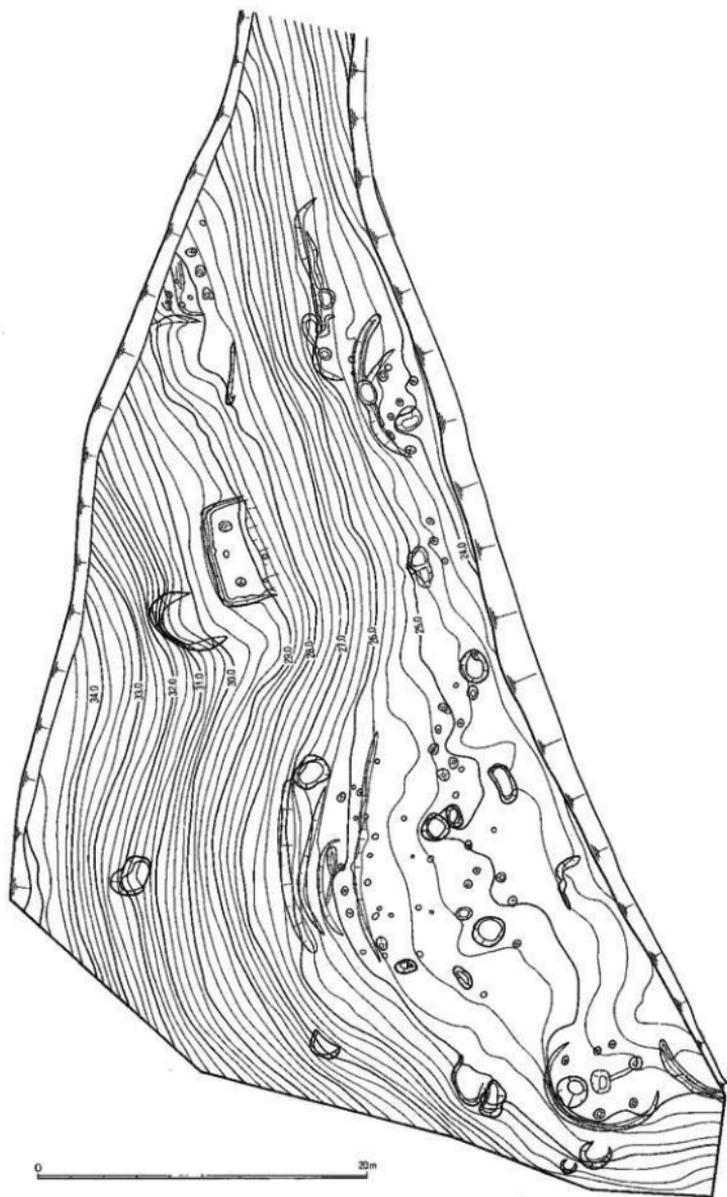
調査の概要

竹ヶ崎遺跡で検出された遺構の大半は弥生後期～終末期のもので、この時期の竪穴住居跡(S1)が25棟、加工段が15段、土坑(SK)が6基、溝状遺構(SD)が2条確認されており、隣接する塩津山遺跡、柳遺跡等と共に大規模集落を形成していたものと思われる。又、遺構外の遺物(主に土器、塩津5期)出土量が多い上に、遺構で2棟のみ検出された塩津1期の遺物が遺構外で多く出土していることを考えれば、この時期の幾つかの遺構は近世の削平等により無くなってしまったものと思われる。

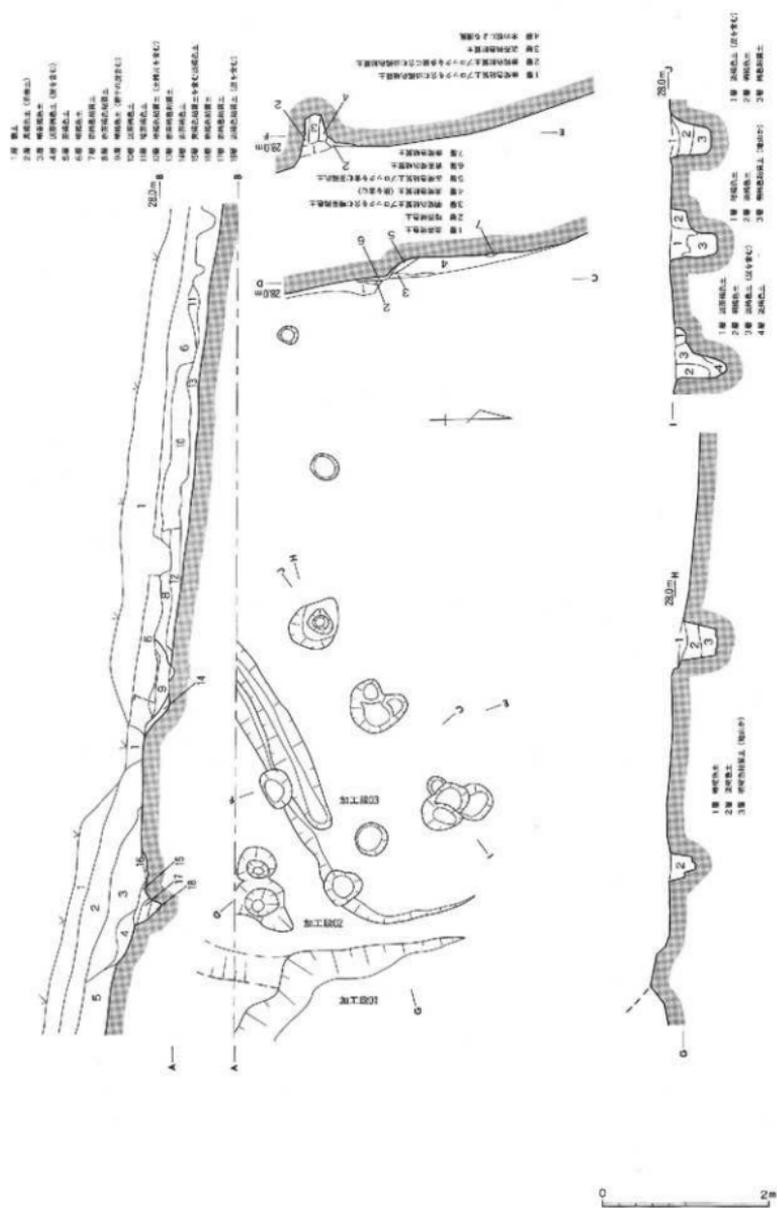
東側調査区上段 緩やかな斜面の最奥部にまで遺構が検出でき、更に後ろの急斜面にも遺構が続いており調査区外まで広がっている。これらの遺構は近世の削平を受けておらず、弥生後期～終末期の遺構と時期不明の建物の建たない柱穴群で構成されている。

東側調査区下段 元々の緩やかな斜面に近世の大規模な削平を受けており、殆どの遺構が浅く残りの悪い状況で検出された。ここでも遺構の大半は弥生後期～終末期で構成されており、一部古墳時代後期頃の土坑や近世の遺構等が検出されている。

西側調査区 西にのびる削平面に削られた、弥生後期～終末期の遺構と古墳時代中期頃の柱穴群、時期は不明だが近世削平段に平行する溝状遺構等により構成されている。遺構外の遺物に平安時代の須恵器なども混じっている。又、調査区外の西側には、泉を挟んで柳遺跡の急な斜面が目前にまで迫っており、両遺跡が切り離せない関係にあるということを改めて思い知らされるのである。



第55図 竹ヶ崎遺跡東側調査区上段遺構配置図 S=1/300



第56図 竹ヶ崎遺跡加工段01・加工段02・加工段03実測図 S=1/60

第2章 調査の結果

第1節 東側調査区上段

竹ヶ崎遺跡の東側調査区上段は、塩津山墳墓群の立地する丘陵に背後三方を囲まれた30m×15mの奥まった緩斜面からなっている。この緩斜面では弥生後期～終末期の加工段が検出されており、大量の遺物（主に土器）が一括出土した。又、西側の急斜面中腹（標高30m付近）には、丘陵に沿うように幅3m程の平坦面が調査区外まで伸びている。この平坦面には弥生後期～終末期の加工段と竪穴住居跡（S101 塩津5期）が北側（造成盛り土）が半分流れた状態で検出され、遺構の規模からこの平坦面が当時幅6m以上は在ったのではないかと思われる。調査区の東側、ちょうど塩津山1号墳の西斜面は近年の果樹園によってかなりの攪乱を受けているが、この斜面からは遺構は検出されおらず、その下に広がる緩斜面に竪穴住居跡（塩津1期）が検出された。それでは以下詳しく東側調査区上段の遺構と遺物を記述していきたい。

加工段01・02・03（第56図）

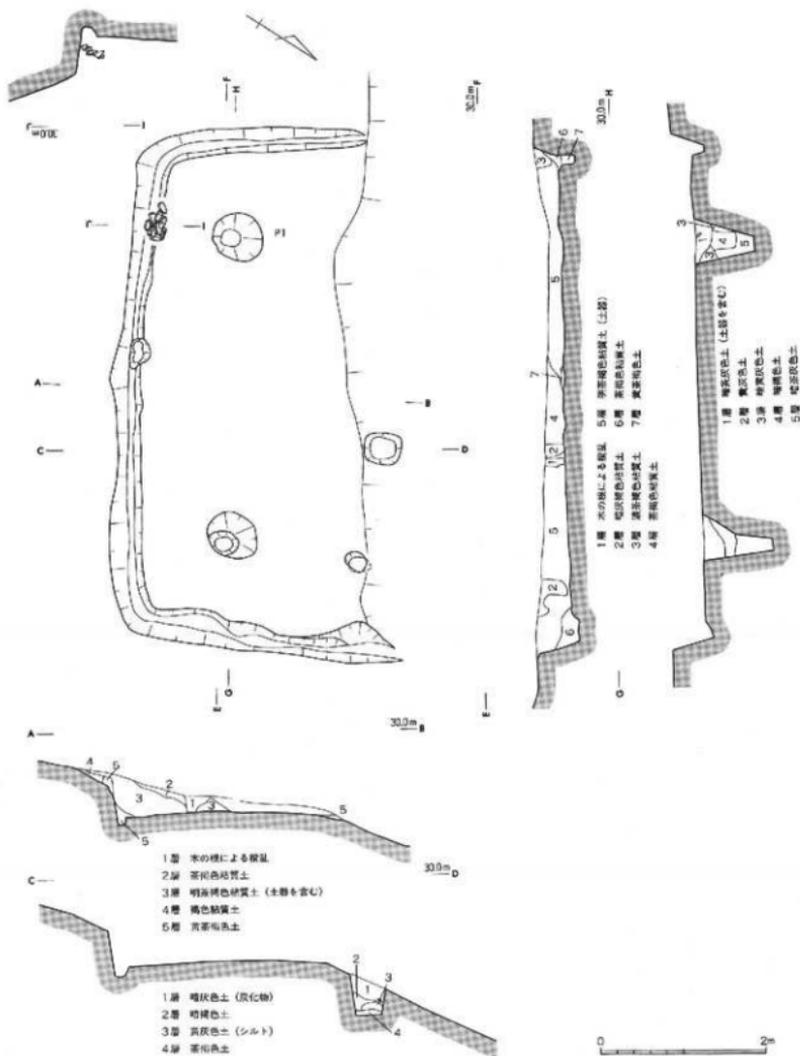
加工段01・02・03は竹ヶ崎遺跡のなかでは最高所、最南端に位置し、標高28m程の急斜面で検出された加工段である。

加工段01 土層断面に表れているように本来加工段02もしくは加工段03の壁に当たるところが切られて段状を呈しているものである。遺物は出土しておらず、遺構の性格も不明である。

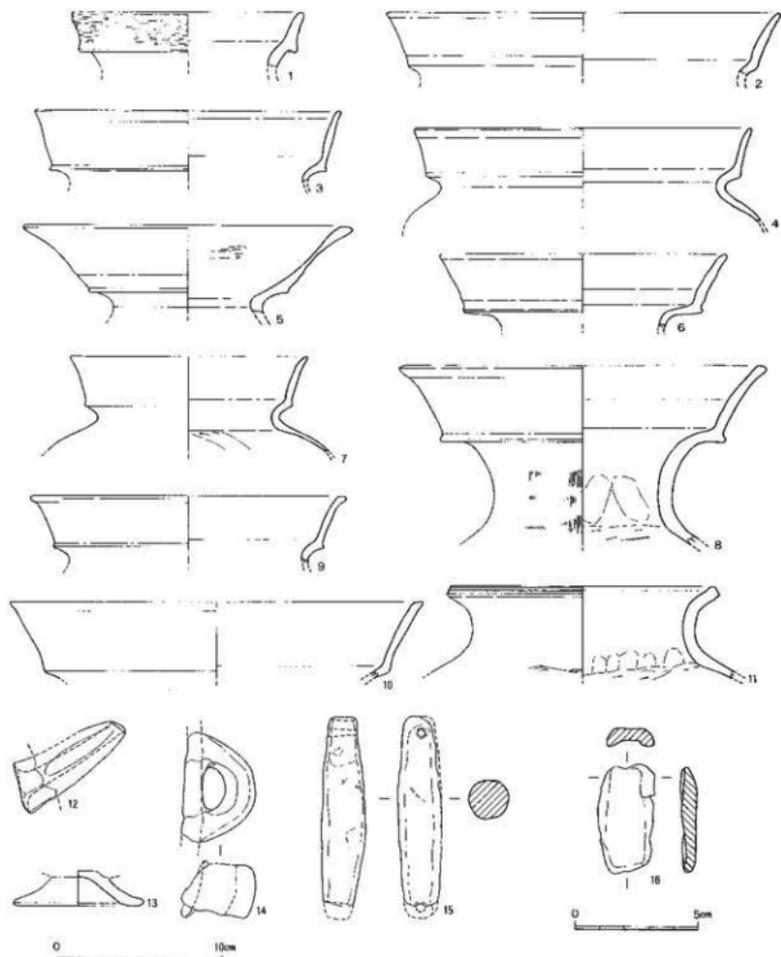
加工段02 遺構の大半が調査区南側の境界線にかかっており、北側を加工段03に切られてかなり残りが悪いが、若干の柱穴を検出できた。床面はほぼ水平である。溝は床面からも土層図からも確認はできなかった。

加工段02出土遺物（第58図） 遺物では残念ながら床面で検出されたものは1点しかなく（第59図）、床面遺物は図化できなかったが、覆土出土遺物を見てみると3点の遺物が図化できた（第58図）。壺1はやや厚手で、短く立ち上がった複合口縁外面には工具は不明だが6条の擬凹線が施されている。色調は淡黄褐色を呈し1mm程の長石や石英粒を含む。なお、この壺は後の2点の遺物と時期を異にするものであり、加工段02廃棄後の流れ込みと考えられる。とすればこの上の丘陵上に塩津1期の遺構が存在する可能性が高い。壺2はやや外側に開いた長く真直ぐな口縁を持ち、端部を意識した調整は見うけられない。色調は表が淡黒色、内面が淡黄褐色を呈し、1mm程の長石粒が目立つ。壺3は薄くシャープに作られており、壺2よりも口縁が立ち上がっている。複合口縁部の稜は水平に向かって突出し、口縁端部はやや外反する。色調は淡茶褐色を呈し1mm程の長石や石英粒を含む。以上のことから、加工段02は弥生時代終末期、塩津5期ぐらいの時期に使われていた可能性が高いが、資料に乏しく断定はできない。

加工段03 加工段02を切り込んで作られている加工段で、北側の約半分は盛土が流れており、西側は調査区の境界に掛かっているために元の遺構の規模は不明である。段の南側に立ち上がる奥壁に沿って幅20～30cmの溝が見られる。床面の柱穴は奥壁に平行して3穴開いており、それぞれに切り



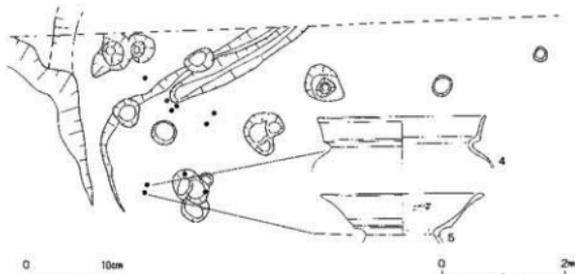
第57図 竹ヶ崎遺跡 S101実測図 S=1/60



第58図 竹ヶ崎遺跡加工段02(1-3)・加工段03(4-5)・S101(6-16)出土遺物実測図 S=1/3(鉄器16はS=1/2)

合いが見られる。土層と併せて見ると、この加工段は少なくとも1度は造り替えられており、建物の建て替えも規模の変更をせずにはほぼ同じ場所で何度か行われたものと思われる。

加工段03出土遺物(第58図) ここから出土した遺物で図化できたのはわずか2点のみであったが、いずれも床面直上の出土だったため遺構の最終廃棄時期は押さえられた。壺4はやや外側に開く長めの複合口縁を持ち、その口縁は先端に向かい先細りしている。色調は淡黄褐色を呈す。鼓形器台5は口径24cmくらいの筒部が縮約されたもので、口縁の中程をかなり薄く作り、端部に向かうにつ



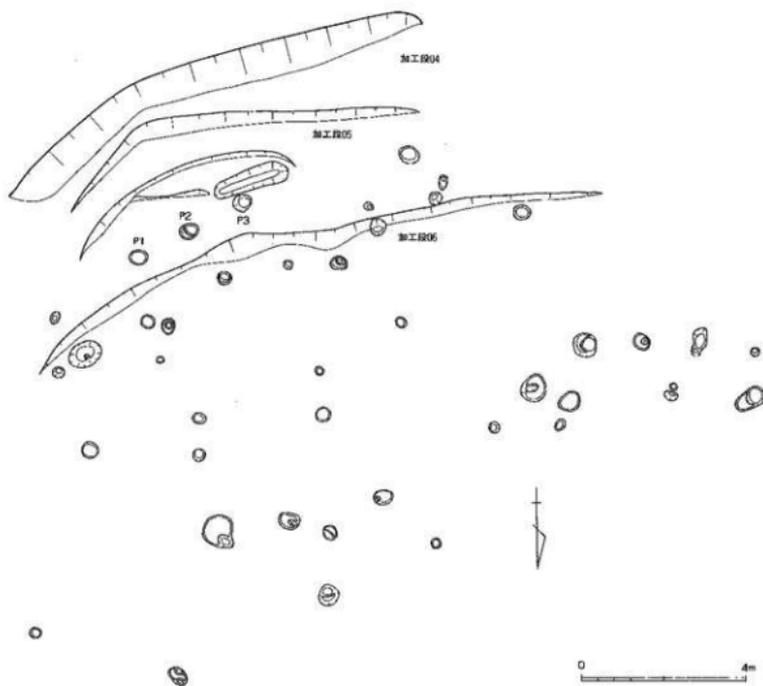
第59図 竹ヶ崎遺跡加工段01・加工段02・加工段03遺物出土状況 S=1/80

れて厚みを増し、上端にやや面を持たせている。内側はヘラケズリの後にヘラ磨きを施したと見られる。色調は淡茶褐色を呈し、1mm程の長石、石英などの砂粒を含む。両遺物からみる限り、加工段03は少なくとも塩津5期の内に廃棄されたものと推測される。

S101 (第57図)

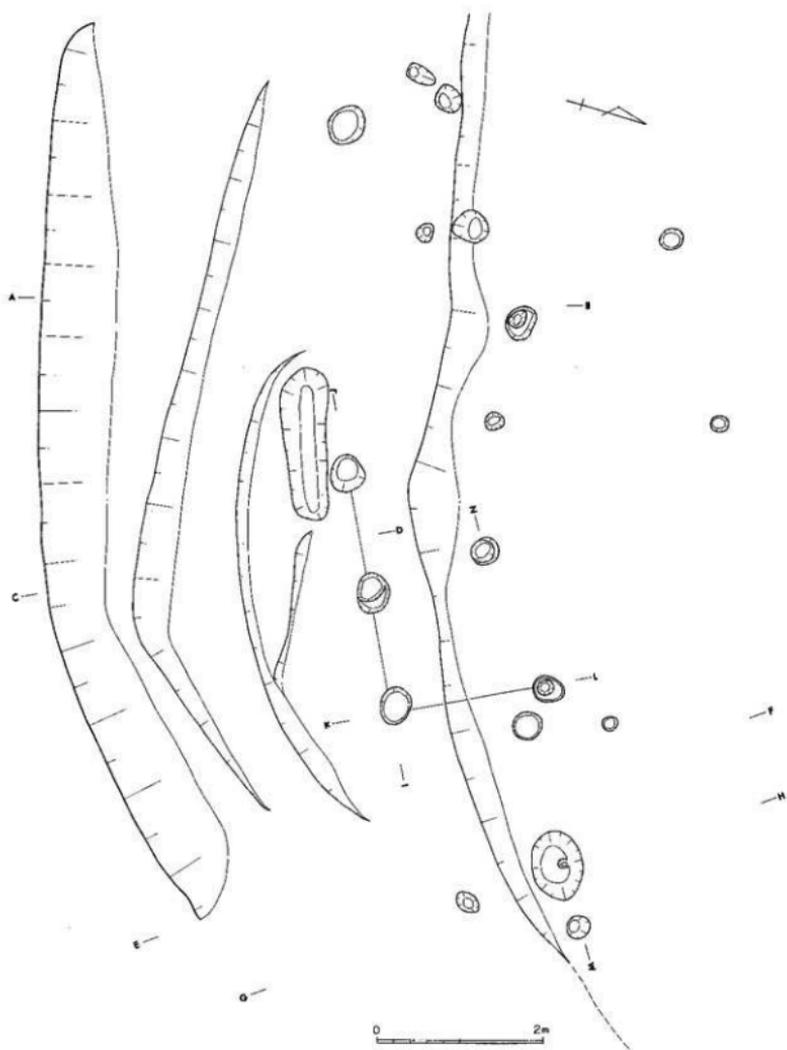
加工段01・02・03より東に10m程離れた同一斜面上で検出された竪穴住居跡で、斜面に沿うように平行に建てられており、その軸は加工段01・02・03に共通する。北側の半分は盛土が流れており、検出できたのは南側の半分と、いわゆる中央ビットと思われるビットのみであったが、建物のおおよその規模などは割り出すことが可能である。S101は方形竪穴住居跡と思われ、その壁体溝の内側で東西方向に6mを測り、柱間距離は4m程ある。径60cmの支柱穴は壁際から1m程内側に寄った所に1m程の深さに掘り込まれており、おそらく4本柱の建物だったと思われる。やや東に寄った深さ1mの中央ビットはその上層に炭化物を含んでいる。壁体溝は20cm幅で途切れることなくハッキリと巡っている。なお、壁体溝上の集石は川原石と思われ、目的用途共に不明であるが、調査中に覆土から同じ様な石が多く出ていたことから何らかの関連を想起させるものである。なお、この住居には建て替えの痕跡は見受けられない。

S101出土遺物 (第58図) S101の遺物は主に床面に堆積した明茶褐色粘質土層から出土したもので、時期的にかなりまとまりが窺われる。複合口縁の甕7は薄い口縁があまり開かず立ち上がるタイプのもので、その端部は外側に向かってつまみ出されており、複合口縁部の稜は風化しているものの水平を意識した作りになっている。色調は淡黄褐色を呈し、1mm以下の細かい砂粒が混じる。甕9は甕7に近いスタイルを持つものの、その口縁端部はつまみ出した後の上端に面を持ち、その複合口縁部の稜は水平を意識して力強く突出している。色調は淡茶褐色を呈し表面にはススが付着している。大型の甕10も真っ直ぐに伸びた口縁の端部に面を持っている。甕6はやや厚めの複合口縁が真っ直ぐに外側に開くもので、端部には調整は見られないものの、複合口縁部の稜のすぐ上から端部のすぐ下までを強くナデることによって複合口縁部の稜と端部を目立たせようとする作意が感じられる。色調は淡橙褐色で胎土には細かい砂粒を含む。複合口縁の甕8は口縁上端に面を持ち、よく突出する複合口縁部の稜を持つ。これらの稜の突出は、口縁を接合する時の強いナデから

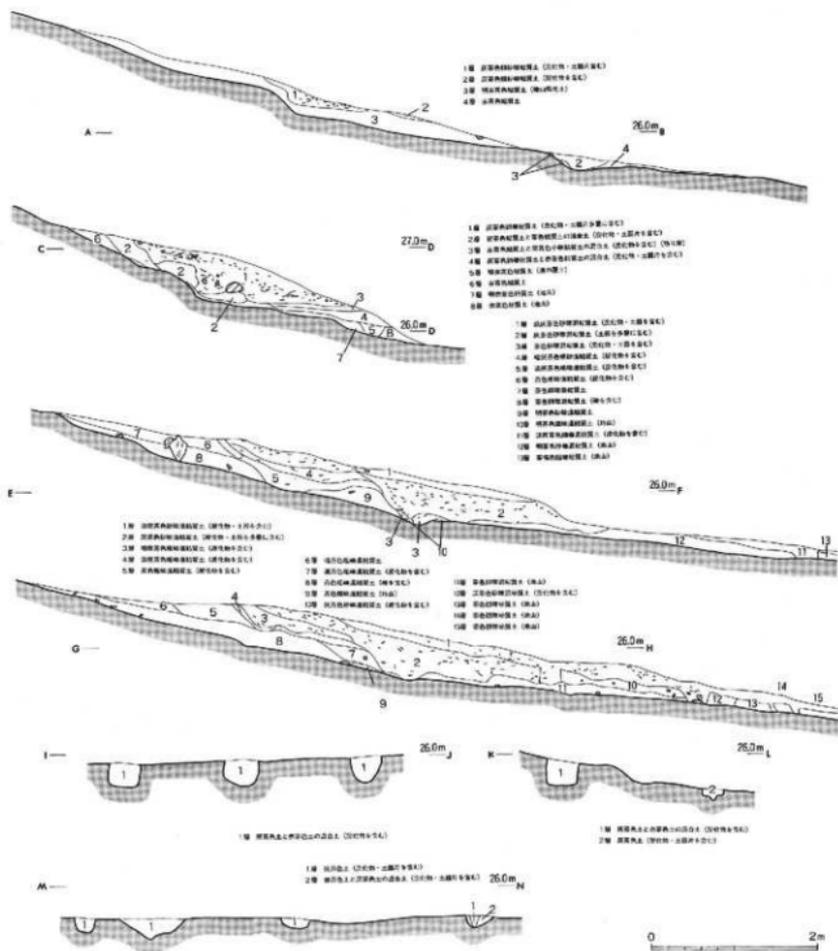


第60図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06遺構配置図 S = 1/120

発生したものと推測される。頸部内面には工具もしくは指による圧痕が認められ、頸部外面には縦にハケメが施されており、頸部接合時のへら状工具によると思われる細かい圧痕が巡っている。壺11は単純口縁の端部をやや引き上げたような形状をしており、その短い口縁には沈線を巡らせている。頸部内側は接合時の指頭圧痕がへらで削られており、外面肩部には簡略化された波状文がみられる。色調は淡橙褐色である。12は注口である。13は低脚杯の小さく開いた脚部である。14はコシキ形土器の取っ手で器壁との接合が観察できる。15はビット1 (P1) から出土した棒状土錘で、両端に1カ所ずつの穿孔が認められる。手握ねで作られているその胴部は掌に丁度よく収まる形をしており断面は円形を呈している。長さ12～13cm、重量80gの大型品である。色調は明橙褐色を呈し半面は焼成時の黒斑が覆う。16は中央がくぼんだ船底形をした鉄器である。袋状鉄斧末製品か、もしくは鉄素材の可能性が考えられる。なお15棒状土錘は山陰地方で出土しているものの中では最古のものである。以上の遺物などからS I 01は塩津5期の新しい段階のものと思われる。



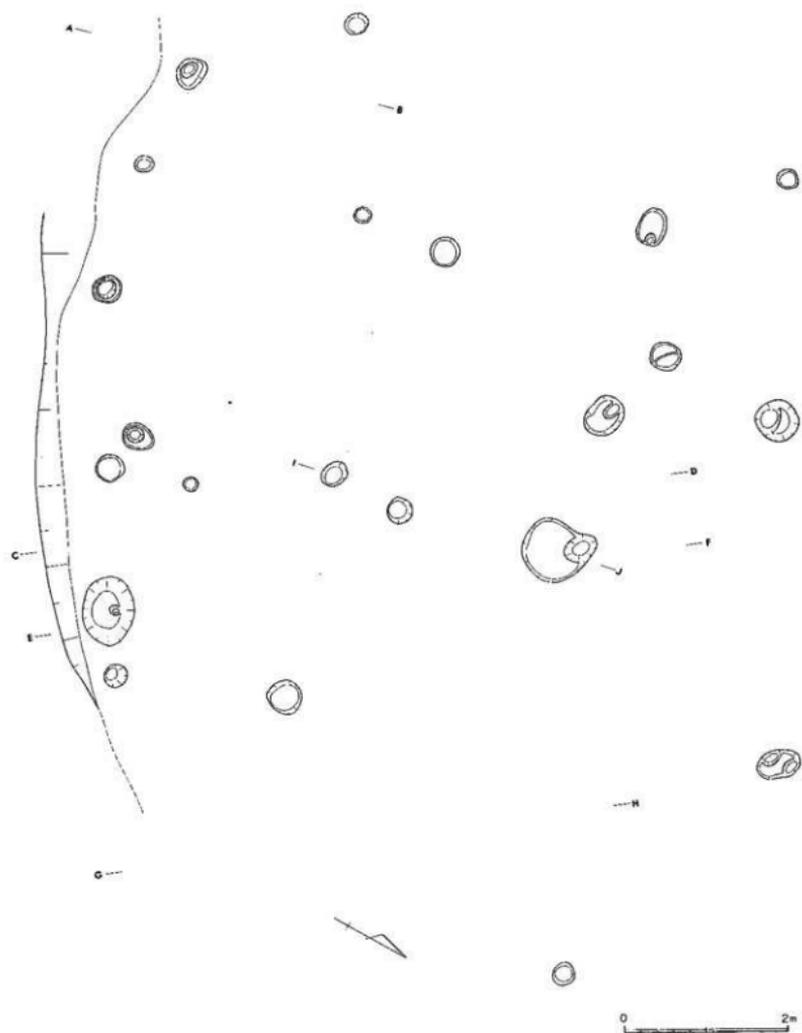
第61図 竹ヶ崎遺跡加工段04~加工段06実測図(1) S=1/60



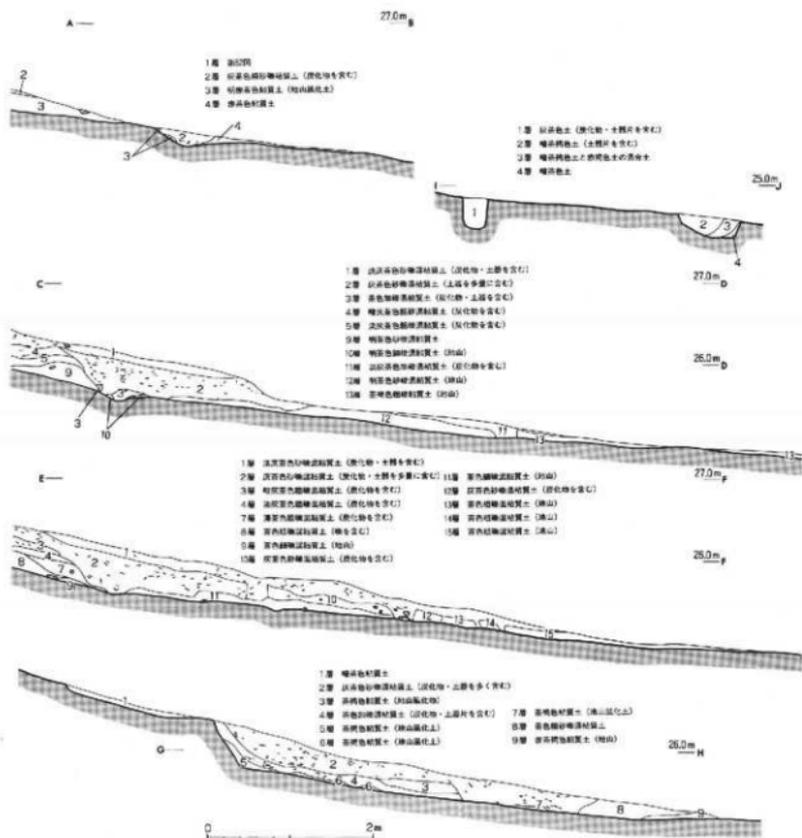
第62図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06土層図(1) S=1/60

加工段04・05・06 (第61図～65図)

加工段04・05・06は竹ヶ崎遺跡東端の背後を塩津墳墓群に囲まれている扇状緩斜面の一番奥の目立たない場所に位置し、加工段北側に広がる緩斜面面上には時期不明のビット群が検出された。加工段は三段のセットとそれを囲む緩やかなスロープとからなっており、それぞれが緩やかな弧を描いている。調査後の地形測量図(第55図)を見ると、遺構は東側にも伸びるのだが、残念ながら遺構の検出はできなかった。



第63図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06実測図(2) S=1/60

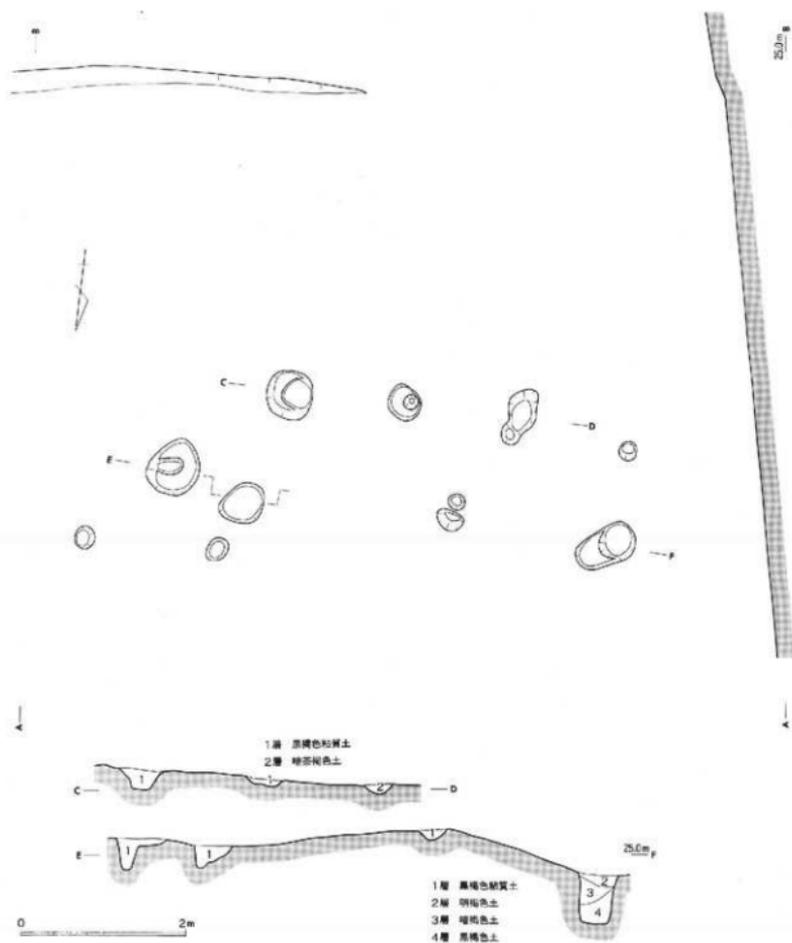


第64図 竹ヶ崎遺跡加工段04~加工段06土層図(2) S=1/60

加工段04・05・06遺物出土状況(第66図) 遺物の出土状況を見ると時期的には塩津1期と5期に分けられる。塩津1期の遺物はほぼ覆土からしか検出されず、また2期から4期の遺物がほとんど検出されていないことから塩津1期の遺物は加工段04・05・06廃棄後の流れ混みと考えられる。

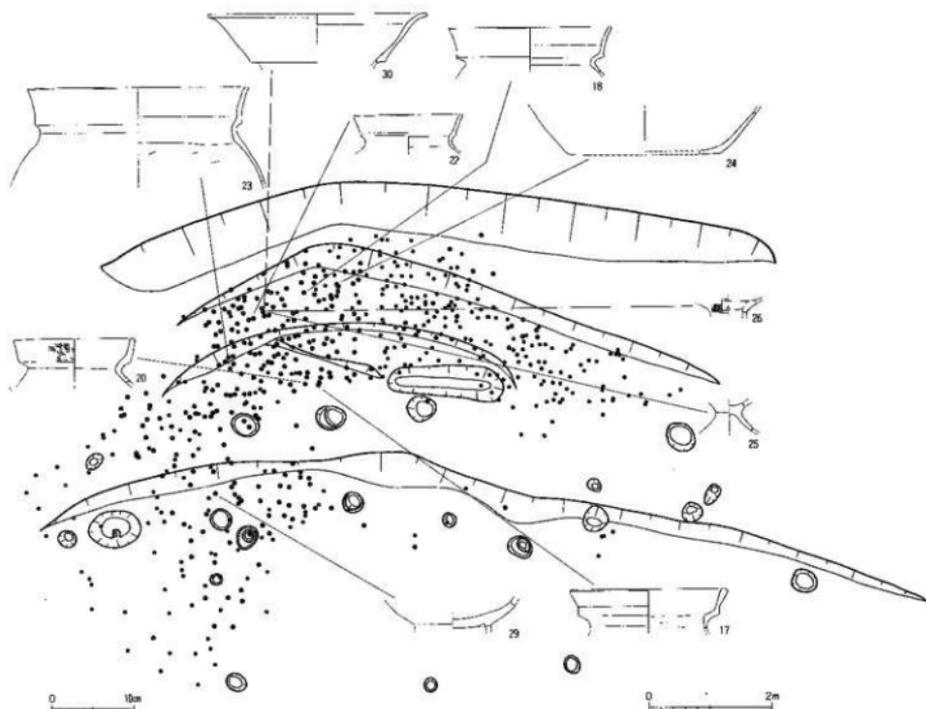
遺物の出土ポイントを見てみると加工段04の内側に沿うようにして、又ピット1・2・3を避けるように逆L字型に出土しているようにも見える。遺物は便宜上最下層遺物とそれ以外の覆土出土遺物とに分けてはいるが、ほぼ一括と見て間違いはない。

加工段04・05・06からは大量の遺物が一括で出土しており、その総数は壺807ヶ(46.49%)・壺203ヶ(11.69%)・器台358ヶ(20.62%)・高杯240ヶ(13.82%)・低脚杯112ヶ(6.45%)・鉢12ヶ(0.69%)・注口3ヶ・コシキ形土器1ヶとなっている。なお、個体のカウントはその器種の特徴的な箇所で行い(例えば壺の複合口縁や高杯の充填部等)、同一個体でない限り小片でもカウントし



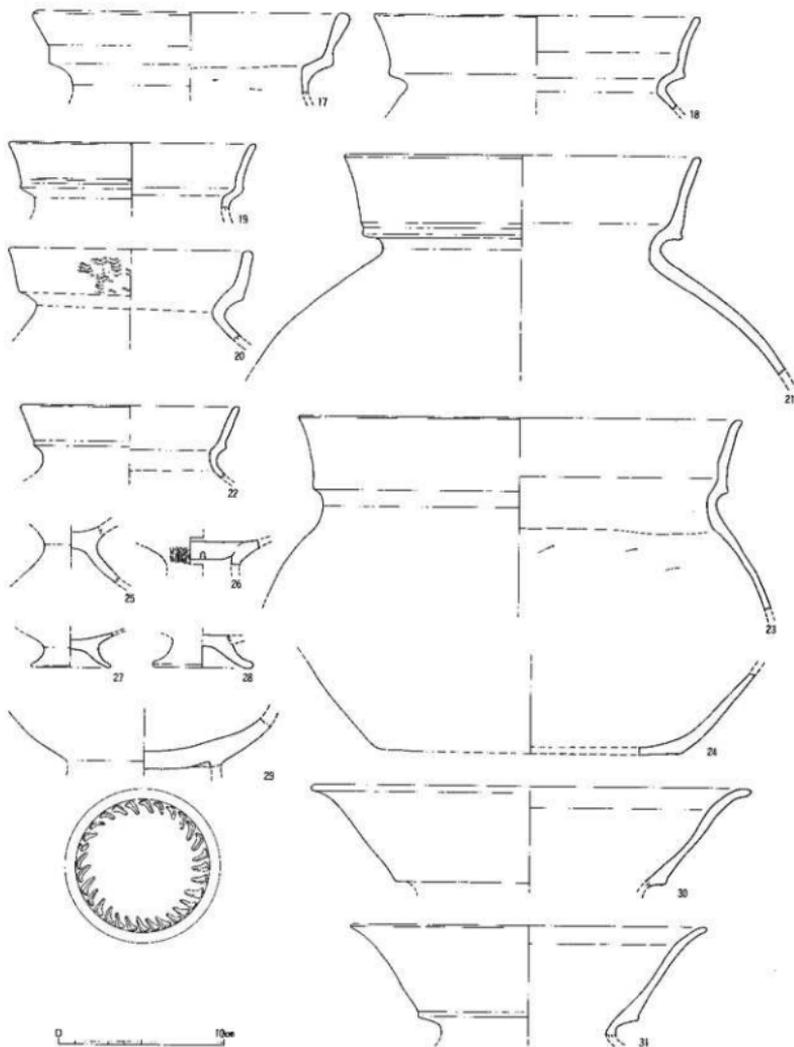
第65図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06実測図(3) S=1/60

た。遺物出土の割合を見ると、壺が圧倒的に多く遺物の約半数を占めていることがわかる。胎土は長石と石英が目立つ淡黄色もしくは淡橙色を呈するものが圧倒的に多いが、一部黒色砂粒の混じった淡茶褐色の胎土を持つものや黄白色を呈するものがある。調整は風化のために殆ど認められなかったが、中には残りのよいものもあった。では、個々の遺物を見てみることにする。



第66図 竹ヶ崎遺跡加工段04~加工段06遺物出土状況 S=1/80

加工段04・05・06床面直上出土遺物(第67図) 甕もしくは壺17は複合口縁の外縁が屈曲しており端部は厚ぼったく面を持っている。色調は茶褐色を呈し2mm以下の長石などを含む。径2mm程の植物茎圧痕がある。複合口縁の甕18・19・22は長めの口縁が緩やかに外反しており、複合口縁部の稜は水平を意識して伸びている。甕20は、複合口縁部の稜をあまり意識しない、厚い複合口縁の外縁に細かい波状文を巡らせたもので、全体にベンガラと思われる顔料がこびり付いている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には2mm~3mm程の大粒の長石や石英等を含んでいる。大型の甕21の口縁端部は丸く収まるが、複合口縁部の稜の上部に強いナデを施すことによって稜を強調しているかのような作意を感じられる。色調は暗黄褐色でやや大粒の砂粒を含む。大型の甕23の複合口縁部の稜は自然に斜め下方に突出しているものの、口縁端部をやや外方に折り曲げて面を持っている。色調は淡黄褐色を呈し表面は黒緑色である。24は大型の甕もしくは壺の底部で、おそらく21か23のものと考えられる。高杯25は脚が低く開くものである。色調は淡茶褐色を呈す。高杯26はやや大振りの円盤によって充填されたものである。色調は外面白黄色で断面は暗灰褐色を呈す。27・28は小振りな低脚杯の脚部である。29は脚付き鉢と思われるものの底部である。脚の接合面がきれいに剝離しているので、右回りの刺突による接合とわかる。色調は明橙褐色で、断面暗灰褐色を呈す。30・31は鉢形



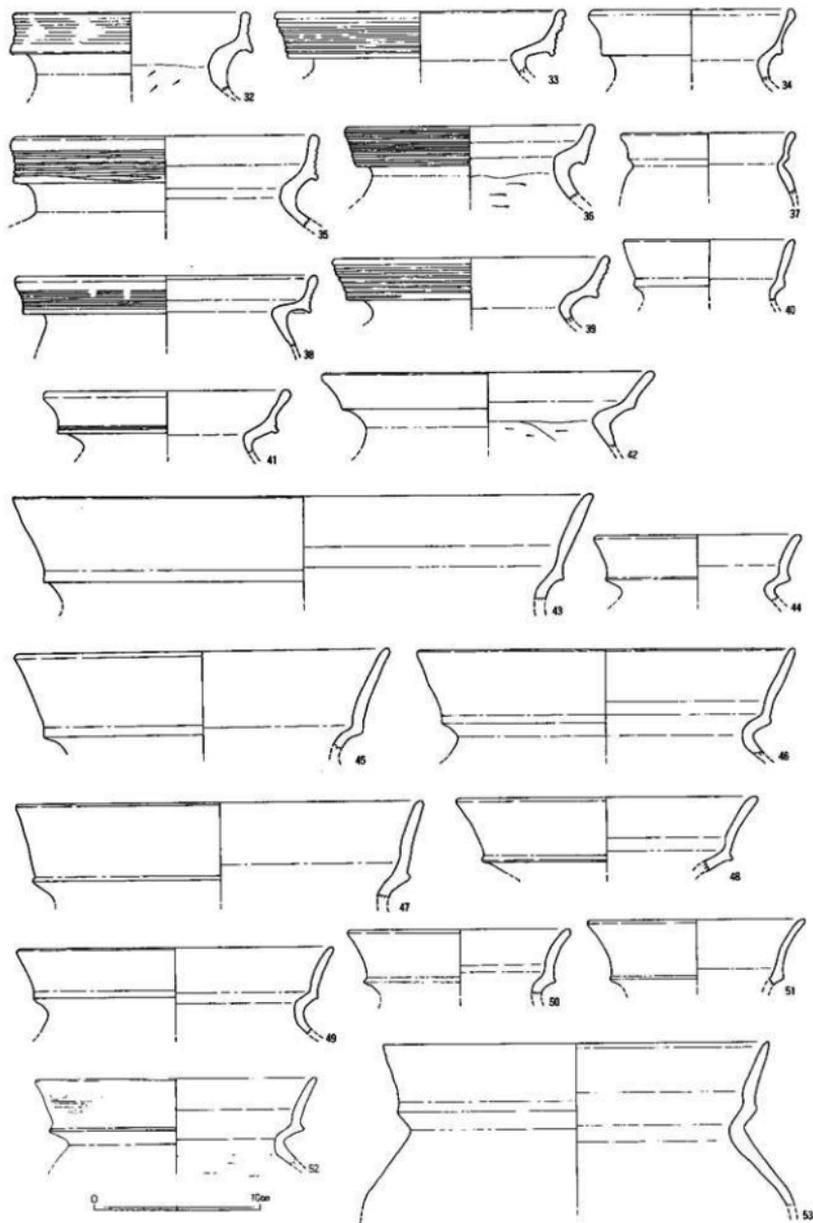
第67図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06床面直上出土遺物実測図 S=1/3

器の受部である。30の端部の方が発達している。

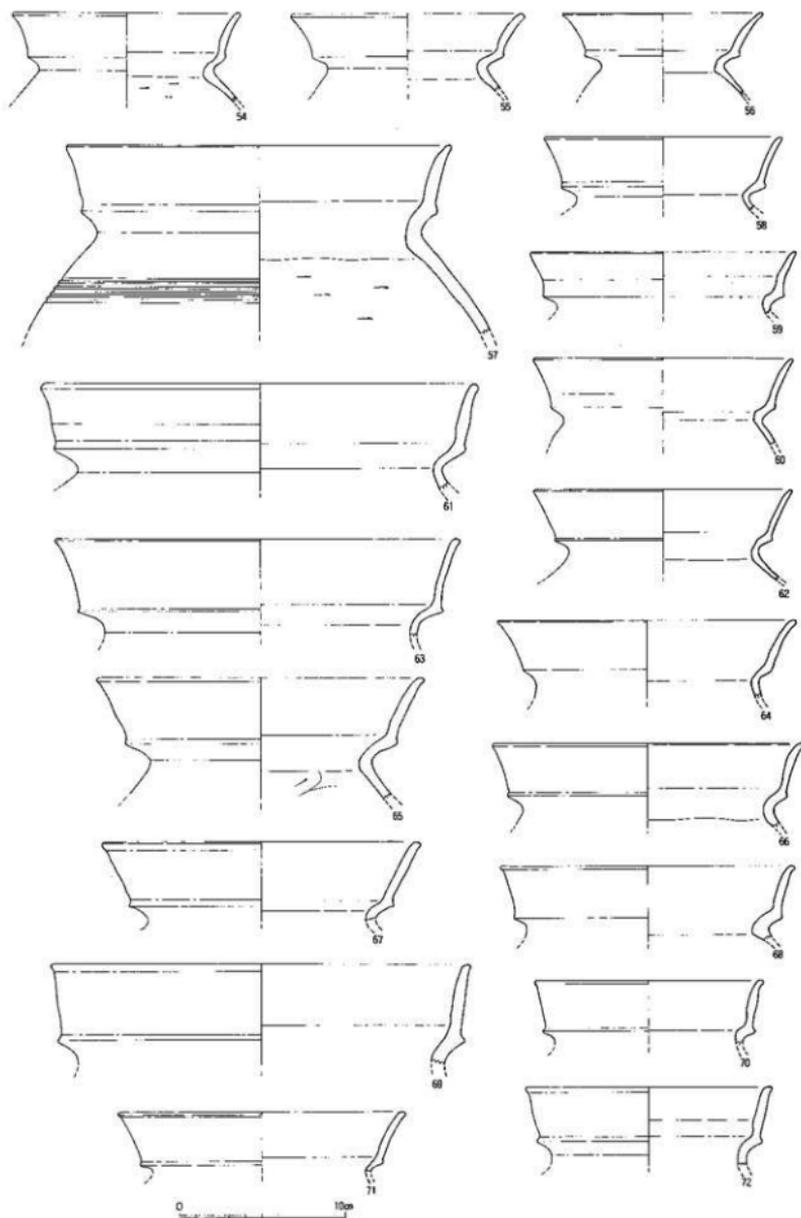
以上が加工段04・05・06の最下層から出土した遺物である。時期は塩津5期の割と古いところといえる。先程も述べたが加工段04・05・06の遺物はほぼ一括で出土したので、これから述べる覆土の一括資料との時期幅もあわせてものが加工段04・05・06の廃絶時期であるといえよう。では

続けて加工段04・05・06覆土出土遺物を見ていくこととする。

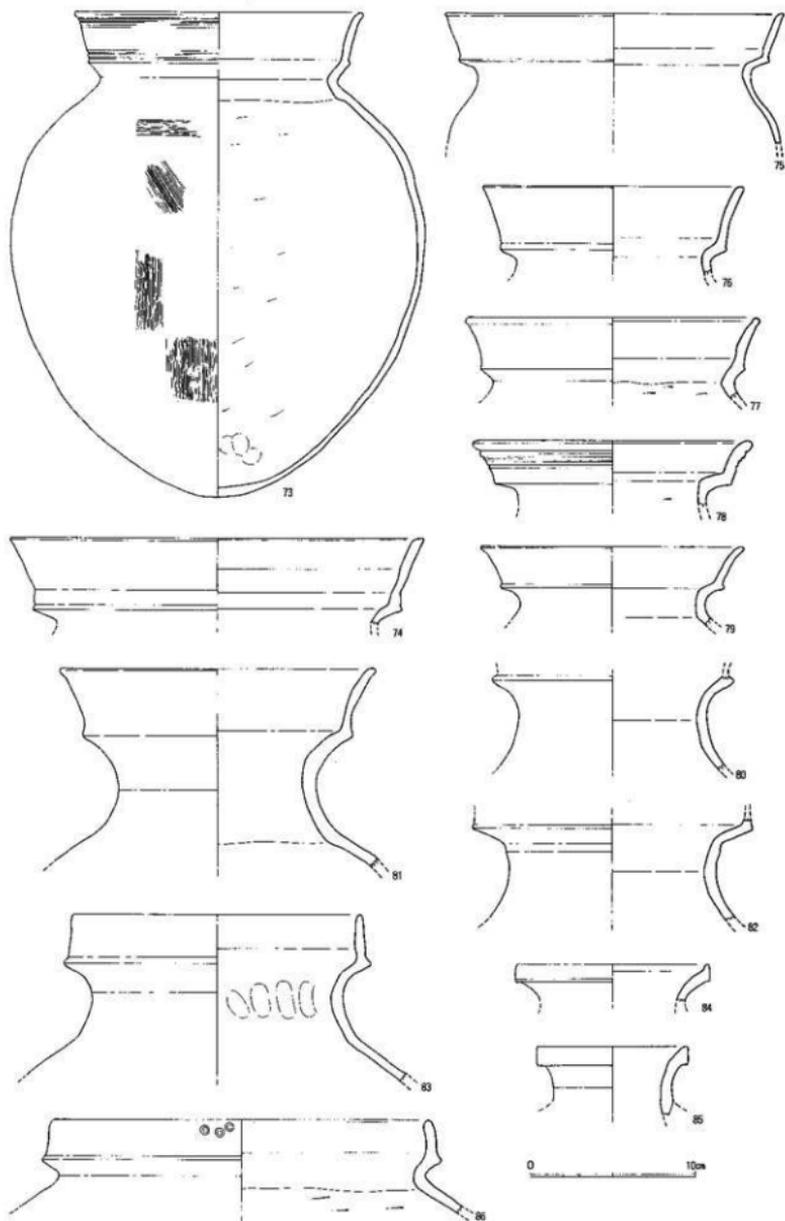
加工段04・05・06出土遺物(第68図～75図) 甕32・33・35・36・38・39・41は短く厚い口縁に擬凹線を施す塩津1期の特徴を備えたもので、加工段廃棄後の流れ込みと考えられる。甕32は複合口縁の下方をやや外に開いてハの字状に見せるもので、その口縁外側には二枚貝の貝殻腹縁と思われる凹線が入る。胎土は淡茶褐色を呈し、1mm程の長石が目立つ。甕33は逆ハの字に開いたやや長い複合口縁を持ち、その外側には五本の凹線を上から二周巡らせている。色調は淡茶褐色を呈し、2mm程の砂粒をふくむ。甕38は短めの複合口縁を持ち、口縁内面は強い屈曲によりテラス状を呈す。胎土には2～3mmの粗い長石を含み、色調は暗橙褐色を呈す。甕41は複合口縁部の稜の上部に二条のごく浅い沈線が巡るものだが、擬凹線をナデ消した可能性もある。甕34・37・40は小形の甕の口縁で、34は口縁が端部に向かって肥厚し、その内面は扶られたかのように内湾している。色調は黄白色を呈し、胎土に3mm程の砂粒を含む。甕42は厚い複合口縁が大きく外側に開いており、端部は丸く収めている。色調は暗橙褐色を呈し2mm程の長石、石英などを多く含む。甕43は大型の甕の口縁で、その長い複合口縁は直線的に上方に開いており、口縁端部を外側に弱く折り曲げている。色調は暗橙褐色で断面は黒色を呈す。小型の甕44はやや厚めの複合口縁が均一な厚みで外反しており、その端部は丸く収まる。複合口縁部の稜は水平を意識して突出する。複合口縁部内側は、強いナデにより屈曲している。淡茶褐色を呈す。中型の甕45・46・47は長く厚めの複合口縁が均一な厚みを持って直線的に開き、その端部は丸く収まる。やや小振りの甕51は、長く薄い複合口縁がカーブしながら外側に開くもので、その端部は丸く収まる。甕52は複合口縁が直線的にやや外に開いたもので、その端部は若干外折れを意識してか外面を強くナデ残している。複合口縁部の稜は強く水平に突出している。大型の甕53は厚い複合口縁が真っ直ぐ外に開き、その厚みは端部にいくに従い薄くなり先端部はシャープに収まる。色調は淡黄褐色を呈し、2mm程の長石や石英などを含む。小型の甕54・55・56は長く薄い複合口縁が軽くカーブしながら外に開くもので塩津5期の甕の特徴を備えている。色調はそれぞれ淡黄色・淡茶褐色・黄褐色を呈す。胎土には1mm程の若干の長石や石英を含む。やや大型の甕57は厚めの複合口縁が端部へ向かうに従い薄くなり、その端部は若干外に折れる。肩部には幅2cm程のハケメが横方向に入る。色調は暗橙褐色を呈す。甕59は複合口縁の中程が強く屈曲し外に開いている。甕59・60・62は長く薄い複合口縁が外に向かって開くもので、その端部はやや細くなる。色調はそれぞれ茶褐色・淡黄褐色・黄褐色である。大型の甕61はやや厚めの複合口縁が直立気味に立ち上がり、口縁端部を意識して折り曲げているように見られる。色調は黄褐色を呈す。同じく大型の甕63は長く薄い複合口縁が弱くカーブしながら直立気味に立ち上がるもので、端部は面を持って外に折れ、複合口縁部の稜は水平に突出している。甕64は長くて薄い口縁を持ち、外に開いた端部は若干の外折れを意識しているように見える。色調は淡黄褐色を呈す。甕65・67・71・72・74・76はやや薄い複合口縁が先細りせずに真っ直ぐに開き、端部に水平の、もしくはそれに近い面を持つものである。口縁の端部が外反しているが、これは面が形成される際の副次的なもののように見える。甕66・68・70・75はやや薄い口縁が外に開き、端部に丸みを持たせて外に薄くつまみ出しているものであるが、口縁外側を先端ぎりぎりまで強くナデしているために端部の外反はより強調されている。甕73は複合口縁の端部を外に折り曲げており、口縁外側には擬凹線を施した後でナデ消している。肩部には横方向のハケメを巡らせており、厚さ4mm程の倒卵形の胴部には



第68図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06出土遺物実測図(1) S=1/3

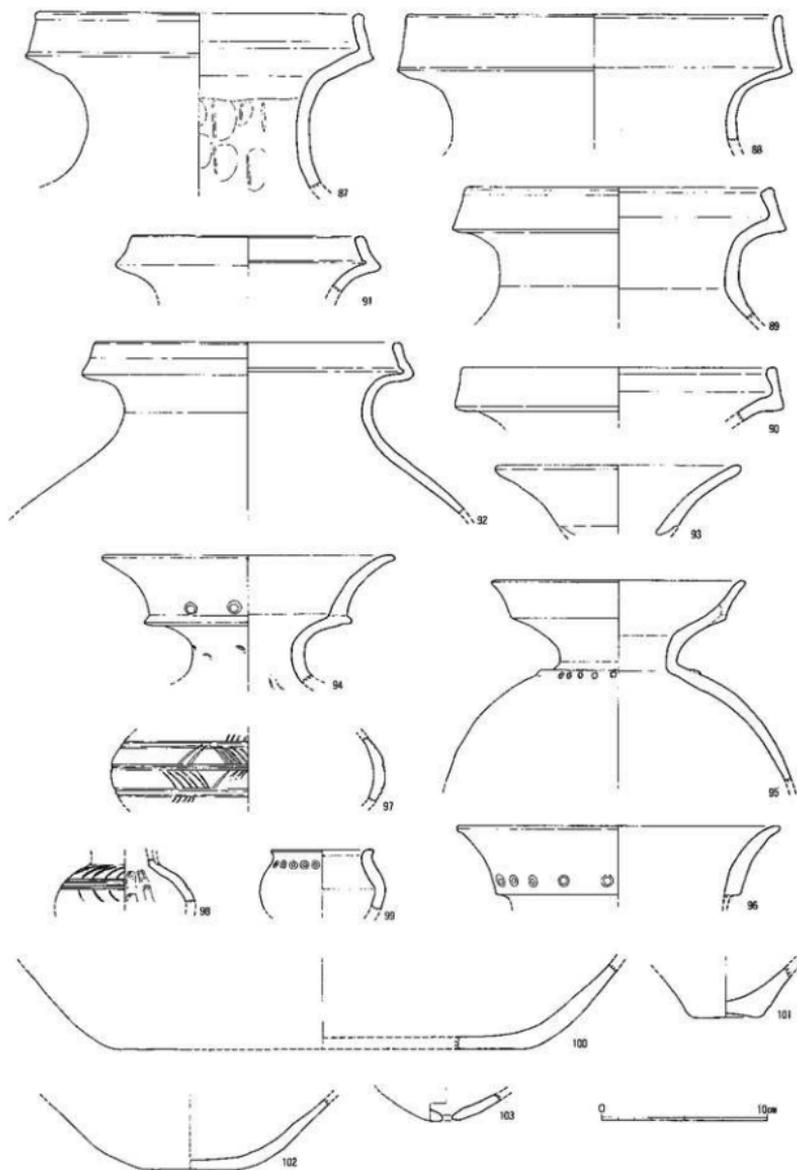


第69図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06出土遺物実測図(2) S=1/3



第70図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06出土遺物実測図(3) S=1/3

斜めから縦方向にハケメが廻っている。底部はその痕跡を残す程度で、内側にはヘラケズリと指頭圧痕を残すのみである。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には1mm以下の長石や石英粒などを含む。壺77は口縁端部の内側にアクセントを持っており、端部を外側につまみ出している。色調は明橙褐色を呈す。壺78は厚い複合口縁がカーブしながら外に開くもので、その外面には4条程の弱い擬凹縁が廻る。複合口縁部の稜にはあまり意識を払っていない様である。色調は暗茶褐色を呈し胎土に1mm程の長石等を含む。壺79は薄い複合口縁が弱くカーブしながら外に開くもので、その端部は丸く収まり、複合口縁部の稜は水平を意識して突出している。頸部は短い。壺80・81・82は頸部の長い中型品で、複合口縁部の稜はあまり意識されていない。壺81は長い複合口縁を外に開き、その端部は外につまみ出されている。色調は暗橙褐色を呈す。壺83は短い口縁が直立しており、その端部にはなにも調整を行わない。複合口縁部の稜は水平に突出している。頸部内側には押さえた跡が残る。小型の壺84は口縁の複合部が少しだけ突出しており、複合口縁部の稜の下部に弱いアクセントが付くが、同じく小型の壺85は口縁の断面が三角形を呈するものである。複合口縁の壺86は口縁が若干内湾するもので、外部には不規則に3点の竹管文が入る。頸部は短く、複合口縁部の稜はやや突出する。明橙褐色を呈す。壺87-92は複合口縁が内傾するものだが、91・92などは内傾するというより閉じているといった方がよいようなものである。壺87は口縁端部が外につまみ出されており、外側の強いナデにより強調されている。複合口縁部の稜は水平に突出する。複合部内側はナデにより若干くぼんでいる。頸部内面にはヘラ糸工具によるものか左方向へのナデが見られる。色調は淡黄褐色を呈し、1mm程の長石や石英などを含む。短い口縁を持つ壺89の口縁端面は、まず直立している口縁端部に水平に面を作った後で端部を内傾させたかのように面が付いている。複合口縁部の稜は口縁と一体化しており若干の突出が見られる。短い口縁を持つ壺91・92は更に内傾しており、口縁はカーブしている。色調は黄褐色を呈す。91は強い内傾のためか複合部内側は潰れて深い溝が出来ている。壺93は口縁の接合部が剝離しているが、おそらく単純口縁の広口壺と思われる。色調は淡黄褐色を呈し長石や石英、金雲母などを含む。複合口縁壺94は強く開いた口縁とやや下がり気味のしっかりと突出した複合口縁部の稜、絞り込まれた頸部を持っている。複合部には2つの竹管文を確認できたが、これが複合部を廻るかは不明。頸部には不揃いに半截竹管様のスタンプが押されている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には細かい石英や長石などを含む。壺95は複合口縁だが、その接合法は山陰地方で通有な複合口縁のそれとは全く違う。頸部と胴部の接合部には突帯が回り、1cm間隔に竹管が廻る。胴部は球形に見受けられる。色調は淡黄色を呈し、胎土には1mm程の長石、石英などを含む。外来系の可能性があるが、胎土は山陰のものようである。壺96は厚い口縁下部に竹管文が施されているものである。淡黄褐色を呈す。壺の胴部97は1文様毎に刺突の方向が変わる鋸歯文と2条の沈線が上から交互に施文されている。色調は淡黄色を呈す。同じく壺の胴部98はまず頸部接合点に貝殻で平行に刺突し、すぐ下に同じ貝による斜め方向の刺突が廻る。その下に4条の沈線が回り更に合わせ鏡のように斜め方向の刺突が廻る。胴部内面には幅5mmに満たないヘラ状工具によるナデ上げ痕が見える。色調は淡黄白色を呈し、胎土にはあまり砂粒を含まない。小壺99はつまみ出した単純口縁に竹管文を巡らせたものである。色調は暗橙褐色を呈し1mm程の長石や石英などを含む。100・101・102・103は壺もしくは壺の底部である。100は大型の壺の底部と思われる、広い平底である。101は4.5cm程の底部の底が窪んでいるもので、形状、胎土等からおそらく塩津1期の壺もしくは壺のものと思われる。102は6cm程の平底部が残っているものである。103はわずか

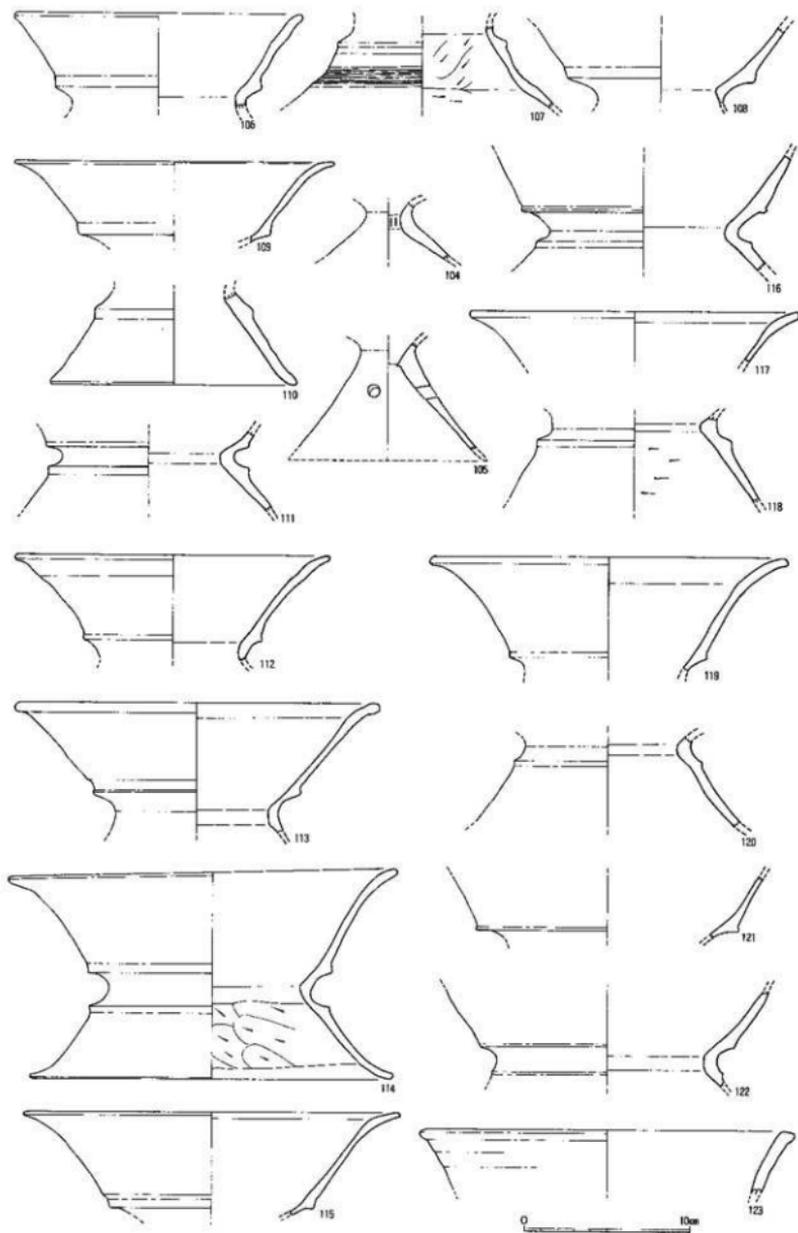


第71図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06出土遺物実測図(4) S=1/3

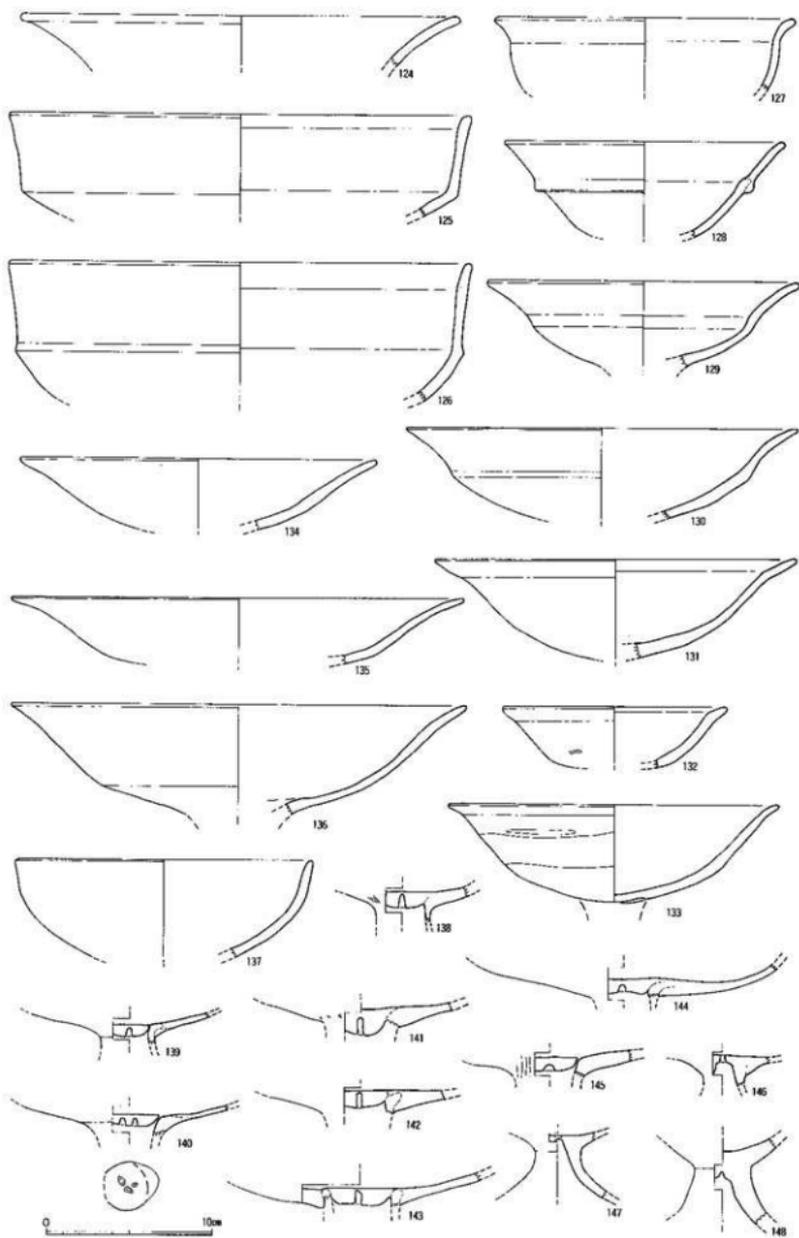
に平底の痕跡が残る底部に、焼成後径1cmの楕円形の穴を穿ったものである。胎土等からおそらく壺95の底部と考えられる。

続いて器台の説明にはいる。器台は殆ど全てが鼓形を呈し、シンプルな低い器形と縮約された筒部を持つ。時期はおおむね埴埴5期に中たる。

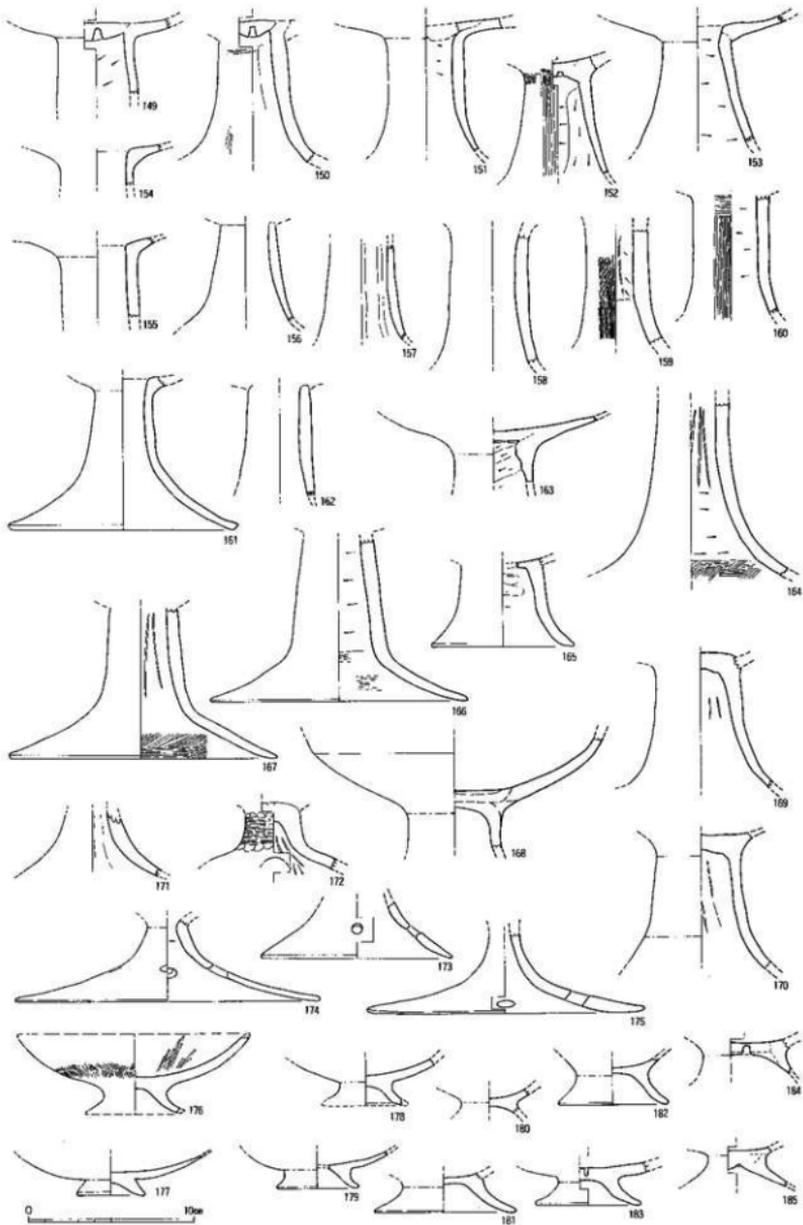
104は小型の器台で、色調は淡橙褐色を呈す。105は真っ直ぐに開いた脚部に3方向のすかしが入った小型の器台である。色調は明橙褐色を呈し、胎土に1mm程の長石や石英などを含む。以上2点は外来系の影響を受けた器形を持っている。106は厚めの受部が自然に外側へ開いているが端部をややつまみ出している。色調は淡黄褐色を呈し2mm以下の長石や石英などの砂粒を含む。107は脚部の中程に二枚貝による凹線文が頼りなく1周しているもので、色調は淡橙褐色を呈し、胎土に1mm程の長石や石英粒を含む。109は薄づくりの大きく開いた受部で、端部を強くつまみ出している。色調は暗黄褐色を呈し、胎土に長石や石英粒等を含む。110は厚めの脚部が自然に開くもので端部を若干つまみ出している。筒部111は縮約してはいるが、まだ筒部内面に面を持っている。受部113は薄い器壁と肥厚した端部を持っており、先端は丸く収めている。複合口縁部の稜の上部を強く撫でることによって稜の突出を意識している。鼓形器台114は縮約した筒部と12.5cmの低い器高を持ち、薄づくりの器壁は端部がつまみ出されて外反している。内側のケズリは筒部をケズリ残してはいるが、筒部内側は殆ど稜線と化している。色調は暗黄褐色を呈し、胎土に1~2mm程の長石や石英などを含んでいる。115は端部の外反が更に強く長いもので、暗橙褐色の胎土を持ち、長石や石英粒を含んでいる。117・119は強く外反した端部に面を持っているものである。123は端部に強い面を持ち、すぐ下から強いナテ調整が施されている。色調は淡黄白色を呈し、内側は黒褐色を呈す。125・126は径28cmの口縁が直立気味に立ち上がり、端部を若干つまみ出している。それぞれ色調は黄白色と黄褐色で、器種は鉢と思われる。127は深い受け部が内湾気味に立ち上がり、端部を軽く折り返している。128は小型の高杯に複合口縁を付けたかのような形状をしており、その複合部は杯の延長線上に真っ直ぐ伸びている。端部は弱くつまみ出されている。胎土は淡茶褐色を呈し、長石を多く含んでいる。129・130は有段高杯の杯部である。複合口縁部の稜は杯部の中程を巡っている。131・132・133はやや深い杯部を持ち、杯端部を外につまみ出している。133は橙色の胎土に白色粘土の帯がマーブル状に練り込まれているのが確認できる。134・135・136は緩くS字を描きながら大きく外に開く浅い杯部を持っている。137は碗状に立ち上がる杯部で、端部付近外面に浅いナテによるアクセントが確認できる。色調は黄褐色を呈し、胎土に長石や石英を含んでいる。138~155は円盤を充填された高杯の脚であるが、脚部と杯部は一体成形では無く別々に作り、兩者をつなぐときに円盤を充填するものである。竹ヶ崎遺跡では以降これを円盤充填法として扱う。140は円盤への刺突を5回も繰り返しているもので、その円盤は薄い。143・144も同様に薄い円盤を持っている。146は細い脚を持つ高杯で軸穴は貫通している。また、軸棒を抜いた後で脚の内側から充填部を径9mm程の棒で突いているものと思われる。147は146と同タイプの高杯だが軸穴は1度貫通した後塞がれている。148は146・147に似ているが、古墳時代中期頃の土師器である。165・168・169・170は円盤を充填した後が見られず、接合部が観察できた168の様に脚部が接合された可能性がうかがえる。ただ165は接合後に脚の内側を削り取っているため、接合状態は不明である。165は短脚の高杯とでも呼べばよさうか、脚の天井部は薄作りになっている。172は短い頸部に縦方向のミガキを入れた後で、単位の小さい横方向のミガキを施しており、脚裾部に透かし穴が認められる。接合法は脚差込方式を用いている。色調は



第72図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06出土遺物実測図(5) S=1/3



第73図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06出土遺物実測図(6) S=1/3

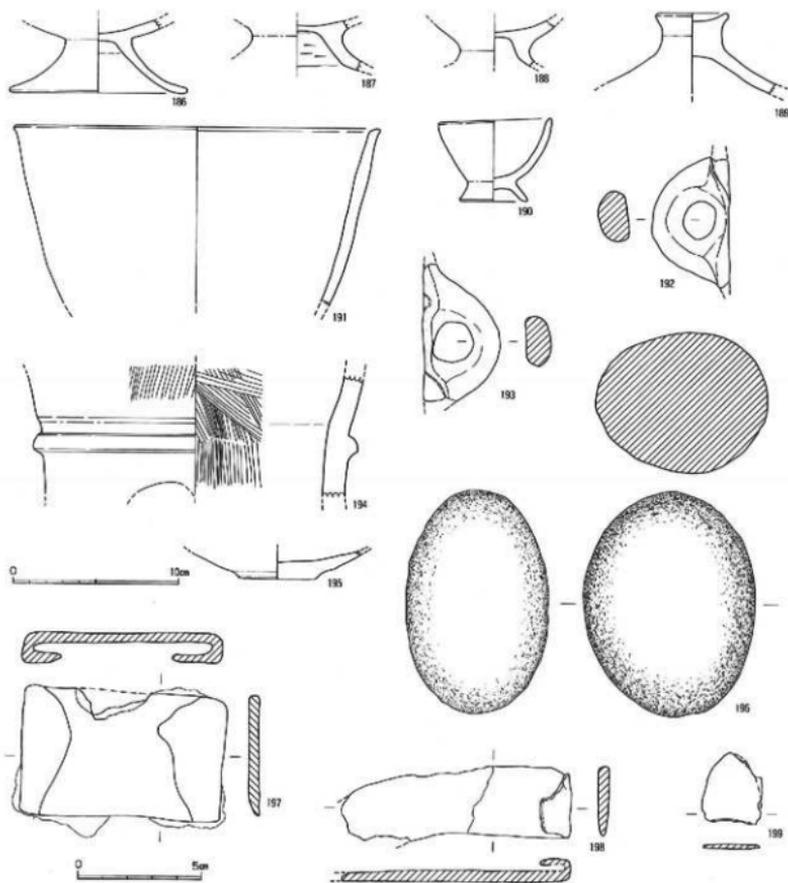


第74図 竹々崎遺跡加工段04～加工段06出土遺物実測図(7) S=1/3

淡黄白色を呈し、断面黒褐色である。胎土には少量の長石や石英を含む。174・175は広く開いた脚裾部に4方向の円形透かしを開けたもので、色調は黄褐色～淡橙色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英を含む在地の土を使用しているが、外来系の特徴を強く反映している。

176～188は低脚杯である。低脚杯の脚部接合法は円盤充填法と、脚差込法の2種類に大別できる。176は杯部があまり開かないもので、外側に細かいハケメが巡り、内側には、縦方向のミガキが施される。色調は淡橙褐色を呈し、2mm以下の長石などを含む。183・184・185は円盤充填の軸穴が確認できるものである。183は杯側から刺突してあるように見えるが、これは貫通した刺突の穴を調整時のナデで埋めたものと考えられる。元は杯側も穿孔をナデで埋めていたものが風化によって表れたものと理解できる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に1mm程の石英や長石等を含む。189は蓋と思われる。色調は橙褐色を呈し、胎土に長石や石英などの砂粒を含む。190は低脚の付いた小椀で、一見ぐい飲みにも見えるその端部は丸く収まっている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には長石や石英などの砂粒を含む。191は端部に内傾する面を持っている。黄褐色の胎土には2～3mmの長石や石英を多く含んでいる。器種はおそらく鉢と思われる。192・193は共にコシキ形土器の取っ手である。その大きさや形状、胎土などから同一個体と考えられる。194は円筒埴輪の一部で、第2段タガとその下の円形透かしが認められた。タガは台形をしており、タテ方向ハケメ調整後に張り付けられて、上下をナデで仕上げられたものと思われる。内側は、タテハケメ後ヨコハケメが入っている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には1mm程の長石が目立つ。この個体は加工段04・05・06の東南斜面上にある古墳想定地（塩津古墳群1997島根県）からの崩落品と思われる。古墳想定地出土の円筒埴輪と接合を試みたものの接点は見つからなかったが、ほぼ同一個体と見て間違いはないと思われる。195は土師質土器の底部と思われるが、風化が激しく、底部が糸切りであろうこと以外は不明である。色調は橙褐色を呈し、緻密な胎土にはあまり砂粒を含まない。196は14cm×10cm程の楕円石で、重量は1635gを量る。顕著な加工痕などは認められなかった。おそらく標石と思われる。これも斜面上部からの崩落品か？197はおそらく片刃の鍛造鉄斧で長期間の使用により刃部はすり減って内湾している（弥生時代の鉄器文化・川越哲志・雄山閣）。幅12.5cm、厚さ6mm程で、折り返しは長いところで4cmになる。198は左向きで中型の鉄鎌である。基部は逆コの字形を呈しその折り返し幅は2cm程である。全長は14cm以上あると思われ、基部の幅は4.5cm程、厚さは約1cmである。刃部はやや内湾するものと思われる。199は全長4cm、最大幅3.5cmの無茎三角鉄族で、基部の形状は平基式と思われるが、若干内湾しているようにも取れる。大型品で戦闘用と思われる。

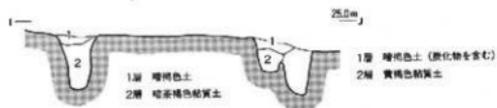
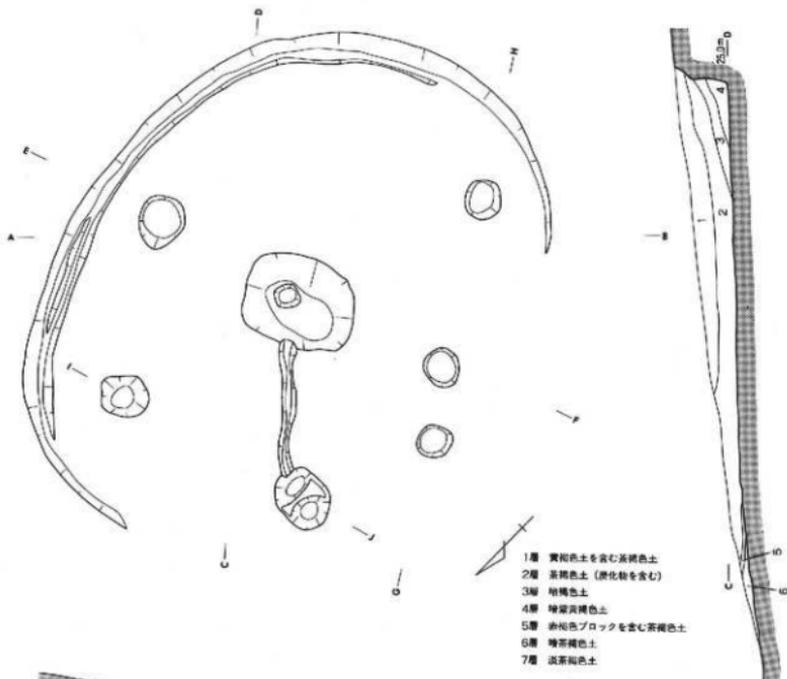
以上の遺物より、この加工段の廃棄時期は塩津5期であるといえる。



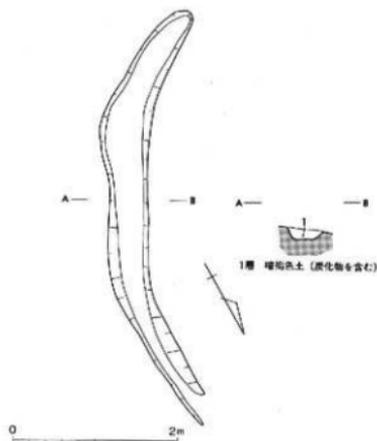
第75図 竹ヶ崎遺跡加工段04～加工段06出土遺物実測図(8) S=1/3(鉄器197～199は S=1/2)

S I 02 (第76図)

竹ヶ崎遺跡の中では最東端に位置する遺構で、その北西側は流れていて遺構面を検出できなかった。S I 02はほぼ円形を呈する不整形の隅丸多角形住居跡と思われ、壁際には浅く壁体溝の痕跡が巡る。規模はその壁の内法で7mを測る。支柱穴と思われる径50cm程のビットが5穴あるが、おそらく南側に在ったであろう6つ目のビットが果樹園により攪乱を受けていたために柱穴が確認できなかったものと思われ、元は6本柱の隅丸多角形住居だったと思われる。それらの支柱穴に囲まれるように径1.5m程の2段階のいわゆる中央ビットが浅く開いている。中央ビットと北側の支柱穴は幅



第76図 竹ヶ崎遺跡 S102実測図 S = 1/60



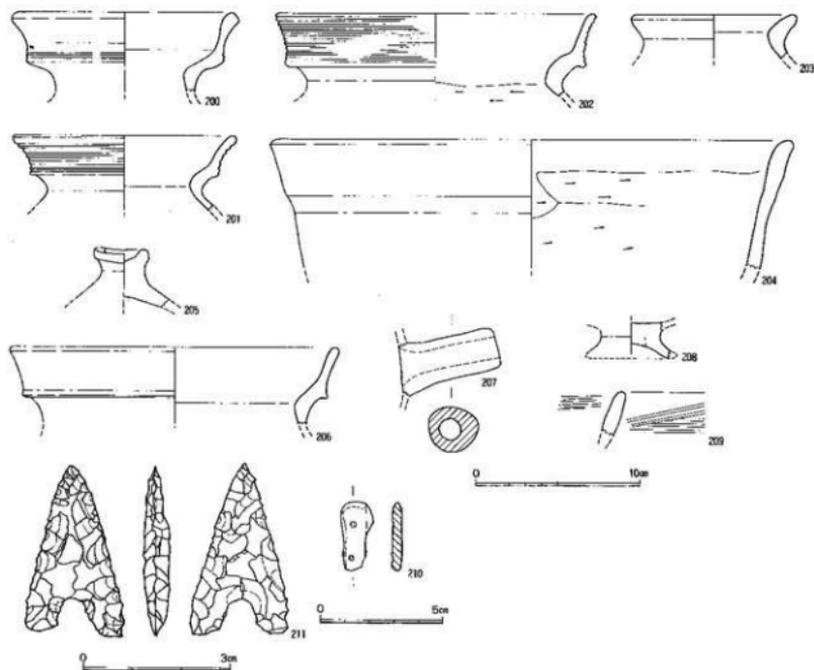
第77図 竹ヶ崎遺跡 S D01実測図 S=1/60

15cmの溝により真っ直ぐ結ばれている。土層を見ると斜面の南側から泥が流れ込んでいった状況がよくわかる。なお柱穴と床面の覆土には炭化物が含まれているが、住居が焼失した形跡はない。

S 102出土遺物(第78図) 壺200は端部が肥厚する高さ3cm程の複合口縁の外側に、貝状の工具によると思われるカーブを持ち、風化が激しく調整は不明瞭だが、複合部に凹線文が確認できる。色調は明橙褐色を呈し、胎土に2mm以下の長石や石英などの砂粒を含む。小型の甕201は強く外傾する高さ2.5cmの複合口縁に6条の擬凹線文を施しており、複合口縁部の稜は突出しない。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に径1mm~2mm程の長石や石英等を多く含む。中型の甕202は全体溝より出土したも

ので、3cm程の緩やかに外反する複合口縁の外面には擬凹線が柔らかに廻っている。複合口縁部の稜は少しだけ下方に突出している。内側の調整として、頸部中程までを左方向のケズリが廻っている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には2mm以下の長石や石英などを含む。小型の単純口縁の甕203は淡黄褐色の胎土に長石、石英などを含んでいる。204は口径32cmの大型の土器で、口縁端部に面を持っている。外側は横方向のナデ、内側は右方向のヘラケズリが口縁から3cm程下まで施されている。色調は淡黄灰色を呈し、胎土に2mm程の砂粒を含む。コシキ形土器の可能性もある。壁体溝出土の205は蓋と思われる個体で径3cm程の不整形のつまみは上部と横部に面を持っている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英などの砂粒を含む。甕の口縁206は3cm程の複合口縁が緩やかに外反し、その端部はやや厚みを持って丸く収まる。複合口縁部の稜は斜め下向きに突出している。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には2mm程の石英や長石等を含んでいる。風化が激しく調整は不明である。207は注口形土器で端部まで一様な口径を保っている。中央ビットからの出土である。風化のため調整は不明であるが色調は暗茶褐色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英などが多量に含まれている。208は小型の低脚杯で脚内側に粘土を充填した形跡が見える。色調は黄褐色を呈し、胎土には1mm以下の長石や石英などを含む。209は口縁または脚の端部と思われるが、小片のため識別不能である。一応口縁として図化した。口縁端部はやや外傾している。口縁の外側にはヘラミガキが施されており、赤色顔料が付着している。口縁内側にはハケ状工具によると思われるヨコハケメ様の調整が施されている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に1mm程の長石や石英などを含む。210は床面で出土した鉄器である。図には2カ所の窪みがあり、当初穿孔されている可能性も考えられたが、レントゲンで見た限りでは穿孔は認められなかった。この1.5cmの匙状鉄器は用途不明品である。

以上の資料を観察した結果、遺構の廃絶時期は壁体溝から出土した遺物等により塩津1期の後半頃ではないかと思われる。



第78図 竹ヶ崎遺跡 S I 02(200-210)・S D 01出土遺物実測図 S=1/3(鉄器210は S=1/2 石器211は 原寸)

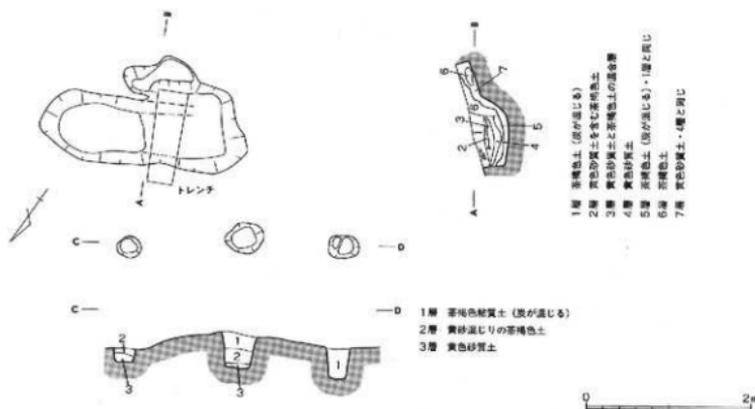
S D 01 (第77図)

S I 02の北側で検出された緩やかな弧を描く溝状遺構で、その幅は50cm程、深さは20cm程である。上部は削平されており遺構の残りは悪い。また、遺構のすぐ北側も近世削平段に大きく削り落とされており遺構は検出されなかったが、溝の形状から竪穴住居の外周溝とも考えられる。

S D 01出土遺物 (第78図) 211はサヌカイト製の凹基式石鏃で、全長3.5cm程である。

S K 01 (第79図)

S I 01の斜面を北に降りた緩斜面に位置し、後述するS I 03や加工段07と同一テラスにある土坑で、東西方向に軸を取っており、全長2.5m、幅0.9m、深さ0.5mある。土層を見ると茶褐色土と黄色砂質土が交互に層を作っているのがわかる。これは掘った土坑をすぐに埋め戻したために層が混ざったものと見られ、土坑の規模や形態などから土坑墓の可能性が考えられそうだが、遺物の出土状況が供献土器のそれとは違い、覆土内にまんべんなく土器が含まれていたために土坑廃棄時の一括廃棄の可能性も考えられる。S K 01の北には軸を同じくしてピットが3穴検出された。



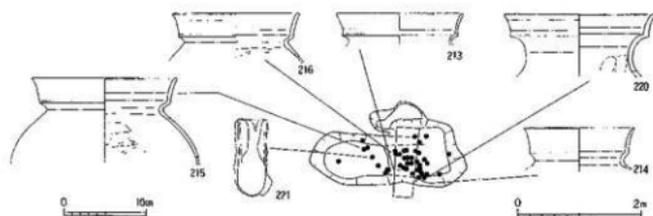
第79図 竹ヶ崎遺跡SK01実測図 S=1/60

SK01出土遺物(第81図) 甕212は短く伸びた複合口縁の端部に強い面を持ち、口縁外面は強くカーブしている。色調は淡黄褐色を呈し、1mm程の砂粒を含む。甕213は長めの複合口縁がやや外反して伸び、端部には調整を施さない。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には少量の長石や石英を含む。薄作りの甕214は先細りする複合口縁を持ち、その端部は面を持っている。甕215・216・217・218は複合口縁の端部に面を持ち、厚めの口縁が真っ直ぐに開くもので、淡黄褐色の胎土に長石や石英などを含む。甕219は全体に厚い造りをしており、単純口縁の端部に外向きの面を持っている。量は、高さ16cm、口径14cmを測り、底径は不定形ながら3cm程になる。外部調整は底部近くまでハケメが入るが、底部は未調整。肩には鈍いタキガが左上がりに巡り、口縁にはヨコナデが施される。内部調整は右上がりの荒いヘラケズリとその後に施された荒いハケメ状の調整が巡る。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に1mm程の長石、石英などを含む。この不格好な造りの甕は畿内5様式平行のものと思われる。複合口縁の壺220は端部に面を持ち、外部の強いナデにより口縁端部を強調している。221は袋状鉄斧で全長6.3cm刃部幅2cm強を測り、平面形は長方形を呈し、基部断面は楕円形を呈す。以上の遺物が一括廃棄されており、その内訳は甕と壺のみという偏りを見せる。SK01の廃棄時期は塩津5期と思われる。

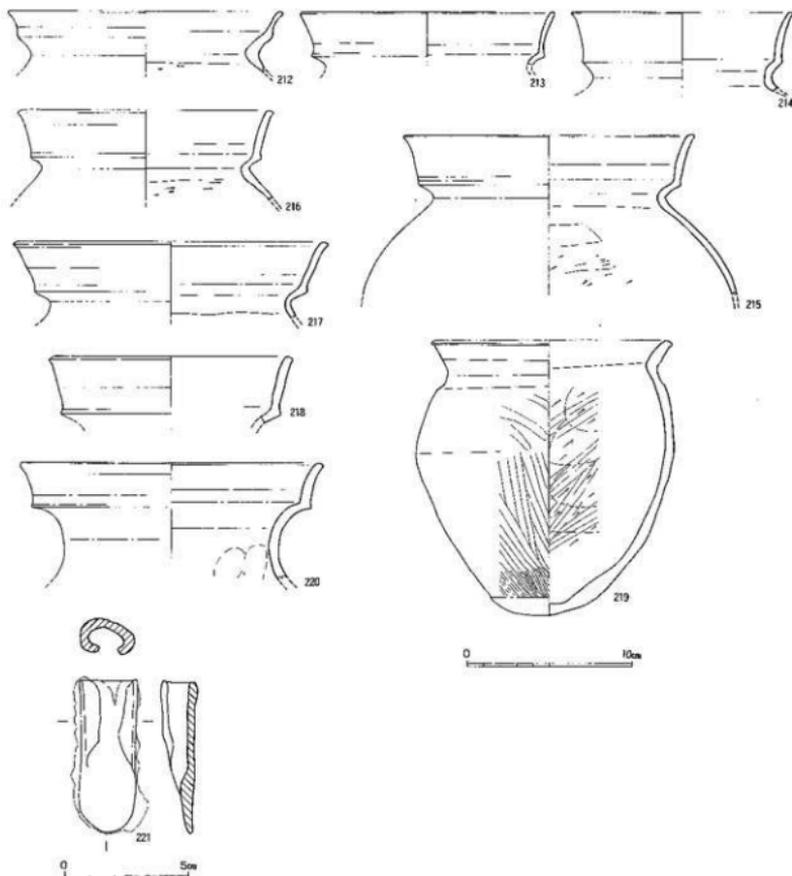
SI03・SK02・SK03(第82図)

加工段01・02・03の北側斜面を下ったテラス状の緩斜面に位置し、SK01が同テラス東側に位置している。西側にはSD02、加工段07が軸を東西にのばして隣接しているが共に切り合い関係は不明である。

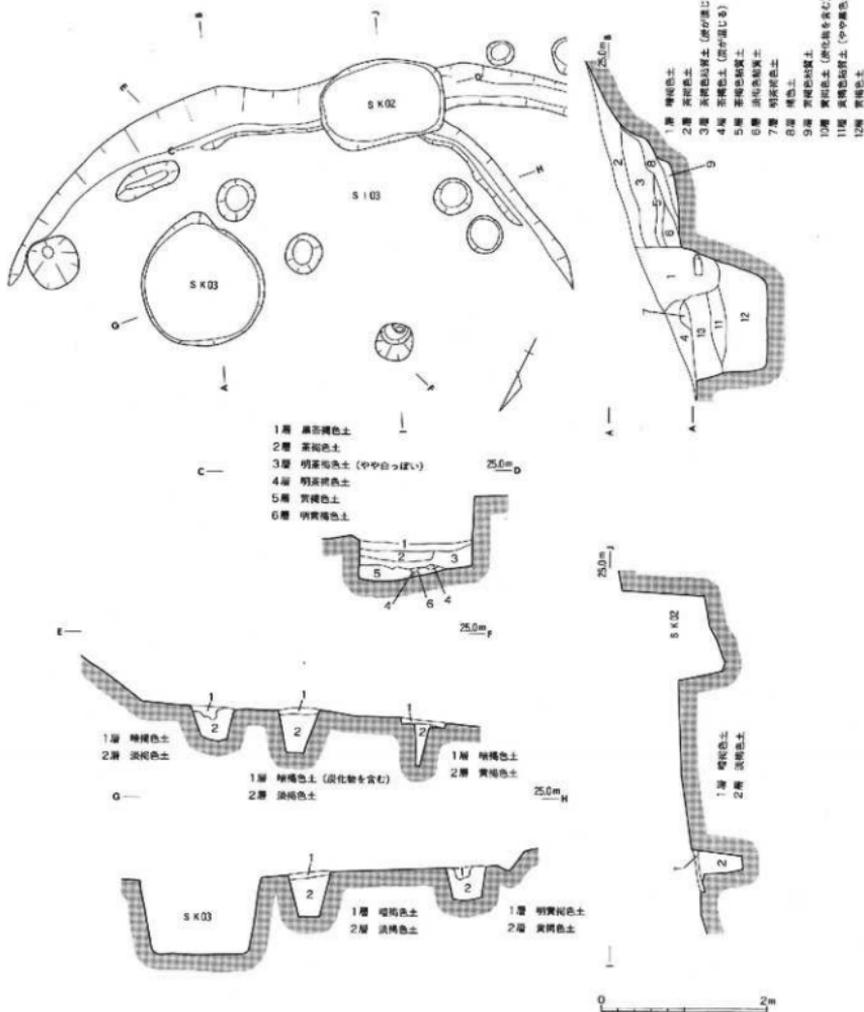
SI03 遺構の北側半分程が近世削平段により削られているため正確な規模は不明だが、1辺が5m以上ある隅丸堅穴住居跡だった可能性が高い。壁際には壁体溝とおぼしき溝が巡っており、床面では直径50cm程のピットが検出されたが、ピットは不規則な配置をしており建物の復元は出来なかった。SI03は1基の土坑を伴っており、土坑から塩津5期の遺物が出土している。SI03はSD02と斬り合っているがその関係を土層から読みとることは出来なかった。



第80図 竹ヶ崎遺跡SK 01遺物出土状況 S=1/80

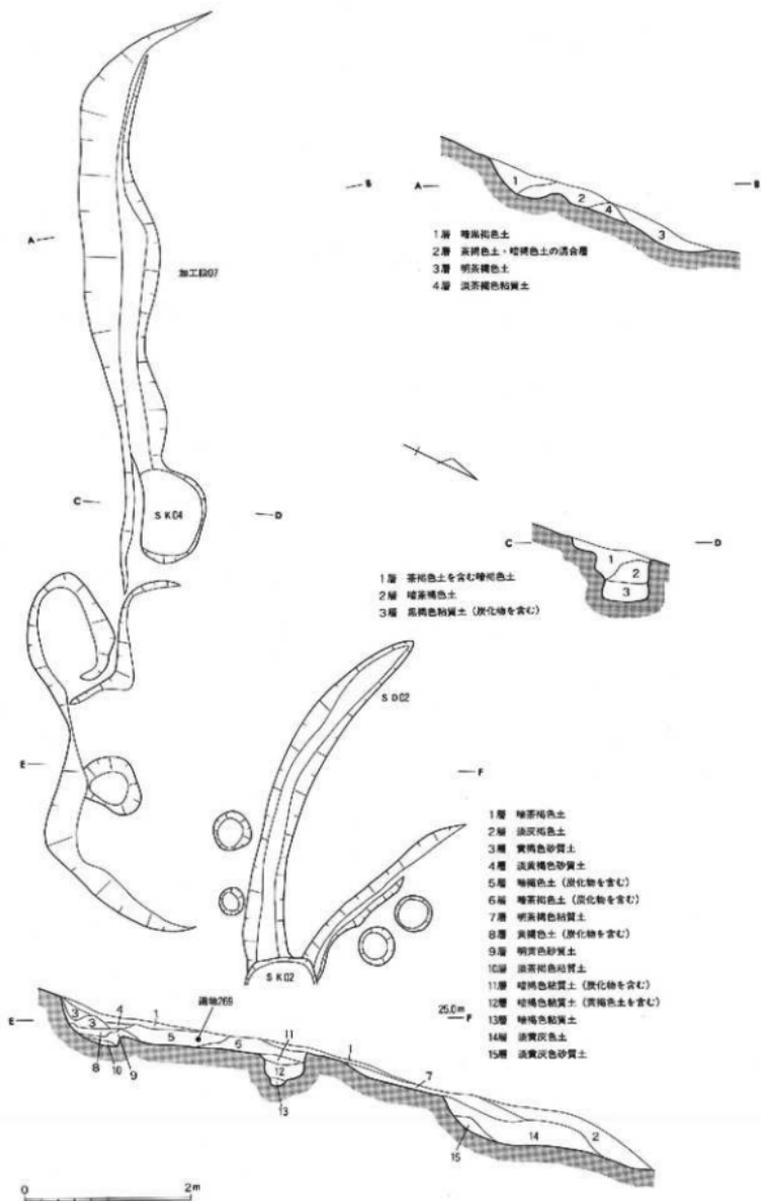


第81図 竹ヶ崎遺跡SK 01出土遺物実測図 S=1/3 (鉄器221は S=1/2)



第82図 竹ヶ崎遺跡 S I 03・S K 02・S K 03実測図 S = 1/60

SK02 S I 03の壁に後から掘り込まれた長方形の土坑で、SD02と切り合い関係にあるが、前後関係は不明である。プランを見た限りSK02はS I 03には伴わないものと思われる。長軸1.5m、短軸1.0mを測り、床面からの深さは50cm程ある。土坑からは塩津5期後半の遺物が一括で出土したが、床面が傾斜しており土坑墓や貯蔵穴の可能性は薄いと思われ、むしろ当時の廃棄穴と見た方がよいと思われる。



第83図 竹ヶ崎遺跡加工段07・S K 04実測図 S = 1/60

S K 03 S I 03の床面で検出された2m×2mの円形土坑で床面からの深さは1.5mある。土層断面(A-B)で見たところ一部攪乱を受けてはいるが、この土坑はS I 03に伴う貯蔵穴と思われる。土坑からは塩津5期の遺物が出土している。

加工段07・S K 04・S D 02 (第83図)

加工段01・02・03のある北側斜面を下ったテラス上に位置し、その北東には軸を東西にとってS I 03が隣接している。

加工段07 テラスに沿うように東西に軸を取り、その長辺は10m程になる。奥壁には幅20cm程の溝が半分程通り、S K 04につながっている。加工段の東側1/3には壁際を巡る溝は認められず、幅3m奥行き1m程壁が南側に入り込んでいるのがわかる。

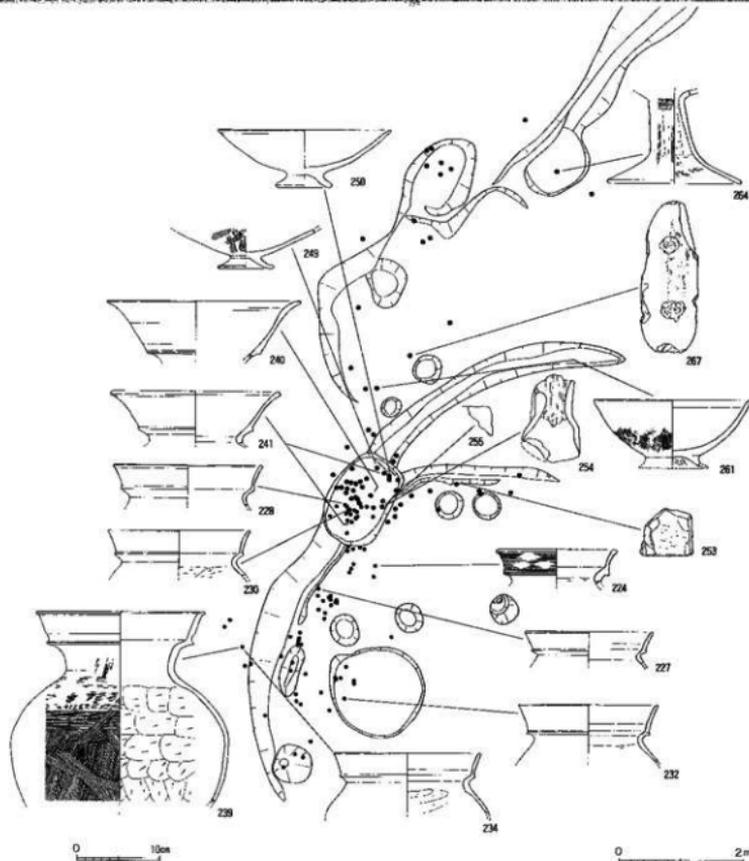
S K 04 加工段07の奥壁沿いに掘り込まれており、壁際の溝とつながっているが、土層図(C-D)を見ると土坑の埋没後に溝が切られているのがわかる。土坑の規模は1m×1mで深さ60cm程あり床面からは高杯の脚が出土している。

S D 02 幅50cm深さ40cm程の溝状遺構でS K 02と切り合い関係にあるが、その前後関係は不明である。

S I 03・S K 02・S K 03・加工段07・S K 04遺物出土状況 (第84図)

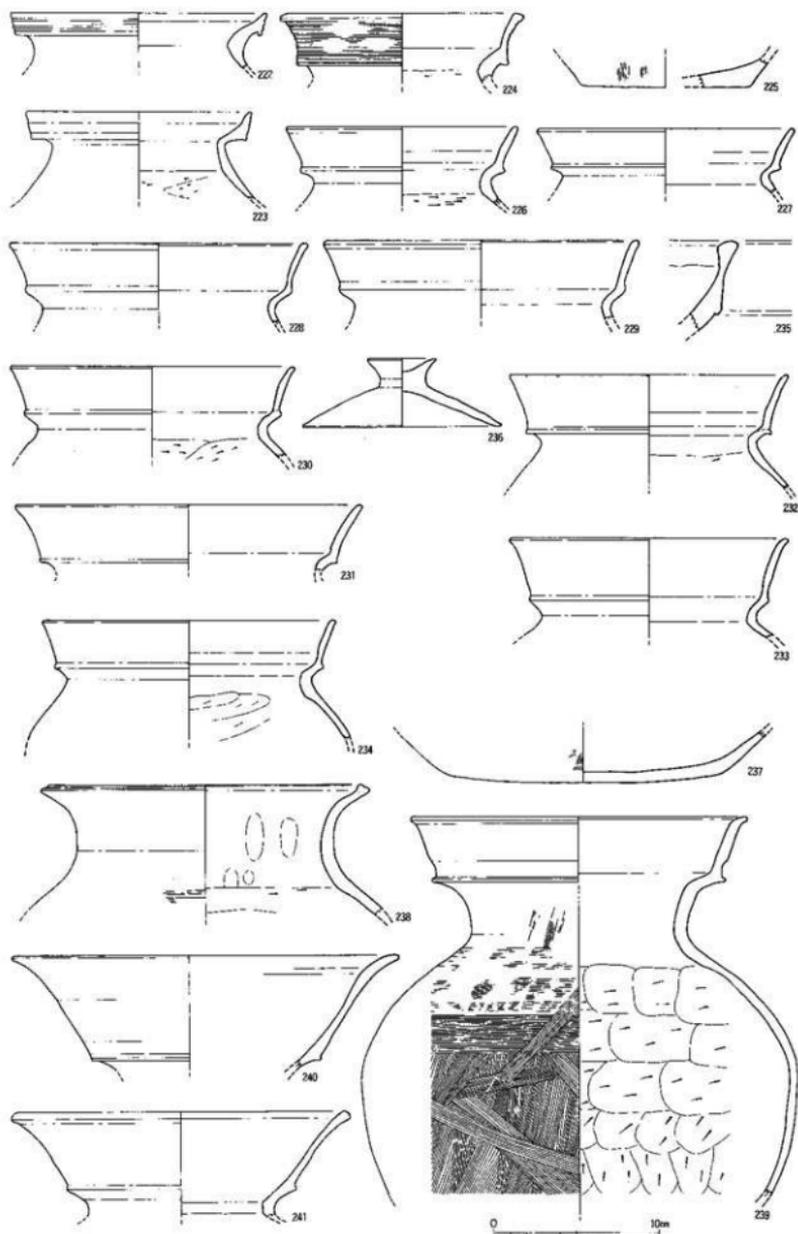
S I 03から出土した遺物は殆ど壁際から出土しており、一部遺構の外に広がっている。S K 03から出土した遺物も南側に寄っており、何らかの関係がうかがえそうである。床面から出土した遺物の殆どは塩津5期中たり、若干含まれている塩津1期の遺物は後の流れ込みと思われる。S I 03から出土した有肩鉄斧とS K 03出土の三角形小鉄片や砥石などからここで鉄器を制作していた可能性が考えられる。加工段07では東側の床面から用途不明のタタキ石状製品と低脚付き椀が出土しておりその他の遺物などで見ると、加工段07は塩津5期中だと見られる。甕259・260、低脚杯262、円筒形土器266を見ると、口縁または脚の端部内側に小突起を作る調整法を取っていることから、何らかの約束事があったのでは？と考えられる。加工段07から鉄錐や水晶未製品が出土していることから玉作関連遺構の可能性がうかがえる。床面資料などからこれらの遺構の廃棄時期は塩津5期の内と思われる。

S I 03・S K 02・S K 03出土遺物 (第85図、86図) 甕222は短い口縁に擬凹線が巡り、複合口縁部は下方に拡張しており、頸部内面に稜を持つ。色調は淡橙褐色を呈し、胎土に2mm程の長石や石英などを含む。塩津1期の遺物と思われる。甕223は短い口縁にヨコナデ調整が施されており、胴部内面には肩部までヘラケズリが施されている。もしこのケズリが頸部を意識して削り残しているなら、この個体は壺の可能性もある。甕224は長く伸びた複合口縁に擬凹線文が施されており、その端部は肥厚して外向きに面を持っている。色調は淡橙褐色を呈し、胎土に2mm程の砂粒を多く含む。塩津2期の遺物であり、流れ込みの可能性も考えられる。225は甕もしくは壺の底部と思われ、30cm程の平底を呈す。甕226・227はやや長めの複合口縁が真っ直ぐ外に開き、その端部は丸く収まる。複合口縁部の稜は水平を意識して突出している。色調はそれぞれ茶褐色、淡黄褐色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英粒を含む。やや大振りの甕228は薄く伸びた複合口縁の先端にやや厚みを持たせ、外折れを意識しているように思える。同じくやや大振りの甕229は真っ直ぐ伸びた複合口縁の端部に

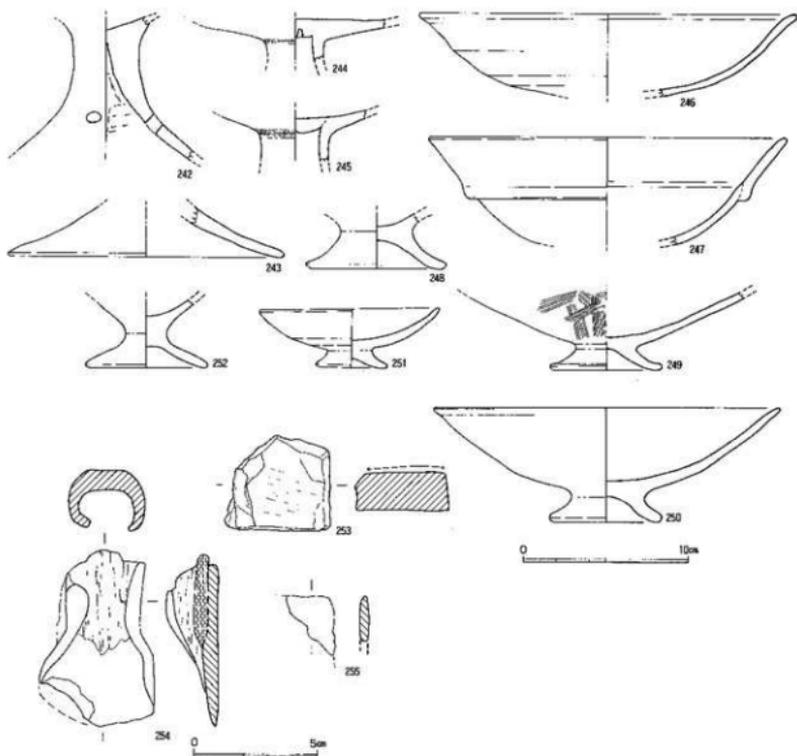


第84図 竹ヶ崎遺跡 S103・SK02・SK03遺物出土状況 S=1/80

弱い折り返し認められる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には2mm程の長石や石英等の砂粒を多く含む。甕230は薄く作った複合口縁の端部が上端に面を持って強く外につまみ出されてお、複合口縁部の稜は水平方向に弱く突出する。色調は淡黄褐色を呈し胎土に2mm以下の長石や石英などを含んでいる。甕231は均一な厚みでやや開く複合口縁を持ち、その端部は丸く収まっている。複合口縁部の稜は斜め下方に弱く突出している。色調は淡橙褐色を呈し、胎土には長石粒を多く含む。甕232は複合口縁がやや開き気味に立ち上がり、その端部は軽く外反させるのみで殆ど調整されないうが、複合口縁部の稜は強調されている。色調は淡橙褐色を呈し、胎土に2mm以下の砂粒を含む。甕233はやや開いた複合口縁の端部を外につまみ出しており、複合口縁部の稜はあまり突出していない。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に1mm程の長石や石英などを含む。甕234は複合口縁があまり開かず真直ぐ伸びており、その端部は上端に面を持ち外につまみ出されている。複合口縁部の稜は水平を意識して突出している。口縁235は小片のため断面のみの図化となったが、複合口縁端部が肥厚しており、先端は内側と外側に面を持っている。口縁の内側は半ばまでが薄く剥離している。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には2mm程の長石、石英などを多く含む。高杯、もしくは鉢の可能性もある。



第85図 竹ヶ崎遺跡 S103・SK02出土物実測図(1) S=1/3

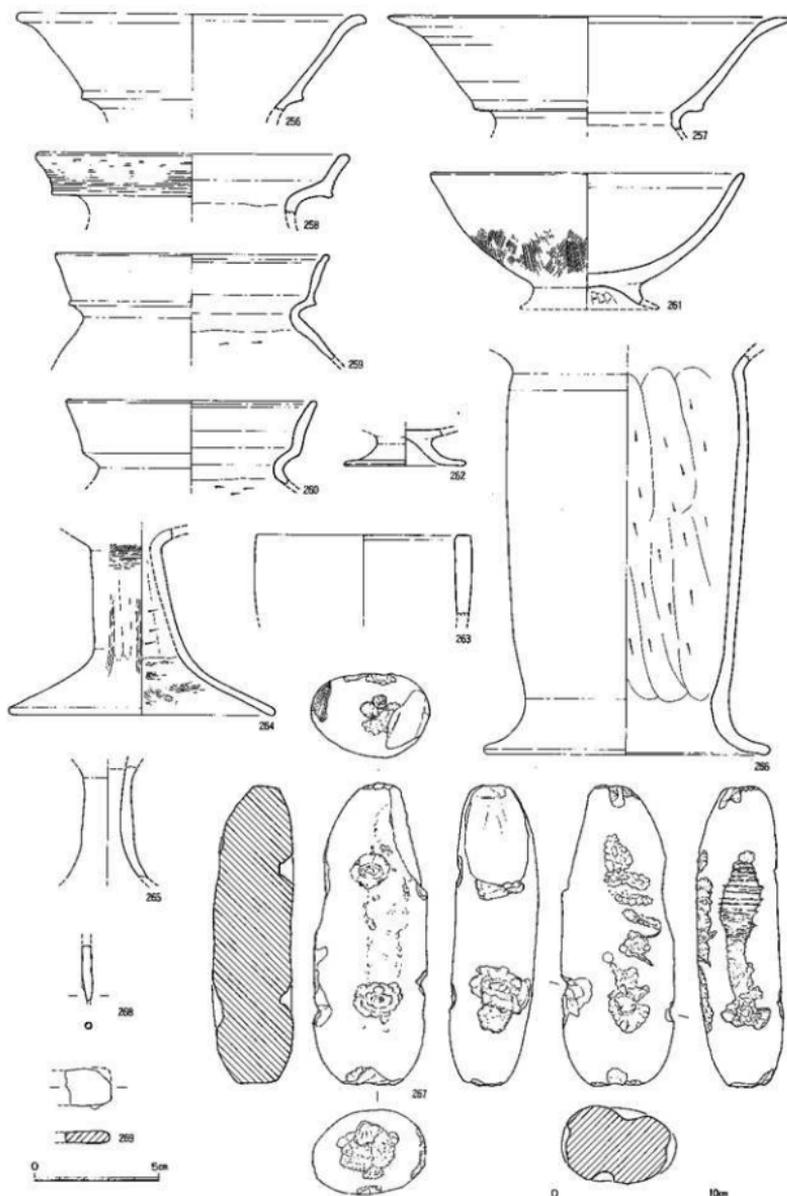


第86図 竹ヶ崎遺跡 S103・SK02出土遺物実測図(2) S=1/3 (鉄器254、255は S=1/2)

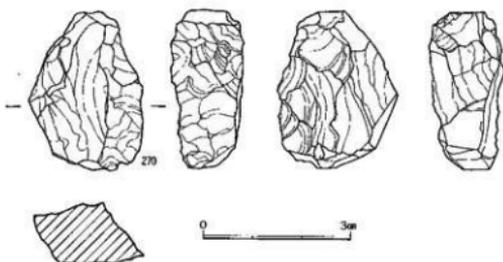
236は低脚杯とも思えるが、蓋として用いられている。つまみ径4cm、底径12cm、器高4cmを測り、つまみ部は外側に軽くつまみ出され、裾部は湾曲せずに真っ直ぐ伸びている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英などを含む。237は甕もしくは壺の底部で、完全な平底を呈しており、外面にハケム調整が施されている。色調は茶褐色を呈し、胎土には2mm程の長石等を多く含む。壺238は殆ど痕跡化した複合口縁の端部がわずかに突出しており、口縁外面を強くナデている。複合口縁部の稜は頸部内側からの延長で強く張り出している。頸部内側は指などを用いて押さえた痕跡が認められる。色調は淡黄褐色を呈し、1mm以下の長石や石英などの砂粒を多く含む。239はやや厚めの複合口縁があまり開かず立ち上がり、その端部は外側へ強く折り返され、面を持っている。複合口縁部の稜は、その上部に強いヨコナデが施されており、水平方向への突出を意識しているものと思われる。胴部の調整には丁寧なハケムがタテに施され、肩部から上には掠れているが横方向のハケムが施されている。胴部内側は底部から上にヘラケズリが廻り、ケズリ方向は次第に右方向になる。色調は淡

橙褐色を呈し、胎土に2mm程の長石や石英などの砂粒を含んでいる。240・241は鼓形器台の受部で、240の端部は肥厚し緩やかに外側へつまみ出されており、複合口縁部の稜は斜め下方へ小さく突出している。241は肥厚した端部に面を持ち、受部は外側へ真っ直ぐ開いている。複合口縁部の稜は水平方向に軽く突出している。筒部内側は幅5mm程の面を持っている。色調はそれぞれ淡橙褐色、淡黄褐色を呈している。242は外米系の影響が強くて高杯の脚部で、基部上端に3方向の透かしが入っている。内側の調整は脚の中心から回転しながらヘラケズリが入っているものである。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には1mm程の砂粒を含む。243は高杯の脚部で淡茶褐色を呈す。244・245は高杯の脚接合部で、円盤充填されている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英などを含む。246は高杯の杯部で、S K03よりの出土である。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石、石英などを含む。247は複合口縁を持つ高杯の杯部か、もしくは鉢と思われる。その端部はやや厚みを持って真っ直ぐ伸びており、複合口縁部には突出した稜を持っている。色調は淡橙褐色を呈し、胎土に1mm程の石英や長石等を含む。248の低脚杯は大きい脚部が付いている。色調は淡橙褐色を呈し、胎土に1mm以下の長石や石英などを含む。低脚杯249はやや大きめの低い脚が付いており、杯部にはハケメ調整が施される。低脚杯250は口径21cm底径6.5cm器高7cmを測り、淡黄褐色の胎土に1mm程の長石、石英、赤色土粒等を含んでいる。低脚杯251は口径11cm底径4cm器高3.5cmを測り、脚接合部は強くナデられている。明茶褐色の胎土には、2mm程の長石や石英などを含む。252は低脚杯と思われるが、高い脚が付いており、杯部の立ち上がりも強い縦長の印象を与える。淡褐色の胎土に2mm以下の砂粒を含む。253は砥石で1面の使用が認められる。254は袋状有肩鉄斧で、全長6.5cm基部幅3.3cm×2.8cm肩幅4.5cmを測るが、刃部の摩耗が激しいので、全長においてはその限りではない。基部には木柄の1部が残っている。255は鉄器製作時に出る三角形小鉄片と思われる。

加工段07・S K04出土遺物(第87図～88図) 256・257は鼓形器台の受部で、256はやや厚めの端部が短く折り返されている。257はやや面を持っている端部を強くつまみ出しており、筒部内面には幅5mm程の面を持っている。甕または壺258は短めの複合口縁が外に開き、外面に擬凹線文を施すものであるが、口縁上部はナデ消されている。甕259はやや直立気味に開く複合口縁の端部が外につまみ出されており、端部内側には強いナデによる窪みが出来ている。複合口縁部の稜は水平を意識して鋭く突出している。淡黄褐色の胎土には長石、石英などを含んでいる。甕260はやや厚めの複合口縁を持ち、その端部は丸く収まるが、端部内面はナデにより浅く窪む。淡橙褐色の胎土には長石、石英などを含む。261は低脚付き椀で、口径は18.6cm程あり器高は8cm程になる。杯部下方には細かいハケメが廻る。内面はヘラミガキと思われるが、風化のため単位方向とも不明である。明橙褐色の胎土には1mm程の石英、長石等を含む。262は小振りな低脚杯の脚部で、脚部は266のように、下方に弱く突出している。263は器壁厚が1cm程あり端部に面を持つ。暗茶褐色の堅い胎土には殆ど砂粒を含まない。264・265は高杯の脚部で264は脚部中程にハケメが施され、内側はヘラケズリされている。頸部上部にはヘラミガキを施し、頸部内側は漸部にハケメ調整が施されている。265は、細い脚部で端部は剥離している。266は円筒形土器で、脚部は下方に弱く突出している。内面の調整は筒部中程から上下に削り分けている。淡黄色の胎土には2mm程の長石や石英などを含む。267の石製工具は両端部に殴打痕を持ち、上部にはおそらく使用によると思われる剥離が見られる。胴部上方、下方にはそれぞれ浅い窪みが廻っている。使用方法は不明である。268は鉄錐で、軸径は3mm程



第87図 竹ヶ崎遺跡加工段07出土遺物実測図 (1) S=1/3 (鉄器268-269は S=1/2)



第88図 竹ヶ崎遺跡加工段07出土遺物実測図(2) S=1/1

である。玉作の穿孔に使用されたと思われる。269は刀子の茎、もしくは鉄素材と思われ、幅1cm厚さ5mm程である。270は水晶製の勾玉未製品と思われる。鉄錘268と合わせて見ると、ここでは勾玉の作成が行われていたものと推察されるが、剥片などが少なく、専門的なものとは考えにくい。

2節 東側調査区下段

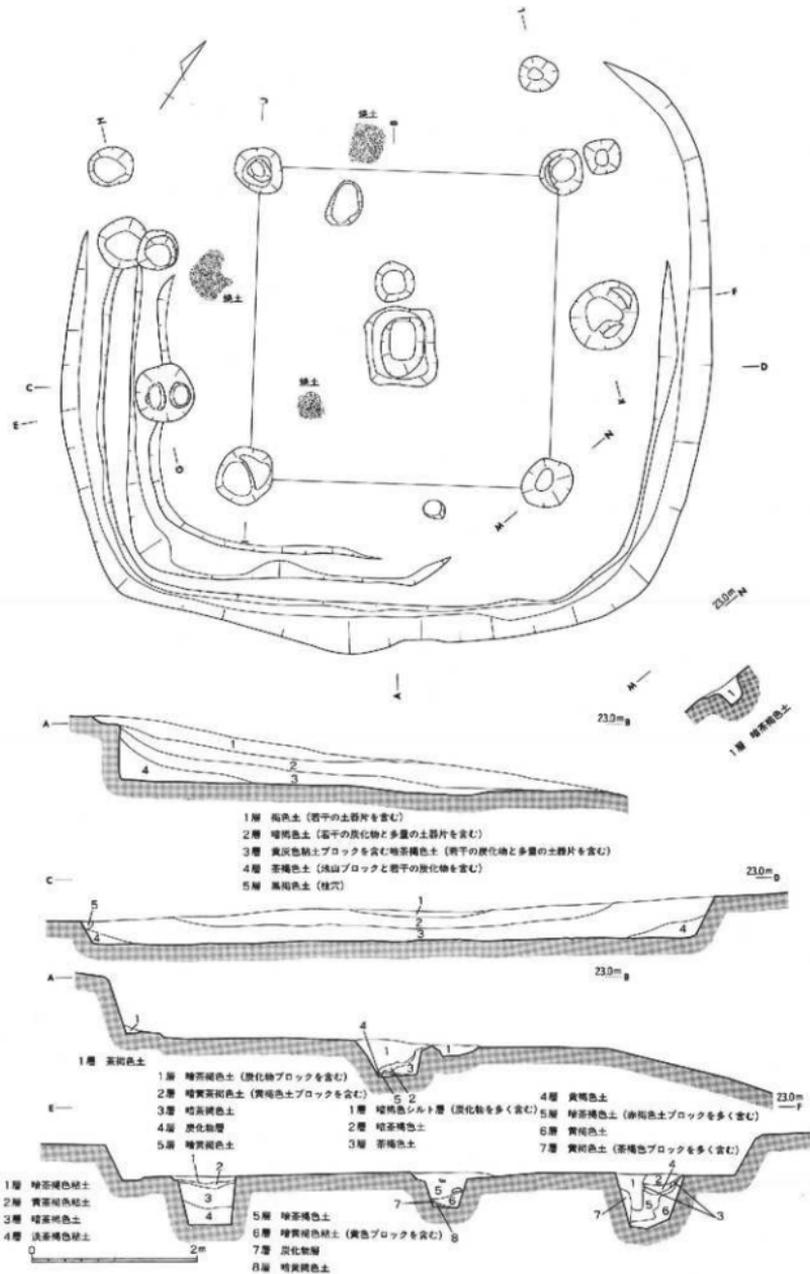
竹ヶ崎遺跡の東側調査区下段は丘陵に囲まれた緩やかな斜面からなっており、S I 09の西側には南東から北西にかけて緩やかな谷筋を形成している。この谷筋の遺物包含層からは主に塩津1期～5期の遺物が出土しており、それらの遺物は遺構に伴わない遺物実測図として(第181～183図)に掲載した。東側調査区下段は近世に大規模な削平を受けており、遺構では土坑やピット群などが検出できた。また、この時期に伴う遺物では17世紀後半～18世紀前半頃の陶磁器等が出土している。なお近世の遺構は(第4節)にて詳しく述べる。竹ヶ崎遺跡では弥生時代後期(塩津1期・5期)の遺構が全城にわたっているが、近世削平段遺構の下からも残りが悪いながら検出されている。第2節では主にこの時期の遺構及び遺物を取り上げて記述していきたいと思う。

S I 04 (第90図～91図)

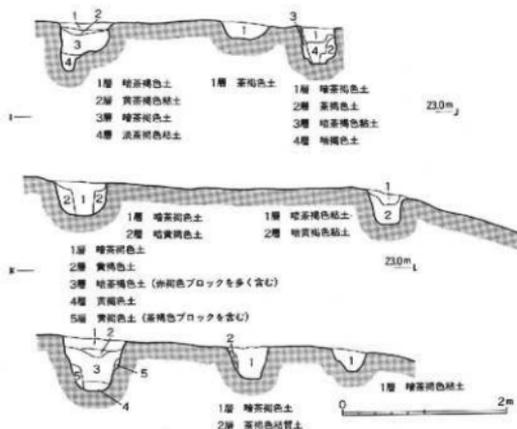
東側調査区下段において南西の位置に検出された竪穴住居跡で近世削平段により削平されている。遺構は北側が流れ去り、残りの良いところで深さ1m弱が残っており、遺構の規模や性格は把握できた。遺構は1辺6.5m程の隅丸方形の竪穴住居跡で、主柱穴は径60cm前後、深さ30cm～60cmのものが4本と思われるが、その内の2穴に柱の建て替え跡が見られ、南壁の内側には壁に平行して浅い掘方が階段状に2段検出されたことにより、これを建て替え時の床面と認識した。少なくともこの住居跡は1度は縮小もしくは拡大があったものと思われ、2度立て替えられた可能性も考えられる。一棟分のみ認められた4本柱の柱間距離は3.5m～4m程で、そのほぼ中央に掘方が方形を呈す2段掘のいわゆる中央ピットが検出された。このピットは覆土に炭化物のブロックを含み、ピット底面に炭化物の層を形成している。このピットの北側に隣接する浅いピットの覆土にも炭化物ブロックが検出でき、おそらくここが火を使った何らかの作業場であったものと推察される。また、一番内側の床面には焼土が認められた。



第89图 竹ヶ崎遺跡東側棚室区下段遺構配置图 S=1/390



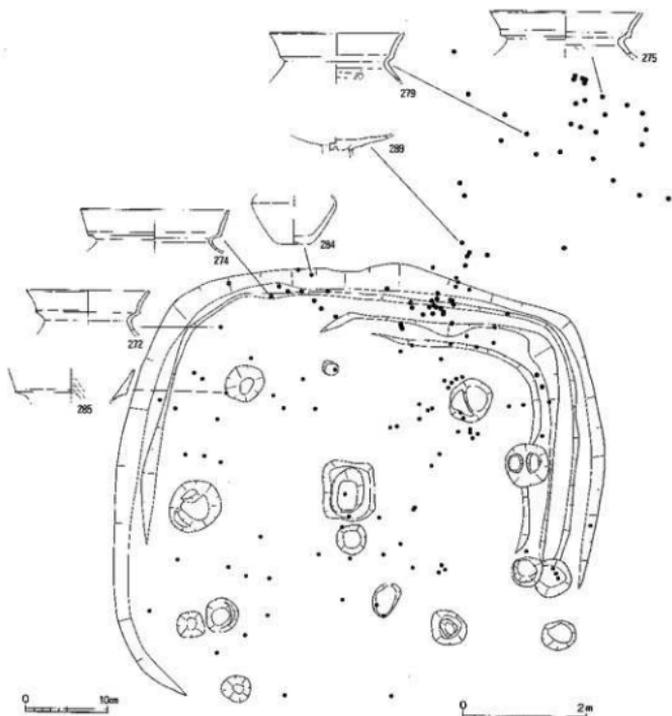
第90図 竹ヶ崎遺跡 S | 04実測図 S = 1 / 60



第91図 竹ヶ崎遺跡S104土層図 S=1/60

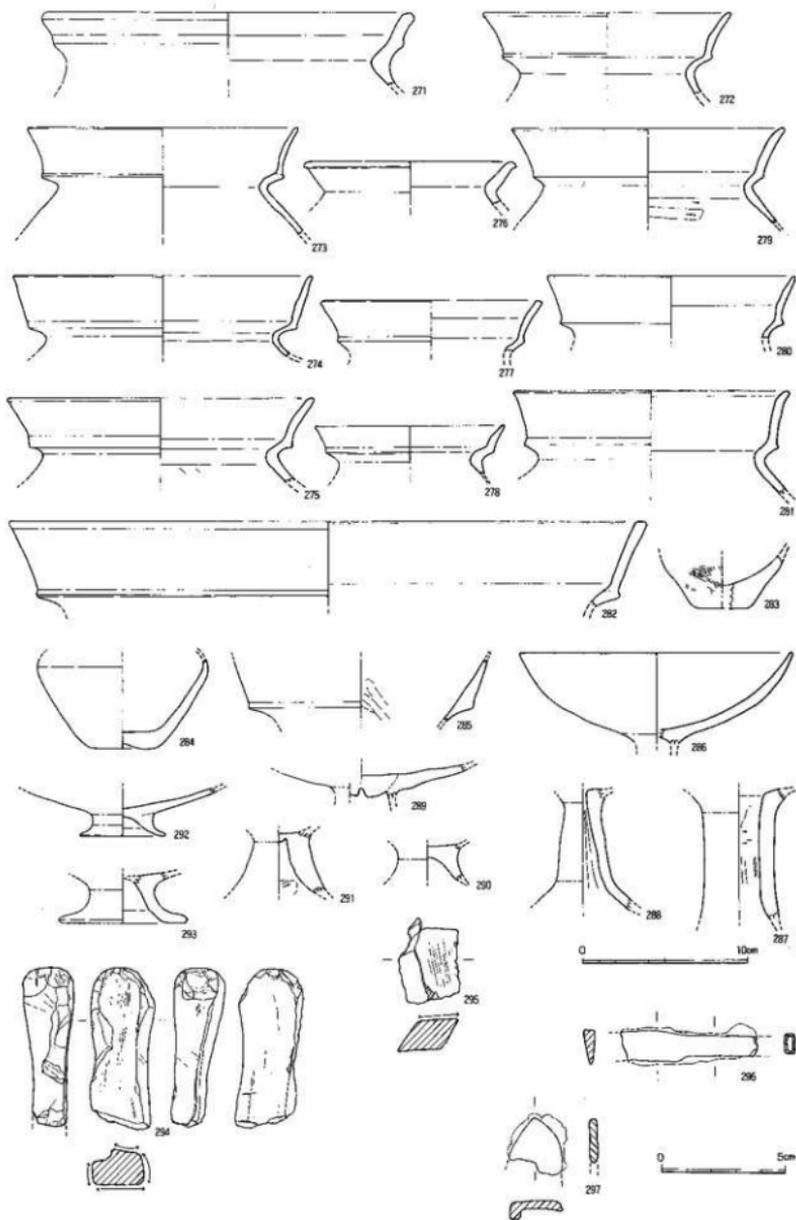
S104遺物出土状況(第92図) S104は第3層より多量の遺物がまんべんなく出土したが、特に南壁に沿って床面直上で検出された遺物が目立つ。また、そのつながりかS104の遺構外南側にも土器が散布されている。

S104出土遺物(第93図) 271は比較的短い肥厚した複合口縁と、複合口縁部に鈍い稜を持つ甕もしくは壺で、その複合部内面は頸部から口縁まであまりアクセントを付けずに立ち上げている。暗茶褐色の胎土には、2mm程の砂粒を含む。塩津2～3期の流れ込みと思われる。甕272・273はやや長めの複合口縁が薄く外反するもので、複合口縁部の稜は水平方向に突出している。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英粒等を含む。甕274はやや長めの複合口縁が直立気味に立ち上がるもので、その端部は外側に軽くつまみ出されている。甕275は厚めの複合口縁が複合部から5mm程垂直方向に立ち上がった所で折り曲げられた様に外反し、その口縁は殆どカーブせずに端部に至る。口縁部にはナデ調整が施され、口縁端部をナデ残すことで、端部にアクセントを持たせている。淡黄褐色の胎土には1mm程の長石粒が目立つ。小型の甕276は短い単純口縁の端部を外側につまみ出し、その端部に面を持たせているもので、口縁にはナデ調整が施されている。口縁外面にはスガが付着しており黒色を呈すが、胎土は淡茶褐色で、2mm程の長石を多く含んでいる。甕277はやや厚めの口縁があまりカーブせずに一定の厚みを持って端部に向かっている。厚い端部には強いナデによりハッキリと面が形成されている。複合口縁部の稜は水平を意識するというより、稜の上部を撫でることに意識が向いている感じを受ける。胎土は淡茶褐色のきめの細かいものが使われており、含まれる砂粒はくすんだ色合いの石英などである。小型の甕278は短めの複合口縁が端部に向かって先細りしており、その先端は外側に向かって軽くつまみ出されている。甕279はやや厚めの複合口縁が長めに外反し、その端部は僅かにつまみ出されている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には1mm程の長石を始め、多種の砂粒を含んでいる。甕280は薄く真っ直ぐ開いた複合口縁の端部を先細りさせ



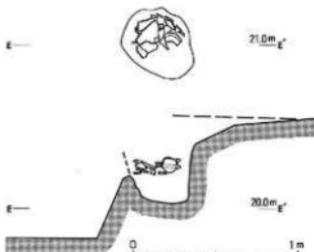
第92図 竹ヶ崎遺跡S104遺物出土状況 S=1/80

ており、複合口縁部の稜は水平を意識して鋭く突出している。暗黄褐色の胎土は1mm程の長石や石英などを含んでいる。甕281は厚い複合口縁がやや直立気味に立ち上がり、その端部はしっかりと外につまみ出されており、複合口縁部の稜は水平を意識している。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英などを含む。大型の甕282は口径39cm幅1.2cmの厚い複合口縁が真っ直ぐに開き、その端部には水平に面を持っている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には長石や石英などを含んでいる。283は甕または壺の底部と思われ、平底を呈す。底径は3cm強あり、底部ぎりぎりまで丁寧なハケが入る。胎土は一部黒斑が入るも淡黄白色を呈し、断面は黒褐色を呈す。1mm程の長石や石英などを含む。284は小型の甕または壺の胴部と思われ、径4cm程の底部中央には指、もしくはヘラ様の工具による圧痕が認められる。内側は底部に径3.4cm程の平坦部を持ち、指頭圧痕が認められる。色調は黄褐色を呈し、胎土には2mm程の長石、石英などの砂粒を含んでいる。285は鼓形器台の受部と思われる。色調は淡黄褐色を呈す。286はやや深めの高杯の杯部で段を有さない。淡茶橙色の胎土には1mm程の長石や石英等を含んでいる。287は高杯の脚部で、内側は長い工具によるヘラケズリが施されている。表面黄灰白色、断面黒褐色の胎土には1mm程の長石等が含まれている。288は高杯の



第93図 竹ヶ崎遺跡 S104出土遺物実測図 S=1/3 (鉄器296-297は S=1/2)

差込式の脚部で、脚の中心には脚内部調整時に開くと
 思われる4mm程の軸穴が隣り合って2つ開いていた。
 高杯289は円盤充填部の中心よりずれたところに1度軸
 穴が開き、それを粘土で塞いで中心に軸穴を開けてい
 る。色調は淡黄褐色を呈す。290は短脚の高杯と思われ、
 胎土は黄褐色を呈し、1mm程の長石や石英などを含む。
 291は短脚の高杯で、その肉厚な脚部の中心には粘土が
 粗雑に充填されている。色調は明橙褐色を呈す。低脚
 杯292は小柄であり発達しない脚部を持っている。色
 調は淡橙褐色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英など
 を含む。同じく低脚杯293は肉厚なしっかりした脚が大



第94図 竹ヶ崎遺跡 S 106中央ビットコシキ形
 土器出土状況 S=1/30

きく開いており、淡茶灰色の胎土には、1mm以下の砂粒を含む。294は全長10cm弱の珪長岩裂と思
 われるきめの細かい砥石で、4面が砥石として使われており、先端部には打痕や擦痕などが認められ
 る。295は緑灰色のきめの細かい材を用いた砥石で、平坦な4面の内の1面のみを使い込んでいる。
 使用面は平滑で、鋭い擦痕が認められる。鉄器296は刀子と思われるが、切先、茎尻を欠き、全長は
 不明だが身幅は1.5cm程で、茎幅9mm程あり、片岡と思われる。297は鉄鎌で、左側の逆刺が片方折
 れ曲がっている。これらの遺物からS I 04は塩津5期に廃棄されたものと思われる。

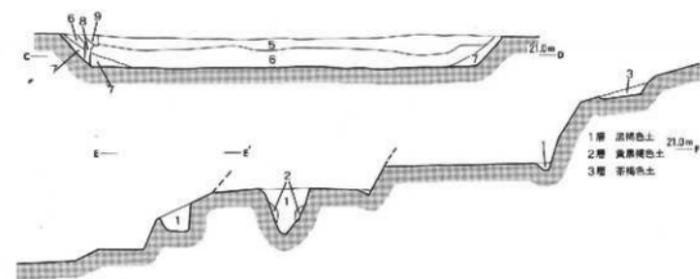
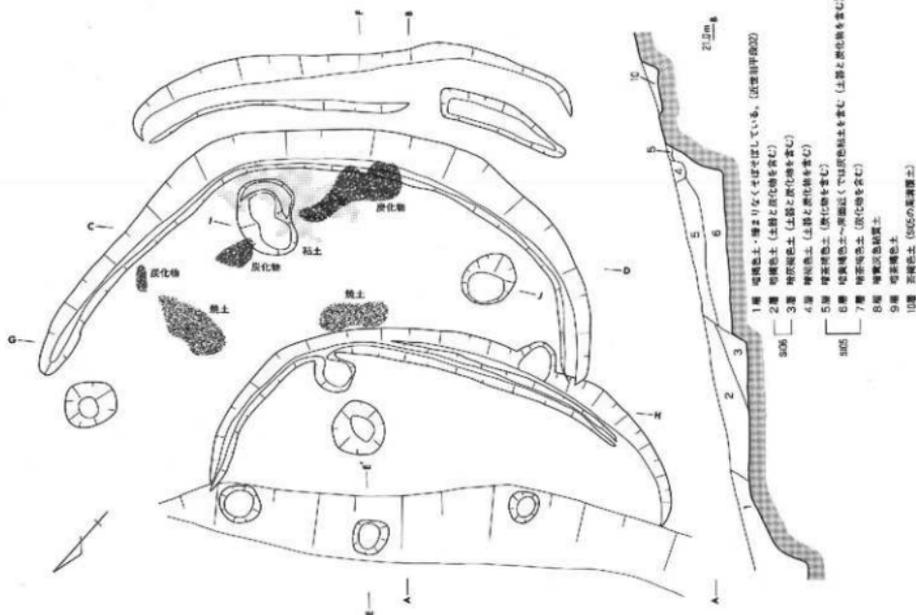
S I 05・06 (第95図)

S I 05・06はS I 04と同一の緩斜面にあってと思われ、近世削平段によって上面を削平された
 形で検出された。S I 05とS I 06は切り合い関係にあり、S I 05がS I 06に切られているのが土層図
 (A-B)よりわかる。S I 06は更に近世削平段によって断ち切られており、遺構の半分が欠損し
 ている。この2棟の住居跡は時期的に塩津5期の内に建てられ、切り合い、廃棄されている。

S I 05 3本の支柱穴が残る隅丸多角形の竪穴住居跡と思われ、形態としては5角形もしくは6角
 形を成すものと思われる。1辺は約4mである。壁際には、幅10cm~20cm程の壁体溝と思われる溝が
 巡っており、支柱穴の柱間距離は3m程で柱穴の掘り片は径60cm、深さは40cmとやや浅めに掘られて
 いる。床面には焼土面と炭化物が検出され、遺構の南壁際には粘土の堆積が認められた。S I 05は
 南側に外周溝を伴い、差し渡し70cm、深さ30cmを測る。

S I 05遺物出土状況 (第96図) 遺物は炭化物と粘土の堆積が認められた南壁際で集中して出土し
 ているのが分かる。また、床面遺物である甕316と、遺構外の南側にある土器散布地の甕底部322が
 同一個体であることが判明したことにより、両者は同時期のものと分かる。床面出土遺物から見る
 とS I 05の廃絶時期は甕の口縁端部に明確な平面が出来ていないことや、床面資料にやや古い鼓形
 器台304が含まれていることなどから塩津5期ではあるが古相を呈すものと認識される。

S I 05出土遺物 (第97図) 甕298は厚めの複合部からいきなり薄くなる複合口縁を持ち、その端部
 は丸く収まる。複合口縁部の稜は水平を意識しておらず、やや下向きに突出している。口縁内側には
 複合部に強いナデが認められず、緩やかに湾曲するのみである。色調は淡黄褐色を呈し胎土に2

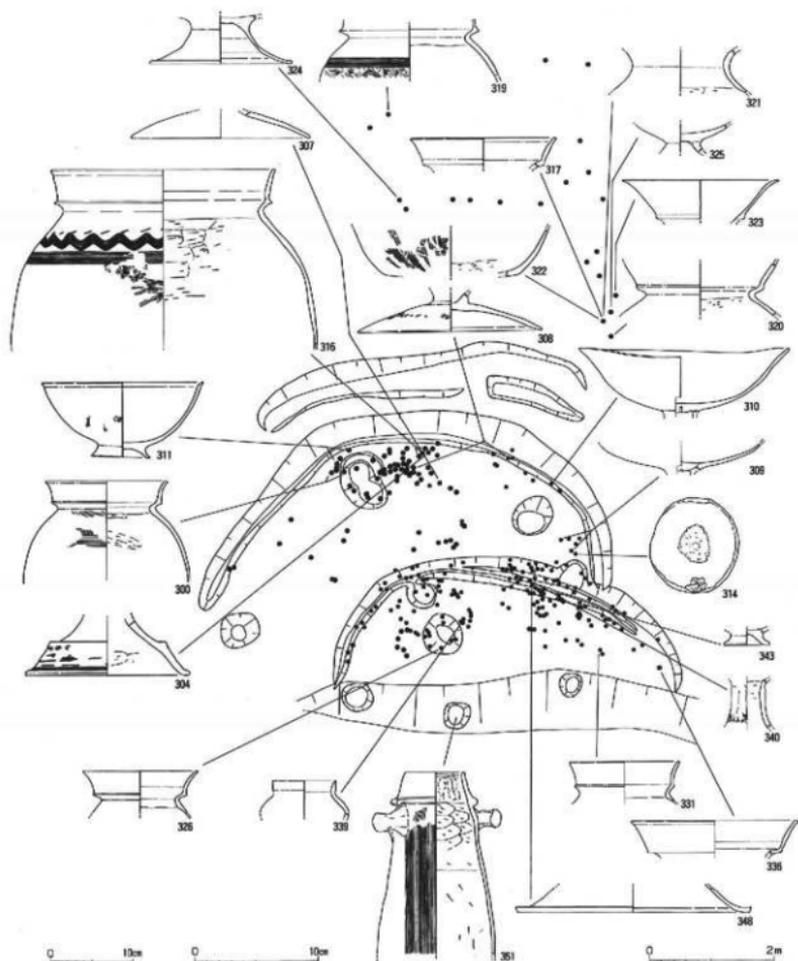


0 2m

第95図 竹ヶ崎遺跡S105・S106実測図 S=1/60

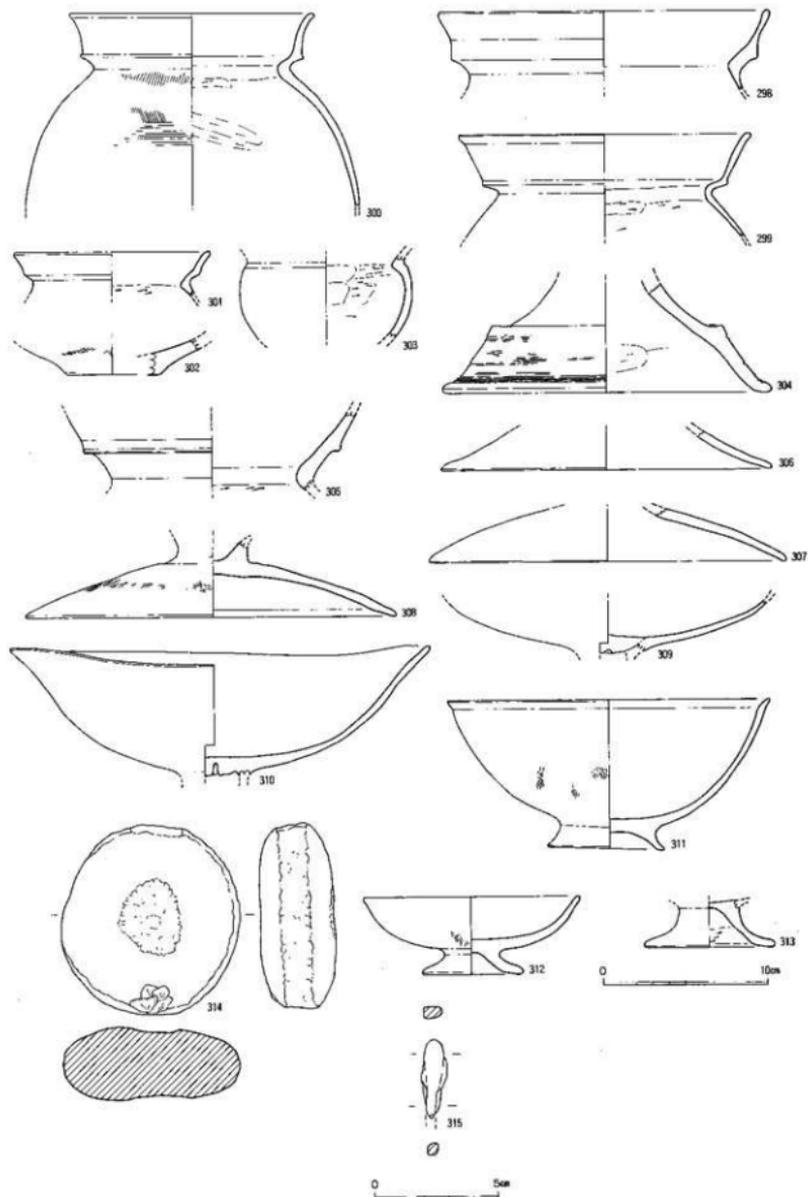
mm程の長石、石英などを含む。甕299は複合部から真っ直ぐに外側に開く複合口縁を持ち、その端部は面を持って外につまみ出されている。複合口縁部の稜線は水平方向に突出している。色調は淡茶褐色を呈し、断面黒褐色である。甕300はやや厚めの複合口縁が緩やかに外反し、端部を丸くつまみ出している。複合口縁部の稜は水平方向を意識して突出する。胴部にハケメが残る。赤茶褐色の胎土には1mm程の長石や石英などをよく含む。小型の甕301は短い複合口縁の端部に軽くアクセントが付くもので、ナデ調整が施されている。302は甕もしくは壺の底部で、小さな平底を呈す。橙褐色の緻密な胎土に1mm程の長石などを含む。303は小型の甕の胴部で、頸部に強いナデ調整が施される。色調は淡黄褐色を呈し、内面は暗橙褐色を呈す。304は鼓形器台の脚部で、屈曲した端部を持っており複合口縁部には擬凹線が施されている。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には1mm程の長石、石英などを含む。鼓形器台305は筒部の縮約が進行しておらず、筒部内側に面を持っている。淡黄褐色の胎土には長石や石英、金雲母などの砂粒を含んでいる。306はハの字に開いた脚部と思われる。黄褐色の胎土には長石や石英などを含む。307・308は蓋形土器と思われる、大型の甕に伴うものと考えられる。308はほぼ完形で底径21.5cmになり、色調は暗橙褐色を呈す。309・310は高杯の杯部で、充填部の径は約3cmである。310はほぼ完形で口径は25cm程で淡黄色を呈す。311は低脚付き椀で、口径19.5cm底径6.5cm器高10cm程のほぼ完形品で、杯端部は外側につまみ出されている。杯の内側には脚部との接合痕が円く見られる。色調は黄褐色を呈し、1mm程の長石、石英、黒色砂粒などを含む。低脚杯312は薄い造りの杯部に肉厚の脚部が付くもので、口径13cm、底径6cm、器高4.7cmを測り、暗橙褐色の胎土には、1mm以下の長石や石英などを含む。313は低脚杯の脚と思われるが、脚高がやや高い。脚底部には直径2cm程の球が押しつけられたかのごとく窪みが生じていた。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英などが含まれている。石器314は石皿として裏表の平坦面を使用し、タキ石として縁をぐるりと使用していたものか、面が出来ている。径10cm、幅は4.5cm程ある。鉄器315は鉄ノミもしくはヤリガンナか？S106の廃絶時期は、床面出土遺物から見ると甕の口縁端部に明確な面が形成されているものが出現しており、塩津5期を廻る遺物が見られなくなっていること、また、S106がS105を切っていることなどから塩津5期と考える。

S105南側土器散布地出土遺物(第98図) 大型の甕316は一部S105の南壁際床面からも出土しており、接合できたため同時期の廃棄と思われる。やや厚めの複合口縁が直立気味に立ち上がり、その端部には明確な面を持っている。複合口縁部の稜は水平を強く意識して突出しており、肩部には間隔の広い列点文、緩やかな波状紋と、平行線文を持つ。色調は淡橙褐色を呈し、胎土に2mm程の長石や石英などを含む。甕317はやや長めの複合口縁が、真っ直ぐ外に開くもので、その端部は一度窪んだ後で外につまみ出されており、端部には面を持っている。胎土には1mm程の長石や石英などが含まれている。318・319・320は甕の頸部で、319は肩部に平行線文を施し、その下方には波状文が確認できる。淡茶褐色の胎土には2mm以下の長石、石英などの砂粒を含む。321は壺の頸部である。暗橙色の胎土には1mm程の長石や石英などを含む。322は甕の底部で、おそらく316のものと思われる。形態は平底を呈し外面の調整には縦方向のハケメが施されている。外面暗茶褐色、内面淡橙褐色を呈し、胎土には1mm程の長石や石英などを含む。323は鼓形器台の受部で、端部が大きく外反している。淡黄色の胎土には1mm程の長石や石英などを含む。324は大型の脚で、底径17.5cm、脚高5cm程になる。脚端部は肥厚しており、アクセントを持っている。淡黄色の胎土には1mm程の長石や

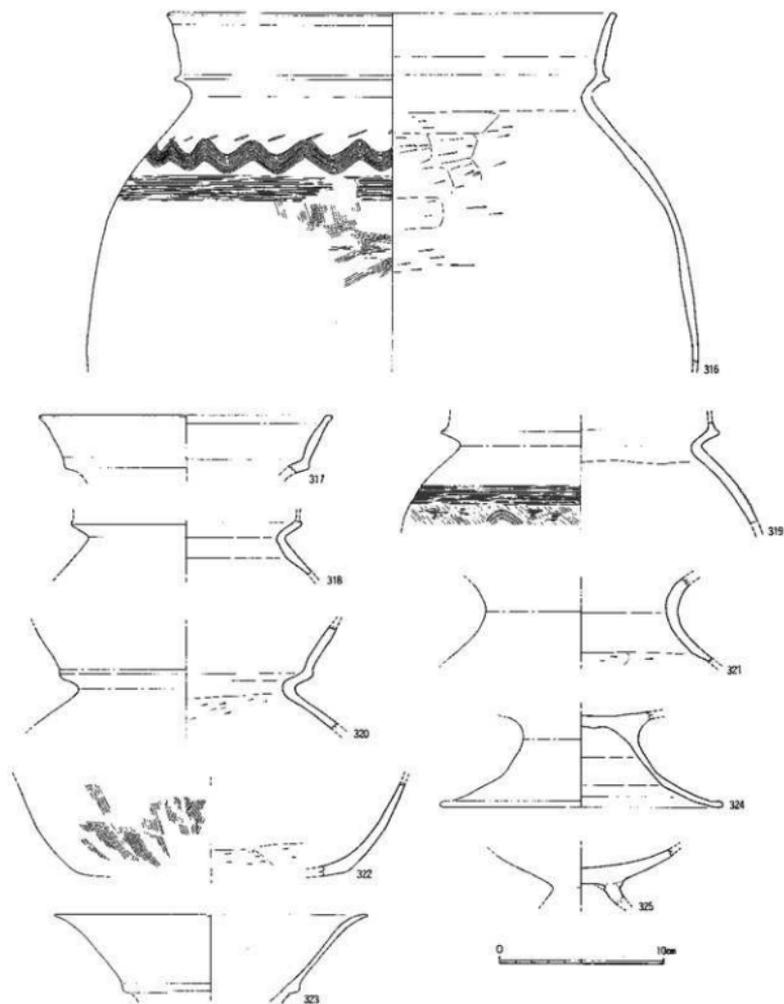


第96図 竹ヶ崎遺跡S105・S106遺物出土状況 S=1/80

石英などを含んでいる。低脚杯325は図には表れなかったが杯部内面に軸穴を持っており、脚部は張り付けた後に粘土で周りを補強されている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には1mm程の長石、石英などを含む。これらの遺物を見たところS105南側土器散布地の遺物はおよそ塩津5期のものと思われる。

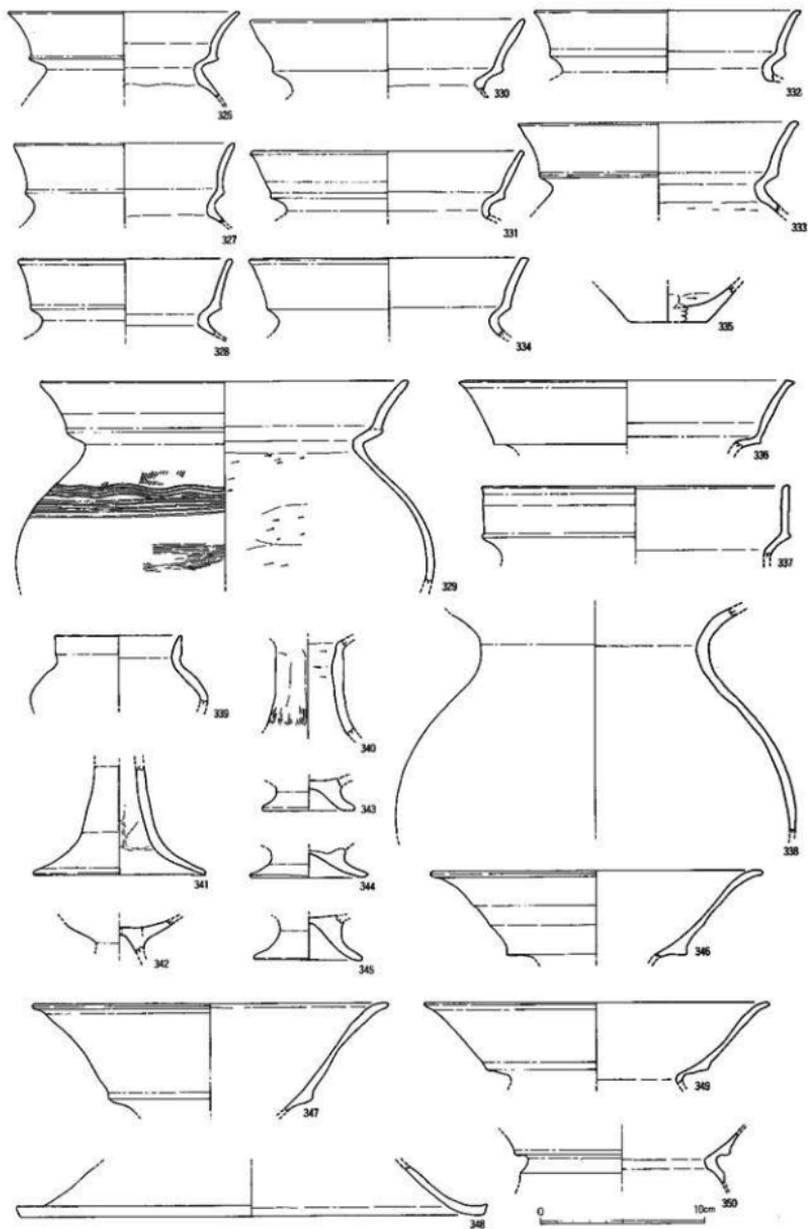


第97図 竹ヶ崎遺跡 S105出土遺物実測図 S=1/3 (鉄器315は S=1/2)

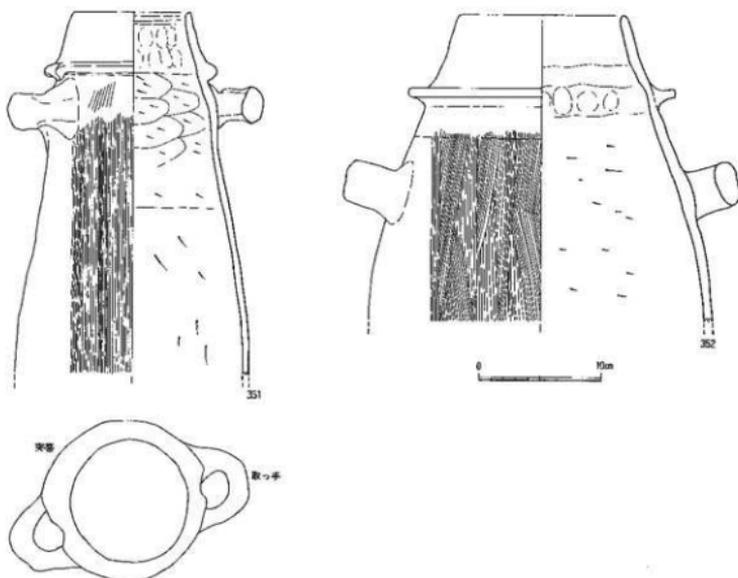


第98図 竹ヶ崎遺跡S105南側土器散布地遺物実測図 S=1/3

S106 遺構の残りはあまり良くはないが掘り方の形態を見ると隅丸方形の竪穴住居跡と思われる。実際には壁体溝と思しき幅20cm、深さ10cm程の溝が巡っている。床面からは支柱穴と思われるビットが1穴検出できたが柱列は不明である。近世削平段に切り落とされた北側半分にはやや東に寄ったビットが検出でき(第94図)、おそらくS106の中央ビットであろうと思われる。



第99図 竹ヶ崎遺跡 S106出土遺物実測図(1) S=1/3



第100図 竹ヶ崎遺跡S106出土遺物実測図(2) S=1/4

S106出土遺物(第99図～100図) やや小振りの甕326は薄作りで長めの複合口縁がカーブしながら外側に開いており、口縁端部は調整されない。複合口縁部の稜は水平を意識して突出している。色調は暗茶褐色を呈し、ススが付着する。胎土には1mm程の長石、石英などを含んでいる。同じくやや小振りの甕327は軽くカーブした複合口縁が直立気味に立ち上がっており、その端部は丸く収まっている。複合口縁部の稜は水平を意識しているが余り突出しておらず、稜の上部に1条の沈線文を施している。淡橙褐色の胎土には1mm以下の長石、石英などを含む。甕327の口縁はカーブせずに真っ直ぐに開いており、その端部はやや厚みを持っているが、これは端部調整時の端部ナデ残しによるものと思われる。暗茶褐色の胎土には1mm程の長石や石英などを含む。甕329はやや厚めの口縁がその厚みを保ったまま端部に至っており、端部は丸く収まっている。複合口縁部は稜の上部に強いナデを施すことによって、その突出を強調しているようにも見える。肩部には波頂間の広い波状文がだれた感じで施されている。淡橙褐色の胎土には1mm程の長石や石英などを含んでいる。甕330はやや厚めの口縁が真っ直ぐ開いており、先細りになる端部が丸く収まる。複合口縁部の稜はシャープさを欠いているが、その突出は水平方向を意識している。淡黄褐色の胎土には2mm以下の長石、石英などを含んでいる。甕331はくびれた複合部を持つ複合口縁の甕で、口縁端部は若干つまみ出されている。暗橙褐色の胎土には長石や石英などを含む。甕332は緩やかにカーブしながら開く複合口縁の端部が、丸みを持って外側につまみ出されているもので、暗橙褐色の胎土には1mm程の長石、石英などの砂粒を含む。甕333はやや外反した複合口縁が軽く開くもので、その端部は面を持って外側につまみ出されている。複合口縁部の稜は水平を意識して突出している。暗茶褐色の胎土に